

平成八年三月

史料館所蔵史料目録 第六十三集

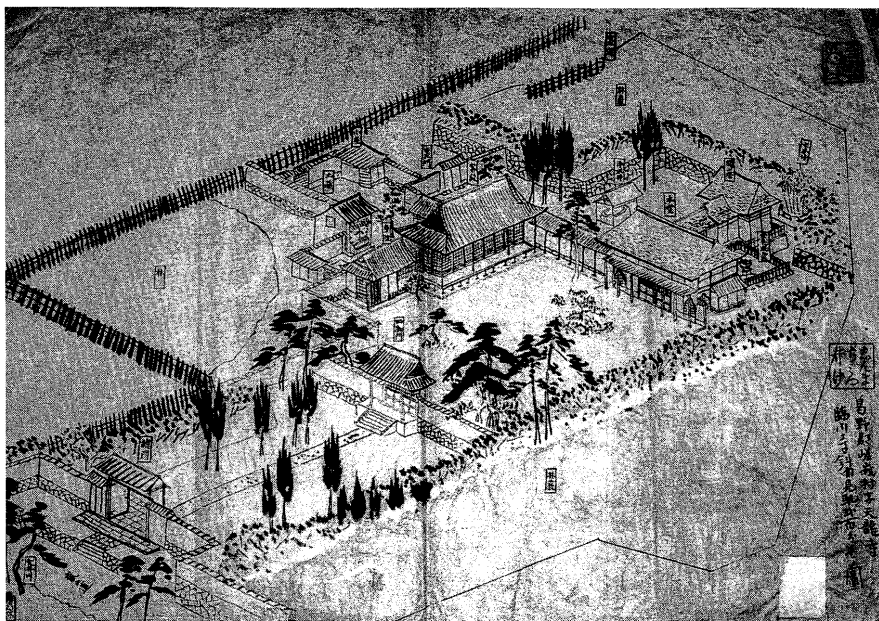
山城国諸家文書目録（その一）

史料館

史料館所藏史料目錄第六十三集

山城国諸家文書目錄
(その一)

A



葛野郡嵯峨村字天龍寺斜面見取二百分一之図（史料番号44）

B



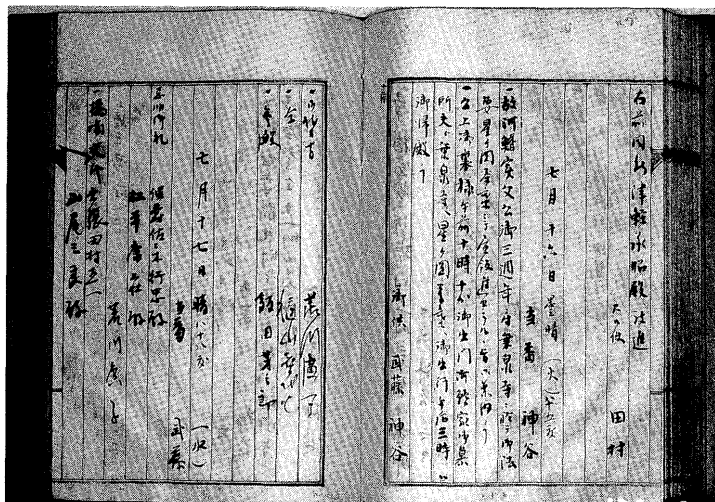
臨川寺古文書目録（史料番号93-2）

C



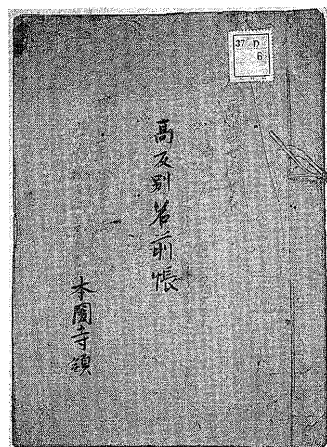
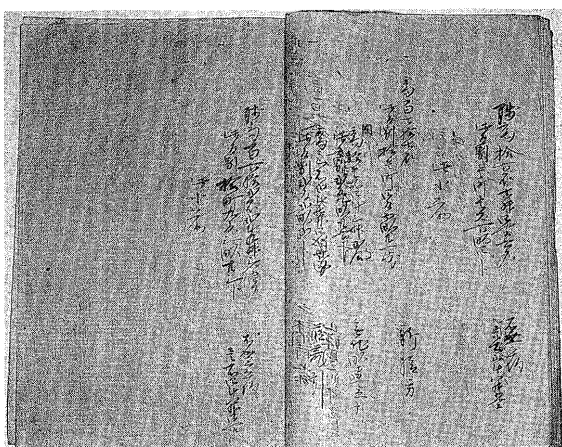
三條家当主日記（史料番号33S26）

D



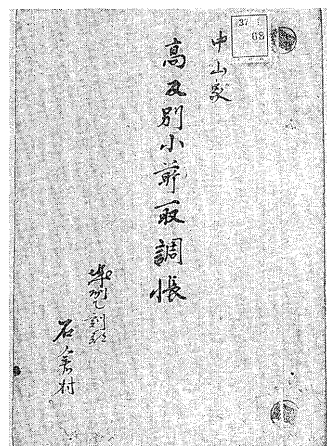
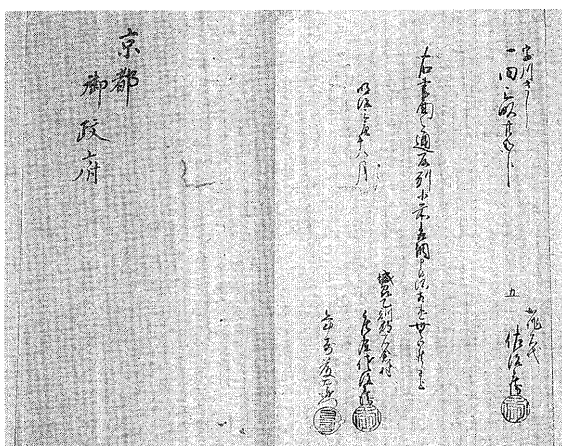
三條家表日記（史料番号33S13）

G



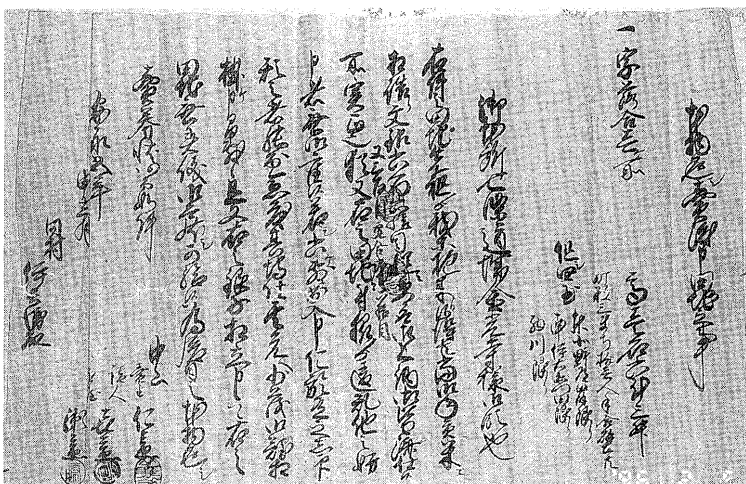
「本園寺領高反別名前帳」(史料番号37D6)

H



「中山家高反別小前取調帳」(史料番号37D65)

I



「本物返シ売渡申田地之事」(史料番号33X26)

凡 例

一 本目録は、『史料館所蔵史料目録』第六十三集「山城国諸家文書目録（その一）」として、次の五件の文書群を収めた。

「山城国葛野郡嵯峨天龍寺塔頭臨川寺文書」（寺院）

「山城国京都三條家文書」（公家）

「山城国京都清水谷家文書」（公家）

「山城国乙訓郡長野新田村三宅家文書」（新田村庄屋・戸長）

「山城国乙訓郡菱川村文書」（庄屋引継文書）

当館が所蔵する山城国の文書群は、すでに『史料館所蔵史料目録』第三十一集において「山城国京都久世文書」「山城国京都平松家文書」の目録が刊行されている。これ以外に今回未収録となった山城国の七件の文書群については、引き続き「山城国諸家文書目録（その二）」に収録する予定である。

一 史料は、史料群全体の構造を表現できるように配列した。すなわち、史料群を発生させた各家々の組織構造に留意し、史料群の有する内的秩序を復元・再構成しようとする形で、大・中・小項目を立てて分類・配列した。また、必要に応じて○印で細項目を示した。

一 史料目録の記載欄は、ほぼ（一）表題、（二）作成年月日、（三）作成者または差出人、（四）宛名、（五）注記、（六）形態、（七）数量、（八）整理番号の順である。

一 表題は原表題をとり、（一）内に内容もしくは内容から判断される文書名称を示した。和漢書等の書冊については内題をとり、内題のないものは外題をとった。また、書付型文書で古文書学的名称を採用したものについては、（一）等を省略したものがある。

一 宛名は史料上の記載を採用し、敬称等についても省略しなかった。差出と宛名の関係は、（差出）↓（宛名）と表示した。

一 作成年月日は和年号で示し、干支のみの場合はそれを採録した。史料内容から推定した場合は、（一）で示した。

一 形態は各文書群ごとに独自の体系をもつので、各解題において解説した。

一 史料の利用にあたっては各解題を参照されたい。

- 一 解題中の文献の引用にあたっては、(一)に著者・論著名を略記した。詳細は各解題末の参考文献リストを参照されたい。
- 一 本目録は福田千鶴が担当した。データの編集には、本多葵美子氏の協力を得た。

總目次

口絵

凡例

頁

山城国葛野郡嵯峨天龍寺塔頭臨川寺文書

解題	三
----	---

目次	三〇
----	----

目録	三
----	---

山城国京都三條家文書

解題	六
----	---

目次	七
----	---

目録	六
----	---

山城国京都清水谷家文書

解題	八
----	---

目次	一〇
----	----

目 録	一〇二
-----	-----

山城国乙訓郡長野新田村三宅家文書

解 題	一三七
-----	-----

目 次	一四四
-----	-----

目 録	一四五
-----	-----

山城国乙訓郡菱川村文書

解 題	一六七
-----	-----

目 次	一七八
-----	-----

目 録	一七九
-----	-----

山城国葛野郡嵯峨天龍寺塔頭臨川寺文書目錄

やましろ かどの さがてんりゅうじたつちゅうりんせんじ
山城国葛野郡嵯峨天龍寺塔頭臨川寺文書目録解題

一、天龍寺塔頭臨川寺文書の伝来と整理の方針

文書の伝来 本文書群は、当館が一九五一年度に三井文庫から譲渡されたものである。そのため、文書の一部には、三井高遂の収集文書をあらわす新町三井家の蔵書印（二種類）が押されている。本文書群が三井文庫の所蔵になった経緯については不明だが、東京大学史料編纂所には臨川寺文書の影写本が二種類ある。その一つ『臨川寺文書』一、二（請求番号三〇七一・六二一七二・一一二）は、書写奥書に「東京都住原区戸越町一―一三八 三井文庫蔵 昭和十七年二月影写畢」とあり、昭和一七（一九四二）二月に三井文庫所蔵の臨川寺文書のうち、おもに中世文書二三点を影写したものである。現在、それらはすべて当館所蔵文書群の中に伝存しているので、遅くとも昭和一七年までには当館所蔵文書群が三井文庫のもとに保管されていたことがわかる。

また一つは『臨川寺文書』一冊（請求番号三〇七一・六二・一一〇）で、この書写奥書には「山城国葛野郡天龍寺村天龍寺蔵本 明治十九年九月 修史局編集星野恒探訪 明年三月影写了」とある。これは、臨川寺の本山である天龍寺の所蔵文書のうち、「臨川寺重書」を書写したもので、現在も天龍寺に所蔵されている。

ほかに、東京大学史料編纂所では、『天龍寺文書』七冊（請求番号三〇七一・六二・三三・一一七）の影写本がある。その奥書には、「右 天龍寺文書 山城国葛野郡嵯峨村天龍寺所蔵 大正十一年一月影写」とあり、『臨川寺文書』とは異なる時期に影写したものである。

現在の臨川寺（京都市右京区嵯峨天龍寺造路町）には、古文書等は一切所蔵していないという。当館所蔵臨川寺文書と関連ある文書群としては、臨濟宗本山天龍寺（京都市右京区嵯峨芒ノ馬場町）に所蔵されている「天龍寺文書」がある。これは、京都府教育委員会によって『天龍寺古文書目録』（京都府古文書等緊急調査報告書、一九八〇年）が公刊されている。また、すべての文書は京都府立総合資料館によってマイクロフィルムで

収集され、閲覧利用に供されている。また、マイクロ撮影の際に新たに発見された文書については、京都府立総合資料館編『天龍寺古文書目録補遺Ⅱ』、『天龍寺古文書目録補遺Ⅲ』（いずれも内部目録）においてマイクロ収集されている。

総量は約三千点で、多数の中世文書を伝蔵しており、本文書群と同じく臨川寺その他の塔頭・末寺の文書を多く含んでいる。天龍寺にはかつて土蔵が三つあったが、現在では一つしか残っていないという。そこに什器などと一緒に、計一五個の木箱に収納された文書が保管されている。江戸時代の記録類は保存箱には入れられていない（『天龍寺古文書目録』九九頁）。江戸後期の天龍寺には「宝蔵」「経蔵」「記録蔵」の三つ蔵があり、元治元年（一八六四）の天龍寺伽藍焼失図（『天龍寺』一三七頁）には現在ある蔵の位置には「宝蔵」が立っている。

ところで、当館所蔵文書群の中には、明治三十六年（一九〇三）八月三〇日付で当直参暇秀嶽[§]が記した「文書目録」がある（史料番号九三一二）
その内容を次に記しておく。

- ①、勝智院旧跡指図 文祿元年十一月玄佐誌 (史料番号四〇)
- ②、門前境内へ申付書 延宝九年丙正月
- ③、歆喜寺古書 元祿七年并同時代古文書 三通
- ④、臨川寺重書目錄 延徳三年十一月記
- ⑤、臨川寺三合院屋地目錄 文明十八年七月二日 元承元定書印
- ⑥、山差出控 天正十五年
- ⑦、將軍家若君誕生ノ節五山進物覚書 寛文十九年三月晦日
- ⑧、入日記 慶長四年林鐘初三日
- ⑨、大授厄年祈祷卷物献上ニ付金地僧録之節書翰 二通
- ⑩、鎌倉黄梅院開山国師三百年香賀受領証一通 慶安二年 (史料番号六一)

明治三十六年八月三十日当直参暇秀嶽記（花押）

これは、本多越中守忠徳の京都五山宛書状（折紙）の紙背に記されている。ここに掲げてある文書を詳細に検討すれば、本文書群の伝来の経過もより具体的になると思われるが、現在わかる範囲で若干の指摘をしておきたい。まず、目録内容の①と⑩は本文書群の中に伝存しており、（一）内に史料番号を記した通りである。④は「天龍寺文書」の「臨川寺重書目録」（天龍寺二二八一号）ではないかと思われる。秀嶽は天龍寺塔頭の一つ弘源寺の塔主であり（田原義宣氏のご教示による）、明治三十六年に天龍寺当直参暇の立場からこの目録を作成しているので、当館所蔵文書群は遅くとも明治三十六年までは天龍寺内にあった。しかも、天龍寺所蔵の文書名も見えることから、本文書群は明治三十六年の段階で現在の「天龍寺文書」とともに保管されていたといつてよいだろう。このような伝来の経過に加え、当館所蔵文書群の中心をなすのは天龍寺の寺院組織の運営に関わつて作成、授受、保管された文書群である。そうした理由から、本文書群の名称を「天龍寺文書」と変更することが検討された。

しかし、本文書群の一部には臨川寺納所、同役者・役人を宛所とする文書群があり、これらは臨川寺伝来文書群として位置づけることができる。当館所蔵文書群を臨川寺伝来文書群と理解した場合、本山天龍寺の文書および他塔頭の文書が含まれている理由を考えねばならないが、天龍寺は各役職の輪番制をとっており、天龍寺の「年中記録」には天龍寺住持、臨川寺住持、維那、書記、侍香、蔵主、侍真といった役職交替の記事が記されている。こうした役職交替の過程で、役僧とともに文書が移動し、本山などの文書が各塔頭に残される可能性は十分にある。

しかも、臨川寺は後述のように明治二〇年から輪住制になり、組織としては天龍寺のなかに包摂された。その際に臨川寺伝来文書群が存在したとすれば、それらも天龍寺の管轄下に置かれたものと思われる。その臨川寺伝来文書と当館所蔵文書群を等式で結べる確証はないが、明治三六年段階で天龍寺参暇が天龍寺文書と当館所蔵文書群を同時に見ることができたとしても、それは本文書群が臨川寺伝来文書であった可能性を否定するものではない。また、天龍寺保管文書であった本文書群は何らかの理由により三井文庫のもとで保管されることになり、それらが三井文庫に入った段階、またはそれらの文書が利用される過程において「臨川寺文書」という文書群名称が付与された可能性もある。ただし、「臨川寺文書」という文書群名称が付与された経過が明らかでない以上、その経過を明らかにすることなしに安易に文書群の内容から文書群名称を変更してしまつては、本文書群が臨川寺の塔頭文書であったかもしれないという可能性を全く否定してしまうことにつながるし、本山の文書が

塔頭に残るといふ文書管理のあり方すら否定してしまうことになる。

したがって、天龍寺の文書管理のあり方、あるいは塔頭文書の史料学的検討が今後進められなければならないが、そうした研究が不十分な現段階において、当館所蔵文書群に天龍寺本山の文書が多く含まれている理由をもって、本文書群の名称を「天龍寺文書」と変更することには慎重でなければならない。そこで、本文書群の名称についてはこれまで通り「臨川寺文書」の名称を残すことにし、文書の性格をより具体的に表現できることを考えて「天龍寺塔頭臨川寺文書」とすることにした。

天龍寺の記録管理 天龍寺が所蔵する「天龍寺文書」の書付型文書の多くは成巻されているが、それらの末尾識語には天明四年（一七八四）一二月に文書の紛失を防ぐため、あるいは後鑑となすために、当住承宣・前住周容・同令玕・同周晃・同道祐・侍真承宣が成巻したとある。天明四年は現在ある「天龍寺文書」の形を作る上で、一つの画期をなすといえる。

天龍寺では、毎年七月に経藏・宝藏の虫払いをおこなっていた。文化一三年（一八一六）一〇月にはさらに記録の整理が進められ、常住年中記録は古来書つがれたもので清書して、一つは宝藏、一つは記録藏へおさめ、平日参照するのは参暇記録を用いるようになった。文化一二年に天龍寺は火災にあっており、焼失を免れた文書の整理が進められたものであろう。「天龍寺文書」のなかには、同様の内容をもつ「年中記録」が二系統伝存している。その一系統の宝永七年（一七二〇）の「年中記」の巻末には、「放火為恐ニ井戸納之事 付合貳百冊余 元治元年子七月十九日」とある。この時、天龍寺は薩摩藩兵の襲撃により火災にあい、建造物のほとんどを失ったが、文書を戦禍から救おうとする寺僧の努力により多くの文書が今日に伝えられたのであった。

史料整理の方針 当館では受け入れ以後、カード目録により閲覧にともしてきた。今回、文書一点ごとの細目録を作るにあたり、それまで付与されていた番号を活かし、一括で扱われてきた文書には枝番号を付けた。

本文書群の中世分から近世初頭の文書三七点については、すでに田中浩司氏によって目録化がすすめられており（『古文書研究』三五）、今回の整理においても参考とさせていただいた。それらについては既に紹介されたもので大幅な変更を加えることはしなかったが、一部に文書名表記を変えたものがある。その点をご了承ください。

三井文庫から史料館に譲渡された文書には、板紙（白地）で製本された文書が多く散見される。本文書群にもそうした文書が含まれている。とくに、内容が関連する書付型の一件文書は一綴りに製本されており、本来の原形が損なわれている。今回の整理にあたりそれらを原形に戻すことはしなかったが、「形態」の項目では原形がわかるような記述を併記するよう心がけた。

本文書群の大部分は書付型文書である。料紙の大きさに基づき、美濃判は美・美継、半紙判は半・半継、それらを断裁したものを切・切継と表記し、美濃判より大判の奉書紙などを用いた料紙は豎、それを横折にしたものを折と表記した。また、罫紙は罫と表記した。

史料の整理・分類においては、史料群を発生させた組織体の機能に基づき、史料群の有する階層構造を反映した編成となるよう心がけたが、天龍寺および臨川寺の寺院組織構造については十分な研究成果を持たないのが現状である。また、寺院はそれぞれの宗派ごとに独自の組織構造をもち、ある名称一つをとっても宗派によって呼び方・意味が異なるなど、その寺院組織固有の特徴として解明せねばならない問題が数多い。本文書群の整理にあたっては、まず史料上に現れる用語一つ一つの意味の確定を限られた史料の中から進めなければならなかった。その点で、京都府立総合資料館の収蔵フィルムにより「天龍寺文書」を閲覧できたのは幸いであつたが、なお不明な点は多いといわざるをえない。今後の研究の進展により、本目録の不備が修正されることを願っている。

二、「天龍寺」の歴史と寺院組織

本節の目的は、次の三節で述べる本文書群の階層構造を理解するために、本山天龍寺および臨川寺を含めた諸塔頭によって構成される「天龍寺」の歴史と組織構造を理解するところにある。「天龍寺」に関する研究は、奈良本辰也監修・大本山天龍寺編『天龍寺』によってその概要を知ることができる。本解題においても、特に断らない限り事実関係の多くを本書に依拠している。ただし、本文書群の中心をなす江戸時代の寺院組織については十分に知ることができないので、以下では各史料を引用しながら本文書群を理解するのに必要な範囲で説明を加えることにしたい。当館所蔵文書から引用する場合には、（ ）内に史料番号を示し、「天龍寺文書」の引用は（天龍寺□□号）と記している。

臨川寺 臨川寺は京都府京都市右京区嵯峨北造路町にあり、臨濟宗天龍寺の別院である。建武二年（一二三五）十月に夢窓国師を開山として創立され、靈龜山臨川禪寺と号し、勅願寺とされた。もとは、龜山法皇の離宮「龜山殿」の一部で、川端殿と呼ばれた。臨川寺は十方住持制をとらず、門様相承制を認められた度弟院（^{つちえん}一門派が住持の座を独占する）であったため、臨川寺の事務、寺領の一切は夢窓およびその一派の手に恒久的かつ独占的に握られていた。康永元年（一二四二）に五山十刹の制度が整えられると、十刹の第二位の寺格となった。永和三年（一二三七）にはついに五山に列し、東福寺下位の席次となったが、五山では十方住持制がとられていたため度弟院としての特権を放棄しなければならなかった。そのため、二年後の永和五年に寺格を再び十刹に戻した。その後、応仁の乱で焼失するなどの打撃をうけ、次第に独立寺院としての機能を喪失して、天龍寺の傘下に組み込まれることになった。焼失した建造物の再建が明応五年（一四九六）頃から始められ臨川寺の再興となったが（「臨川寺山門再興造営之帳」史料番号二）、その後も数度の火災にあい、現在では夢窓疎石と世良親王の塔所となっている三會院（本堂）・客殿・中門などが残っている。現在、中門にかかっている「三會院」の額は、足利義満の筆と言われる。

明治維新後は政府の方針により各寺院の輪住制を廃止する独住制が命じられ、東堂・西堂の区別なく塔頭が独立に運営されることになった。その際、臨川寺は後住が決まらず廢寺寸前となったが、明治二十年（一八八七）四月一日より西堂の地位にある者が本末の差別なく位階の順序により満一カ年宛輪住交代し、各自が課出金を納めて維持費を捻出することに取り決めた。その「臨川寺輪住規約」（史料番号三七）を次に掲げておく（なお、一部の旧字は新字に変えている）。

- 一 例年、四月一日を以て交代ノ定日トナス
- 一 末寺ヨリ輪住ノ時ハ、交代定日ノ五日以前宿院へ到着之事
但シ往返并宿院ノ費用自弁ノ
- 一 当番ノ員数事故ニ因リ登山スル能ハサル者ハ、代理員依頼スヘキ事
但シ西堂以上ノ者ニ限ルヘシ
- 一 代理ヲ以当番ヲ務ル者ハ、本員并ニ代理員連署ヲ以テ前年十二月中可届出事

但シ本山塔頭ノ員ヘ代理依頼スルモ不苦

一 登山ヲ代理ニ依頼スル片ハ、往返ノ路費并謝勞金五円代理員ヘ贈呈スヘキ事

但シ本山塔頭衆ヘ依頼ノ片ハ謝勞金半額タルヘキ

一 輪住中ハ、諸西堂ノ上位タルヘキ事

但シ例月行事ハ勿論、祖忌宿半共焼香ノ

一 輪住一回ヲ勤ムルノ後チ、勲勞トシテ職錢ヲ免シ黄衣東堂昇階ヲ推挙スヘキ事

但シ代理住ノ片ハ之ヲ遙任ス

一 別記香資課出金ハ、毎年六月三十一日限り地方取締ニ於テ取纏メ差出ヘキ事

右

年中香灯保存費予算

一 金 六 拾 円 月五円宛

香灯并庫下年中費用

一 金 貳 拾 五 円

年中修繕費

合 金 八 拾 五 円 也

納

一 金 三 拾 円

本山ヨリ支弁

一 金 拾 円

資本金百円
御寄付ノ利子

住山閣下ヨリ資助

一 金 五 拾 五 円

課出金見込

一 金 壹 円 宛 東堂并西堂位

一 金 五十 錢 宛 前堂位

合 金 九 拾 五 円 也

この時に課出金を負担したのは、在籍西堂三六名、東堂九名、前堂三一名であつた。

天龍寺の寺院組織 天龍寺は京都市右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場町にある臨済宗天龍寺派の大本山で、臨川寺と同じく霊亀山と号する。後嵯峨上皇が営んだ亀山殿の地に足利尊氏が後醍醐天皇の菩提を弔うために勅願寺として創立した。暦応二年（一三三九）に夢窓疎石を開山とし、京都五山の制が整備されるに伴い京都五山の第一位の地位を確立したが、室町幕府の外護を背景に発展した天龍寺は、応仁の乱以降の戦乱によって次第に勢力を失っていった。

天正一三年（一五八五）には、豊臣秀吉が嵯峨一一〇〇石・西岡樋爪村三三四石・同馬場村三三六石・北山村六〇石の計一七二〇石の寺領を寄進した（天龍寺二九〇号）。江戸時代になつてもこの石高に変化はなく、宝永七年（一七二〇）の「年中記」には、この年に朱印改めがあり、天龍寺一七二〇石、塔頭禅昌院八石四斗、末寺等持院三三六石五斗余、上京宝巖院三二石、丹州常照寺五〇石が書き上げられている。つまり、「天龍寺」の諸塔頭は、右の三寺院の他は「天龍寺」に与えられた寺領を分有してその経済基盤とした。第1表に正徳元年（一七一一）の天龍寺および塔頭の村別石高を示したが、三六の塔頭の名が見える。

「天龍寺」の塔頭は時代によって増減した。江戸時代の始めには三一院の塔頭があつたが、明治五年（一八七二）には二二院に減じ、現在では境内塔頭として、慈濟院・三秀院・松巖寺・妙智院・寿寧院・弘源寺・宝巖寺・永明院・等観院があり、境外には臨川寺、金剛院、宝寿院の計一一院が残っている。

「天龍寺」をとりまく外部組織としては、まず五山の制度を説明しておく必要がある。五山制度とは、禅林を五山、十刹、諸山の三段階に分ける官寺制度のことで、元来は中国の創案であるが、日本においては鎌倉幕府によって鎌倉五山が創始され、建武政権、室町幕府を経て、京都五山の制度が整えられ、三代足利義満の時代に南禅寺を五山の上に置き、第一 天龍寺・建長寺 第二 相国寺・円覚寺 第三 建仁寺・寿福寺 第四 東福寺・淨智寺 第五 万寿寺・淨妙寺 と定められた。つまり、五山制度には幕寺関係が強く反映している。

建武三年（一三三六）ころ、室町幕府は禅律方を設け、禅律寺院を統制したが、五山派が夢窓派を中心に台頭してくると、禅寺の統制は幕府

第1表

正徳元年天龍寺・塔頭村分高表

寺院名	寺廻	川端村	山本村	小溝村	上嵯峨村	池裏村	生田村	高田村	北山村	小計1	馬場村	樋爪村	小計2	合計
常住領	6.996	7.803	5.177	0	5.782	3.002	10.433	0	3.260	42.453	40.239	46.738	86.977	129.430
景德寺領	2.440	5.941	2.682	3.343	1.929	3.281	3.827	0	0	23.443	4.567	9.815	14.382	37.825
崇恩寺領	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4.567	9.815	14.382	14.382
堂司料	1.691	1.620	2.931	0.435	3.101	2.318	1.563	0	0.900	14.559	0.364	0.278	0.642	15.201
客頭料	0.736	0.732	0	0	0.522	2.500	0	0	0	4.490	0	0	0	4.490
兄部料	0	1.477	0	0	0.360	2.078	0.427	0	0.444	4.786	1.577	2.814	4.391	9.177
力者料	0.520	1.145	0	0	0	0	0	0	0	1.665	0	0	0	1.665
雲居庵領	4.343	4.719	0	1.620	2.880	1.766	8.685	0	1.387	25.400	0.184	1.595	1.779	27.179
真碩学科	5.724	11.768	1.212	2.817	10.100	10.381	9.158	0	0.600	51.760	20.714	29.235	49.949	101.709
松碩学科	15.099	14.5412	6.556	2.945	2.675	2.895	13.581	0	3.812	62.1042	16.336	26.495	42.831	104.9352
慈碩学科	2.799	5.208	6.501	4.258	14.317	7.490	12.222	0	0.315	53.110	20.317	26.501	46.818	99.928
臨川寺領	7.911	4.932	1.560	1.710	5.641	4.136	6.408	0	1.693	33.991	0.255	1.301	1.556	35.547
三合院領	5.154	4.592	1.865	3.725	4.465	6.841	2.288	0	1.566	30.496	5.787	4.411	10.198	40.694
慈濟院領	24.925	12.364	6.898	10.472	12.824	11.481	8.857	0	5.790	93.611	1.095	3.814	4.909	98.520
福壽庵領	3.932	7.783	0	1.520	1.666	2.710	3.071	0	1.280	21.962	3.734	2.815	6.549	28.511
梅陽軒領	0.720	3.623	0	0.157	1.877	0	1.093	0	0.332	7.802	0	0.111	0.111	7.913
喜春軒領	9.132	0.984	2.440	2.580	1.108	0.390	2.094	0	0	18.728	0	0	0	18.728
養清軒領	10.525	1.642	1.625	0	3.825	7.933	0.840	0	2.080	28.470	5.621	2.147	7.768	36.238
蔵光庵領	2.590	5.130	0	4.575	6.491	7.966	2.552	0	2.544	31.849	2.724	4.590	7.314	39.162
鹿王院領	9.062	48.033	2.876	0.407	9.615	3.802	10.433	2.842	8.647	95.717	0	0.570	0.570	96.287
瑞応院領	2.473	5.469	8.531	3.853	5.629	7.839	5.087	0	0	38.881	0	0	0	38.881
正円庵領	0	9.688	0	1.456	0	2.147	2.500	0	0	15.791	0	0	0	15.791
法苑寺領	1.852	2.072	0	0.718	1.370	0	1.717	0	0	7.729	0	0.282	0.282	8.011
真乗院領	16.5315	16.5455	1.170	0.600	12.599	5.750	0.880	4.720	4.313	63.109	11.997	20.496	32.493	95.602
龍昇院領	3.386	6.097	1.100	2.008	1.392	3.488	10.714	0	0	28.185	6.050	7.561	13.611	41.796
栖林軒領	0.914	2.708	0.535	0	2.988	2.191	2.478	0	0.672	12.486	0	0	0	12.486
妙智院領	13.272	16.0225	4.348	3.783	9.713	5.572	4.989	0	4.025	61.7245	15.734	13.769	29.503	91.2275
華蔵院領	4.268	1.380	0.546	0.394	4.808	0.354	0.540	0	0.800	13.090	0.171	0.448	0.619	13.709
永明院領	2.262	0.244	0	1.951	1.604	1.210	1.145	0	0.600	9.016	6.817	6.920	13.737	22.753
西芳院領	0	0.560	0	0.364	3.355	0	1.881	0	0	6.160	29.887	31.776	61.663	67.823
延慶庵領	0	3.148	0.532	0.563	0	2.583	6.391	0	0.587	13.804	20.366	30.497	50.863	64.667
壽寧院領	5.846	5.994	4.817	0	7.610	3.463	2.754	0	1.880	32.364	4.295	9.495	13.790	46.154
南芳院領	9.0835	4.240	3.995	1.057	5.171	4.030	6.460	0	2.100	36.1365	0	0.670	0.670	36.8065
華徳院領	1.463	0.727	0.302	0.762	3.742	0.383	1.418	0	0.870	9.667	0.716	2.028	2.744	12.411
栖松軒領	4.175	5.538	1.320	0.650	1.495	0	1.406	0	1.242	15.826	0.262	0.696	0.958	16.784
宝篋院領	2.968	0	0.554	0.090	0.693	5.752	2.430	0	0.540	13.027	0	0.153	0.153	13.18
松岩寺領	6.518	6.619	1.934	1.090	12.015	1.238	7.875	0	2.060	39.349	0.117	1.461	1.578	40.927
三秀院領	9.565	5.920	3.011	0.800	1.923	5.941	10.129	0	1.040	38.329	0	0	0	38.329
宝壽院領	0	1.218	0	0	2.282	0.364	2.564	0	0.380	6.808	7.291	20.702	27.993	34.801
招慶院領	3.385	3.560	8.124	0	10.884	0.830	4.903	0	1.110	32.796	0	0	0	32.796
龍濟院領	0.909	0	0	0.751	0	0	0	0	0	1.660	5.559	12.781	18.340	20.000
弘源寺領	3.308	0	0.855	2.280	1.013	0.880	0	0	0	8.336	7.167	1.614	8.781	17.117
維北軒領	6.486	6.065	1.555	0	2.057	2.678	2.424	0	1.732	22.997	0	1.926	1.926	24.923
禪昌院領	1.567	0	0.844	0	0.184	1.980	2.420	0	2.460	9.455	0	0	0	9.455
合計(石)	214.531	247.8522	86.396	63.734	181.705	139.643	180.637	7.562	61.061	1183.1212	244.510	336.320	580.830	1763.9512

出典：「天龍寺常住并諸塔頭領村分高括牒」（史料番号23）

の直轄を必要としなくなった。そのため、義満は康暦元年（一三七九）に春屋妙葩を初代僧録司に任じて、禪宗官寺の人事権、官寺への昇格、位階の昇進、所領の寄進、訴訟の裁決などを統括させた。義満はさらに相国寺を建立し、同寺内にあった秀峰尤奇（聖一派）の開いた安聖寺を他所に移し、その跡地に小御所を立てた。永徳三年（一三八三）九月からここを鹿苑院と称して義満の修業所とし、やがて相国寺の塔頭の一つとなり、塔主として禪僧を常住させ、最初の鹿苑院院主となった絶海中津が天下僧録を兼帯したため、義満の晩年には相国寺塔頭鹿苑院の院主が歴代僧録司を兼ねることが慣例となった。その後、皇族による僧録の補佐役を副僧録と呼び、鹿苑寺の一寮舎である蔭涼軒いんりょうけんの軒主がこれにあつた。藤原氏などの門閥出身者が多く任じられるようになった頃から機能が著しく低下し、その主導権は下位職の蔭涼職に移ったが、形骸化しながらもその制度は室町幕府とともに存続した。元和元年（一六一五）徳川家康は蔭涼職とともに僧録を廃止したが、同五年九月に二代將軍秀忠は南禅寺金地院の以心崇伝を僧録司に任じ、以後幕末まで同院の歴代塔主が僧録司を勤めた。

江戸幕府が重視した五山僧の機能の一つに、対馬国以酩庵における日朝交易がある。幕府は寛永一二年（一六三五）に柳川一件（国書改ざん事件）を処理すると同時に、室町幕府以来続いている対州書役（修文職）の制を改め、以酩庵の輪番制を導入した。これにより、南禅寺以外の五山から筆に長じた学僧を朝鮮書契御用として選出し、輪番で対馬国の以酩庵に駐在させ、外交往復書簡の起草や、朝鮮使者の応接に対応し、特に朝鮮通信使の応接では対馬藩主とともに江戸往復の接待を勤めさせた。交替期は初め一年であったが、明暦元年（一六五五）から二年となり、慶応二（一八六六）に廃庵となるまで日朝関係のパイプ役を果たした。

五山では優れた人材を門派を問わず住持に迎える人材登用である十方住持制をとっていたので、諸山、十刹、五山と優秀な僧侶は出世していった。出世するためには、まず秉私ひんしという禪宗特有の出世のための資格試験を受け、これに合格した僧は時の住持からその証明書である謝語しゃごを書いてもらい、諸山へ出世する正式の資格を得た。五山の中では、東堂・西堂の衣相および坐具などの色を定めて区別したことから、侍者・藏主・座元・西堂・東堂・住持などの名称が僧階に変化した。東堂は当該禪寺の前住者のことで、他山の前任者がきて住することを西堂といった。ただし、天明六年（一七八六）八月の「臨川当住座位之事」（史料番号七七）には「臨川寺当住之座位、中古已来雖為籍次前住当住之差別依無之、今般衆議之上可為西堂之上首者也」とあり、臨川寺においてはこの時当住の座位が西堂の「上首」（上位）と定められた。

ここで延宝九年（一六八一）の「新壁書」（天龍寺一三〇六号）を引用しておく。

新壁書

一、住持交代 解夏 除夜

一、塔主交代 同

一、参暇 一節

一、定参暇 梅林 西堂

一、役者 両節

一、参暇衆方丈聚会附役者

但、毎月朔日 十日 廿日

諸事記録

一、從塔頭出家衾員方丈江毎月加番

但、天龍・臨川之当住、定参暇免之

一、方丈夜番力者衾員宛

但、力者寺中掃地免之

一、寺中掃地 一月六度

但、從塔頭五人宛出之掃地

奉行役并行者衾員

一、勘定一年兩度 二月二日 八月二日
但、晚炊停止

一、維那官錢貳斛可出之

同衣料貳石

一、現管可預置千当住院事

但、兩参暇役者之相封

一、米倉兩参暇役者之相封

一、米弘兩参暇役者相談之上、可届当住事

一、米銀不可私借事

一、竹木不可私伐事

右衆評如件

延宝第九辛酉年

夷則廿三日

参暇

周郁(花押)

同

承定(花押)

同

周保(花押)

当参暇

善俊(花押)

東堂

玄英(花押)

同
道充（花押）

前住
玄森（花押）

同
梵亨（花押）

住山
玄竹（花押）

住山（住持）・塔主・前住・東堂・西堂・参暇・当参暇・定参暇・役者・維那・奉行・行者・力者といった職名を確認でき、署名の高下から僧階を窺うことができる。これ以外に、史料上には常住・当住・侍真・侍香・書記・藏主・納所などの職名が見え、それらの職掌と相互の関係を知らることが本文書群の理解のためには不可欠である。

「天龍寺」組織において最高の地位にあるのは、言うまでもなく本山天龍寺の住持で、住山・常住とも呼ばれた。次に、本文書群において史料によく見られる役職には参暇がある。これは参暇禪師ともよばれ、江戸時代の禅寺における行政上の実際の首脳者で、三―五人によって構成された（『天龍寺』一二二頁）。これに次ぐのが役者であり、参考までに次の史料を掲げておく（天龍寺一二九二号）。

壁書

一、当寺奉行之事、四人組之内一人充毎日常在方丈、三人者公儀其外諸役等從二月二日至八月二日可勉之事

一、常住領之外、諸塔頭寮舍行力領分、斛別清錢五錢充毎年二月二日、八月二日、至方丈当奉行衆江渡之可請取、但、勘定日者可為二月二日、五月二日、八月二日、十一月二日、参暇并奉行被相勘衆江相触可勘定事

一、右之出錢者、可有受用公儀之諸式在方丈、奉行一回之内江為飯費并油炭茶之代貳斛壹斗可渡之、於当国内者路料飯費以下不可有下行、

当国外者为飯費、上者一日四拾文充、下者三拾貳文充、可有下行、此外路料者隨其時可有勘定、遠国下向之時者以衆評可相究、若出錢下行仁不足之時者、可為追打事

一、出錢式日以後、過五日者為罰金一倍可出之事、付、追打出錢相触以後過音者罰金可為一倍事

一、參暇役者公儀之御札二節、為輪番一人充可勉之、但輪番參暇或公儀或他行難去儀有之時者、在寺之參暇雖非番可補之、此外公儀至寺家大抵者參暇中江可相尋事

一、常住領内檢・免相之時者、奉行之内三人可有在庄、納之時者一人可有在庄、至納下勘定者可為右之式日、但、未進書ヲ相究、次之奉行江可相渡、北山・嵯峨村領分納下勘定可為同前事

一、官物并度月橋錢、逐一当奉行請取、納帳仁結之、妙智院江可預置事

一、參暇諸家江札錢之時者、行者一人輪番仁相定可召連事

一、常住・臨川兩寺之力者用所有之時者、可罷出為飯費等一器充其日仁可下行、若力者於不罷出者、所司代江可相尋事

奉行之次第

慈濟院

一番

宝篋院

南方院

華德院

陽春軒

院

慶寿院

二番

招慶院

維北軒

藏光庵

栖林軒

真乘院

三番

三秀院

松岩寺

地藏院

永明院

陽春院

四番

宝寿院

養清軒

寿寧院

喜春軒

五番 西芳寺 瑞応院 宝泉庵 蒼玉院

右之条々以衆評相定上、及兎角輩於有之者為当奉行所司代江相尋可隨其旨也 仍議定如件

天正廿壬辰年正月十九日

維那

周笈（花押）

（二十七塔頭名省略）

天正二〇年（一五九二）に定められた右の塔頭役者による組編成は、文祿三年（一五九四）年八月二日に改編され、さらに慶長二年（一五九七）二月二日には、これまでの五番編成に保祐庵・崇恩院・華藏院・栖春軒を加えて六番編成に変更された。内容的には、まず四人組の内一人が毎日方丈に詰め、残る三人は「公儀其外諸役等」を二月二日から八月二日まで半年勤務し、常住領のほか、諸塔頭・寮舎・行力領分の石別清錢五錢充を毎年二月二日・八月二日に方丈の当奉行衆へ渡して請取を取ること、勘定日は二月二日・五月二日・八月二日・十一月二日とし、参暇および奉行とともに勘定をすること、などとあるように、天龍寺の勘定方の支配を主に扱っている。

役者はさらに寛永元年（一六二四）に、次の職務規程を定められている（天龍寺一二九号）。

当時役者諸式壁書

一、三員之役者如有来壁書諸事可被相勤 但、於金銀錢之納者為三員封之、可被置一処不可有分数事

一、諸式納下方勘定之式日不相替可有算用、若三員之内以常住物并自他之用不遂算用仁於有之者、為其組之奉行役相并遂算用、以不沙汰之知行之物成随相当加貳和利、可被押取事

一、三員之内、若虚妄有之時、或構鼻肩於被背壁書之旨、奉行組者其組之知行之物成随相当、常住江可押取事

右條々堅可被相守、若及異儀仁於有之者、為此判形之衆中歴公儀急度可申付者也、仍衆評如件

寛永元甲子年

十二月廿四日

（維那一名・参暇三名・当参暇一名・住山書判省略）

これによれば、三人の役者は壁書にかかれた諸事務の取り扱い（特に金銀銭の管理）と常住物の諸式納・下行・勘定算用を取り扱い、その上で不正があつた場合には各組の奉行役の者が規定に基づいて処罰するよう取り決めている。

この役者とは別に、「天龍寺」には役人と呼ばれる人物がいる。本文書群のなかには、小林主税・芹川富三郎・小林直一郎・西川政一郎・江村小右衛門・笠岡源右衛門・大西多右衛門（史料番号二八九）、西川備右衛門（史料番号一三七一一）、武尾了可（史料番号二四八）、芹川恵且（史料番号二九七）天龍寺祠堂方役人小林与左衛門・天龍寺役人加藤元長（史料番号三三七一六）の名が見える。芹川の名は客頭としても史料上に現れ、富田屋久右衛門の小屋造作願を客頭である芹河恵且が臨川寺役者に宛てて提出しており（史料番号一一一六八）、臼井壽瑄も造路町藤兵衛の小屋造作願を臨川寺役者に取り次いでいる（史料番号一一一七二）。

「天龍寺文書」には、安永九年（一七八〇）に寿寧院が境内の北敷を亀溪院の旧跡と地替をした際の証文に役人の名が詳しく出ている（天龍寺四二三号）。寿寧院の北隣華徳院役人供川奎右衛門・西隣蔵光庵役人小林次左衛門・華徳院役人中川如水・同利兵衛・寿寧院役人松田政八が連印で地替願いを出したことに對し、参暇令珣・周晃、役者周楨・昌鈺・令玉、役人臼井寿瑄・小林利右衛門、寿院役人加藤寿元・西川政右衛門が検分のうえで絵図四枚を作成し、方丈および臨川寺・華徳院・寿寧院の四ヶ所それぞれを保管する旨の奥書を記している。これにより、各塔頭ごとに俗名をもつ役人が一名から二名いたことがわかる。

力者は中世においては公家・寺社・武家などに仕え、駕輿、馬の口取り、長刀を持った警固、使者など、力役を中心とした奉仕にしたがつた者をいい、剃髪しているが僧侶ではなかった（菊池紳一「力者」『国史大辞典』四）。各衆派によつて意味するところも異なるようだが、延宝九年（一六八一）臨川寺には力者が七名（作右衛門・庄兵衛・多右衛門・源右衛門・喜兵衛・茂兵衛・喜左衛門）おり、宝曆十二年（一七六二）二月にはその子孫六名と三合院の力者一人が、臨川寺より預け置かれていた外畠・内屋敷を質入または沽却しないことを臨川寺役者から申し渡されている（天龍寺四五三号）。ほかに、方丈の夜番（同一三〇六号）を勤めた。

天龍寺門前村 天龍寺門前村は、立石・造路・毘沙門・法界門前・小屋町の五町と山本村・小溝村が含まれた。享保一四年（一七二九）の「山城国高八郡村名帳」では、天龍寺門前は村高二一六石五斗六升余で、そのうち天龍寺領が二〇二石五斗三升余、残る一二石二斗八升余を大覚寺

宮領・河野家領・二尊院領が分けていた。そのうち、臨川寺は造路町の一角、天龍寺の東側にあり、大井川に面して渡月橋の北に位置した。天龍寺門前村の村域は、北と西は上嵯峨村、南は大堰川を境に上山田村に沿って、東は下嵯峨村に接する。村の南端を大堰川堤に沿って下嵯峨街道（三條街道）が西極の筏改所まで通じ、村の中央東寄りを芹川が南流して大堰川に注いでいる。

下嵯峨川端村 下嵯峨村は、北は上嵯峨村、西は天龍寺門前村、東は生田・高田村、南は大堰川を挟んで上山田村に接する。大堰川の北側に位置したため川端村とも、下嵯峨川端村・嵯峨川端村とも称した。本文書群においては、下嵯峨川端村として記された文書が多い。

宝永四年（一七〇七）一月に川端村年寄が京都町奉行に提出した書付（天龍寺二八八号）によれば、天龍寺が建立して以来、地侍の役儀として入院乗払・御開山大年忌等の折には方丈勤めをし、川端村は天龍寺境内地なので往古より入組の領主（本所様）の諸役は免許で、居屋敷にかかる年貢のみ各領主に納入し、宗旨証文は天龍寺の方丈に提出（指出）するだけで「公儀」へは提出しない、と述べている。川端村はまた大郷なので、天龍寺から任命された大年寄二、三名が、天龍寺と各村との諸届や諸願の取次を行っていた。大年寄を勤めたのは、大八木（米）・福田の両家であった。

三、天龍寺塔頭臨川寺文書の性格と階層構造

本文書群は、貞和五年（一三四九）年から明治三六年（一九〇三）年におよぶ総点数六九五点の文書群である。その中心となるのは江戸期の文書であるが、既述のように江戸時代の禅林寺院組織については十分な研究蓄積をもたないのが現状である。そうした限界を考慮しながら本文書群の階層構造をおおまかに示せば、次のような発生の契機を異にするサブ文書群の集合体であると考えられる。

- 1、京都五山第一位としての天龍寺の寺院機能に基づき発生、授受、保管された京都五山文書群、
- 2、本山天龍寺と諸塔頭の組織運営に関わって発生、授受、保管された「天龍寺」文書群、
- 3、各々の塔頭における組織運営に関わって発生、授受、保管された天龍寺塔頭文書群、

したがって、大項目には「五山／天龍寺」、「天龍寺」、および塔頭でまとまっている文書群として「臨川寺・三會院」「弘源寺」を立て、断片的な塔頭文書は「諸塔頭」のなかで一括して扱った。さらに、いずれに属するか判断の難しい絵図類については便宜的に「絵図類」という項目を立てている。

本文書群の内容は、2の「天龍寺」文書が中心で、次に臨川寺・三會院関係の文書が多いが、そのほかの塔頭の文書も含んでいる。本文書群の性格は寺院文書であるが、それに特徴的な経文や偈頌、謝語、血脈図などは見られず、どちらかといえば領主文書としての性格が強い。

五山／天龍寺 ここでは、天龍寺の京都五山第一位の寺としての機能に基づき発生、授受、保管された文書を取めた。まず、上級権力との関係で「室町幕府」「織豊政権」「徳川幕府」「明治政府」の中項目をたてた。前二者との関係では、知行安堵・諸役免許状の写が伝わっている。「徳川幕府」では、まず五山の碩学に与えられる学資米に関わる文書があり、「学資米支給」の項目を立てた。五山僧の困窮ぶりが知られるほか、寛永二〇年（一六四三）に完成した「寛永諸家系図伝」に関わって江戸下向した際の賄帳があり、同事業への五山僧の関与がわかる。また、江戸期における以酊庵の運営は幕府と五山の関係において重要な問題であり、その関連史料がある。これは「朝鮮修文職・以酊庵」の小項目を立てた。

幕府と天龍寺を取り次ぐ僧録職関係では、元和五年（二六一九）から正徳四年（二七一四）の間の歴代僧録職の補任状写が八通ある。僧録司金地院から幕府への吹挙状（下位者から申し出たことを上位者に取り次ぐ文書）は昇位の吹挙案が一件あるのみで、他は天龍寺の吹挙願いに対する金地院僧録司からの返翰があり、小高檀紙二枚（本紙一枚・礼紙一枚）の料紙に切封の様式を用いている。右以外で幕寺関係に基づき発生した文書については、「公儀御用」のなかで一括して取り扱った。

「明治政府」関係では、明治五年から六年にかけての「教院録」一冊があるのみである（史料番号三六）。

天龍寺 「寺領」では寺領関係の史料を集めている。「勘定」については、その機能についての若干の説明をしておきたい。まず、天龍寺文書から次の史料を引用したい。

帳箱入日記

（天龍寺四一五号）

一、寺院校割帳

壹卷

一、同寄附帳

壹卷

一、同納下帳

自慶安二已丑年
年

三十一冊
裁捨本冊

一、三會唐司道具帳
一、壽慶屋敷之狀
一、寺院納下帳

自慶安二已丑年
至貞享三丙寅年正月

壹冊
壹通
四拾一

一、(天龍寺重書写
天龍常住へ出之

甲乙
貳冊

一、臨川寺重書写
同断

貳冊

右

一、(三會重書写
同断

貳冊

延宝四丙辰年

七月晦日

寿覺(花押)

一、古壁書

七通

一、臨川前住入牌壁書

壹通

一、等持門前 久左衛門來狀

壹通

一、(福寿庵地替証文
貞享二丑年常住重書箱へ入

壹通

一、天龍常住借狀

壹通

一、同道務屋敷請狀
天龍常住へ出之

壹通

一、(藏光庵地替証文
貞享二丑ノ年常住重書箱へ入

壹通

一、同力者庄左衛門島請狀

壹通

天龍常住へ出之

一、臨川寺領畠開請狀
同断 壺通

(一) 免ヲ破故狀ヲ破
一、生田藤左衛門田地請狀 壺通

一、池浦次右衛門田地請狀 壺通

一、安堵橋四郎右衛門田地請狀 免破 壺通

(一) 貞享二年常住重書箱へ入
一、山本弁才天屋敷地替絵図 一枚

一、借米狀 壺通

一、

一、油通 壺通

まず、延宝四年(一六七六)に寿覚によって右の文書が帳箱に入れられたこと、それらの一部の文書は貞享二年(一六八五)に天龍寺常住のもとへ移されたこと、常住のもとには重書箱があること、などがわかる。塔頭名では臨川寺・三会院・福寿庵・藏光庵・等持寺が見られることから、これは一塔頭における「帳箱入日記」ではなく、天龍寺および諸塔頭を統括する「天龍寺」の部局における文書管理の記録である。しかも、納下帳の管理をおこなう部局であること、納下帳以外の文書の内容も天龍寺および塔頭の財政・財産に関わる文書が多いこと、さらに天龍寺常住とは明らかに異なる部局であることから、「天龍寺」全体の財政を扱う部局、いわゆる「天龍寺納所」において作成された文書管理の記録であると思われる。

こうした文書管理のあり方を本文書群の目録編成に反映させるならば、文書表題に「臨川寺」とあるからといって、それを臨川寺において作成、授受、保管された塔頭伝来文書と考える理解は極めて一面的であるといえよう。「天龍寺」の一塔頭である臨川寺の勘定関係の帳簿は、「天龍寺納所」において作成、授受、保管された文書と、「臨川寺納所」において作成、授受、保管された文書とが存在するのであり、その他の塔頭においても同様なことがいえる。

具体的な事例をあげれば、たとえば「臨川寺領・三合院領田畑救米申渡并請取印形帳」という文書がある（史料番号二九）。これは文化四年（一八〇七）一月に臨川寺領・三合院領の村々百姓が、当夏以来の雨天・台風による不作のため、破免を願い出たことにより、天龍寺役者が田畠一步通の救米を与えることと定免を見取免に変更することを申し渡し、その奥書に各村百姓が救米の請取押印をした史料である。これは内容的には臨川寺・三合院の寺領経営に関わるものだが、機能的には塔頭領を統括する「天龍寺」において作成された史料ということになる。そのため、本文書は大項目の「臨川寺・三合院」ではなく、「天龍寺」のなかに配列している。逆にいえば、利用者において臨川寺・三合院の財政構造を知るためには、本目録の構成からは「天龍寺」の「勘定」と「臨川寺・三合院」の「勘定」の両方を見る必要があることに注意してほしい。

「納下帳」とは禅宗寺院によく見られる収支帳簿である。本文書群の中世分の帳簿、および天龍寺の寺内収支機構について検討した田中浩司氏によれば、これらの帳簿は「天龍寺」の一部局である納所が作成したものという。納所は莊園年貢を財源として日常仏事の運営をおこない、納所寮・維那寮・力者・行者などを所管としていた（田中「戦国期寺院領主経済の一鱗」）。近世になってからも「天龍寺納所」の呼称は史料上に見られるが、組織としての機能が中世戦国期と同じであるかどうかは今後の課題として残されている。慶安四年（一六五二）八月朔日の「寺院古帳之覚」（史料番号六二）によれば、まず天文八年（一五三九）「米方納下帳」一冊があり、慶長四年（一五九九）から正保四年（一六四七）までは臨川寺および三合院の「年貢帳」「納下帳」が毎年各一冊づつ計二冊が毎年作成され、保管されていたことを記している。

次に、奉加とは寺社・仏像の造立修補や經典刊行などの事業費を集めることを目的として、一般の人々に仏縁を結ぶ機縁になると称して、淨財の寄付を求めるもので、「奉加帳」とはその寄付を申し出る文書のことをいう。逆に、淨財の寄進を進める側の文書を「勧進帳」という。天

龍寺の納所において掌握された帳簿であるが、「納下帳」と「奉加帳」が合冊されたものがあるため、「納下・奉加」の中項目を立てた。

寺領からあがる年貢以外には、貸金の利子、借入金、開帳の賽銭が「天龍寺」の主たる収入源であった。そこで「借用証文」も「勘定」の項目で扱った。ほかに、寛文年間の酒造制限に関する請状を配列した。

「継席」は諸塔頭の塔主の後継を天龍寺参暇および役者に宛てて願い出るもので、「天龍寺」の人事は参暇・役者の管轄であったことがわかる。石州宗林寺は、島根県邑智郡羽須美村にある「天龍寺」の末寺である。

「造作願・伺・届」では、天龍寺および塔頭における造作普請に関わる一連の文書を収めている。普請を希望する塔頭は、まず京都町奉行所に「願状」を提出し、奉行所からの許可がおりると、塔頭は奉行所に「請状」を提出するとともに、本山の天龍寺参暇・役者に普請の「届状」もしくは「伺状」を提出する。また、普請の請負大工が普請箇所の絵図および京都町奉行所から許可が得られた旨を記した「伺状」を大工頭の中井家に提出し、その提出文書に中井主水（または藤三郎）が許可の裏書をして大工に差し戻した。天龍寺の御用大工は京都一条通七本松東江入ル町平松組の市左衛門であった。普請が終わると、再び塔頭は奉行所に普請箇所の「届状」を提出して、一連の事務処理を終えた。百姓が屋敷の普請を願い出る場合には、まず百姓から領主である塔頭に願い出て、そこから天龍寺常住に「願状」が出されている。これらの文書の配列順は、まず本山人龍寺をおき、次に「天龍寺」の塔頭を五十音順にならべ、その後相国寺およびその塔頭、大徳寺およびその塔頭の順に配列した。他山である相国寺・大徳寺の文書が伝存している理由はよくわからない。

「争論」では、まず享保三年（一七一八）に天龍寺と松尾社との間で藪伐採に関して境論争があった。これはそれまでも度々係争していたようで、同六年に裁決が下り天龍寺の勝訴となっている。この件については「天龍寺」（一一〇頁）にも説明がある。

宝暦二年（一七五二）には、川端村の惣百姓が同村大年寄と家別印鑑の件について争論をおこし、奉行所に大年寄の横暴を訴え出ている。これは川端村が天龍寺の領主支配から離脱しようとする動きとなったため、惣百姓と天龍寺との争論に発展した。結局は、天龍寺の川端村支配が旧来通りに認められた。これら一件文書を入れた袋の上書には、「安永三年午十月九日改之 川端村印鑑出入（破損）用帯刀一件 反古也 但し不可許外出候」とあり、安永三年（一七七四）に一件文書の整理が行われたことがわかる。

「諸願」でまとまったものでは、普請関係の願いがある。これは上山田村が井樋普請をおこなう際に、川方役所には「願状」を出し、天龍寺には「断状」を出すもので、天龍寺境内地における奉行所支配と領主支配の差が文書上にも現れている。他に、土砂留、川流人、明和六年（一七六）西川重之丞の欠落に関する一件文書などがある。

臨川寺・三合院 ここでは臨川寺およびその境内塔頭である三合院の組織運営に基づいて発生、授受、保管された文書群を収めた。臨川寺と三合院の組織運営は、本文書群からは断片的にしかわからない。参考までに、「天龍寺文書」のなかから次の史料を掲げておく。

三合塔主臨川寺江移住之定（天龍寺四一〇号）

一、西堂之内ニ而当住可相定置事

一、毎月旦望并開山宿忌半齋祠堂齋、塔主焼香之事 但、当住不及出頭事

一、公方様 大御所様御祈禱、施餓鬼会、都督忌、開山忌、鎮守、諷經、修正、満散之節、当住・西堂焼香之事

但、侍香者当住会下方可相勤事

一、三合侍真塔主会下方可相勤事

一、両班者是迄之通事

一、御目付衆其外巡検来出節、塔主接遇之事

一、收納方・金銀出入・山林奉行并修造等法式、侍真取計是迄之通之事

但、可及談決儀者、当住・前住同様ニ可被申談事

辛巳

正月

これは「公方」「大御所」「目付」「巡検」などある所から、江戸期のものと思われる。臨川寺住持と三合院塔主の役割分担が定められ、両班の組織は維持したままで、侍香は臨川寺当住会下の者が勤め、三合侍真は塔主会下の者が勤めることとなっている。第1表でみるように、臨

川寺領は三五、五四七石、三合院は四〇、六九四石と各々が寺領を有しており、しかも三合院の方が石高は多い。天龍寺の納所で作成、管理された帳簿は、臨川寺と三合院のものは合冊で処理されており、ここに収めた文書も臨川寺と三合院の勘定を同時におこなっている。そうした理由から、臨川寺と三合院を一つの大項目として扱ったが、中項目の「諸願」のみは、宛所の違いにより「諸願・諸届（臨川寺）」「諸願・諸届（三合院）」の二項目に分けて編成した。

「勘定」では、まず臨川寺役人宛の書付型文書の年貢勘定書がある。文書の内容は、臨川寺と三合院の当年の年貢差し引き勘定である。他に年貢下免の願状および請状があるが、それらの宛所は臨川寺役人宛であったり同役者宛であったりと、統一されていない。二節で述べたように、「天龍寺」における「役者」と「役人」は職掌に明確な違いがあるが、これが単なる誤記であるのか、あるいは「役者」も「役人」もともに年貢下免に関与したのかどうかを判断するためには、臨川寺の寺院組織の解明およびこうした事例の蓄積が必要である。したがって、現段階では役人と役者の区別はせず、同一の項目のなかで扱った。なかには臨川寺納所を宛所とするものもあり、臨川寺の寺院組織の一端を示しており、役者と納所との関連もこれらの文書を分析することにより明らかとなろう。

「諸願・諸届」の内容で特徴的なものを述べておきたい。まず、文化一二年（一八一五）から文政一三年（一八三〇）にかけて、天龍寺門前町の者が臨川寺門前馬場における花見の筵貸と平焼売りの営業願いがある。平焼は「茶をわかし并平焼等仕度」とあるので飲食物の類であろうが、文書上からはそれがどのような食べ物（？）であったか想像の域を出ない。次に、寛政二年（二七九〇）から天保三年（一八三二）にかけて、川端村から臨川寺役者に宛てた雨乞の願状と、雨乞をして利益があった場合の雨乞御札の願状がある。文化九年（一八二二）には、川端村からの提出文書が「届書」となっていることを臨川寺が「不届」として「願書」に書き換えさせている。雨乞をめぐっての領主と領民の関係のみならず、両者の文書意識の差がうかがえるおもしろい史料である。三合院宛のものでは、明和三年（二七六六）槌屋嘉兵衛が出奔したことにより、その拝借銀の返済や跡地の処理をめぐる一連の史料がある。

弘源寺 弘源寺は文安三年（二四四六）六月に、開山三世の法孫玉岫英種を開基とする。細川持之が建立した寺で、天龍寺の境内塔頭の一つである。はじめは現在の落柿舎の所にあり、明治一六年（一八八三）に維北軒を合併して現在の地に移ったという。

中項目には、「山寄進」「山論」「輪聖寺兼帯」「諸願・諸届」を立てた。「山寄進」には、文禄から慶長期にかけての弘源寺所持の山を寄進する証文がある。「山論」は、元禄九年（二六九六）の山寄進に端を発して弘源寺と吉田榮忠との間に山論が生じており、その一連の文書がある。輪聖寺は、開山夢窓国師の誕生の地に創建された寺である。正徳五年（一二一五）に弘源寺七世の塔主天琢禪師がここに寺の創建を願ったが、同地が紀伊藩・久居藩の入組地であったために、両藩に許可を願い出て昭堂・庫裡・樓門などを建築した。明治以後、無住として廢止されたが、明治三五年に復興願いが天龍寺に出され、天龍寺の直轄末寺として弘源寺一三世秀岳和尚の努力で復興した。本文書群には、寛政一二年（一八〇〇）から安政七年（一八六〇）にかけて、弘源寺による輪聖寺兼帯に関わる記録が三点ある。

役人の機能については既述のようによくわからないが、「諸願」では弘源寺役人を宛所とする文書を収めた。内容的には、宝暦七年（二七五七）以降、山本村傳左衛門が常寂寺の往来の妨げになっているので、その取り締まりを繰り返し弘源寺役人に依頼した一件文書がある。なかには天龍寺役者宛の文書もあるが、一連の文書なのでここに収めた。

諸塔頭 等観院、鹿王院、その他の塔頭関係の文書がある。等観院は、至徳三年（一一三六）八月に開山夢窓国師の直弟徳叟周佐とくそうを開基として開創した。鹿王院は、京都十利の第五位に位置する名刹で、覚雄山と号し、康暦二年（一二三〇）足利義満が普明国師を開山として開創した。寺那を大福田宝幢寺という。応仁の乱後に廢寺同然となっていたのを江戸時代になって酒井忠知が、子の虎岑を中興開山として再興した。この時、天龍寺の塔頭になったと伝えられる。

絵図類 ここには出所の判断のつかない絵図類を収めている。たとえば、史料番号三八と三九の天龍寺塔頭絵図は、応永三三年（一四二六）に臨川住持比丘中珊が將軍の命により作成したもので、「応永鈞命図」として知られ、天龍寺所蔵のものは重要文化財に指定されている。これと同様の絵図は、天龍寺塔頭の鹿王院でも書写され伝存しているため、本文書群のこれらの絵図が天龍寺あるいは塔頭のものという判断はつけられない。その他の絵図類も同様な判断から、便宜的にここに収めた。特長的なものとしては、年不詳であるが、「臨川寺門前寺領明細絵図」（史料番号四二）が一鋪ある。天龍寺領、および臨川寺をはじめとする塔頭領、そのほか大覚寺領などが色分けて描かれている。石高の記載はない。

〔付記〕

本文書群の解題を書くにあたっては、天龍寺法務兼教学部長である田原義宣氏に多くのご教示を賜った。また、「天龍寺文書」の閲覧に際しては、黒川直則・池田好信氏をはじめ京都府立総合資料館の方々に多くの便宜を図っていただいた。記して御礼申し上げたい。

〔参考文献〕

- 相田二郎『日本の古文書』上下（岩波書店、一九五四年）
今枝愛真『中世禅宗史の研究』（東京大学出版会、一九七〇年）
田中浩司「戦国期寺院領主経済の一齣―天龍寺の「納下帳」の分析を中心に―」（『論究』二二―一、文学研究科篇、一九九〇年）
同「国文学研究資料館史料館所蔵臨川寺文書について」（『古文書研究』三五号、一九九一年）
奈良本辰也監修・大本山天龍寺編『天龍寺』寺社シリーズ③（東洋文化社、一九七八年）
京都府教育委員会『天龍寺古文書』（京都府古文書等緊急調査報告書、一九八〇年）。
京都府立総合資料館『天龍寺古文書目録補遺』Ⅱ、『天龍寺古文書目録補遺』Ⅲ。

※ () 内太字は国師・大師号

二九

山城国葛野郡嵯峨天龍寺塔頭臨川寺文書目錄 目次

五山／天龍寺	頁	臨川寺・三會院	頁
室町幕府	三	規約	三
奉行人連署奉書	三	寺領	三
織豊政權	三	公儀御用	三
朱印狀	三	勘定	三
判物（前田玄以）	三	年貢	三
徳川幕府	三	田淵山	三
学資米支給	三	借金・借米	三
朝鮮修文職・以酊庵	三	諸願・諸届（臨川寺）	三
僧録職補任	三	請地	三
吹挙	三	訖狀	三
公儀御用	三	加藤壽元一件	三
規式	三	筏貸・平焼	三
明治政府	三	雨乞	三
諸事	三	諸願・諸届（三會院）	三
天龍寺	三	榎屋嘉兵衛	三
舍利	三	弘源寺	三
寺領	三	山寄進	三
勘定	三	山論	三
規式	三	輪聖寺兼帶	三
納下・奉加	三	諸願・諸届	三
借用証文	三	諸塔頭	三
酒造制限	三	勘定	三
繼席	三	年貢	三
造作願・伺・届	三	土地売買	三
天龍寺	三	雲居庵	三
雲居庵	三	延慶庵	三
喜春軒	三	弘源寺・維北軒	三
慈濟院	三	藏主権現社	三
松岩寺	三	藏光庵	三
等寺院	三	福壽庵	三
宝篋院	三	宝壽院	三
寶壽院	三	相国寺	三
大德寺	三	建物改	三
争論	三	諸願・諸届	三
諸願・諸届	三	用水普請	三
土砂留	三	川流入	三
西川重之丞	三	諸事	三
文書目錄	三	その他	三
その他	三		三

山城国葛野郡嵯峨天龍寺塔頭臨川寺文書目錄

(文書記号 26 N)

五山／天龍寺

室町幕府

奉行人連署奉書

室町幕府奉行人連署奉書写(宝篋院敷地門前力者家事、大覚寺門跡雜掌の競望停止) 文亀元年一二月八日 大和守・豊前守↓当院雜掌 ※四八一
一三三は豎繼紙

形態 数量 番号

一通 四八一

室町幕府奉行人連署奉書写(宝篋院敷地門前力者以下民屋事、大覚寺門跡の違乱停止) 永正一五年二月一九日 前近江守・散位↓当院雜掌

豎 一通 四八二

室町幕府奉行人連署奉書写(当寺門前人工以下諸役事免除之处、大覚寺違乱停止) 寛正三年四月二三日 大和守・下野守↓善入寺雜掌

豎 一通 四八三

室町幕府奉行人連署奉書写 永正一五年一二月一九日 前近江守・散位↓当院雜掌 ※四八一と同文

豎 一通 四八四

室町幕府奉行人連署奉書写(洪恩院雜掌申城州北嵯峨仙翁村事、藏春庵違乱停止) 永正六年九月二七日 為完・時基↓天龍寺雜掌

美 一通 四八五

室町幕府奉行人連署奉書写(宝幢寺鹿王院他住持職、当知行安堵) 永禄八年一二月二日 沙弥・右馬助↓守厚西堂雜掌

美 一通 四八六

織豊政權

朱印状

織田信長朱印状写(当寺泉水再興免許・寺領当知行安堵) 一二月二〇日 信長朱印↓嵯峨西芳寺

折包紙入 一通 四八七

豊臣秀吉朱印状写(摂津国中島内寺領当知行安堵) 天正三年一二月一〇日 朱印↓禪昌院

折包紙入 一通 四八八

豊臣秀吉朱印状写(当寺門前境内地子人足等并山林免許) 天正一七年二月朔日 朱印↓天龍寺

折包紙入 一通 四八九

山城国天龍寺領目錄写 天正一三年一二月二日 朱印↓天龍寺

豎 一通 四九〇

判物(前田玄以)

前田玄以書状写(当寺領内山林諸役免許) 天正一二年一二月一三日 民部卿法印玄以判↓天龍寺役者中

折 一通 四九一

前田玄以書状写(馬場掃除并馬場南北の竹木伐採免許) 文禄四年五月一四日 民部卿法印玄以在判↓臨川寺・三會院

折包紙入 一通 四九二

徳川幕府

学資米支給

五山学資御蔵米関係書類

一括 四九三

寛政三年八月十八日於松平右京亮殿被仰渡候御書付写(五山僧困窮二付)一山江年々七〇石學問料被下置二付、書契の學問等取計の事)亥七月

學資御藏米請取巡次簿 寛政三年起(慶応二年)

學問教育料御藏米請取記錄 慶応元年九月 当番建仁寺

口上覚(当年學問料当九月御渡願狀下書力)

慶応元年八月 東福寺役者願成寺・建仁寺役者禪居庵・相國寺役者亭川軒・天龍寺役者華藏院(各印は抹消)御奉行所 包紙上書(口上覚 五山惣代建仁寺役者禪居庵)

請取申米之事(当寅年分學問料請取狀下書力)

慶応二年九月 東福寺役者長慶寺・建仁寺役者養浩菴・相國寺役者小補軒・天龍寺役者栖林軒(各印は抹消)神尾安太郎殿・中村雅太郎殿

○

(江戸下向賄不足二付五山評議)寛永一九年三月晦日万寿寺・東福寺・建仁寺・相國寺・天龍寺(各署名花押)前欠

就干御系図在江戸三僧賄帳(寛永二十年・正保四年)令首座・徑首座・倫西堂・天龍役者永玄・同等云・当參暇周佐(力)

朝鮮修文職・以酈庵

(朝鮮国往来書簡写) (寛永一八年四月／同一九年二月)

五山碩學并朝鮮修文職次目(文書目錄)(宝曆一二年二月)(天龍寺參暇↓金地院役者禪師)

元暉書狀(碩學并朝鮮書契御用之儀御請二付、二月上旬參府之旨承知)正月二三日 金地院役者元暉判別源西尾和尚

元暉書狀(別源西尾碩學並朝鮮書契御用之儀御請之旨承知)孟春念三日 金地院役者元暉判別源西尾和尚

元暉・同元仰連署書狀(妙智大和尚病氣故、封馬御用交替願之儀二付、僧録より返翰被越旨)十一月二七日 金地院役者元暉・元仰連判別源西尾和尚

惠孝書狀(碩學并封州書契御用之吹嘘狀・副書之儀)二月二日 金地院役者惠孝判別源西尾和尚

某書狀(公方様厄年祈禱之卷数披露)孟春二七日 金地院役者判別源西尾和尚

雪溪西堂宛專首座・金首座消息(後西院宸翰他天龍寺方丈へ寄附)

金地院僧録司宛天龍寺元穹請書(大君正誕辰之疎二付轉達)五月二日 元穹判 切封跡あり

鹿王堂頭大和尚宛面是院東玖書狀(酈庵交代之件、伺之通)抄冬二二月

慎公雅伯禪師宛道恭・昌材連判書狀(三月二四日着岸之由)六月一六日

鹿王院大和尚宛氏江左織功志他六名連署書狀(病氣二付輪番斷之件)九月一九日

南禪寺五山宛本多越中守忠徳書狀(今般本丸勤二付祝儀の返札)正月九日 紙背あり

(以酈庵敷地建物等覚書)丑六月 付札二あり

折包紙入 一通 八七一

折包紙入 一通 八七二

切繼包紙入 一通 八七三

折包紙入 一通 八七四

折 一通 八七五

堅 一通 八七六

堅 一通 八七九

切繼 一通 八八〇

折 一通 八八一

切繼包紙入 一通 八八二

折 一通 八八三

美繼 一通 八八五

口上覺(以酹庵絵図之件二付書付) 閏八月 天龍 切繼 一通 六

僧録職補任

德川秀忠朱印狀写 元和五年九月 朱印↓金地院 (本光国師) 包紙上書「僧録職贈帖 八通」 堅 包紙入 一通 六二

德川家光朱印狀写 寛永二年五月 朱印↓金地院 (大典禪師) 堅 一通 六三

德川家綱朱印狀写 万治三年四月 朱印↓金地院 (広惠禪師) 堅 一通 六三

德川家綱朱印狀写 延宝元年一月一七日 朱印↓金地院 (普濟禪師) 堅 一通 六四

德川綱吉朱印狀写 元禄一〇年五月二三日 朱印↓金地院 (通心禪師) 堅 一通 六五

德川家宣朱印狀写 正徳元年二月五日 朱印↓金地院 (晃長老) 堅 一通 六六

德川家繼朱印狀写 正徳二年二月二二日 朱印↓金地院 (札長老) 堅 一通 六七

德川家繼朱印狀写 正徳四年正月一五日 朱印↓金地院 (達長老) 堅 一通 六八

吹 挙

金地院崇伝書狀写(慶長二〇年) 正月三日 金地院 院崇伝↓五岳御役者中 包紙上書「御黒印被成下候節、指出奥書之儀二付金地院」来書 但奥書年号慶長十九年十二月廿八日 折包紙入 一通 六

(昇位吹挙願狀案文) 宝曆三年一〇月六日 住持承 堅・東堂四名・西堂三名・維那一名↓金地堂頭僧録 司大和尚 美 三通 六

金地院役者吹挙返翰 七月六日 元真判↓天龍諸大老 包紙上書「吹嘘返翰 五通 後鑑二留置」 切封 堅 一通 六一

金地院役者吹挙返翰 一二月一六日 元方判↓(天龍諸大老) 切封 堅 一通 六二

金地院役者吹挙返翰 一二月一六日 元方判↓(天龍諸大老) 切封 堅 一通 六三

金地院役者吹挙返翰 一〇月四日 元雍判↓(天龍諸大老) 切封 堅 一通 六四

金地院役者吹挙返翰 一〇月二八日 元甫判↓(天龍諸大老) 切封 堅 一通 六五

金地院役者吹挙返翰 八月五日 元梗判↓(天龍諸大老) 切封 堅 一通 六六

金地院役者吹挙返翰 八月五日 元梗判↓(天龍諸大老) 切封 堅 一通 六七

金地院役者吹挙返翰 一二月二一日 元洛判↓(列嶽諸位大和尚) 切封 堅 一通 六八

金地院役者吹挙返翰 七月九日 元汴判↓(天龍諸大老) 切封 堅 一通 六九

金地院役者吹挙返翰 七月九日 元汴判↓(天龍諸大老) 切封 堅 一通 七〇

金地院役者吹挙返翰 七月九日 元汴判↓(天龍諸大老) 切封 堅 一通 七一

金地院役者吹挙返翰 一〇月二九日 元汴判↓(天龍諸大老) 切封 堅 一通 七二

公儀御用 覺(国絵図二付石川主殿頭書付) (元禄力) 三月 石川主殿頭↓ 切繼 一通 七三

西樂寺別當職了賢請狀写 天文九年八月五日 中坊了賢在判↓洪恩院侍者御中	美	一通	二三
(御国恩献金二付末寺并領地銘々へ達書案文)(万延元年九)	半	一冊	七
奉願口上覚(御本丸炎上二付五山一統献金願状案文)庚申正月 万壽寺師常印・東福寺以清印・建仁寺東政・相国寺周整・天龍寺宗球・南禅寺祖韶↓金地僧録司大和尚	堅繼	一通	六
規 式			
(金地院申渡覚三カ条并南禅寺・五山請状) 享保一二年四月三日 天龍寺塔頭院主等二六名連判	美繼	一通	六
覚(五山僧侶衣体省略之定) 享保一六年五月	美繼	一通	六
考定僧堂式 享保二〇年四月 住山僧録司乾嚴↓龍山衆悉知 付紙あり	美繼	一通	三
○			
(五山附庸之諸山寺名書上)	切繼	一通	八
明治政府			
教院録 明治五年四月(明治六年八月) 天龍寺	野	一冊	三
天 龍 寺			
寺 領			
天龍常住并諸塔頭領村分高括牒 正徳元年五月 門前領知方絵図水牒 安政四年改	堅 美	一冊 一冊	三 三

(妙心院門跡領内等観院持田坪付) 宝永元年二月二十九日 組中印↓	半	一通	三七
(地藏院領知絵図)		一紙	一六
龜山天皇御陵絵図 文化三年二月 天龍寺役者南芳院	堅	一冊	四
○			
為取替印紙(天龍寺領北山村・松原村地面松平因幡守替地二付取替証文)慶応二年六月 天龍寺役者宝慶院・華藏院・同地方小林主税・芹川中務連印↓松平因幡守殿内留守居足達清一郎殿・同真野代次郎殿・勘定吟味役林善兵衛殿・同目付勝井清太夫殿	堅繼 包紙入	一通	一八
為取替印紙(天龍寺領松原村地面松平修理太夫替地二付取替証文)慶応二年九月 天龍寺役者栖林軒・西芳寺・同地方小林主税・芹川中務連印↓松平修理太夫殿内金方木場奎右衛門殿・留守居内田仲之助殿 ※一八一―と同一包紙	堅繼	一通	一八・二
為取替印紙(天龍寺領松原村地面松平修理太夫替地二付取替証文)慶応二年九月 天龍寺役者栖林軒・西芳寺・同地方小林主税・芹川中務連印↓松平修理太夫殿内金方木場奎右衛門殿・留守居内田仲之助殿 ※一八一―と同一包紙	堅繼	一通	一八・二
文政四年巳十二月十一日見分五嶋伏原川原付洲開地龜絵図	美 包紙入	一鋪	二九・一
(明和九年・安永六年新田改二付触状写)	半繼	一通	二九・二
御高瀬川堀替測量筋絵図(安養寺村境ヨリ三條千本迄凡貳千三百八拾間余川巾壹丈四尺) 慶応元年八月 嵯峨川問屋上柳市良兵衛 彩色	美繼 包紙入	一通	二七

勘定

○規式

評定之条々(勘定關係一〇カ条) 慶長七年一二月
二三日 住山一名・西堂二名連判

床曆規定 天明四年四月五日 参暇承賣他一〇名連判

○納下・奉加

天龍寺米錢納下帳 天文一五年七月始(一)天文一六年六月晦日) 天文一七年九月一七日勘定済

天龍寺米錢納下帳 天文一八年七月始(一)天文一十九年正月) 天文一九年一月二五日勘定済

天龍寺米錢納下帳 天文二一年八月始(一)天文二二年二月) 弘治三年七月一日勘定済

就錯乱方々調入目帳同諸下行方 元龜四年四月二日始(一)同年七月五日)

天龍寺常住馬場樋爪北山嵯峨村納帳 元和二年一〇月 弘源代金隆・龍昇代承由・藏光代莊喜連判

弘源寺并惟北軒領 庭帳之寛 寛永一五年九月 英首座判

三(会)年貢并納下 慶安元一四年

三(会)院領年貢并地子納帳 慶安元年一〇月 侍真梵亭判

三(会)院領納下帳 慶安元年七月一五(一)二年七月一五日 侍真梵亭判

堅 一通 天

美繼 一通 天

堅 列帖装 一冊 〇

堅 列帖装 一冊 二

堅 列帖装 一冊 三

半 一冊 四

半 一冊 六

半 一冊 七

美 一冊 〇

二〇一

二〇二

三(会)院領年貢帳并納下帳 慶安二年八月二日(一)慶安三年八月二日 侍真梵亭・前住元松・前住昌倫・当住周紹・東堂壽洪・東堂壽仙・塔主判

三(会)院領年貢帳并納下帳 慶安三年八月二日(一)慶安四年八月二日

三(会)院領年貢帳并納下帳 慶安四年七月晦日(一)慶安五年八月晦日

天龍常住本占納下帳 安政六年八月(一)万延元年八月

天龍常住本占納下牒 文久三年八月二日(一)元治元年八月二日

(文禄二年寿元納帳之内書拔) (文禄二年力)

開山国師二百年忌奉加帳 天文二〇年

開山国師二百年忌以来納下帳 弘治三年四月一二日 同年七月一日勘定訖 殊光

尊氏相公三百年忌齋作法 明曆二年四月二八日

就開山三百年忌鎌倉黄梅院香資之請取狀 慶安二年八月二三日 黄梅院納所周勤判(一)天龍寺紀綱禪師

大仏殿奉加之事(大仏殿奉加黄金一枚請取狀) 元禄五年二月二八日 東大寺龍松院公慶印(一)天龍寺御役者中

(紙屋川橋崩二付奉加金三步請取証文) 宝永三年六月五日 紙屋川村年寄勘左衛門・同惣百姓中代三郎右衛門・太郎左衛門連印(一)天龍寺御役者様

乍恐口上書(雲龍之掛軸一幅寄進狀) 二月廿一日 吉田忠兵衛悱与兵衛(一)御納所様御披露

臨川寺山門再興造當之帳 明応七年正月一日始

臨川寺山門再興造當方奉加錢之帳 文龜元年七月

二〇三

二〇四

二〇五

一冊 三

一冊 三

一冊 三

一冊 三

一冊 三

一冊 六

一冊 七

一通 六

一通 六

一通 六

一通 六

一通 六

韋駄天堂建立納下帳	文龜二年七月八日	二二	開山參百年忌諸堂莊嚴圖并清規	慶安三年九月	豎	一冊	三		
山門方	文龜二年七月八日	二三	臨川寺領三會院領田畑救米申渡并請取印形帳	文化四年二月	半	一冊	元		
山門脇扉造営入目	永正元年七月二日	二四	寺院決算一紙目錄(臨川寺・三會院)	元文四年正月晦日	美繼	一通	五		
臨川寺造営帳	永正三年二月始(同年四月)	半	月晦日	当月住等領・前任承堅・侍真等実連判	美繼	一通	五		
臨川寺造営帳	永正一四年六月晦日	半	祠堂施入証文(案文)	年月月日	美	一通	六		
開山國師真前奉物子母錢帳	天文一三年臘月(天文一六年二月九)	美列帖裝	臨川寺役者昌格・誰名		美繼	一通	六		
寺院造営諸牒十貳冊	慶長九・慶安四	半綴	一札(渡月橋々錢年限二付法輪寺契狀)	安政五年	美繼	一通	六		
大橋殿烏居石倉普請入目帳	慶長九年八月始(慶長一〇年七月晦日)	奉行	二月	法輪時役者大貳印・天龍寺御役者中	美	一冊	一		
大井川渡船	奉加納下帳	慶長一〇年二月	奉行	善榮・同周任・同承喜連判	美列帖裝	一冊	五		
三會院大風破損修補入目帳	寬永八年閏一〇月	一一月	三會院	大風破損方納下帳	文龜三年正月始	美列帖裝	一冊	五	
臨川寺大風破損修補入目帳	寬永八年閏一〇月	一一月	三會院	大風破損方納下帳	文龜四年正月始	美列帖裝	一冊	五	
臨川・三會上葺雜用帳	寬文九年二月晦日	二五	臨川寺造営方納下帳	大永元年八月始	大永三年	豎列帖裝	一冊	六	
三會院居間普請雜用帳	元祿七年臘月(元祿八年正月晦日)	侍真慧春判	雲居菴昭昭堂造営下行帳	天文一七年二月始	天文一七年臘月	豎列帖裝	一冊	九	
庫裡東側御屋根坪数并仕損帳	宝永元年申九月	檢	雲居菴昭昭堂造営帳	天文一九年九月日		豎	一冊	九	
皮屋与八郎印	三會院	二五	八幡神樂山之手錢修復料寄付分拔書	(天正年中)	端裏張紙	二天正年中	鹿王院領山手錢納帳之内	八幡神樂料山之分拔書角倉甚平先祖請山仙之谷山之証跡	五郎左衛門指引之覺
禪悅御屋根北妻南妻仕樣帳	(享保元年七月)	屋根							
屋与八郎印	三會院御役者樣	二五							
昭堂普請雜用帳	享保七年正月晦日	慧韶・周鍊連判							
淨并並屋形新造牒	享保一七年正月晦日	侍真妙冲							

天龍寺再建方元銀六拾貫目証文 丑九月

包紙 一通 三六二

借用申銀子之事（銀子借用証文） 文政六年六月

預り主三秀院知事惟芳・廣首座・証判隣寺真乘院知事念首座連印↓九里平左衛門殿 天龍寺參照瑞心院・慈濟院連印奥書

堅繼 一通 三六二

預り申銀子之事（銀子預り証文） 文政六年七月

天龍寺役者禪昌院・藏光庵・維北軒連印↓三秀院知事禪師瑞心院・慈濟院連印奥書あり

堅繼 一通 三六二

預り申銀子之事 文政二年九月 天龍寺再建方役者

西芳寺・正圓庵・龍濟軒・宝壽院・三秀院・藏光庵連印↓九里親六殿御息女おと勢との・御子息悦之助殿 慈濟院・宝篋院連印奥書あり

堅繼 一通 三六二

（再建助力金千両預り証文） 文政九年臘月二五日

天龍寺役者藏光庵涼蔭・華藏院防首座・栖松軒玄藏主連印↓九里親六殿口入御取次無名氏は誰老參暇鹿王院泊船・慈濟院文明・宝篋院香林・真乘院桂隱・永明院龍岩・梅陽軒祥岩連印奥書あり

堅繼 一通 三六二

（再建助力金千両預り証文） 文政九年臘月二五日

天龍寺役者藏光庵涼蔭・華藏院防首座・栖松軒玄藏主連印↓九里親六殿口入御取次無名氏は誰老

半 一通 三六二

添証之事（天龍寺再建方預ケ金返済無之二付添証文） 弘化二年二月 天龍寺再建方役者栖松軒・慈濟院・維北軒・延慶庵・松慶院・禪昌院連印↓九里平左衛門殿 鹿王院・壽寧院・三秀院連印裏書あり

堅繼 一通 三六二

※一〇三包紙一通入

指入申一札之事（金三百両借用証文） 安政四年一月

一月 天龍寺役者真乘院・養清軒連印↓九里平左衛門殿 慈濟院・延慶庵・妙智院連印裏書あり 墨引抹消あり

堅繼 一通 三六二

注文（光源寺梵鐘鑄造注文） 享保七年正月一四日

御鑄物師三条金座和田信濃大掾藤原国次↓光源寺様

堅繼 一通 三六二

○借用証文

預り申銀子之事（銀子借用証文） 享保五年十二月二〇日 預り主仁兵衛↓

半 一通 三六〇

預り申銀子之事（銀子借用証文） 寛政五年正月

天王寺屋八兵衛↓天王寺屋市左衛門殿

美切 一通 三六〇

奉拝借御銀之事（田地引当銀子借用証文） 文政

一三年二月 生田村拝借主九左衛門・証判人同村喜右衛門・同造路町藤石衛門連印↓天龍寺様御役者中様 端裏書「文政拾三年十二月七貫五百日年賦文券 生田村九左衛門 外二引当文券拾式通相添」

堅繼 一通 三六〇

恩借申金子之事（金子借用証文） 安政六正月 足利家内秋田直次郎・斯波要人印↓天龍寺御勘定所 足利泰俊裏書印あり

堅繼 一通 三六〇

（献金請取証文） 慶応四年正月一日 金穀出納所役所印↓天龍寺并諸塔頭

堅繼 一通 三六〇

（献金請取証文） 慶応四年正月一日 金穀出納所役所印↓天龍寺末寺宝嚴寺

堅繼 一通 三六〇

預申金子之事（調達金預り証書） 慶応四年六月 有栖川殿勘定所印・取締方連印↓天龍寺勘定所

堅繼 一通 三六〇

調達仕法 慶応四年六月 有栖川殿勘定所印・取締方連印↓

折包紙入 一通 三六〇

借用金証（田地抵当金子借用証文） 明治一五年三月

葛野郡下嵯峨村借り主山口馬次郎・同郡天竜寺村早田佐七・同郡下嵯峨村加地茂八連印↓天龍寺事務所御中 朱印使用 印紙添付

堅繼 一通 三六〇

連判証文之事（敷地引当金札六百両借用証文）

明治三年二月 天龍寺勘定所・同役者松岩寺・龍濟軒連印↓妙智取次左海指吸治郎輔殿 慈濟院・養清軒・弘源寺・壽寧院・妙智院連印裏書あり

堅繼 一通 三六〇

証(三家年賦金請取証文) 一月一八日 橋本熊三郎
印↓ 切 一通 三九二

○酒造制限

天龍寺門前境内酒屋関係書類

一札之事(酒造高二四〇石二付請狀) 寛文七年三月晦日 山城国葛野郡天龍寺境内酒屋角倉宇兵衛・年寄長右衛門連印↓天龍寺様御役者衆中 堅 包紙入 一通 一六八

一札之事(酒造高一八五石二付請狀) 寛文七年三月晦日 山城国葛野郡嵯峨村立酒屋屋平木弥次右衛門印↓天龍寺様御役者衆中 堅 包紙入 一通 一六二

(公儀触二付請狀) 寛文七年三月晦日 毘沙門堂町年寄吉助・長右衛門連印↓天龍寺御役者中 半 一通 一六三

(山城国葛野郡嵯峨天龍寺門前境内内酒屋之事并葦若草之事、法度申渡二付届書案) 寛文八年三月二〇日 天龍寺役者昌典・永雲・西堂周保(各判抹消)↓金地院納所禪師 墨引抹消あり 堅 一通 一六四

一札之事(公儀酒造法度二付高書上并請狀) 寛文八年三月二六日 山城国葛野郡嵯峨村天龍寺境内酒屋角倉宇兵衛・五人組五名・年寄一名連印↓天龍寺御役者衆中 堅 一通 一六五

一札之事(公儀酒造法度二付高書上并請狀) 寛文八年三月二六日 山城国葛野郡嵯峨村天龍寺境内酒屋弥次右衛門・五人組五名・年寄一名連印↓天龍寺御役者衆中 堅 一通 一六六

今度酒造米御改二付而酒屋有之所ハ其所之年寄町中吟味仕員数書付差上候覺 寛文九年一〇月一八日下嵯峨毘沙門堂酒屋角倉宇兵衛・年寄加兵衛・五人組四名・町中連印↓天龍寺御役者中 堅 一通 一六七

今度酒造米御改二付而酒屋有之所ハ其所之年寄町中吟味仕員数書付差上候覺 寛文九年一〇月一八日下嵯峨天龍寺門前立酒屋弥次右衛門・年寄角左衛門・五人組四名・町中連印↓天龍寺様御役者中 堅 一通 一六八

御公儀様造酒屋御吟味二付一札之事 寛文九年一〇月二〇日 酒屋角倉宇兵衛・五人組四名・年寄加兵衛連印↓天龍寺御役者正圓庵様・花徳院様 堅 一通 一六九

御公儀様造酒屋御吟味付テ一札 寛文九年一〇月二〇日 酒屋弥次右衛門・年寄角左衛門・同二郎右衛門五人組四名連印↓天龍寺様御役者正圓庵様・花徳院様 堅 一通 一七〇

御請合之一札之事(酒造并煙草作付法度二付請狀) 寛文九年一〇月二〇日 作道町次右衛門他二四名・法界門町市兵衛他六名↓天龍寺様御役者中 繼 一通 一七一

御請合之一札之事(酒造并煙草作付法度二付請狀) 寛文九年一〇月二〇日 立石町彦右衛門他三〇名連印↓天龍寺様御役者中 繼 一通 一七二

御請合申上候一札之事(酒造并煙草作付公儀法度、天龍寺下知二付請狀) 寛文九年一〇月二〇日 寺院力者作十郎他六名・雲居力者長九郎・天龍力者一名連印↓天龍寺様御役者中 繼 一通 一七三

繼 席

慈濟院繼席願書類 一冊 一七四 (五通)

妙泉他二名連署慈濟院繼席願書(庸長老法脉相統)(享保六) 丑一〇月一〇日 壽寧院妙泉・藏光菴慧韶・喜春軒統笠連印↓天龍參暇禪師 堅 包紙入 一通 一七五

妙泉他五名連署慈濟院後見願書(詔首座後見)(享保六) 丑一〇月一〇日 壽寧院妙泉・喜春軒統笠・慈濟院下元芳・元琮・元穹連印(元穹印なし)↓天龍參暇禪師 堅 包紙入 一通 一七六

天龍寺參暇中返答之覺（享保六）一二月四日	切繼	一通	七十三	
天龍寺參暇禪師宛慧韶・統笠書付（韶西堂後見斷二付存寄）（享保八）卯七月二十四日藏光庵慧韶・喜春軒統笠連印↓天龍參暇禪師	堅	一通	七十四	
天龍寺參暇禪師宛元琮・元芳・元穹連署口上書（享保八）卯七月二十六日	美繼包紙入	一通	七十五	
○				
永興寺台帖請取証文		一綴	九	
禪興寺・永興寺台帖請取証文 享保七年四月二五日周防永興寺周方印↓天龍參暇禪師	堅	一通	九一	
永興寺・臨川寺台帖請取証文 宝曆二年三月二〇日鹿王院昌瑠・永興寺周蘭連印↓天龍參暇禪師	堅	一通	九二	
圓覺寺台帖請取証文 明和七年三月二三日鹿王院慧桃・永興寺周蘭連印↓天龍參暇禪師	堅	一通	九三	
○				
石州宗林寺後住一件書類		一綴	九	
天龍參暇和尚宛壽寧院周容口上覺（宗林寺後住之件届狀）（安永元年）辰四月	繼	一通	九一	
天龍參暇和尚宛華德院周東口上覺（信首座并慶首座遺言により宗林寺後住願狀）（安永元年）辰八月	繼	一通	九二	
天龍參暇和尚宛壽寧院周容申狀 安永元年一二月	繼	一通	九三	
天龍參暇和尚宛壽寧院周容申狀 安永二年正月	繼	一通	九四	
天龍參暇和尚宛壽寧院周容申狀 安永二年二月	繼	一通	九五	
天龍參暇和尚宛壽寧院周容申狀 安永二年二月	繼	一通	九六	
○				
天龍參暇和尚宛慈濟院元機願狀（喜春軒剪首座隱退二付繼席相統）寛政二年八月	美	一通	一〇〇	
本山參暇宛等持院役者紹養・法券大圓院周佐連署口上覺（福泉庵繼席願狀）天保五年三月	美	一通	一〇一	
本山參暇和尚宛妙智院周續口上覺（宝巖院繼席願狀）天保六年八月	美	一通	一〇二	
本山參暇和尚宛慈濟院元琳口上覺（三秀院繼席願狀）天保六年一二月	美	一通	一〇三	
本山參暇宛慈濟院元琳（喜春軒繼席願狀）天保九年二月	美	一通	一〇四	
本山參暇和尚宛等持院役者周寔口上覺（正受院繼席願狀）天保二年一二月功運院紹諦↓常住役者禪師	美	一通	一〇五	
本山參暇和尚・役者禪師宛真乘院周然覺（松巖寺繼席願狀）慶応元年八月	美	一通	一〇六	
本山參暇和尚宛鹿王院昌碩口上覺（栖松軒并龍濟軒繼席願狀）慶応二年九月	美	一通	一〇七	
金地役者禪師宛天龍寺參暇英慎・令珊連署口上覺（延慶庵其他繼席二付届狀控）慶応二年九月	美	一通	一〇八	
天龍參暇禪師宛昌光口上（圓光会裏祖鐸龍濟軒江呼取掛錫願狀）未三月一四日	美包紙入	一通	一〇九	
鶴藏主宛壽寧院繼席二付玉□（膠力）書狀	繼	一通	一一〇	
○				
覺（宝篋院什物并院領之牒面等請取狀）享保一八年八月一二日壽寧院周寅・大圓院周在連印↓天龍寺參暇禪師・同役者禪師	美包紙入	一通	七	

宝篋院現管覚（宝篋院ヨリ他借銀明細書上）
享保一八年八月一二日 天龍役者琮・昌倬連印↓壽寧院知事禪師 美 一通 七

覚（宝篋院ヨリ他借銀元利共請取状） 一一月一九日 壽寧御納所印↓天龍役者禪師 切繼 一通 三

○ 覚（歡喜寺住持取立願状案文） 月日 天龍寺 堅 一通 二三

造作願・伺・届

○天 龍 寺

乍恐以口上書奉願候（傳三郎居屋敷造作願状）
正徳三年二月 川端村願主傳三郎・同年寄九里浅右衛門・同福田理兵衛連印↓天龍寺御役者中様 美切 一通 二二三

（嵯峨天龍寺役人芹川惠運居宅造作許可二付大工市左衛門伺状）元文二年六月 一条通七本松東江入ル町平松組大工市左衛門印↓中井藤三郎様 繪図あり 中井藤三郎裏書あり 美繼 一通 二二六

（嵯峨天龍寺方丈造作許可二付大工市左衛門伺状）元文三年四月 一条通七本松東江入ル町平松組大工市左衛門印↓中井主水様 繪図あり 中井主水裏書あり 美繼 一通 二二三

（嵯峨天龍寺造作許可二付大工市左衛門伺状）元文三年九月 一条通七本松東江入ル町平松組大工市左衛門印↓中井主水様 繪図あり 中井主水裏書あり 美繼 一通 二二三

（嵯峨天龍寺造作許可二付大工市左衛門伺状）元文四年三月 一条通七本松東江入ル町平松組大工市左衛門印↓中井主水様 繪図あり 中井主水裏書あり 美繼 一通 二二三

（天龍寺境内六僧坊石仏地藏輿台覆造作許可二付大工六兵衛伺状）寛保二年四月二五日 平松組大工六兵衛印↓中井主水様御役人中様 繪図あり 中主水裏書あり 美繼 一通 二二七

一札之事（仏殿南側老化造作許可二付請状控）寛延二年六月 天龍寺役者松岩寺・延慶菴連印↓御奉行所 美 一通 二二九

（下嵯峨天龍寺仏殿南側廊下造作許可二付大工市左衛門伺状）寛延二年六月 一条通七本松東江入ル町平松組大工市左衛門印↓中井主水様 繪図あり 裏書なし 美繼 一通 二二三

（嵯峨天龍寺雪隠并小便所造作許可二付大工市左衛門伺状）寛延三年七月 一条通七本松東江入ル町平松組大工市左衛門印↓中井主水様 繪図あり 中井主水死去二付矢倉久左衛門印・弁慶勝之丞・池上五郎右衛門裏書あり 美繼 一通 二二三

（天龍寺方丈構内米蔵建替許可二付大工市左衛門伺状）安永二年七月 一條通千本西へ入式丁目平松組大工市左衛門印↓中井主水様 繪図あり 中主水裏書あり 美繼 一通 二二四

乍恐書付を以御届奉申上候（天龍寺開山堂普請變更二付届状控）寛政九年正月 平松組大工願主市左衛門印↓中井藤三郎様御役所 美 一通 二二六

造作御願（天龍寺造作願状控）文化一二年一月 役者瑞応院・真乘院・禪昌院↓御奉行所 繪図あり 堅繼 包紙入 一通 二二九

造作御願（客殿・庫裏・書院再建願状控）文化一二年一月 役者瑞応院・真乘院・禪昌院↓御奉行所 繪図あり 堅繼 一通 二二九

（天龍寺法堂再建願状案文）文化一二年月 役者瑞応院・真乘院・禪昌院↓御奉行所 繪図あり 美繼 一通 二二九

奉願口上書(天龍寺焼失跡小屋普請願狀下書) 文化二年三月 天龍寺役者眞乘院・御奉行所 絵図あり	美繼	一通	二二一〇
(天龍寺仮法堂再建造作許可二付大工市左衛門願狀) 文化五年二月 一条通六軒町西へ入町平松組市左衛門印・中井藤三郎様 絵図あり 中藤三郎奥書あり	堅繼	一通	二二一〇二
普請御願(天龍寺物置并便所造作願狀控) 文政二年閏四月 天龍寺役者瑞応院・宝篋院・御奉行所 絵図あり	美繼	一通	二二一〇三
奉願口上書(天龍寺法堂地築二付仮小屋造作願狀控) 辰(文政三年)二月 天龍寺役者宝篋院・永明院連印・御奉行所 絵図あり (一〇六と同一包紙)	美繼 包紙入	一通	二二一〇五
奉願口上書(天龍寺法堂地築二付仮小屋造作願狀案文) 辰(文政三年)二月 天龍寺役者宝篋院・永明院連印・御奉行所 絵図あり (一〇五と同一包紙)	美繼 包紙入	一通	二二一〇六
物置御願(天龍寺物置造作願狀控) 文政一三年三月 天龍寺役者宝壽院・養清軒・御奉行所 絵図あり	美繼	一通	二二一〇八
奉願造作(天龍寺輪番所景德寺造作願狀控) 天保二年二月 天龍寺役者蔵光庵・栖松軒・御奉行所 絵図あり	美繼	一通	二二一〇三
普請御願(天龍寺鎮守八幡素屋根普請願狀控) 天保四年二月 天龍寺役者龍昇院・栖林軒・御奉行所 絵図あり	美繼	一通	二二一〇四
普請御願(天龍寺鎮守八幡素屋根普請願狀下書力) 天保四年三月 天龍寺役者龍昇院・栖林軒・御奉行所 絵図あり	美繼	一通	二二一〇五
普請模様替奉願覺(天龍寺洗心亭普請模様替二付願狀控) 天保五年八月 天龍寺役者永明院・栖松軒・御奉行所 絵図あり	美繼	一通	二二一〇七
奉願口上覺(天龍寺鎮守八幡普請木置小屋引直願狀控) 天保六年三月 天龍寺役者禪正院印・御奉行所	美	一通	二二一〇六
造作御願口上書(天龍寺納屋造作願狀控) 元治元年四月 天龍寺役者喜春軒・養清軒連印・御奉行所 絵図あり	美繼	一通	二二一〇四
出来御届ケ書(中宮御所今日出来二付届狀) 三月一日 平松清右衛門	美繼	一通	二二一〇六
湯殿積り書	半繼	一通	二二一〇九
建物指図	断片	一枚	二二一〇五
○雲居庵 (天龍寺雲居庵客殿建替造作許可二付大工市左衛門伺狀) 享保一六年九月 一条通七本松東江入ル町大工市左衛門・平松清右衛門連印・中井主水様 絵図あり 中井主水裏書あり	堅繼	一通	二二一九
(天龍寺開山塔所雲居庵建替造作許可二付大工市左衛門伺狀) 享保一八年三月 一条通七本松東江入ル町大工市左衛門・平松清右衛門連印・中井主水様 絵図あり 中井主水裏書あり	堅繼	一通	二二一九
(嵯峨天龍寺開山塔所雲居庵造作許可二付大工市左衛門伺狀) 元文四年三月 一条通七本松東江入ル町平松組大工市左衛門印・中井主水様 絵図あり 中井主水裏書あり	堅繼	一通	二二一〇四
奉願口上覺(天龍寺輪番所雲居庵修復願狀控) 文化二年二月 天龍寺役者瑞応院・南芳院・御奉行所 絵図あり	堅	一通	二二一〇六
普請御願(輪番所雲居庵廊下并侍者寮便所引移願狀控) 文政九年六月 天龍寺役者蔵光庵・栖松軒・御奉行所 絵図あり 端裏書「上役四方田重丞・下役吉岡伊和助」	美繼	一通	二二一二

普請御願（天龍寺輪番所雲居庵普請願狀控）

嘉永七年正月 天龍寺役者禪正院・華徳院連印↓御奉行所 絵図あり

美繼

一通 二二一三

雲居昭堂立模様絵図

美

一通 二二一四

雲居庵庫司仮屋敷指図

美

一通 二二一五

○延慶庵

（延慶庵修復公儀願出二付加判願狀）享保一四年
一二月 延慶庵道俗↓天龍寺參暇禪師 絵図あり

堅繼

一通 二二一七

（天龍寺塔頭松尾谷村延慶庵造作願二付延慶庵
届狀）天明元年八月 延慶庵道倫印↓天龍參暇和尚・
役者禪師 絵図あり

美繼

一通 二二一八

（天龍寺塔頭延慶庵土藏作事願差出二付届狀）
寛政一〇年五月 天龍寺塔頭延慶庵道祐印↓天龍參
暇和尚・役者禪師 絵図あり

堅繼

一通 二二一九

○喜春軒

（天龍寺塔頭喜春軒造作願二付招慶院届狀）
明和七年九月 招慶院元穹↓天龍參暇禪師・役者禪
師 絵図あり

半繼

一通 二二二〇

（天龍寺塔頭喜春軒建物明細届狀）天保一四年一
〇月 喜春軒知事↓本山參暇和尚・役者禪師 絵図あ
り

美繼

一通 二二二三

（天龍寺塔頭喜春軒建物明細届書）天保一四年一
二月 天龍寺塔頭喜春軒役者↓御奉行所 絵図あり
造作御願（天龍寺塔頭喜春軒造作願狀下書）
嘉永四年四月 天龍寺塔頭喜春軒役者亭首座・天龍
寺役者正圓庵↓御奉行所 絵図あり

美繼

一通 二二二四

（天龍寺塔頭喜春軒修復願差出二付願狀）元治
元年四月 慈濟院元璫印↓本山參暇和尚・役者禪師
絵図あり

美繼

一通 二二二五

○弘源寺・維北軒

（天龍寺塔頭弘源寺・維北軒普請届狀控）天明
九年二月 天龍寺塔頭弘源寺・維北軒役者晤藏主印
↓御奉行所 絵図あり

堅繼

一通 二二二六

○慈濟院

（天龍寺塔頭慈濟院造作願出二付届狀）天明三年
二月 慈濟院元機印↓天龍參暇和尚・役者禪師 絵図
あり

美繼

一通 二二二七

（天龍寺塔頭慈濟院造作願狀）天明三年九月 慈濟
院役者富首座・天龍寺役者瑞心院↓御奉行所 絵図
あり 後欠か

堅

一通 二二二八

（天龍寺塔頭慈濟院造作願許可二付大工市左衛
門同狀）天明三年九月 一条通七本松東江入ル町平
松組大工市左衛門印↓中井主水様 絵図あり 中主
水裏書あり

堅繼

一通 二二二九

（天龍寺塔頭慈濟院造作願差出二付届狀）寛政
一〇年三月 慈濟院元機印↓天龍參暇和尚・役者禪
師 絵図あり 願狀日付は寛政九年九月

繼

一通 二二三〇

御請書（慈濟院普請許可二付請狀控）寛政一〇年
三月二日 天龍寺塔頭慈濟院役者明首座・天龍寺役
者真乘院↓御奉行所

堅

一通 二二三一

（慈濟院塗り家造作願許可二付届狀）文化九年一
〇月 慈濟院元機印↓天龍參暇和尚 絵図あり

美繼

一通 二二三二

口上覚（当院旧跡新開地二川端村中之町木屋
次右衛門借家造作願二付届狀）文化一四年一二
月 慈濟院元機印↓本山參暇和尚・役者禪師

美

一通 二二三三

（天龍寺塔頭慈濟院并天堂引移并水場所取建願
開濟二付届狀）天保二年七月 慈濟院元琳印↓本
山參暇和尚・役者禪師 絵図あり

美繼

一通 二二三四

(天龍寺塔頭慈濟院弁天堂引移并水場所取建請狀差出二付届狀)天保二年七月慈濟院元琳印↓本山參暇和尚・役者禪師	美	一通 二二三	上覚(嵐山藏主権現社修復二付願狀)宝永五年九月三日役行者講中印↓天龍寺御役者衆中様	美	一通 二二二
(天龍寺塔頭慈濟院式台普請願聞届二付届狀)天保八年七月慈濟院元琳印↓本山參暇和尚・役者禪師 絵図あり	美繼	一通 二二二	○松岩寺	美繼	一通 二二五
(天龍寺塔頭慈濟院旧跡鎮守神明社普請明細届狀)天保一四年一〇月慈濟院知事↓本山參暇和尚・役者禪師 絵図あり	美繼	一通 二二三	(天龍寺塔頭松岩寺造作願出許可二付大工市左衛門伺狀)天明三年二月一条通七本松東江入ル町平松組大工市左衛門印↓中井主水様 絵図あり 中主水裏書あり	美繼	一通 二二五
(天龍寺塔頭慈濟院建物明細届狀)天保一四年一〇月慈濟院知事↓本山參暇和尚・役者禪師 絵図あり	美繼	一通 二二三	○招慶院	美繼	一通 二二六
(天龍寺塔頭慈濟院寛政九年九月差出絵図面之写)天保一四年一〇月慈濟院 絵図あり	美繼	一通 二二三	(天龍寺塔頭招慶院修覆造作許可二付大工市左衛門伺狀)延享三年四月一条通七本松東江入ル町平松組大工市左衛門印↓中井主水様 絵図あり 中主水裏書あり	美繼	一通 二二六
(天龍寺塔頭慈濟院旧跡地届狀)卯一一月慈濟院知事↓本山參暇和尚・役者禪師	美	一通 二二三	(天龍寺役者龍昇院八幡社鳥居建替許可二付大工市左衛門伺狀)寛延三年九月一条通七本松東江入ル町平松組大工市左衛門印↓中井主水様 絵図あり 中井主水死去二付矢倉久左衛門印・并慶勝之丞・池上五郎右衛門奥書あり	美繼	一通 二二三
○地藏院			(天龍寺塔頭招慶院造作願聞届二付届狀)天保二年七月招慶院元俊印↓本山參暇和尚・役者禪師 絵図あり	美繼	一通 二二九
奉願造作之事(地藏院仏殿建立公儀書出シ之案紙)元禄一六年九月天龍寺塔頭地藏院光長老・天龍寺役者↓御奉行所 絵図あり	豎	一通 二二一	(天龍寺塔頭招慶院飯門造作請狀差出二付届狀)天保二年七月招慶院元俊印↓本山參暇和尚・役者禪師	美	一通 二二三
(天龍寺塔頭松尾谷村地藏院實覆建直願二付延慶庵・龍濟軒届狀)天明元年九月延慶庵道倫・龍濟軒昌周收連印↓天龍參暇和尚・役者禪師 絵図あり	美繼	一通 二二四	(天龍寺塔頭招慶院表門并土塀造作願狀并請狀差出二付届狀)享和三年九月招慶院元俊印↓天龍參暇和尚役者禪師 絵図あり	豎繼	一通 二二九
○壽寧院					
(天龍寺塔頭壽寧院境内建設改届狀下書)寛政二年一〇月天龍寺塔頭壽寧院 絵図あり	美繼	一通 二二七			

○藏光庵

(天龍寺塔頭藏光庵客殿・庫裏造作許可二付大工市左衛門伺状)宝暦八年四月一条通千本西江入式町目平松組大工市左衛門印↓中井主水様 絵図あり、中主水裏書あり

堅繼 一通 二二四

(藏光庵門外石垣取払届状)文化九年五月藏光庵知事印↓臨川寺役者禪師 絵図あり 略絵図別紙一枚あり

美・半 二通 二二四

○等寺院

開帳二付仮屋龜絵図 等寺院

美繼 一通 二二四

(等持院塔頭正受院普請願狀)元文三年六月等持院塔頭願主正受院・同役者↓御奉行所 絵図あり

堅繼 一通 二二〇

(地藏堂造作願二付等持院役者届状)明和三年二月等持院役者宗晃・周竺連印↓天龍參暇禪師 絵図あり

堅繼 一通 二二六

(等寺院構内地藏堂造作願許可二付大工市左衛門伺状)明和三年二月一条通七本松東江入式町目平松組大工市左衛門印↓中井主水様 絵図あり、中主水裏書あり

美繼 一通 二二七

(等寺院塔頭正受院客殿跡二仏間造作願二付、等持院役者代届状)明和四年閏九月正受院紹運・等持院役者代文栄連印↓天龍參暇禪師 絵図あり

美繼 一通 二二六

(等持院境内地藏堂造作願二付等持院役者届状)安永二年二月等持院役者紹丹・周竺連印↓天龍參暇和尚 絵図あり

美繼 一通 二二四

(等持院境内地藏堂造作許可二付大工市左衛門伺状)安永一年閏三月一条通り千本西江入式町目平松組大工市左衛門印↓中井主水様 絵図あり 中主水裏書あり

美繼 一通 二二四

(等持院境内地藏堂造作二付地築願出二付等持院役者届状)安永二年閏三月等持院役者紹丹・周竺連印↓天龍參暇和尚

美繼 一通 二二四

(等持院鎮守小社引直シ願出二付等持院役者届状)天明二年八月等持院役者宗岳・紹丹↓天龍參暇和尚 絵図あり

堅繼 一通 二二五

奉願覚(等持院門前溝浚石垣積直願差出二付届状)享和元年二月等持院役者周温印↓天龍參暇和尚 絵図あり

美繼 一通 二二八

(等持院大会修業期間中建足公儀聞濟二付届状)文化七年正月等持院役者紹猷印↓天龍參暇和尚 絵図あり

美繼 一通 二二九

(等持院再建願許可二付届状)文化八年一〇月等持院役者大圓院周温印↓天龍寺參暇和尚 絵図あり

堅繼 一通 二二三

(等持院塔頭切運院仮建物普請願聞濟二付届状)天保四年一月等持院役者正受院紹養・切運院紹諦連印 絵図あり

美繼 一通 二二三

(等持院拜殿并唐門普請願狀差出二付伺状)安政三年一月等持院役者周舜↓本山參暇和尚 絵図あり ※願狀日付は八月

美繼 一通 二二三

(等持院山門普請模様願狀差出二付届状)安政四年閏五月等持院役者周舜印↓本山參暇和尚 絵図あり

美繼 一通 二二三

奉願造作絵図(地藏堂造作) 北山等持院

美 一通 二二四

奉願口上覚(等持院灰筋塀塗替願差出二付届状)戊戌九月宗晃印↓天龍寺參暇禪師

堅 一通 二二四

○福壽庵

(福壽庵門修復公儀願出二付加判願狀)享保四年二月福壽菴元芳↓天龍寺參暇禪師 絵図あり

堅繼 一通 二二六

○宝篋院

(天龍寺塔頭宝篋院普請願狀下書) 寛政七年二月
天龍寺塔頭宝篋院役者↓天龍寺役者↓御奉行所
絵図あり

美繼 一通 二二七

○宝壽院

(天龍寺塔頭宝壽院構内茶屋再建許可二付大工
市左衛門何狀)(宝曆二年)巳二月一條通
千本西へ入式丁目平松組大工市左衛門印↓中井主水
様絵図あり、中主水裏書あり

美繼 一通 二二五

(天龍寺塔頭宝壽院神輿部屋并庵室等造作願狀
控) 寛政一〇年一月天龍寺塔頭宝壽院役者曙首
座・天龍寺役者真乘院連印↓御奉行所 絵図あり

堅繼 一通 二二四

(天龍寺塔頭宝壽院神輿部屋并庵室等造作願差
出二付届狀) 寛政一〇年一月宝壽院性毘印↓
天龍參暇和尚・役者禪師 絵図あり

堅繼 一通 二二六

(天龍寺塔頭宝壽院作事届狀) 天明九年二月 天龍
寺塔頭宝壽院役者渙藏主印↓御奉行所 絵図あり

堅繼 一通 二二四

(天龍寺塔頭宝壽院作事届狀) 天明九年二月 天龍
寺塔頭宝壽院役者渙藏主↓御奉行所 絵図あり 朱
書訂正あり

堅繼 一通 二二五

奉願造作(天龍寺塔頭宝壽院石鳥居造作願狀控)
享和三年三月天龍寺塔頭宝壽院役者薫藏主印・天
龍寺役者禪昌院↓御奉行所 絵図あり

堅繼 一通 二二九

普請奉願書付(天龍寺塔頭宝壽院車折大明神造
作模様替二付願狀控) 文政五年一〇月天龍寺塔
頭宝壽院役者諒首座・天龍寺役者禪昌院↓御奉行所
絵図あり

美繼 一通 二二七

○臨川寺

(臨川寺林内鎮守修復許可二付大工市左衛門何
狀) 宝曆六年六月一條七本松東江入ル町平松組大
工市左衛門印↓中井主水様 絵図あり、中主水裏書
あり

美繼 一通 二二三

乍恐奉願口上書(上嵯峨中院町所持建家造作替
願狀) 明和八年二月四日願主安堵橋町木屋弥兵
衛印↓臨川寺様御役人中

美 一通 二二四

(造路町百姓久右衛門居宅造作願二付白井壽瑄
届狀) 天明六年八月白井壽瑄印↓臨川寺御役者中
絵図あり

美繼 一通 二二六

奉願口上書(重左衛門居屋敷置置願狀)

天明八年三月造路町年寄庄兵衛・願主重左衛門連
印↓臨川寺様御役人中様

半切 一通 二二六

(造路町本右衛門居屋敷造作願狀) 寛政二年正月
造路町願主本右衛門・年寄安兵衛連印↓臨川寺様御
役者中様 絵図あり

美繼 一通 二二七

(富田屋久右衛門小屋造作願二付客頭願狀)
寛政二年八月二日客頭芹河惠且印↓臨川寺様御
役者中 絵図あり

美繼 一通 二二六

奉願口上書(力者太右衛門古家量取願狀)
寛政二年八月造路町願主太右衛門・年寄安兵衛連
印↓臨川寺様御役者中様

半 一通 二二九

御断口上書(造路町藤兵衛小屋造作願二付白井
壽瑄届狀) 寛政二年一〇月一九日白井壽瑄印↓臨
川寺御役者中

半 一通 二二七

乍恐御届口上書(重左衛門小屋引直願狀)
寛政九年二月造路町願主重左衛門・年寄清兵衛・
東隣吉藏・西隣藤兵衛連印↓臨川寺様御役者中様

美 一通 二二七

奉願上造作（路造町明春庵造作願狀）寛政九年三月 造路町年寄佐七・五人組忠藏連印↓臨川寺様御役者様 絵図あり	美繼	一通	二一八〇	（仙翁寺八幡寺領二付大覚寺殿坊官答伏控）辰九月七日大覚寺殿坊官衣笠民部卿・野路井駿河守↓寺社奉行所	美繼	一通	二二一五
奉願口上書（兵右衛門請地建物立直造作願狀）寛政一一年正月 造道町兵右衛門印↓臨川寺様御役者中様	美	一通	二一八六	覚（大覚寺殿坊官と和議二付、鹿王院・天龍寺役者取替証文差上証写）辰（元文元年）一二月一六日 鹿王院役者瑠西堂・天龍寺役者永明院連印↓奉行所	美繼	一通	二二一六
乍恐造作御願（藤右衛門請地居屋敷造作願狀）寛政二二年二月 造路町願主供川藤右衛門印↓臨川寺様御役者中様	美繼	一通	二一八七	（鹿王院領ヨリ差出候西樂寺普請大覚寺殿江届狀案文）辰八月 天龍寺役者福壽庵・鹿王院役者瑠西堂・關首座	美繼	一通	二二〇〇
乍恐奉願口上書（造路町太右衛門寺境内小屋普請願狀）文政八年三月 造路町願主太右衛門・東隣弥三兵衛・西隣兵右衛門・年寄三郎兵衛連印↓臨川寺様御役者中様	美	一通	二一八八	（大覚寺殿坊官上嵯峨支配之儀二付口上書写）辰八月一四日大覚寺殿坊官衣笠民部卿・野路井駿河守↓寺社御奉行所	美繼	一通	二二〇一
乍恐奉願口上書（造路町忠兵衛寺境内居宅修復願狀）文政八年三月 造路町忠兵衛・年寄三郎兵衛連印↓臨川寺様御役者中様 略絵図あり	美	一通	二一九九	○相 国 寺			
奉願口上書（造路町藤右衛門物入小屋造作願狀）文政八年六月 造路町藤右衛門印臨川寺様御役者中様	美	一通	二二〇〇	（相国寺米藏雪隠建直造作許可二付大工市左衛門同狀）享保一六年一〇月一条通七本松東江入ル町大工市左衛門・平松清右衛門連印↓中井主水様 絵図あり 中井主水裏書あり	美繼	一通	二二一〇
奉願口上書（臨川寺境内加藤壽元請地建物等修復願狀）寅八月 加藤壽元↓臨川寺様御役者中様	半	一通	二二〇七	（相国寺塔頭善応院修復許可二付大工市左衛門同狀）享保一七年一二月一条通七本松東江入ル町大工市左衛門・平松清右衛門連印↓中井主水様 絵図あり 中井主水裏書あり	美繼	一通	二二一三
（濱松屋善助造作願狀）寛政三年九月一四日中院町願主濱松屋善助・年寄徳兵衛・大黒屋西隣弥兵衛連印↓三合院様・藏光庵様御役者中様 絵図あり	堅	一通	二二一三	（相国寺塔頭却外軒造作許可二付大工市左衛門同狀）享保二〇年四月一条通七本松東江入ル町大工市左衛門・平松清右衛門連印↓中井藤三郎様 絵図あり 中井藤三郎裏書あり	美繼	一通	二二一五
奉差上一札之事（屋根屋与八葺替請狀）文化八年七月 御出入屋栋屋与八印↓三合院様御役人中様	美繼	一通	二二九三	（相国寺塔頭大通院造作許可二付大工市左衛門同狀）享保二〇年一二月一条通七本松東江入ル町大工市左衛門・平松清右衛門連印↓中井藤三郎様 絵図あり 中井藤三郎裏書あり	美繼	一通	二二一六
乍恐奉願口上書（寺領山本村伝左衛門居屋敷繕普請願狀）文政二年九月 山本村願主伝左衛門↓三合院様御役者中様	堅	一通	二二〇四				

<p>(相国寺塔頭松鷗菴修復許可二付大工市左衛門 伺伏)享保二年三月一条通七本松東江入ル町平 松組大工市左衛門印↓中井藤三郎様 絵図あり 中 井藤三郎裏書あり</p> <p>堅繼 一通 二一七</p>	<p>(東山慈照寺修復許可二付大工市左衛門伺伏) 元文三年四月一条通七本松東江入ル町平松組大工 市左衛門印↓中井主水様 絵図あり 中井主水裏書 あり</p> <p>堅繼 一通 二一九</p>	<p>(相国寺柴小屋建直造作許可二付大工市左衛門 伺伏)安永六年一〇月一条通千本西へ入式丁目 平松組大工市左衛門印↓中井主水様 絵図あり 中 主水裏書あり</p> <p>堅繼 一通 二二〇</p>	<p>(相国寺毘沙門堂造作再願許可二付大工市左衛 門伺伏)天明二年八月一条通千本西へ入式丁目平 松組大工市左衛門印↓中井主水様 絵図あり 中主 水裏書あり</p> <p>堅繼 一通 二二〇</p>	<p>(相国寺塔頭大智院造作許可二付大工市左衛門 伺伏)天明七年二月一条通七本松東江入ル町平松 組市左衛門印↓中井主水様 絵図あり 中主水裏書 あり</p> <p>美繼 一通 二二五</p>	<p>仮建御願(相国寺塔頭豊光寺仮住居建願状控) 天明八年九月相国寺塔頭豊光寺・同役者富春軒↓ 御奉行所 絵図あり</p> <p>美繼 一通 二二六</p>	<p>仮建御願(相国寺塔頭豊光寺仮住居建願状下書) 天明八年九月相国寺塔頭豊光寺・同役者富春軒↓ 御奉行所 絵図あり</p> <p>美繼 一通 二二六</p>	<p>(相国寺塔頭豊光寺仮建願許可二付大工市左衛 門伺伏)天明八年九月一条通六軒町西へ入町平松 組市左衛門印↓中井主水様 絵図あり 中主水裏書 あり</p> <p>美繼 一通 二二六</p>
<p>(相国寺塔頭松鷗菴造作許可二付大工市左衛門 願状)寛政三年四月一条通七本松東江入ル町平松 組市左衛門印↓中井藤三郎様御役所 絵図あり 中 井藤三郎裏書あり</p> <p>美繼 一通 二二七</p>	<p>(相国寺塔頭玉龍庵仮造作願許可二付大工市左 衛門願状)寛政四年二月一条通七本松東江入ル町 平松組市左衛門印↓中井藤三郎様御役所 絵図あり 中井藤三郎裏書あり</p> <p>美繼 一通 二二七</p>	<p>奉願柴小屋造作之事(相国寺柴小屋造作願状控) 寛政七年六月相国寺役者亨川軒・同富春軒連印↓ 御奉行所 絵図あり</p> <p>堅繼 一通 二二七</p>	<p>(万年山真如寺法堂作事許可二付大工市左衛門 伺伏)享保一五年九月一条通千本西へ入式丁目平 松組大工市郎右衛門・組頭平松清右衛門連印↓中井主 水様 絵図あり 中井主水裏書あり</p> <p>堅繼 一通 二二八</p>	<p>(北山真如寺庫裏建増造作願許可二付大工市左 衛門伺伏)安永四年二月一条通千本西へ入式丁 目平松組大工市左衛門印↓中井主水様御役所 絵図 あり 中主水裏書あり</p> <p>美繼 一通 二二八</p>	<p>(北山万年山真如寺釣鐘堂普請許可二付大工) 天明五年二月一条通七本松東江入ル町平松組大工 市左衛門印↓中井主水様 絵図あり 中主水裏書あ り 破損大</p> <p>美繼 一通 二二九</p>	<p>○大徳寺 (北山真如寺客殿普請願許可二付大工市左衛門 伺伏)寛政六年一月一条通六軒町西へ入町平松 組市左衛門印↓中井主水様 絵図あり</p> <p>美繼 一通 二二九</p>	<p>(大徳寺内碧玉菴寮舎単丁菴造作許可二付大工 市左衛門伺伏)享保一二年正月一八日平松組一 条通千本西へ入式丁目大工市郎右衛門・組頭平松清右 衛門連印↓中井主水様 絵図あり 中井主水裏書あ り</p> <p>堅繼 一通 二二九</p>

(大徳寺内碧玉菴寮舎単丁菴造作許可ニ付大工市左衛門伺状) 享保二年一月二〇日 一条通千本西へ貳丁目平松組大工市郎右衛門・組頭平松清右衛門連印↓中井主水様 絵図あり 中井主水裏書あり 堅繼 一通 二二五

(大徳寺塔頭単傳庵造作許可ニ付大工市左衛門伺状) 享保一七年閏五月一条通千本西へ貳丁目平松組大工市郎右衛門・組頭平松清右衛門連印↓中井主水様 絵図あり 中井主水裏書あり 堅繼 一通 二二二

(大徳寺塔頭単傳庵造作許可ニ付大工市左衛門伺状) 享保一十九年四月一条通七本松東江入ル町大工市左衛門・平松清右衛門連印↓中井主水様 絵図あり 中井主水裏書あり 美繼 一通 二二四

○

(大工市左衛門伺状奥書案文) 己二月一条通千本西へ入式丁目平松組大工市左衛門印↓中井主水様 美 一通 二二四

(大工市左衛門伺状奥書案文) 己閏三月一条通千本西へ入式丁目平松組大工市左衛門印↓中井主水様 美 一通 二二五

建物改

臨川寺外塔頭諸院境内建物改控 一括 二三

境内諸建物覚控 天保一五年二月 臨川寺役者蔵充庵↓御奉行所 美 一冊 二二一

(境内諸建物覚控) 天保一四年二月 天龍寺塔頭福壽庵役者昭蔵主↓御奉行所 美 略綴 一冊 二二三

(境内諸建物覚控) 天保一四年二月 天龍寺塔頭寿寧院役者永蔵主↓御奉行所 美 一冊 二二三

(境内諸建物覚控) 天保一四年二月 天龍寺塔頭南芳院役者永蔵主↓御奉行所 美 一冊 二二四

(境内諸建物覚控) 天保一四年二月 天龍寺塔頭華徳院役者永蔵主↓御奉行所 美 一冊 二二五

(境内建物絵図控) 天龍寺塔頭松尾谷村龍濟院 美 一冊 二二六

(境内建物絵図控) 天保一四年二月 天龍寺塔頭宝篋院役者永蔵主↓御奉行所 美 一冊 二二七

(境内建物絵図控) 天保一四年二月 天龍寺塔頭宝篋院役者永蔵主印↓御奉行所 美大 一冊 二二八

(境内諸建物覚控) 天保一四年二月 天龍寺塔頭妙智院役者金蔵主印↓御奉行所 天明度絵図写あり 美大 一冊 二二九

(境内諸建物覚控) 天保一四年二月 崇恩寺役者慎蔵主印↓御奉行所 絵図なし 美大 一冊 二二〇

(境内諸建物覚控断簡) 天保一四年二月 天龍寺塔頭禪昌院役者金蔵主印↓御奉行所 前欠大 美 一冊 二二二

(境内諸建物覚控綴) 天保一四年二月 天龍寺塔頭松尾谷村西芳寺役者慎蔵主印↓御奉行所 綴 一冊 二二三

争論

松尾社中与天龍寺數伐採候争論之事度々詮議之上場所不分明ニ付為見分桜井孫兵衛手代西専助久下藤十郎手代本多仲右衛門差遣逐糾明裁許申付候覚 享保三年六月二日(京都町奉行↓天龍寺) 住山性湛・東堂元庸・西堂性琴他七名連署奥書あり 下札二あり 堅繼 一通 二〇〇

松尾社中与天龍寺數伐採候争論之事度々詮議之上場所不分明ニ付為見分桜井孫兵衛手代西専助久下藤十郎手代本多仲右衛門差遣逐糾明裁許申付候覚(写) 享保三年六月二日(京都町奉行↓天龍寺) 端裏張紙一享保三年御裁許写 美繼 一通 二〇二

松尾社中と天龍寺境内去戌六月依令裁許大井川筋西堤川除普請之儀松尾社中窺之、猶又吟味之上申渡候覺(享保四)亥二月(京都町奉行↓天龍寺)周鍊・英果・等琳連署奥書あり

一 通 二〇二

覺 享保一二年五月 奉行↓天龍寺役者 端裏張紙「同所大井川筋小端際中山殿御家領數地之儀」二付於京都町御奉行所享保十二未年五月当寺江被御渡置被仰渡書御本紙 城州葛野郡下嵯峨天龍寺」

一 通 二〇三

天龍寺境内川端村印鑑出入一件書類

一 括 二〇四

先達而私共御願申上候願書之面村方難儀仕茂數多御座候旨書付差上ヶ候二付当三日被為御召出難儀之訳申上様二被仰渡候依之書付ヲもつて申上候覺 宝曆二年一〇月一三日 川端村十町年寄連判↓天龍寺様御役者中様

半 綴 袋入 一 通 二〇四一

川端村大年寄并惣百姓、家別印鑑爭論二付天龍寺申渡書 宝曆二年一月 天龍寺役者↓川端村大年寄大八木藤右衛門・同大八木清左衛門・同仲間木村八郎右衛門他一七名・各町小年寄、惣代等三〇名

一 通 二〇四二

天龍寺役者申渡案文(宝曆二年)年号月日 天龍寺役者↓川端村大年寄誰一、同何町小年寄誰、何町同誰一〇四一二の案文

半 綴 八 通 二〇四三

覺(川端村支配之儀二付朱印・制札願書案文)(宝曆二年)

半 綴 一 通 二〇四四

(村方役儀二付御尋二付答申書)

半 綴 一 通 二〇四五

奉願口上案文(川端村百姓印鑑出入之儀二付願書到來二付、町奉行所へ口上願書)年号月日 川端村御家領百姓惣代たれ↓阿部様御役人中様 阿部中将殿役人↓柳原大納言・広橋大納言宛奥書あり

半 綴 一 通 二〇四六

口上覺案(大年寄共心得違二付吟味願書) 西五月二九日 天龍寺役者華藏院・華藏院↓御奉行所墨引抹消あり

一 通 二〇四七

口上覺案(大年寄共心得違二付吟味願書) 西五月二九日 天龍寺役者華藏院・華藏院↓御奉行所二〇四一七とは同文

一 通 二〇四八

口上覺案(大年寄共心得違二付吟味願書) 西六月二日 天龍寺役者華藏院・延慶院連印↓御奉行所二〇四一七とは同文

一 通 二〇四九

口上覺案(大年寄共心得違二付吟味願書) 西六月 天龍寺役者華藏院・延慶院連印↓御奉行所二〇四一七とは同文

一 通 二〇五〇

口上覺控(大年寄共心得違二付吟味願書) 西六月 天龍寺役者華藏院・延慶院連印↓御奉行所二〇四一七とは同文

一 通 二〇五一

差上申一札之事(印鑑帳出入之儀二付大年寄請狀案文) 年号月日

一 通 二〇五二

差上申一札之事(印鑑帳出入之儀二付小年寄・町惣代請狀案文) 月日 何町小年寄誰印・同町惣代誰印↓天龍寺御役者中様

一 通 二〇五三

差上申一札之事(印鑑帳出入之儀二付大年寄・小年寄請狀下書) 宝曆三年

一 通 二〇五四

覺(請狀差出延引二付川端村年寄・惣代託状) 宝曆三年七月二〇日 川端村年寄大八木藤右衛門・大木清左衛門・同惣代上柳市郎兵衛↓天龍寺御役者中

一 通 二〇五五

去ル廿二日御書付を以御尋二付御答申上ル覺下書 西一〇月 天龍寺役者華藏院・華藏院・松岩寺↓御奉行所

一 冊 二〇五六

去ル廿二日御書付を以御尋二付御答申上ル覺下書

一 冊 二〇五七

(当寺境内带刀人増減之儀御尋二付答申書) 亥九月 天龍寺役者華徳院・松岩寺↓御奉行所 切繼 一通 二四一八

口上覚(神事带刀之名目除之願書) 亥十一月 天龍寺役者華徳院・松岩寺↓御奉行所 美繼 一通 二四一九

(材木屋組侍分一件二付覚書) 半 一通 二四二〇

(家別印形之儀二付覚書) 五月三日 切繼 一通 二四二二

○

(嵯峨川筋村々網持争論二付公儀宛口上書写之届状) 宝曆五年四月 川筋網年寄政右衛門・同惣代次郎右衛門連印↓天龍寺様御役者中様 美繼 一通 二四二一

(嵯峨川筋村々網持争論二付公儀宛願書写之届状) 宝曆五年四月 川筋網年寄政右衛門・同惣代次郎右衛門連印↓天龍寺様御役者中様 半繼 一通 二四二二

(嵯峨川筋村々魚領争論二付奉行宛裁許願書写之届状) 亥五月一九日 網持惣代次郎右衛門・同年寄政右衛門連印↓天龍寺御役者中様 半繼 一通 二四二三

(嵯峨川筋村々魚領争論二付裁許状写之届状) 亥六月一七日 半繼 一通 二四二四

諸願・諸届

用水普請

覚(上山田村一之井・二之井用水樋普請二付断状) 享保一七年一月一六日 上山田村役人関市郎左衛門印↓天龍寺御役者中 美 一通 二四二五

覚(上山田村小橋之下他六ヶ所普請二付断状) 元文五年一月二七日 上山田村役人市郎左衛門印↓天龍寺御役者中 美繼 一通 二四二六

覚(上山田村一之井樋・二之井樋・沓本揃堤・志茂堤普請二付断状) 寛保元年一〇月二日 上山田村庄屋市郎左衛門印↓天龍寺御役者中 美繼 一通 二四二七

覚(上山田村一ノ井用水樋修復二付断状) 酉(元文五)年二月七日 上山田村庄屋市郎左衛門印↓天龍寺御役者中 半切 一通 二四二八

覚(上山田村小橋ノ下并一之井樋下普請二付断状) 宝曆四年一〇月一五日 上山田村役人清水宇右衛門印↓天龍寺御役者中 美切 一通 二四二九

○土砂留

覚(招慶院領梅ヶ畑預ヶ山土砂留二付届状) 天保七年二月 招慶院知事周臣↓本山參暇和尚・役者禪師 美 一通 二四三〇

(招慶院領梅ヶ畑預ヶ山土砂留二付届状) 天保一年二月 招慶院知事周臣↓本山參暇和尚・役者禪師 美 一通 二四三一

(招慶院領梅ヶ畑預ヶ山土砂留二付届状) 天保二年三月 招慶院知事周臣↓本山參暇和尚・役者禪師 美 一通 二四三二

○川流人

天龍寺境内大井川筋流人一件 一括 二四三七

死人雜物(川流人之届) 丑正月一〇日 半横折 一通 二四三八

指上申一筆之事(大井川流懸り死骸二付子細届状写) 延享二年正月一〇日 下嵯峨天龍寺役人西川備右衛門・同門前年寄伊兵衛・同庄兵衛・同前役人見付人市兵衛↓御奉行所様 半繼 一通 二四三九

(天龍寺門前番非人市兵衛口上書写) 丑正月一〇日 市兵衛 半繼 一通 二四四〇

奉指上口上書(大井川筋村々年寄口上書写) 丑

正月一〇日 上山田村年寄三郎左衛門・下嵯峨法輪寺門前年寄次兵衛・同川端村上柳市郎兵衛・同小溝村年寄吉郎兵衛・上嵯峨大川町年寄平右衛門・同中院町年寄吉兵衛・同井頭町年寄三右衛門・八軒町年寄佐兵衛・御奉行様 地破損

差上申一札(大井川はまり人二付届状) 寛延三年八月九日 天龍寺役人武尾了可

(川はまり人救出二付届状) 宝曆六年七月二六日 中院町武兵衛・弥右衛門・伝右衛門・加兵衛・権右衛門・利兵衛・藤右衛門印・平兵衛印・茂兵衛印 同行惣中↓天龍寺様御役人中様

○西川重之丞

西川重之丞父子欠落後一件書類 封状上書「西川満右衛門欠落後一件諸書物無用之反古也開封無益開封無用 天明四辰〇十二月改之」

乍恐御断書(重之丞父子欠落之儀、公儀へ訴状二付届状) (明和六) 丑五月二九日 造路町家賃請合印形仕候当人年寄庄左衛門・年寄傳兵衛・町惣代喜右衛門・同吉右衛門連印↓天龍寺様御役者中様

乍恐御断書(百性十之丞一家欠落之儀、公儀へ訴状二付届状) 明和六年五月晦日 造路町年寄庄左衛門・五人組喜右衛門連印↓天龍寺様御役者中様

丑五月廿七日家出下嵯峨天龍寺門前造道町百性重之丞諸道具改帳写并公儀差出二付届書 明和六年五月晦日 年寄庄左衛門・五人組吉右衛門連印↓天龍寺様御役者中様 五十嵐市郎兵衛方内中并十九郎改

丑五月廿七日家出下嵯峨天龍寺門前造道町百性重之丞家屋敷改帳写并公儀差出二付届書(明和六) 丑五月晦日 年寄庄左衛門・五人組吉右衛門連印↓天龍寺様御役者中様 五十嵐市郎兵衛方内中并十九郎改

半繼 一通 二四七四

堅繼 一通 二六八

美繼 一通 二五

一括 三七

美繼 一通 三七二

半繼 一通 三七二

半 一冊 三七三

美繼 一通 三七四

下嵯峨天龍寺門前百性重之丞所持同前立石町有之候建家改帳図写并公儀差出二付届書(明和六) 丑六月四日 立石町年寄平兵衛・五人組小兵衛連印↓天龍寺様御役者中様

乍恐口上書(天龍寺祠堂方所持重之丞借家、此度改除之願状) 明和六年六月朔日 天龍寺門前立石町天龍寺祠堂方役人小林与左衛門・年寄平藏・五人組小兵衛連印、天龍寺役人加藤元長與書↓御奉行様

乍恐口上書(玄伯取繕普請分重之丞家、此度改除之願状) 明和六年六月朔日 天龍寺門前立石町百姓重之丞借家医師吉田玄和・年寄平藏・五人組小兵衛連印↓御奉行様

乍恐口上書(玄伯・庄兵衛借受分家賃・町内出銀等御尋二付口上書) 明和六年六月朔日 天龍寺門前立石町百姓重之丞借家医師吉田玄伯・同断働人庄兵衛・年寄平藏・五人組小兵衛連印↓御奉行様

乍恐奉願口上書(彦兵衛借銀返済二付建家并諸道具拝領願願書写并届書) 明和六年六月二二日 年寄平兵衛・五人組甚兵衛連印↓天龍寺御役者中様

日延御願(重之丞尋出日延願差出二付届状) 丑六月二二日 造路町年寄庄左衛門印↓天龍寺様御役者中様

就御尋二付口上書(重之丞借銀等御尋二付奉行宛差出候口上書写并届状) 丑八月二二日 造路町年寄庄左衛門印↓天龍寺様御役者中様

覚(家土蔵・田畑・藪地第銀書上) 端裏書「八月末役所方町内へ尋書」

覚(家土蔵・田畑・藪地第銀書上) 明和六年八月 造路町年寄庄左衛門印↓五十嵐市郎兵衛様 端裏書「八月末質物地面返答書」

美繼 一通 三七五

美繼 一通 三七六

美繼 一通 三七七

美繼 一通 三七八

美繼 一通 三七九

美繼 一通 三七〇

美繼 一通 三七二

半繼 一通 三七三

半繼 一通 三七三

嵯峨天龍寺門前造道町年寄・五人組・惣代、同町力者質人之儀ニ付申狀 丑二〇月二八日	半繼	一通	三七二四	乍恐奉願上口上書（大工勘方ニ付願狀文案）御断口上書（壽閣屋敷借宅元得引取ニ付断狀） 文化七年二月二日造路町明春庵・見靈連印↓加藤壽閣	美切	一通	二六
就御尋口上書（重之丞居宅并土蔵普請之儀）明和六年丑一〇月造路町年寄庄左衛門・傳兵衛連印↓天龍寺様御役者中様	半繼	一通	三七一五	一札（壽閣屋敷借宅元得引取ニ付念狀） 文化七年二月二日明春庵・見靈連印↓白井壽篤	半	一通	二六二
重之丞一件ニ付入用米銀諸控（丑六月一二月一日）	横	一冊	三七一六	一札之事（八兵衛先祖筋目之儀ニ付一札） 寛政三年二月一八日天王寺屋八兵衛↓市左衛門	半	一通	二六五
差上申一札之事 明和元年閏極月 西川木市↓三会院様御役者中様	半繼	一通	三七一七	一札之事（仁兵衛・仁左衛門先祖筋目之儀ニ付一札） 寛政三年二月一八日大文字屋長兵衛印↓市左衛門殿	半	一通	二六六
○諸 事							
宗旨書上之覚（造路町角右衛門借宅浪人宗旨証文）貞享四年九月二日長井安左衛門判↓天龍寺役者様 北嵯峨称念寺奥書あり	堅繼	一通	六	（鳥居本町寺号社号取調之書付を京都東役所へ差出ニ付届狀） 文化二年八月二日鹿王院御領鳥居本町年寄仁兵衛・五人組和助・招慶院御門前年寄佐兵衛・五人組吉郎兵衛・宝篋院御門前年寄庄兵衛・五人組松之助連印↓鹿王院様・招慶院様・宝篋院様御役者中様 宝篋院周彌・招慶院元俊・鹿王院宗寛連印↓天龍參暇和尚・役者禪師	美繼	一通	二七
御断書（上嵯峨招慶院門前類焼ニ付公儀へ差出書付・絵図等写） 元文二年六月天龍寺塔頭招慶院	美繼	一通	二五	（等持院出火公儀届済ニ付届狀） 文化五年四月六日等持院役者紹猷印↓天龍參暇和尚 絵図あり	美繼	一通	二四一
（たば物駄伐木口伐賃金御尋被為成候ニ付答狀） 申（宝曆二）一〇月一三日 杣惣中	半	一通	二五	口上覚（昨五日夜出火、法堂以下焼失ニ付届狀） 辰四月六日等持院役者紹猷印↓天龍參暇和尚切	切繼	一通	二四二
奉願上口上書（天龍寺門前仙方惣中御用賃金ニ付願狀） 宝曆二年一〇月願人御門前久太夫・治右衛門・市郎兵衛・久兵衛連印杣惣中	美繼	一通	二六	口上覚（灰搔ニ付届狀） 辰四月七日等持院役者紹猷印↓天龍參暇和尚	切繼	一通	二四三
奉願上口上覚（善次郎半作料願狀） 安永三年二月一五日大工市左衛門印↓天龍寺様御役者中様	半	一通	二五	（等持院大会修業公儀聞済ニ付届狀） 文化七年正月等持院役者紹猷印↓天龍參暇和尚	美繼	一通	二五
乍恐奉願口上書（弟子惣兵衛本作料願狀） 午（安永四年カ）七月大工市左衛門印↓天龍寺様御役者衆中様	堅	一通	二五	（美作国東北条郡塔中村松溪庵由緒書上） 安政三年霜月四日吉田殿御内谷伊兵衛	美	一通	二四一
乍恐口上書（龜山院御陵守戸役給米ニ付願狀控） 慶応三年二月三日天龍寺役人小林主税・芹川富三郎・小林直一郎・西川政一郎・江村小右衛門・笠岡源右衛門・大西多右衛門連印↓御奉行所	美	一冊	二六	（美作国東北条郡塔中村松溪庵由緒下書）	半	一通	二四二

乍恐以書附奉願上候(旧天龍寺末松溪庵ニ付倉敷役所へ差出願狀控)安政四年正月 作州東北条村塔中村百姓惣代勘三郎・年寄惣兵衛・庄屋卯右衛門↓倉敷御役所

美繼 一通 二六四三

入置申一札之事(近江屋孝三郎下シ荷物紛失一件ニ付契狀)文久二年二月 近江屋孝三郎・支配人善介・伊兵衛連印

豎 一通 二六六

御託口上書(先祖よりの重書不当之取扱いニ付詫狀)慶応三年七月 森見彦右衛門・森見重兵衛連印↓天龍寺御役者中様

豎繼 一通 二六八

口上書(吉田真齋等帶刀免許願狀)己九月二八日 吉田真齋印・倅宇兵衛光隆判↓天龍寺様御役者中

美包紙入 一通 二五二

口上覺(惣門前下馬札建替ニ付届狀控)午八月 天龍寺役者龍昇院印↓御奉行所

美 一通 二五四

覺(紙屋川橋掛入用多ニ付夫食願狀)宝永三年四月一六日 紙屋川惣百姓中↓天龍寺常住・鹿王院・如知院・寿念院・法則院・慶藏院・音はん様

美繼 一通 二〇八

乍恐奉願上候口上書(銀子拝借願狀)宝曆三年九月三日 大工市左衛門印↓天龍寺様御役者中様

美 一通 二三五

覺(慈濟院境内門前居宅他洪水流ニ付届狀)元文五年閏七月 天龍寺塔頭慈濟院役者

美 一通 二四六

養清軒寺地之内ニ預り申立木之事(立木預り手形)寛文二二年七月九日 慈濟院納所(花押)↓天龍御役者衆中

美切包紙入 一通 二四二

差上申一札(慈濟院留守居壽孝捨身ニ付檢使來ル口書写)寛政四年二月五日 天龍寺塔頭慈濟院住持俊季・煩ニ付代猷首座・同役者佐首座・天龍寺役者西芳寺・正圓庵↓御奉行所

半繼 一通 二六七

天龍寺塔頭慈濟院出火龜絵図 寛政四年二月三日

美 一鋪 二六八

奉願口上覺(凶作ニ付小淵村田地年貢下免願狀)安政四年一月上嵯峨福嶋弥弥作兵衛代八軒村惣八印↓天龍寺様御役人御中

美 一通 一七三

覺(境内地八八三坪御用材木困場永代借入狀)明治二年三月 會計官宮繼司(朱角印)↓天龍寺役者中

豎包紙入 一通 一八一

覺(御用材木困場永代借入金拾両年々支払約定証)明治二年三月 會計官宮繼司(朱角印)↓天龍寺役者中 一八一と同一包紙

豎 一通 一八二

皆金受取証(建家売渡代金皆済受取証文)明治一四年八月二七日 葛野群第六組下嵯峨村木村桑造・証人西野五兵衛連印(朱)↓天龍寺事務所御中

半 一通 一八三

売渡証 明治一一年一月一六日 葛野群越畑村売主田中浅右衛門・証人横谷芳兵衛連印↓山添與助殿越畑村戸長井上與一郎代理用係山本覺之助(朱印)與書あり

豎 一通 一八四

茶園売渡証 明治一九年一〇月一四日 葛野郡天龍寺村大賀川均一郎・小川勘七連印↓由理滴水殿 天龍寺村戸長野路井孝治(朱角印)與書あり

豎繼 一通 一八五

証(茶園売渡代金受取証)明治一十九年一月七日 大賀川均一郎印↓天龍寺御寺務所御中

半切 一通 一八六

大賀川均一郎書狀 明治一十九年一月七日 大川賀均一郎印↓天龍寺御寺務所山田古心殿

半 一通 一八七

(断簡)八月一七日 天龍寺役者↓立石町年寄甚左衛門・造路町年寄太右衛門・毘沙門町年寄勘七・山本村年寄平助・小溝村年寄作兵衛・法界門町年寄万右衛門・川端村惣年寄大八木仁右衛門連印

半繼 一通 一八八

文書目録

(天龍寺本寺並び塔頭諸末寺所藏稀書目録)

美 一冊 四

絵箱仁入置目録(天常住・臨川寺分) 慶安元年七月七日 住山壽洪他六名連判 慶安二年・万治四年・寛文二年の新添分書入あり

継 一通 六

寺院古帳之覚 慶安四年八月朔日(天文八)慶安四年

美綴 一冊 三

(臨川寺古文書目録) 明治三六年八月三〇日
当直参暇秀嶽素記

堅 一通 五二

その他

太政官符写(臨川寺領葛野郡大井郷、伊勢大神宮夫役工米臨時雜役等免除) 貞和五年四月二八日↓山城国司

堅継 一通 七

(歛喜院御房宛伊丹主税・沢野頼母書状包紙)

包紙のみ 一通 三二

冬至秉拂拙語 前堂小比丘紹温

美 一冊 五

(天龍寺役者留書)(享保元年一二年七月)

美 一冊 四

臨川寺・三合院

規約

(臨川寺役者規定) 宝曆四年八月 当住周寅他九名連判

美継 一通 五

臨川当住座位之事(当住座位は西堂之上首二付衆議事書) 天明六年八月 塔主令椿他九名連判

堅 一通 七

臨川寺輪住規約 明治一九年一〇月 大本山事務所 活 一冊 三七

寺領

臨川寺除地指図(総坪数合六三四二坪八分、反別二町一反一畝一二分)

五〇×三〇 一鋪 四

(臨川寺領敷地坪付并絵図)

半継 一通 一七

公儀御用

御請書(堀田相模守巡見二付請状) 寛政五年五月二二日 木嶋社・広階寺役者・臨川寺役者・法輪寺役者↓御奉行所

半 一通 二〇

勘定

年貢

未年御年貢米之事(三合院并臨川寺分年貢差引勘定書) 文化八(未)年一二月 馬場村庄屋久右衛門印↓臨川寺様御役人中様

美継 一通 一四一

子年御勘定書(三合院并臨川寺年貢差引勘定書) 文化二三年子一二月 樋爪村庄屋虎蔵印↓臨川寺様

半継 一通 一五一

子年勘定書之事(三合院并臨川寺分年貢差引勘定書) 文化一三(子)年一二月 庄屋久右衛門印↓三合院様御役人中様

美継 一通 一四二

辰年御勘定書(三合院并臨川寺年貢差引勘定書) 天保三辰年閏一二月 樋爪村沖田虎蔵印↓三臨川寺様

美継 一通 一五二

辰年御勘定之事(三合院并臨川寺年貢差引勘定書) 天保三年辰一二月 馬場村庄屋久右衛門印↓三合院様御役人中様

美 一通 一四三

○

御請狀之事（大米甚左衛門八年間年貢請狀）
貞享五年三月一〇日 大米甚左衛門印↓臨川寺御納所中 美 一通 二〇

一札之事（臨川寺持昌作人請狀）宝曆一三年五月
力者立石町与左衛門印↓臨川寺様御役者中様 美 一通 二〇

差上申請地之事（政右衛門請地差上証文） 明和
九年七月 政右衛門印↓臨川寺様御役者中様 半 一通 二〇

奉差上請地証文之事（臨川寺境内造路町南側西
川重之丞上り屋敷請狀）寛政八年正月 加藤壽元
印↓臨川寺様御役者中様 美 一通 二〇

奉差上一札之事（臨川寺領瀬戸川畑地五カ年見
掛下免請狀）安永元年一二月 造路町政八印↓臨
川寺様御役者中様 美 一通 二〇

奉差上一札之事（臨川寺領瀬戸川畑地五カ年見
懸下免請狀）安永七年一二月 百姓政八印↓臨川
寺様御役者中様 美 一通 二〇

奉願上口上書（臨川寺領瀬戸川地面十カ年下免
願狀）寛政五年一二月 願主造路町兵右衛門印↓臨
川寺様御役者中様 美 一通 二五

奉願上口上書（臨川寺領瀬戸川地面五カ年下免
願狀）天明八年一二月 造路町百姓兵右衛門印↓臨
川寺様御役者中様 美 一通 二五

乍恐奉願上口上書（臨川寺領清水塚田地下免
願狀）文化一二年六月 河端村柳篤寺無住二付正定
院得替・溝中惣代福田三郎左衛門連印↓臨川寺様御
役者中 美 一通 二六

乍恐奉差上上書口上免（臨川寺領清水塚田田地
十カ年下免請狀）文化一二年九月 河端村柳篤寺
無住二付正定院得替・溝中惣代福田三郎左衛門連印
↓臨川寺様御役者中 美 一通 二六

奉願上口上書（臨川寺領瀬戸川田地五カ年下免願
狀）文化一四年正月 願主立石町庄右衛門印↓臨川
寺様御役者中様 美 一通 二六

乍恐再奉願上口上書（臨川寺領瀬戸川畠年貢下免
願狀）文政九年一二月 畠中町吉郎兵衛印↓臨川
寺様御役者中様 半 一通 二六

奉差上御請免一札（臨川寺領瀬戸川畑地年貢下
免請狀）文政九年一二月 畑中町吉郎兵衛印↓臨
川寺様御役者中様 半 一通 二六

奉差上未進証文之事（臨川寺領畑地年貢未進二
付来三月迄延納願狀）天保二年一二月 中院町願
主李右衛門印↓臨川寺様御役者中様 半 一通 二七

奉差上未進証文之事（臨川寺領畑地年貢未進二
付来三月迄延納願狀）天保三年一二月 中院町百
姓李右衛門印↓臨川寺様御役者中様 半 一通 二七

奉願上口上書（臨川寺領瀬戸川筋田地年々見取
年貢願狀并請狀）宝曆一〇年正月 西川満右衛門
印↓臨川寺様御役者様 端裏朱書「瀬戸川年貢下ヶ免
願 力者萬右衛門」 美 一通 二八

奉願上口上書（臨川寺領瀬戸川筋田地年々見取
年貢願狀并請狀）未正月一七日 願人百姓満右衛
門印↓臨川寺様御役者様 端裏朱書「瀬戸川田地年
貢下ヶ免願 満右衛門」 美 一通 二八

○田淵山

乍恐奉願上口上書（田淵山之儀二付救銀拝借願
狀）明和元年七月 北溝村年寄五兵衛・中村宇右衛
門・町惣代同名儀兵衛連印↓臨川寺様御役者中様 美 一通 二六

差上申請証文之事（臨川寺領田淵山之立木売払二
付請狀）明和元年七月 北溝村中村宇右衛門・同村
惣代中村儀兵衛・同村年寄五兵衛連印↓臨川寺様御
役者中 半 一通 二七

奉指上一札（臨川寺領田湖山并弁天山下刈二付請狀）明和元年二月八日寺院力者中惣代笠岡源右衛門・大西宇右衛門連印↓臨川寺様御役者中様	美	一通	一呖
奉指上一札（臨川寺領田湖山并弁天山下刈二付請狀）明和五年九月寺院力者中惣代源右衛門・宇右衛門連印↓臨川寺様御役人中様	美繼	一通	一四
覚（臨川寺領田湖山売渡二付廻狀）午霜月一七日臨川寺役人印↓川端村・安堵橋・山本村・造路町・法輪寺門前・中院町・鳥居本・鳴瀧村（人名略）	美繼	一通	一五
○借金・借米			
借米之事（借米証文）延宝九年二月一日借主多右衛門・同源右衛門・同喜兵衛・同茂兵衛・請人作右衛門連印↓臨川寺御納所様	美	一通	二〇七
乍恐以口上書奉願候（力者作右衛門・甚右衛門銀子借用願狀）元文三年五月願主作右衛門・甚右衛門連印↓臨川寺様御役者様 甚右衛門添書あり	堅繼	一通	三一
覚（力者作右衛門・甚右衛門借用狀）元文三年六月八日願主倅甚右衛門・同作右衛門・証人藤右衛門・同重右衛門連印↓臨川寺様御役者中様 封筒一通あり	美繼	一通	三三
奉願上口上書（居宅修復金拝借願狀）宝曆八年七月願人力松山甚右衛門印↓臨川寺様御役者様	美繼	一通	三三
乍恐奉願上口上書（銀子拝借願并請取狀）宝曆一〇年二月二〇日願人力松山甚右衛門印↓臨川寺様御役者様	美繼	一通	三四
奉差上口上覚（拝借銀返済延引之願狀）天明八年霜月願主造路町兵右衛門・証人木引茂介連印↓臨川寺様御役者中様	半	一通	三八

乍恐奉願上口上覚（銀子借用願狀）享和二年二月松山嘉兵衛・同嘉右衛門連印↓臨川寺様御役者中様	半繼	一通	包紙入 三三
乍恐奉願上口上書（拝借銀力年無利息之願狀）文化七年二月笠岡源右衛門・松山嘉兵衛連印↓臨川寺様御役者中様	半	一通	三四
奉拝借銀素之事（銀子借用証文）文政七年二月拝借人加藤壽庵印↓臨川寺様御役者中様	半	一通	三六
奉拝借金之事（金子借用証文）天保四年極月茸師与八印↓臨川寺様御役人加藤様	半繼	一通	三九一
覚（金子請取）九月八日茸師与八↓加藤様	半切	一通	三九二
諸願・諸届（臨川寺）			
○請 地			
乍恐奉願口上書（臨川寺境内造道町南側西川重之丞上り屋敷請地願狀）寛政七年二月加藤壽元印↓臨川寺様御役者中様	半	一通	一五
乍恐口上書（政右衛門差上地面請地願狀）戌八月願主太右衛門印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「八月力者太右衛門請地之願書」	半切	一通	一五
奉差上一札之事（西川重之丞上り屋敷請地竹木龍毛代銀上納五カ年賦請狀）寛政八年正月加藤壽元印↓臨川寺様御役者中様	美	一通	三〇
○詫 状			
（天龍寺門前力者心得方申違二付請狀）天保三年二月松山嘉右衛門・笠岡源右衛門・西川政右衛門・供川藤右衛門・大西多右衛門連印↓臨川寺様御役者中様	美繼	一通	一五

一札之事(松屋弥右衛門田淵山之立木盜取二付町中詮証文)宝永二年二月二十六日中院年寄半兵衛・五人組忠兵衛・同左兵衛・同玄隆連印↓臨川寺様御役者中様

美 一通 二四

御届(落シ文二付一札)延享四年正月二一日力者笠岡源右衛門・西川嘉兵衛・大西太右衛門・西川嘉右衛門・供川藤右衛門・西川備右衛門・松山甚右衛門連印↓臨川寺様御役者中様

美 一通 二五

奉差上ケ一札(臨川寺境内ニテ源七・惣助林下草盜取一件内濟二付請狀)宝曆九年六月川端村源七・同所惣助・同所源七親久兵衛・同所惣助縁類七左衛門連印↓臨川寺様御役人中様

美 一通 二五

○加藤壽元一件

奉願口上書(加藤壽元実父帰山之願狀)天明七年六月加藤壽元印(↓臨川寺) 白井寿瑄・芹川恵且より臨川寺御役者中様宛奥書あり

美 包紙入 一通 二六

口上覚(加藤壽元親引取二付願狀)天明八年五月加藤壽元(↓臨川寺御役者中様) 白井壽瑄奥書あり

美 一通 二六

口上覚(加藤壽元鹿王院参居願狀)天明八年九月加藤壽元(↓臨川寺御役者中様) 白井壽瑄奥書あり

半 一通 二六

乍恐奉願口上書(白井壽篤方打紛候日用道具二付願狀)文政八年二月加藤壽閣↓臨川寺様御役者中様

美 一通 二六

○筵貸・平焼

乍恐奉差上一札(臨川寺門前馬場ニテ筵貸并平焼請狀)文化二年三月造路町平焼弥曾兵衛・同音松・藤藏・畑中町平焼伊兵衛・小屋町同新七・筵貸新吉・同次右衛門・同善右衛門・同武兵衛・同次兵衛・藤吉・畑中町庄九郎連印↓臨川寺様御役人中様

半 一通 二六

乍恐奉差上一札(臨川寺門前馬場ニテ筵貸并平焼請狀)文化二年三月造路町筵貸弥曾兵衛・同勘兵衛・小屋町同新七・同新吉・同善右衛門・同武兵衛・同次右衛門・同藤吉・畑中町庄九郎・造路町平焼武兵衛・小屋町同彦兵衛・同次兵衛連印↓臨川寺様御役人中様

半 一通 二六

乍恐奉差上一札(臨川寺門前馬場ニテ筵貸并平焼請狀)文化二年三月造路町筵貸弥曾兵衛・同又兵衛・畑中町筵貸庄九郎・築山町筵貸甚兵衛・同堀町筵貸久兵衛・同文右衛門・同藤吉・同新吉・同治右衛門・同武兵衛・同兵左衛門・同善右衛門・造路町平焼武兵衛・政八・小屋町新七・喜右衛門連印↓臨川寺様御役人中様

半 一通 二六

乍恐奉差上一札(臨川寺門前馬場ニテ筵貸并平焼請狀)文政六年三月築山町筵貸甚兵衛・小屋町同正介・同善兵衛・同彦兵衛・同兵左衛門・同甚七・同伊兵衛・平焼新七・筵貸伊之介連印↓臨川寺様御役人中様

半 一通 二六

乍恐奉差上一札(臨川寺門前馬場ニテ筵貸并平焼請狀)文政二年三月小屋町筵貸久兵衛・弥七・伊兵衛・平焼新七・安堵橋町喜八・築山町甚兵衛・立石町吉兵衛連印↓臨川寺様御役者中様

半 一通 二六

乍恐奉差上一札(臨川寺門前馬場ニテ筵貸并平焼請狀)文政二年三月小屋町筵貸茂八・同定七・同弥七・立石町同辰之助・築山町甚兵衛・大道町長左衛門・安堵橋町平焼喜八連印↓臨川寺様御役者中様

半 一通 二六

○雨 乞

川端村雨乞願書類

一冊 三〇二

乍恐奉願口上書(雨乞御札二付届狀)寛政二年七月川端村惣年寄福田半兵衛・同上柳市郎兵衛連印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「戊七月河端村雨乞御札之願書」

半 一通 三〇二

乍恐口上書（雨乞仕度二付届狀）寛政四年四月二 七日 惣年寄上柳市郎兵衛・同福田半兵衛連印↓臨 川寺様御役者中様	半	一通 三〇一二	乍恐御届口上書（雨乞仕度二付願狀）寛政九月閏 七月三日 川端村惣年寄大米幾右衛門・同福田惣左 衛門連印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「寛政九年 巳壬三日請雨願 川端村」	美	一通 三〇一〇
乍恐口上書（雨乞仕度二付届狀）寛政六年六月 川端村惣年寄福田半兵衛・同大米幾右衛門連印↓臨 川寺様御役者中様	美	一通 三〇一三	乍恐御届口上書（雨乞仕度二付願狀）寛政一一年 六月二〇日 川端村惣年寄大米幾右衛門・同福田惣 左衛門連印↓臨川寺様御役者中様	美繼	一通 三〇一一
乍恐口上書（雨乞仕度二付届狀）寛政六年六月九 日 川端村惣年寄福田惣左衛門・同福田半兵衛連印 ↓臨川寺様御役者中様 端裏書「六月九日川端村 請雨願」	美切	一通 三〇一四	乍恐御届口上書（雨乞御礼二付届狀）寛政一一年 六月二七日 川端村惣年寄大米幾右衛門・同福田惣 左衛門連印↓臨川寺様御役者中様	美繼	一通 三〇一二
乍恐御届口上書（雨乞御礼二付届狀）寛政六年六 月二〇日 川端村惣年寄福田半兵衛・同大米幾右衛 門連印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「六月廿日請 雨御願」	美切	一通 三〇一五	乍恐御届口上書（雨乞仕度二付願狀）文化元年六 月一三日 川端村惣年寄大米幾右衛門・同福田惣左 衛門連印↓臨川寺様御役者中様	美切	一通 三〇一三
乍恐御届口上書（雨乞仕度二付願狀）寛政六年七 月三日 河端村惣年寄福田半兵衛・大米幾右衛門連 印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「七月三日請雨 川端村」	美切	一通 三〇一六	乍恐御届口上書（雨乞仕度二付願狀）文化三年六 月朔日 川端村惣年寄福田惣左衛門印↓臨川寺様御 役者中様 端裏書「文化三年寅六月朔日雨乞届書 川端村」	美繼	一通 三〇一四
乍恐御届口上書（雨乞仕度二付願狀）寛政八年七 月八日 川端村惣年寄福田半兵衛・大米幾右衛門連 印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「辰七月八日雨乞 願川端村 惣年寄持參」	美繼	一通 三〇一七	乍恐御届口上書（雨乞御礼二付届狀）文化三年六 月六日 川端村惣年寄福田惣左衛門印↓臨川寺様御 役者中様 端裏書「文化三年寅六月六日雨乞御礼届 書 川端村」	美繼	一通 三〇一五
乍恐御届口上書（雨乞仕度二付願狀）寛政九年七 月一〇日 河端村惣年寄大米幾右衛門・同福田惣左 衛門連印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「川端村請 雨願 寛政九巳七月十日」	美	一通 三〇一八	乍恐御届口上書（雨乞仕度二付願狀）文化六年六 月三日 川端村惣年寄福田惣左衛門印↓臨川寺様御 役者中様 端裏書「文化六巳年六月三日雨乞之届 今三日々五日迄三日之間 川端村」	美繼	一通 三〇一六
乍恐御届口上書（雨乞御礼二付届狀）寛政九年七 月一九日 川端村惣年寄大米幾右衛門・同福田惣左 衛門連印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「川端村請 雨御礼七月一九日 寛政九年巳」	美切	一通 三〇一九	乍恐御届口上書（雨乞御礼二付届狀）文化六年六 月一六日 川端村惣年寄福田惣左衛門印↓臨川寺様 御役者中様 端裏書「文化六巳年六月十六日雨乞 御礼參之届 川端村惣年寄」	美切	一通 三〇一七
			乍恐御届口上書（雨乞御礼二付届狀）文化七年七 月一六日 川端村惣年寄福田惣左衛門印↓臨川寺様 御役者中様 端裏書「文化七年午七月雨乞礼參届 川端村惣年寄福田惣左衛門」	美繼	一通 三〇一八

乍恐御願口上書（雨乞御礼二付願狀）文化九年六月五日川端村惣年寄福田惣左衛門印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「文化九年申六月十五日雨乞願但届之字不相当二付願之字二為相改」 美 一通 三〇二一六

乍恐御願口上書（雨乞御礼二付願狀）文化九年六月二八日川端村惣年寄大八木理右衛門印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「文化九年六月廿八日雨乞御礼願 川端村」 美切 一通 三〇二一〇

乍恐御願口上書（雨乞仕度二付願狀）文化十一年七月川端村惣年寄大八木仁右衛門印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「文化十一年七月五日雨乞願書 川端村」 美繼 一通 三〇二一二

乍恐御願口上書（雨乞御礼二付願狀）文化十一年七月二日川端村惣年寄大八木仁右衛門印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「文化十一年七月廿一日雨乞御礼願書 川端村」 美繼 一通 三〇二一三

乍恐御願口上書（雨乞御礼二付願狀）文政元年七月朔日川端村惣年寄大八木仁右衛門印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「文政元年寅七月朔日雨乞願書 川端村」 美切 一通 三〇二一三

乍恐御願口上書（雨乞仕度二付願狀）文政元年七月六日川端村惣年寄福田三郎左衛門印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「文政元年戌寅七月六日雨乞願 川端村」 堅 一通 三〇二一四

乍恐奉願口上書（雨乞仕度二付願狀）文政四年七月六日川端村惣年寄大八木仁右衛門印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「文政四年己七月六日雨乞願 川端村」 堅 一通 三〇二一五

乍恐奉願口上書（雨乞御礼二付願狀）文政四年七月九日川端村惣年寄大八木仁右衛門印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「文政四年己七月九日川端村雨乞御礼願」 堅 一通 三〇二一六

乍恐奉願口上書（雨乞仕度二付願狀）文政六年六月五日川端村惣年寄大八木仁右衛門印↓臨川寺様御役者中様 美切 一通 三〇二一七

乍恐奉願口上書（雨乞仕度二付願狀）文政六年七月一八日川端村惣年寄大八木仁右衛門印↓臨川寺様御役者中様 美切 一通 三〇二一八

乍恐奉願口上書（雨乞仕度二付願狀）文政九年六月一日川端村惣年寄福田三郎左衛門印↓臨川寺様御役者中様 堅 一通 三〇二一九

乍恐御願口上書（雨乞仕度二付願狀）文政九年六月二六日川端村惣年寄福田三郎左衛門印↓臨川寺様御役者中様 堅 一通 三〇二二〇

乍恐奉願口上書（雨乞仕度二付願狀）文政九年六月二五日川端村惣年寄福田三郎左衛門印↓臨川寺様御役者中様 堅 一通 三〇二二一

乍恐奉願口上書（雨乞仕度二付願狀）天保二年七月川端村惣年寄福田理兵衛・福田惣左衛門連印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「天保二年辛卯七月廿日 雨請願 川端村」 堅 一通 三〇二二三

乍恐御願口上書（雨乞仕度二付願狀）天保二年七月二三日川端村惣年寄福田理兵衛・上柳市郎兵衛連印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「天保二年辛卯七月廿五日雨乞願 川端村」 堅 一通 三〇二二三

乍恐御願口上書（雨乞御礼二付願狀）天保二年八月二日川端村惣年寄上柳市郎兵衛・同福田理兵衛連印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「天保二年辛卯八月二日雨乞御礼願 川端村」 堅 一通 三〇二二四

乍恐御願口上書（雨乞仕度二付願狀）天保三年七月一日川端村惣年寄上柳市郎兵衛・同福田理兵衛連印↓臨川寺様御役者中様 端裏書「天保三年辰七月十日雨乞願 川端村」 堅 一通 三〇二二五

乍恐口上書（雨乞仕度二付願狀）天保三年七月一
七日川端村惣年寄福田理兵衛・上柳市郎兵衛連印
↓臨川寺様御役者中様 端書「天保三年辰七月十七
日方來廿一日雨乞届 川端村」

乍恐御届口上書（雨乞御札二付願狀）天保三年八
月六日川端村惣年寄上柳市郎兵衛・同福田理兵衛
連印↓臨川寺様御役者中様 端書「天保三年壬辰八
月六日雨乞御札届 雨乞十八日延引 川端村」

○諸 事

乍恐奉願口上書（松山嘉兵衛名跡相統二付願狀）
寛政四年二月日 松山嘉兵衛印↓臨川寺様御役者
中様

乍恐奉願口上書（市左衛門出入差留二付大工平
兵衛願狀）寛政七年八月大工平兵衛・後見同嘉兵
衛連印↓臨川寺様御役者中様

乍恐奉願口上書（松山嘉右衛門四国巡拝願狀）
文化一五年五月願主松山嘉右衛門・同嘉兵衛連印
↓臨川寺様御役者中様 大西多右衛門・佐川藤右衛
門・西川政右衛門・笠岡源右衛門連印奥書あり

乍恐奉願口上書（松山嘉右衛門出勤願書）天
保三年閏一月願主松山嘉右衛門印↓臨川寺様御
役者中様 笠岡源右衛門・西川政右衛門・佐川藤右
衛門・大西太右衛門連印奥書あり

奉願口上書（天龍寺二二世元章和尚祠堂地四百
年忌二付地子錢免除願狀）天明五年六月白井壽
瑄印↓臨川寺御役者中

掟（臨川寺領造路町北側屋敷地白井家由緒二付
地子免許衆議掟）天明六年八月前住□睦・前住
周侶・前住□祐・前住周見・前住□玗・当住通琅連
判

奉差上ヶ御請書（救銀請取之請狀）天明七年七月
松山嘉兵衛・佐川奎右衛門・西川政右衛門・大西太
右衛門・笠岡源次郎連印↓臨川寺様御役者中様 包
紙入 包紙上書「力者中救銀五拾匁請書」

覚（表通并馬場筋衆議二付蔵光菴支配請狀）文化
七年正月 蔵光菴周价印↓臨川寺役者禪師

諸願・諸届（三合院）

一札之事（吉田栄忠抱瀬戸川畠田二直シ之願狀）
元禄二年二月二六日 吉田栄忠印↓三合院様御
納所中

一札（三合院領生田村弥次郎屋敷跡年貢下免請
狀）寛延二年極月生田村九左衛門印↓三合院様御
役人中様

奉願口上覚（薄馬場下作下免願狀）天明二年一一
月願主松山嘉兵衛印↓三合院御役者中様

乍恐奉願上未進之事（三合院年貢米未進二付米
三月迄延納願狀）文化一二年二月願主與左衛
門・証人小林利右衛門連印↓三合院様御役者中様

御請狀之事（田地年貢八年間請狀）元禄六年四月
二六日北嵯峨弥左衛門印↓三合院御納所様

御請米狀之事（田地年貢七年間請狀）元禄七年五
月三日 野路井乘益印↓三合院御物成所様

一札之事（三合院領内田地年貢請継続願狀）享
保三年九月二日北嵯峨弥左衛門印↓三合院様御
役人中様

奉願口上書（臨川寺領瀬戸川筋田地三カ年見
取年貢願狀并請狀）子（宝曆六年）九月力西川
満右衛門↓三合院様侍真様 端裏朱書「瀬戸川田
地年貢下免願」奥書「宝曆七年正月西川満右衛門
印↓侍真様」

乍恐奉願口上書（三合院領池裏村久兵衛所持畑地親類引請難決二付差上願狀）文政一三年四月小屋町親類半右衛門・築山町弥兵衛・池裏村藤助連印↓三合院様御役人中様 半 一通 一六

乍恐奉願口上書（三合院領池裏村久兵衛所持畑地親類引請難決二付差上度願許容二付請狀）文政一三年四月小屋町親類半右衛門・築山町弥兵衛・池裏村藤助連印↓三合院様御役人中様 半 一通 一七

譲り渡シ申屋敷之事（三合院并蔵光庵年貢地家屋敷永代譲渡証文）宝曆九年八月譲り主惣屋九右衛門・親類代門町ぜに屋武兵衛・同清瀧柳屋惣助・年寄善助・五人組弥右衛門・口入藤右衛門・西隣弥兵衛連印↓近江屋嘉兵衛 美繼 一通 一〇

一札（銀子借用証文）享和二年一月松皮屋与八印↓三合院様御役人中様 美切 一通 三三

借用仕銀子之事（銀子借用証文）文化四年八月臼井壽篤印↓三合院侍真様 半繼 一通 三三

乍恐奉願口上書（銀子借用証文）文化一四年一二月願主加藤壽閣印↓三合院侍真様 美 一通 三五

奉願口上書（銀子借用願狀）文政一三年六月加藤壽閣印↓三合院侍真様 美 一通 三七

差上申一札之事并拝借仕銀子之事 明和元年閏極月西川木市印↓三合院様御役者中様 半繼 一通 三七

三秀院証文銀五貫目無利息十ヶ年割済証文・引宛方丈之証文 未七月二日銀子持參 西川木市印↓三合院様御役者中様 包紙 一通 三八

乍恐奉願口上書（木挽茂助御門并高堺破損修復入用銀赦免之願狀）天明七年九月二十四日上嵯峨新在家町願主木挽茂助・御作事御出入方惣代大工市左衛門↓三合院様御役人中様 美包紙入 一通 三六

奉願口上書（三合院領生田村弥次郎屋敷跡年貢下免願狀）宝曆六年一二月生田村海老名九左衛門印↓三合院様御役人中様 美 一通 三七

奉願口上書（三合院領生田村弥次郎屋敷跡年貢七カ年下免願狀）明和八年七月海老名九左衛門印↓三合院様御役人中様 美繼 一通 三七

奉願口上書（三合院領生田村弥次郎屋敷跡年貢七カ年下免願狀）安永七年一二月生田村海老名九左衛門印↓三合院様御役人中様 美繼 一通 三七

奉願口上書（三合院領生田村弥次郎屋敷跡年貢下免願狀）寛政四年生田村海老名九左衛門印↓三合院様御役人中様 美繼 一通 三七

奉差上一札之事（三合院領生田村弥次郎屋敷跡年貢下免請狀）寛政四年一二月生田村海老名九左衛門印↓三合院様御役人中様 美繼 一通 三七

奉差上一札之事（三合院領生田村弥次郎屋敷跡年貢下免請狀）寛政一一年一〇月生田村海老名九左衛門印↓三合院様御役人中様 美繼 一通 三七

乍恐奉願口上書（田淵山木切払願狀）宝曆一四年正月日山本村惣代与助・同百姓惣代半右衛門連印↓三合院様御役人中様 堅 一通 二五

奉願口上書（領分田淵山松木切払願狀）天明六年一二月山本村寄伝左衛門・惣代半右衛門連印↓三合院様御役者中様 美包紙入 一通 二五

（加藤元長并母願狀）宝曆八年正月加藤元長印・同母↓三合院様御役者様 半繼 一通 二五

（加藤元長并母願狀）三月一九日加藤元長印・母↓三合院様御役者様 半繼 一通 二五

乍恐口上書（半之丞不埒筋二付妻とひと親子義絶の一札取替二付届狀）寅（文政一三年）九月七日加藤壽閣↓三合院様侍者様 切繼 一通 二六

奉差上一札之事（濱松屋善助人足歩料契狀）
寛政三年九月一六日 中院町浜松屋善助印↓三合院
様・藏光庵様御役者中様 美 一通 二六四

証判一札之事（借宅仕僧恵明二付妙春庵請狀）
文化四年九月 造路町妙春庵印↓乍親類家預り白井
壽篤印↓三合院侍真 美繼 一通 二七三

○槌屋嘉兵衛

三合院領年貢米之事（槌屋嘉兵衛年貢皆済狀）
宝曆二三年極月二〇日（↓中院槌屋嘉兵衛）端裏書
「高掛り十七文・国掛り廿貳文」 ※一四一、一四
三は同一包紙 奉仕上書「末年ノ御皆済沓通 古券
沓通入 槌屋嘉兵衛」 美切 包紙入 一通 二四二

三合院領年貢米之事（槌屋嘉兵衛年貢皆済狀）
明和元年二月五日（↓槌屋嘉兵衛） 美切 一通 二四三

三合院領年貢米之事（槌屋嘉兵衛年貢皆済狀）
明和二年二月二四日（↓槌屋嘉兵衛） 美切 一通 二四三

槌屋嘉兵衛借銀書類 一括 二六六

奉願上口上書（家屋敷敷地立毛引当銀子借用証
文）明和元年二月 寺領地之上上嵯峨中院町槌屋
願人嘉兵衛印↓三合院様御役人中 美繼 一通 二六六

奉拝借銀子之事（銀子借用証文）明和元年霜月
上嵯峨中院町拝借主槌屋嘉兵衛・証人鍵屋庄兵衛・
同近江や藤兵衛連印↓三合院様御役人仲様 美 一通 二六六

御断書（槌屋嘉兵衛家出居書）明和三年六月九日
上嵯峨仲院町年寄又右衛門・五人組半兵衛↓御奉行
様 美繼 一通 二六六

奉指上口上書（槌屋嘉兵衛跡入札買受之居書）
戊二〇月八日 萬屋生三郎・同七兵衛・大坂屋弥七
連印↓三合院様藏光庵様御役人中様 端裏書「上
京都古木屋共三人」 美 一通 二六六

奉差上御請書（槌屋嘉兵衛跡入札買請請狀）明
和三年一〇月一九日 御境内安堵橋町請負人弥兵衛・
町年寄七兵衛連印↓三合院様藏光役人中様 美繼 一通 二六四

奉差上証文（拝借銀返納延引願狀）明和三年一〇
月 中院町鍵屋庄兵衛・同近江屋藤兵衛連印↓三合
院様御役人中様 美繼 一通 二六五

奉差上御請書（祠堂銀年賦請狀）明和四年二月
上嵯峨中院町鍵屋庄兵衛・同所近江屋藤兵衛・同請
人鍵屋与助・同請人近江屋弥助連印↓三合院様御役
人中様 美 一通 二六六

証文之事（銀子借用証文）明和五年子正月二七日
借り主中院町鍵屋庄兵衛・伴同与助連印↓三合院様
御役人中様 堅 一通 二六七

奉拝借銀子之事（銀子借用証文并請狀）明和五年
正月二七日 借り主鍵屋庄兵衛・証人伴同与助連印
↓臨川寺様御役人中様 美繼 一通 二六八

奉拝借銀子之事（引受銀延納願狀）明和五年正月
二七日 借り主近江屋藤兵衛・証人伴同与助連印↓
臨川寺様御役人中様 美繼 一通 二六九

奉願口上書（引請銀延納願狀）明和六年一二月朔
日 嘉兵衛引負中院町近江屋藤兵衛印↓三合院様御
役人中 美 一通 二七〇

一札之事（与一日切願請狀）明和七年正月二九日
中院町鍵屋庄兵衛・同伴与助連印↓三合院御役人中
様 美切 一通 二七二

奉差上証文之事 明和七年一〇月 中院町槌屋嘉兵
衛代同町建屋庄兵衛・同町近江屋藤兵衛連印↓三合
院様御役人中様 堅 一通 二七二

舍 利
三合院法身塔舍利数控 永正一一年七月七日 妙
恵光甫和尚筆 繼 一通 二七五

弘源寺

山寄進

吉田永可知行小倉山寄進狀写 文祿四年九月二九日
吉田入道栄可・与頭清正↓本国寺御上人様包紙共 上書「遺本国寺写 常寂寺」
堅繼・美 二通 二六一

弘源寺等洋山寄進狀写 文祿五年正月一日 弘源寺等洋↓本国寺殿(日禎上人)
美 一通 二六二

弘源寺等洋山寄進狀写 慶長三年八月一〇日 弘源寺等洋↓究竟院僧正
美 一通 二六三

弘源寺等洋山寄進狀写 慶長一四年四月一九日 弘源寺等洋↓究竟院僧正
美 一通 二六四

山論

城州嵯峨毘沙門町吉田栄忠与天竜寺塔頭弘源寺山論之事
兪議之上為檢使小堀仁右衛門手代駒井忠右衛門・中野宇衛門差遣遂紀明裁許并申渡候覺
元祿一六年八月一〇日 天龍役者周甫・明泉連印
美繼 包紙入 一通 二六七

城州嵯峨毘沙門町吉田栄忠与天龍寺塔頭弘源寺山論二付場所見分吟味仕候覺
元祿一六年七月 美 一冊 二六八

弘源寺山論公訴書付留 元祿一六年四月・九月 天龍常住
美 一冊 二六九

当寺領山論公訴書付留 元祿一六年四月・九月 弘源常住
美 一冊 二七〇

弘源寺山論書類
一冊 二七一
(二通)

壳渡シ申弘源寺山之事(弘源寺領山壳渡証文写)
元祿九年七月一二日 壳主清薫・同子吉田忠兵衛・請人同栄忠・同同市左衛門↓今井玄貞様 端裏書「弘源寺山譲り狀写」
堅 一通 二七一

寄進狀(弘源寺領山寄進狀写) 元祿九年七月一五日 今井玄貞因庵・同玄恕↓弘源寺乾仲禪師文室果侍者執達
堅 一通 二七二

納弘源寺領山流地子米之事(地子米請取之留写) 元祿一〇年極月二〇日(↓吉田栄忠)
美切 一通 二七三

山本田畑數我等持来り候覺 元祿一三年一〇月 吉田栄忠↓吉田与七郎
美繼 一通 二七四

一札之事(弘源寺山地子米請狀写) 元祿一三年一二月二七日 吉田栄忠・伴同傳兵衛↓弘源寺様
美繼 一通 二七五

謹而言上(栄忠訴訟二付弘源寺口上書控) 元祿一六年六月四日 天龍寺塔頭弘源寺祐首座・代果藏主↓奉行所
美繼 一通 二七六

納弘源寺領山裾地子米之事(未進地子米請取切手請取狀) 元祿一六年八月一四日 天龍寺境内毘沙門堂町百姓栄忠・伴傳兵衛連印
美切 一通 二七七

(弘源寺山論裁判書決断之文言控) 元祿一六年八月 美 二通 二七八

一札(弘源領山論裁許二付栄忠請狀案文) 元祿一六年九月 山預り主栄忠・証人伴同・同年寄↓本所弘源寺様
堅 一通 二七九

乍恐奉願(弘源寺領山裾預り願狀) 元祿一六年九月一五日 毘沙門堂町栄忠印↓本所弘源寺様
美 六通 二八〇

(弘源寺山論裁許二付栄忠願狀) 寅八月六日 美切 一通 二八一

覺(吉田栄忠・傳兵衛不屈二付弘源寺領山裾取上之窺書) (元祿一五) 閏八月 美 五通 二八二

(弘源寺山裾山論繪図) 元禄一六年七月 下嵯峨
毘沙門町榮忠・同伴傳兵衛・天龍寺塔頭弘源寺祐首
座・果藏主 彩色 一鋪 一五三
39.5×80cm

山本源英公屋敷地圖 元禄一六年九月 天龍參暇中
収・性湛・玄怡 天龍役者性琴・祖縁・承凌連判 一鋪 一五三
44.0×62cm

山本源英公坪付繪図 彩色 一鋪 一五四
55×79cm

弘源寺山繪図 彩色 一鋪 一五五
143×113cm

弘源寺山繪図 彩色 一紙 一六六
36×51cm

弘源寺山繪図 彩色 一紙 一六七
27×39cm

弘源寺山繪図 彩色 一鋪 一六九
49×74cm

○

一札之事 (弘源寺山裾道筋預り請狀) 享保一九年
一二月 島中町半三郎印→弘源寺様御役人中 一通 一六三
美

輪聖寺兼帶

輪聖寺納下 (寛政一一文化四) 半 一冊 一七〇

東山輪聖禪寺諸般 天明三年始 (安政七年) 伊勢
国三宅村琳勝寺に弘源寺住持兼帶 半 一冊 一七二

輪聖寺八幡山一件記 (弘源寺南海記) 天保三年二
月発端 (天保六年) 半 一冊 一七六

諸願・諸届

差上申一札之事 (博打法度二付請狀) 貞享二年五
月五日 次兵衛他六名連判・連印→弘源寺様 美 一通 一七三

覚 (宗旨証文) 享保四年九月二六日 常寂寺住持・
役者春照院連印→天龍塔中弘源寺 美切包紙入一通 一七四

(宗旨証文) 享保八年九月一八日 本国寺末寺常寂
寺役者春照院・住持日延連印→弘源寺御役人中 美 一通 一七五

○

常寂寺門前道筋一件書類

乍恐奉指上口上書 (常寂寺門前道筋改二付当寺
支配人等願狀) 宝曆七年四月日 常寂寺支配任
安兵衛他三名連印→弘源寺様御役人中 美 一通 一七六
(六通) 二〇六

御願申口上之覚 (山本村傳左衛門往来妨二付常
寂寺願狀) 宝曆七年二月 常寂寺印→天龍寺御
役者中 堅 一通 一七七一

以口上奉申上候 (山本村傳左衛門門前道筋我儘
二付常寂寺願狀) 宝曆九年二月一二日 常寂寺
印→弘源寺御役人中 美繼 一通 一七九

御願申上候口上覚 (山本村傳左衛門往来妨二付
願常寂寺書) 宝曆一〇年四月日 常寂寺印→天
龍寺御役者中 堅 一通 一八〇

申渡覚 (山本村傳左衛門往来妨不相成様天龍寺
申渡書) 辰五月 天龍寺役者 山本村年寄半右衛
門・百性傳左衛門連印→常寂寺印 山本村年寄半右
衛門・百性傳左衛門連印請書 常寂寺奥書あり 美繼 一通 一八二

常寂寺道筋繪図 宝曆一〇年四月 端書「宝曆十年
庚辰五月二日常寂寺前道筋素繪図彼寺住持持参二付
写置者也」 美繼 一通 一八三

諸塔頭

勘定

○年貢米

随心院御門跡様御年貢米請取申事 寛永一四年極
月二八日 庄屋仁左衛門判→永正主様 美切 一通 一八四

蔵光庵領年貢米之事（槌屋嘉兵衛年貢皆済状）
明和二年（↓槌屋嘉兵衛）端裏書「壹文」
美切 一通 一四

永代御請申中嶋島之事（鹿王院領中嶋作職清左衛門請狀）寛永一十七年八月一九日 大米清左衛門判
↓鹿王院様御納所
美 一通 二八

下作状之事（田地下作請狀）正徳二年二月二一日 下作人五郎左衛門・請人左衛門・同人重左衛門・慶昌庵様 印部分切捨
美切 一通 三九

（中院町三文字屋権右衛門居宅年貢請狀）享保一四年八月三文字屋権右衛門印↓維北軒様御役人中
美 一通 三三

一札（上山田村中尾下地面支配預け請狀）文化九年二月中山前大納言殿家大口但馬守↓天龍寺御役者中 中山裏書印あり 包紙上書「中山家領中尾藏地免預ヶ一札」但中山大納言殿裏印
堅包紙入 一通 二六

○土地売買

永代売渡し申田地之事（妙心寺領田地永代売渡し証文）寛文二年二月二九日 売主寺戸久三郎・請人・同傳右衛門連判↓等觀院宛
美 一通 二九

御年貢米ニ相詰り本物返シニ売渡し申田地之事（隨心院門跡領田地本物返シ売渡し証文）元禄二年二月二三日 売主等觀院・弟子養藏主・請人左衛門・同伝右衛門・庄屋物集女村字右衛門連印↓物集女村五兵衛殿 印部分断裁あり
美 一通 三三

御年貢米ニ相詰り永代売渡し申田地之事（裏辻領田地永代売渡し証文）元禄二年二月二七日 売主長左衛門・請人藤右衛門・同長三郎・同忠兵衛・同半右衛門・庄屋請人市郎左衛門連印↓与兵衛殿
美 一通 二三

譲り状之事（裏辻様領田地譲り状）元禄四年一月二八日 親宗雪・庄屋仁助・市郎兵衛・弥右衛門・七兵衛・物集女村市郎兵衛連印↓養藏主
美 一通 二三

山城国葛野郡嵯峨天龍寺塔頭臨川寺文書目録 諸塔頭 絵図類

永代売渡し申敷之事（裏辻領内敷永代売渡し証文）宝永六年二月六日 うり主与左衛門・庄屋半右衛門連印↓等觀院拙翁様
半 一通 二六

本物返シ売渡し申田地之事（土御門三位領内田地本物返シ売渡し証文）享保一〇年二月 売主与兵衛・請人仁兵衛・庄屋請人↓等觀院拙翁
美 一通 三三

本物返シ売渡し申田地之事（妙法院門跡領内田地本物返シ売渡し証文）享保五年二月 売主与兵衛・請人市郎兵衛・年寄請人忠右衛門・同請人九郎兵衛・庄屋請人権右衛門・同請人重助連印↓等觀院拙翁様 庄屋請人段差あり
美 一通 三三

永代売渡し申家屋敷之事（伏見領年貢地市条通西今出川町屋敷永代売渡し証文）享保一五年二月四日 売主白屋平四郎・吹拳人篠屋甚兵衛・五人組篠屋甚兵衛・上立売通姥西町売証人小松屋治右衛門連印↓大文字屋市左衛門殿 町代早川新四郎・本間又右衛門連印與書あり
美繼 一通 三五

譲り渡申田地之事（瑞応院領畑地作式古券状皆濟相添讓狀）安永八年二月生田村譲り主利助・同加判人半次郎印↓生田九左衛門殿
美繼 一通 三五

差入一札之事（讓渡屋敷古券状二付一札）安政五年一月 木屋満左・材木屋茂八連印↓木屋治郎右衛門殿
美 一通 三七

奉差上請取（屋敷地買上代金請取証文）文久四年二月 川端村中之町木屋治郎右衛門・年寄富田屋六兵衛連印↓御上様
美 一通 一五

（八幡山下西楽寺坊主安休身元証拠写）慶安二年二月一日 仙翁寺村八幡明主助右衛門・同久兵衛・新之丞・道祐↓鹿王院様御納所中
美 一通 二四

絵 図 類

（嵯峨中諸寺院絵図）応永丙午九月 臨川住持比丘
一鋪 三

応永古絵図之写 (天龍寺塔頭絵図)	一鋪 三
勝智院旧跡指図 文祿二年十一月誌 玄佐判	一鋪 四〇
臨川寺門前寺領明細絵図	一鋪 三
葛野郡嵯峨村字天龍寺臨川寺斜面見取二百分一之図	一通 四
葛野郡嵯峨村字天龍寺慈濟院斜面見取二百分一ノ図	一通 四
葛野郡嵯峨村字天龍寺壽寧院斜面見取二百分一ノ図	一通 四
当寺境内支配所川端村濱町之内家并鹿絵図 寅九月朔日 天龍寺役人 芦河恵且↓御奉行所	一通 二九七
鷺村授林旧跡改メ控	一通 二九
(墓碑二基寸法書)	一通 三〇

山城国京都三條家文書目錄

やましろ きょうとさんじょう
山城国京都三條家文書目録解題

一、三條家文書の伝来と整理の方針

当館所蔵の三條家文書は、一九五八年度に東京の古書店から購入したもので、総点数七七点である。本文書群に関連する文書としては、昭和
二五年（一九五〇）七月に故三條実春氏が神宮文庫に献納した三條家文書三二五二点が知られている。献納される以前に東京大学において作成
された『三條家文書目録』には、次の日記（表日記、請求番号一九一九）四〇冊を載せている。

1、明治二年四月一六日	～	十二月七日	一冊
2、同 一四年一月	～	十二月	二冊
3、同 一六年一月	～	六月二七日	一冊
4、同 一七年一月	～	同 一八年十二月	四冊
5、同 二〇年一月	～	同 二二年十二月	六冊
6、同 二四年一月	～	同 四四年十二月	二三冊
7、大正二年六月	～	同 三年三月	二冊
8、大正一五年一〇月	～	昭和二年九月	一冊

当館所蔵分には、明治四五年一月から大正二年三月、大正三年三月一六日から大正一二年中までの日記（表日記）一六冊があり、神宮文庫本

のちょうど欠年分にあたっている。したがって、当館所蔵三條家文書は、神宮文庫所蔵の三條家文書と本来同一の文書群であったと考えられる。次に、国立国会図書館憲政資料室に所蔵されている三條家文書四二九九点がある。これは、一九五〇年に三條家より国立国会図書館に譲渡されたもので、書翰を除いた文書については『三條家文書目録』一（書類の部、憲政資料目録第九）が刊行されている。内容的には三條実万・実美父子の幕末維新时期から明治二〇年代までの政治関係の文書が中心であるが、「元文元年改元日記」をはじめとする江戸期の文書も一部に含まれている。残る書翰類と三條家文書の家政文書は、『三條家文書目録』二（書翰の部、憲政資料目録第一三）が刊行されている。

このほかに、東京大学総合図書館には、三條公爵家本として七二五一冊が保管されており、宮内庁書陵部にも三條家本を伝存している。当館所蔵文書が三條家の所蔵を離れた経緯などは詳らかにしないが、右の関連文書のあり方からみれば、当館所蔵文書は三條家文書のきわめて部分的な文書ということになる。

当館所蔵三條家文書は、一九五八年度に受け入れて以降、表題と年号のみを記した史料仮目録Bによって閲覧に供してきた。今回、一点ごとの細目録を刊行するにあたり、史料仮目録Bで付与されていた仮整理番号（一番から二五番まで）は活かし、これまで未整理であった史料には新たな番号（二六番から五〇番）を付与した。形態は、半紙判は半、美濃判は美とし、それより大判は豎とした。各料紙を横折りした書冊を横、さらにそれを半分にした書冊を横（豎・美・半）半、各書冊を綴ったものを綴とした。野紙は野と表記した。数量は、書付型文書は通、書冊型文書は冊とした。

史料の整理・分類編成においては、史料群の有する階層構造に基づいた編成となるよう心がけたが、本文書群のみの分析からでは三條家の組織構造の断片を提示したに過ぎない。その点をご了承いただきたい。

二、三條家の歴史

三條家は藤原北家道長の叔父閑院公季の子孫で、閑院家嫡流にあたる。白河・鳥羽院政期には外戚として権勢をふるい、六代実行が累進して

従一位太政大臣に昇り、その殿第の一つであった三條高倉第にちなんで三條を号したことから、三條の家号が定まった。以後、代々清華七家の一つとして納言・大臣に進み、笛を家業とした。庶流には、西園寺・徳大寺・姉小路・正親町三條・滋野井家などがあり、特に正親町三條家（公氏流）と区別するために、嫡流家を転法輪三條とも称した。平安末期・鎌倉前期には『愚昧記』を記した実房（一一四七―一二三五）が出て、公事・政理に通ずる公卿として重用された。南北朝後期には『後愚昧記』を記した公忠（一二三四―一三八三）が出た。

江戸期の家祿は四七・二石余で、紀伊郡中嶋村二〇〇石、同郡吉祥院村約二〇石、乙訓郡今里村五〇石、久世郡上津屋村二〇〇石に領地を得た。ことに幕末・維新期には、実万（一八〇二―一八五九）・実美（一八三七―一八九一）父子が攘夷派の公卿として活躍した。実万は内大臣公修の第二子として生まれ、天保二年（一八三一）に議奏、嘉永元年（一八四八）に武家伝奏、安政四年（一八五七）五月に内大臣に進んだ。翌五年、日米修好通商条約の勅許問題や將軍継嗣問題をめぐって幕府との対立を深め、安政の大獄で幕府の圧迫を受けて出家した。実美は実万の第四子として生まれ、安政元年（一八五四）に兄公睦の死去により家督を継いだ。文久三年（一八六三）の八・一八の政変により七卿都落ちとなった。慶応三年（一八六七）一二月の王政復古により、帰京すると議定になり、翌明治元年には副総裁となり、功績により永世祿五千石を与えられた。明治二年（一八六九）右大臣、同四年太政大臣に進み、内閣制度発足まで明治政府の首班として活躍した。内閣制度創設後は内大臣となり、一時総理大臣も兼任した。明治一七年公爵に叙せられ、同二十四年二月一八日に病死、護国寺（東京都文京区）に国葬された。

公美は明治一五年一月に別家して華族に列せられ、同一七年七月男爵に叙せられ、同一九年より東三條と改姓したが、同年一〇月に本家に復して嗣子となったため、甥の実敏（公美の養兄公恭の二男）が東三條家を継承した。大正三年（一九一四）公美の死去により、二男実憲が家督を相続したが、同一三年実憲も二三才で早世した。そこで、実美の三男公輝が明治二五年二月に分家して男爵となっていたのを本家に復し、公輝は大正一三年五月に家督を継いだ。

江戸期の三條家の住居は、禁裏の東側、梨木町西側（現京都御所御苑内）にあった。「増補再板 京大絵図」（『新撰京都叢書』第一一巻下、古地図集、6）には「転法輪殿」とあり、「新改内裏之図」（同）には「転法輪」とあり、そこから西側に一筋隔てたところに「転法輪隠居」屋敷がみえる。「明治元年京大絵図」（史料番号二二六・二 M3）にも同じ所に「転法輪」屋敷が描かれているので、江戸期を通じて同地に居住した

ようである。明治期以降の三條家の住居は、実美は東京府第三大区永田町一丁目二番地を邸宅とし、明治二四年に公美が家督相続した際には、麻布区麻布鳥居坂町一番地に居を移した。大正期には赤坂区青山南町六丁目九七番地に屋敷があつた。

三、三條家文書の性格と階層構造

本文書群の総点数は七七点で、延享二年（一七四五）の「目次」（史料番号二六）がもっとも古く、大正九年（一九二〇）から昭和一九年（一九四四）にかけての三條家の会計記録綴である「議案」（史料番号五〇）が史料年限の下限である。史料総点数はわずかであるが、江戸中期から昭和まで長期にわたる史料を伝存している。その中心となるのは、三條家の家政に関するものであるが、明治元年（一八六八）以降、三條家が東京に居を移してからは同家の家政機構も改変されるため、大項目として採用した「家政」については、江戸期と明治期以降に分けて編成した。

家政（江戸期） 中項目には、「日記」、「幕末風聞」、「家内儀礼」、「財政」を立てた。以上合わせても一九件なので、「家領」、「家財」、「勘定」の小項目を立てた。「日記」は、実顕、季晴、実起の三代にわたる当主日記が断片的に残っている。内容的には禁中に関わる記事が多く見られる。

家政（明治期以降） ここには、三條家の家政組織によって作成・授受された文書を収めた。三條家の家政組織の構造は、明治一年の「内事記録」（史料番号一四一三）によれば、家長（当主）の下に置かれた家扶一名が、家政事務、内外の応接、会計、家従以下の雇任の監督の四つを職掌し、例規のない重大事はすべて家長の命令を受けた後に処理することを定めている。家扶の下には家従数名が置かれ、その内二名は会計担当で、会計課章程を詳記した。ほかに、家従試補がおり、受付・宿直などを担当している。明治一五年にはさらに家政改革があり、その家憲によれば、これまで家従が担当していた家中一切の用度を担当する会計掛を新たに設け、家従は分番・宿直および内外の庶務に従事するよう定められ、会計掛と家従との明確な役割分担がなされている。

右のような家政組織から、中項目には「家憲」、「家扶」、「会計掛・家従」を立てた。「家扶」には、南町三條邸（青山南町）における内外の応

接記録である「表日記」を小項目に立てた。「会計掛」と「家従」は本来は別項目とするべきだが、文書点数が少ないため煩雑になることを避けて統一して扱い、小項目に「会計記録」、「日記（会計所）」、「議案」、「内事記録」を立てた。「内事記録」は三條家の出産、死亡、家司の雇入など、三條家全般に関わる人事記録であり、「家扶」の職掌とも考えられるが、表紙に「会計所」と記した文書（史料番号一四）があるため、とりあえずこの項目に入れた。今後の検討をまちたい。

戸籍・官員録 戸籍は、「秘書」（史料番号四九）と表題のある簿冊一冊があり、東京市麻布区戸籍役場の発行する戸籍謄本がイロハ順に綴じられている。井上馨、池田輝知といった「華族」の名が多いが、中には「平民」の戸籍も含まれており、明治四〇年代に出生した者の戸籍もある。巻末に大正八年三月付の東三條実敏の履歴書（押印あり）を載せている。また、官員録は、「元民部省官員」の名簿（史料番号六）で、大蔵省昇紙の略綴りである。いずれも、本文書群のなかに伝存している経緯などは不詳であるが、便宜上ここに収めた。

文芸・諸芸 三條家は装束・笙の家として知られるが、そうした家職に関わる文書は本文書群の中に含まれていない。「池の藻屑」第一（史料番号二二）は、後柏原院・後光嚴院の伝記で、安永三年（一七七四）九月に平安長門介三善彦明の撰を明治一七年に近藤瓶城が杉園氏蔵本を原稿用紙に墨写したもので、仮綴六冊がある。

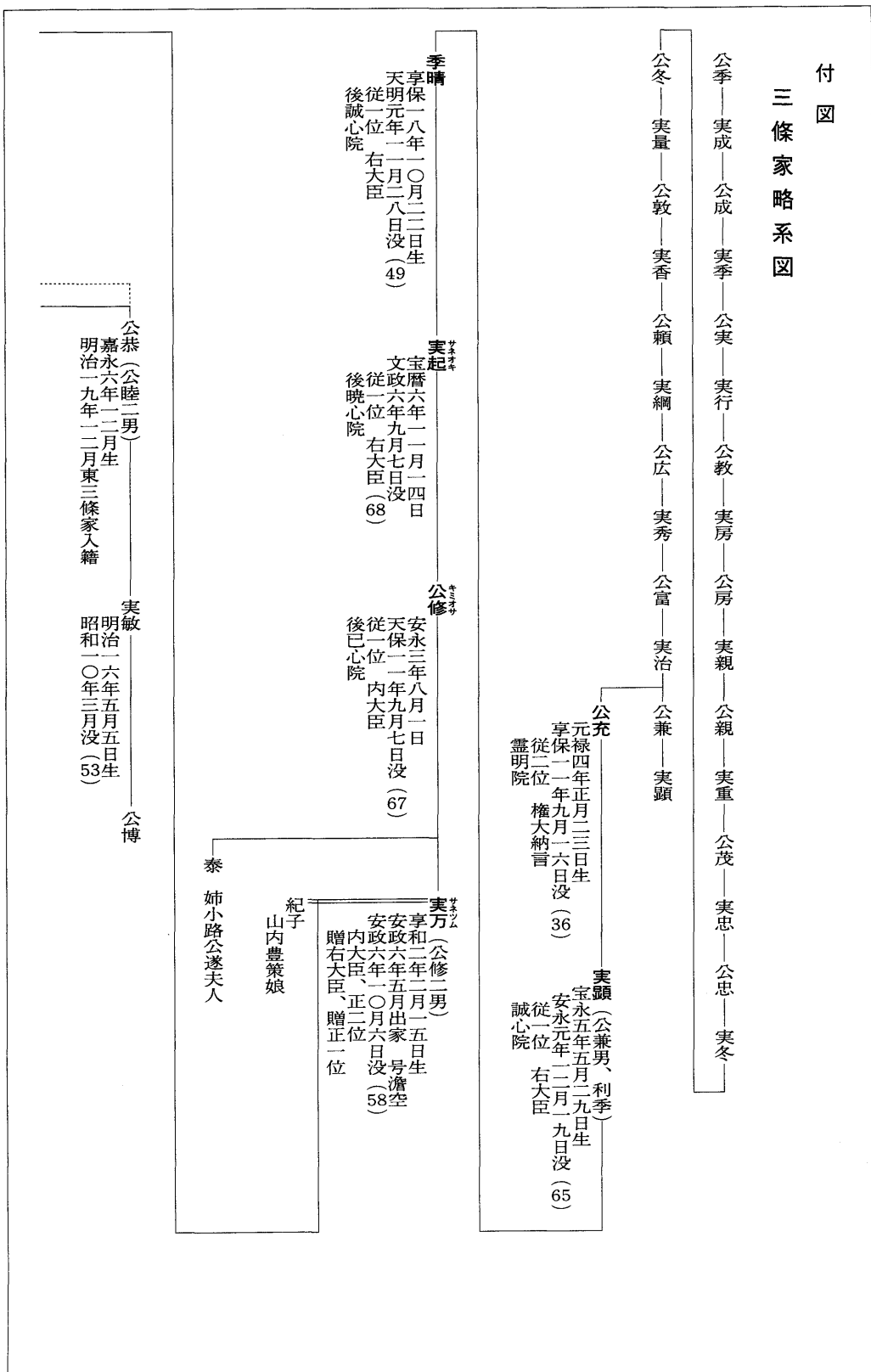
勤仕 江戸期に三條家が上卿をつとめた関係で、甲斐国都留郡上吉田村富士浅間社御師渡辺氏宛の神道裁許状、および関行篤宛の宣旨案・位記などがある。

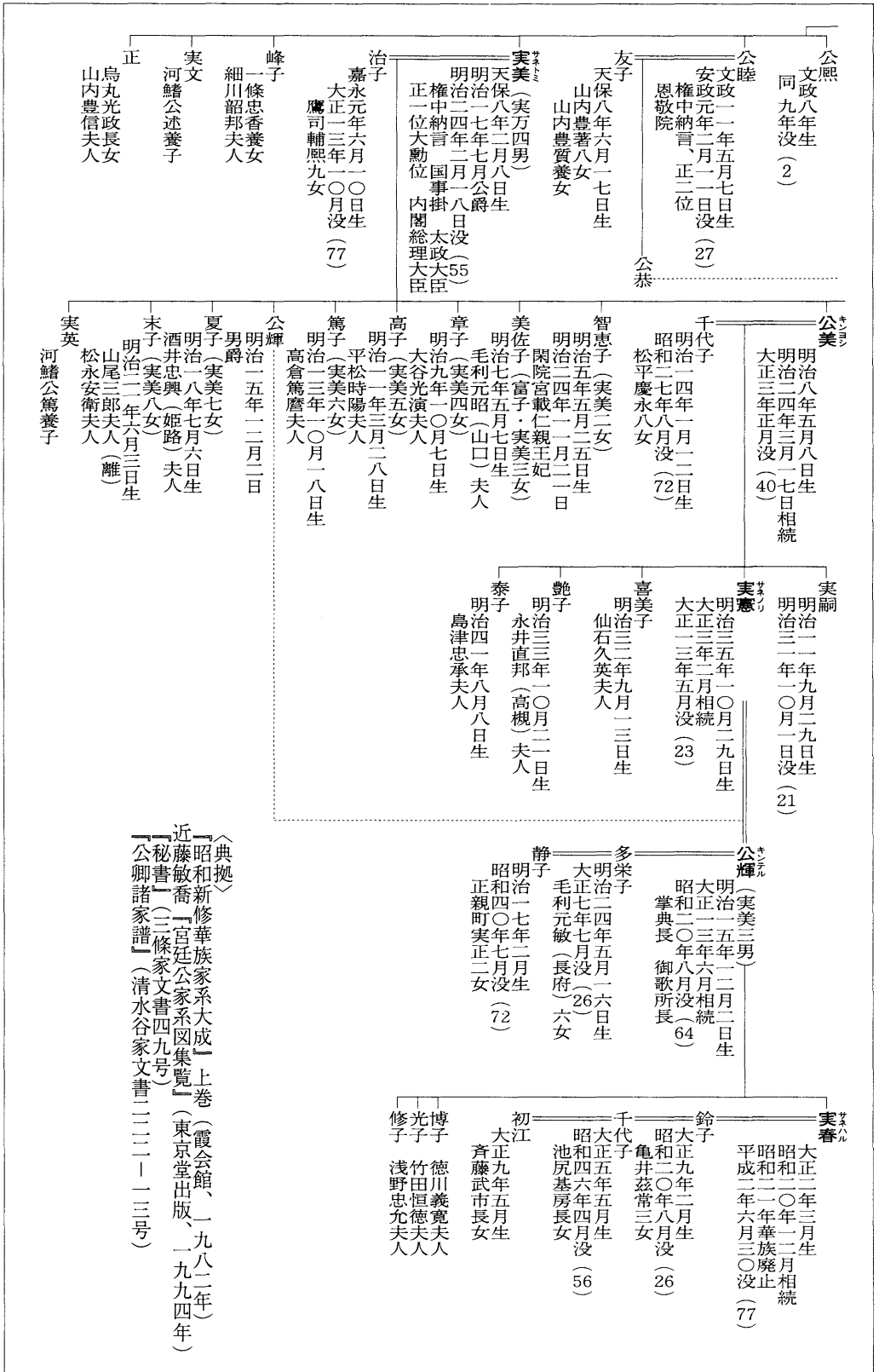
参考文献

- 【三條家文書目録】（東京大学史料編纂所蔵、請求番号六一〇〇・一一・一一六）
- 【三條家文書目録】一 書類の部（憲政資料目録 第九、一九七三年、国立国会図書館編）
- 【三條家文書目録】二 書翰の部（憲政資料目録 第二三、一九八二年、国立国会図書館編）

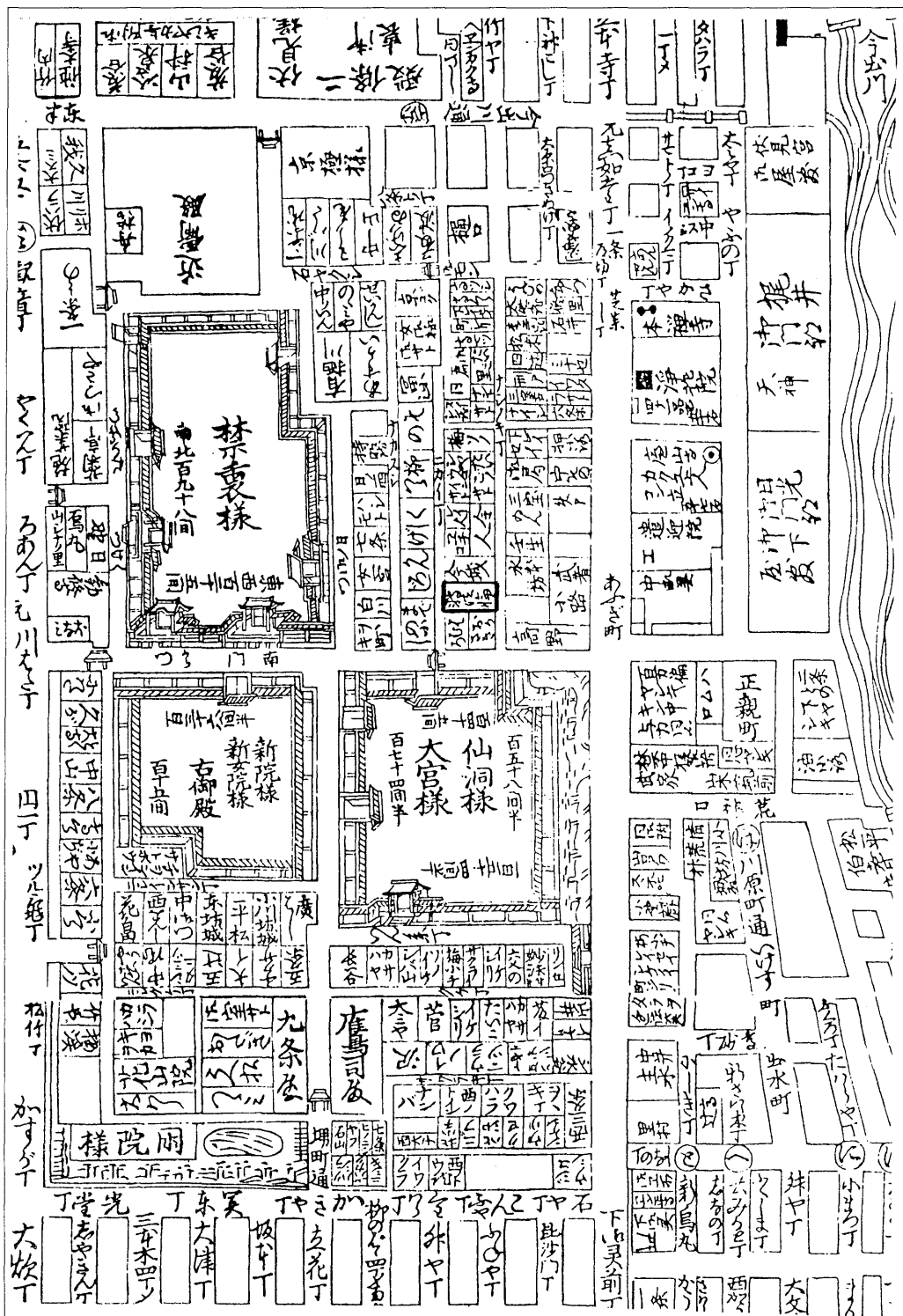
付 図

三條家略系図





〔典拠〕
『昭和新修華族家系大成』上卷(霞会館、一九八二年)
近藤敏喬『宮廷公家系図集覧』(東京堂出版、一九九四年)
『秘書』(三條家文書四九号)
『公卿諸家譜』(清水谷家文書二二一—二三号)



出典：「増補再板京大絵図乾」（『新撰京都叢書』第11巻下古地図集6）より一部転載
 註：延享3年（1746）版。中央に「転法輪」とある。

山城国京都三條家文書目録 目次

家政（江戸期）	頁
日記	七
幕末風聞	七
家内儀礼	七
財政	七
家領 家財 勘定	七
家政（明治以降）	七
家憲	七
家扶	七
表日記	七
會計掛・家従	七
會計記録 日記 議案 内事記録	七
戸籍・官員録	七
文芸・諸芸	七
勤仕	七
儀式	七
裁許狀・免許狀 口宣案・位記 名簿	七

山城国京都三條家文書目録

(文書番号 33 S)

家政(江戸期)

日記

日次	延享二年一〇月	形態	数量	番号
御日次	寛延四年正月〜三月一九日	横堅	一冊	二六
御日次	(寛延四年) 三月二〇日〜六月二二日	横堅半	一冊	二七一
御日次	宝暦八年八月	横半半	一冊	二六
御日次	宝暦一〇年正月〜八月	横半半綴	一冊	二五
御日次	宝暦一二年閏四月〜七月	横美半	一冊	二〇
御日次	天明八年正月〜二月迄	横美半	一冊	三
御日次	天明九年正月〜二月迄	横美半	一冊	三
御日次	寛政二年正月〜二月	横美半	一冊	三

幕末風聞

難波異変記	(天保八年)	沼田学舎蔵書印あり	写本半	一冊	七
合衆国書翰和解	蜂屋扣		美	一冊	一九
合衆国伯理璽天德書翰和解	蜂屋扣		美	一冊	二〇
俄羅斯書翰和解			美	一冊	三

家内儀礼

(献立留) (文化四〜一四年)

財政

○家領

転法輪様御家領 田畑地高扣 嘉永五年二月
伏見茶屋六兵衛方村方江引請之分

○家財

御道具名目帳(御納戸御帳ニ請取印相済申分)

○勘定

御勘定書	文化六年七月五〜二月迄	桜御殿	半	一冊	一
御勘定書	文化八年正月五〜二月迄	桜御殿	半	一冊	二
山城大和河内借財口々取調	(慶応二年五)		美	一冊	五

家政(明治以降)

家憲

(家僚沙汰書并家憲)	(明治一五年)	美	一冊	七
家僚規則案	明治一七年一〇月	綴	一冊	八

家憲 明治二十四年

(家憲案) (明治二十四年)

(家憲案)

家 扶

○表 日記

(表日記) 明治四五年一月〜大正二年三月一日迄

(日誌) 大正三年三月一六日〜同二月末日迄

(表日記) 大正四年一月〜同五年一月一日迄

御日誌 大正四年九月〜同六年七月三一日迄

日記 大正五年一月〜六月迄

(表日記) 大正五年中

御日誌 大正六年八月〜大正七年一月三〇日迄

三條家朱印

日記(表日記) 大正七年一月〜二月迄 三條家表

御日誌 大正七年二月〜大正九年七月二一日迄

三條家

日記(表日記) 大正八年一月〜二月 三條家

日誌 大正九年七月二二日〜同一年八月二八日迄

南町三條家朱印

日記(表日記) 大正九年中 三條家

日記 大正一〇年七月〜九月一日 三條家 水損に付

開閉難

野 一冊 九

野綴 一冊 元

野 一冊 五

野 革装 一冊 三五

野 革装 一冊 三六

野 革装 一冊 三七

野 一冊 三三

野 一冊 三四

野 革装 一冊 三八

野 一冊 三四

野 一冊 三十五

野 一冊 三五

野 一冊 三三

野 一冊 三九

野 一冊 三四

野 一冊 三一

日誌 大正一〇年八月二九日〜大正一一年六月一〇日迄 三條家朱印

日記 大正一一年一月〜同二年八月

日記 大正一一年中 三條家

日記(表日記) 大正一二年中 三條家

(日記) 昭和三年一〇月一日〜同四年九月二二日迄

會計掛・家從

○會計記錄

御經濟向録事 明治一一年六月 三條家

(御經濟録事) (明治一二年二月〜同三年二月)

御財産簿 明治一七年六月

御財産表 明治一七年一〇月 三條家

公帳修正案 明治二十四年四月 公爵三條公美他五名

○日記(會計所)

日記 明治三二年九月〜 會計所 水損開閉不可

日記 明治三三年一月〜同三五年二月迄 會計所

日記 明治三六年一〇月〜明治三八年二月迄 會計所

日記 明治四一年一月〜同四二年二月迄 (會計所)

○議 案

議案 (大正二年〜昭和一九年)

野 一冊 三二〇

野 一冊 三二二

野 一冊 三二三

野 一冊 三二六

野 一冊 三二三

野 一冊 二〇

野 一冊 二四

前欠野 一冊 二

美 一冊 二

野 一冊 三

野 一冊 三

野 一冊 三

野 一冊 三

野 一冊 三二

野 一冊 三二

野 一冊 三三

野 一冊 三一

簿 一冊 五

○内事記録

内事記録	明治一、一、一四年	會計所	野	一冊	一四一
内事記録	明治一四年	明治二四年二月一八日迄	野革装	一冊	一四二
内事記録	明治二四年三月	(明治四四年)	野革装	一冊	一四三

○

(戸籍簿)	野革装	一冊	一五
-------	-----	----	----

戸籍・官員録

秘書(戸籍)	簿	一冊	呪
元民部省官員	野紙(大藏省)	一冊	六

文芸・諸芸

慶長五年庚子九月関ヶ原合戦備書	半	一冊	六
明治三五年六月二七日写	江馬春齋	今西龍	
池の藻屑	原稿用紙	六冊	三
	仮綴		

勤仕

儀式

○裁許状・免許状

甲斐国都留郡上吉田村富士浅間社祝師渡辺丹後	堅	一通	四
掾定勝神道裁許状写			
享保四年四月二九日卜			
部朝臣兼敬			

甲斐国都留郡上吉田村富士浅間社祝師渡辺丹後	堅	一通	四
守定女神道裁許状写			
宝曆一二年二月二二日			
卜部朝臣兼雄			

甲斐国都留郡上吉田村富士浅間社御師源清久神	堅	一通	四
道裁許状			
寛政二二年二月一九日卜部朝臣(花押)			

甲斐国都留郡上吉田村富士浅間社御師渡辺丹後	堅	一通	四
頭清久神道裁許状			
寛政二二年二月一九日卜部朝臣良連(朱印)			

神道裁許状	寛政二二年二月一九日	卜部朝臣(朱印)	前後欠
贈權大僧都法印免許状写	文政五年三月一〇日		
○口宣案・位記			

藤原行篤任出雲守口宣案	上卿三條大納言	後欠	宿紙
藤原行篤叙從五位下口宣案	嘉永七年九月一五日		宿紙
上卿三條大納言	職事藤原右少辨豊房		

藤原行篤任和泉守口宣案	嘉永七年九月一五日		宿紙
上卿三條大納言	職事藤原右少辨豊房		
藤原行篤任和泉守口宣案	嘉永七年九月一五日		宿紙
上卿三條大納言	職事藤原右少辨豊房		

関出雲守藤原行篤從五位下諸大夫成御官物之事	嘉永七年一〇月	東坊城前大納言殿家三上信濃介・井上主税・三條大納言殿家丹波豊前守・森寺因幡守連印	大杉重藏殿・越川万喜太殿・水野小八郎殿
関出雲守様從五位下諸大夫成御官物銀之注文	嘉永七年一〇月	御官物御用掛屋平野屋次兵衛印	三條大納言様御家森寺因幡守殿・東坊城前大納言様御内井上主税殿・三上信濃介殿
○名簿			

関出雲守様從五位下諸大夫成御官物銀之注文	嘉永七年一〇月	御官物御用掛屋平野屋次兵衛印	三條大納言様御家森寺因幡守殿・東坊城前大納言様御内井上主税殿・三上信濃介殿
○名簿			

関出雲守様從五位下諸大夫成御官物銀之注文	嘉永七年一〇月	御官物御用掛屋平野屋次兵衛印	三條大納言様御家森寺因幡守殿・東坊城前大納言様御内井上主税殿・三上信濃介殿
○名簿			

関出雲守様從五位下諸大夫成御官物銀之注文	嘉永七年一〇月	御官物御用掛屋平野屋次兵衛印	三條大納言様御家森寺因幡守殿・東坊城前大納言様御内井上主税殿・三上信濃介殿
○名簿			

関出雲守様從五位下諸大夫成御官物銀之注文	嘉永七年一〇月	御官物御用掛屋平野屋次兵衛印	三條大納言様御家森寺因幡守殿・東坊城前大納言様御内井上主税殿・三上信濃介殿
○名簿			

関出雲守様從五位下諸大夫成御官物銀之注文	嘉永七年一〇月	御官物御用掛屋平野屋次兵衛印	三條大納言様御家森寺因幡守殿・東坊城前大納言様御内井上主税殿・三上信濃介殿
○名簿			

関出雲守様從五位下諸大夫成御官物銀之注文	嘉永七年一〇月	御官物御用掛屋平野屋次兵衛印	三條大納言様御家森寺因幡守殿・東坊城前大納言様御内井上主税殿・三上信濃介殿
○名簿			

山城国京都清水谷家文書目錄

やましろ きょうとしみずだに
山城国京都清水谷家文書目録解題

一、清水谷家文書の伝来と整理の方針

清水谷家文書は、当館が一九五一年度に東京の古書店から購入したもので、総点数八〇九点である。本文書群に関連する史料としては、現在国立国会図書館憲政資料室が所蔵している「清水谷公考関係文書」がある。内容は、公考（一八四五―一八八二）の箱館裁判所総督時代の文書・記録類で、父公正（一八〇九―一八八三）が整理した「清水谷公考履歴資料」や公考の日記、書簡控などがある（杉谷昭「清水谷公考関係文書」）。これらの文書に関しては、昭和四年（一九二九）四月に東京大学史料編纂所が清水谷実英氏（東京府下淀橋柏木五三番地）の所蔵原本を書写しており、それらの書写本は維新史料引継本に収められている（請求番号Ⅱは・一六〇）。

当館所蔵文書が清水谷家の所蔵を離れた経緯については、現在では明らかにしない。当館では受け入れ以後に、表題と点数を記した仮整理目録Bにより閲覧に供してきた。本文書群はその仮整理の段階で、ある程度の主題別分類がなされており、受け入れの際の現状がどのようなものであったかよくわからない。後述するように、本文書群は古代・中世の古記録の書写本や江戸時代の有職故実書が中心で、数代にわたって清水谷家の蔵書としての機能のもとに維持・保管されたものである。それとともに、これらの蔵書は時々の当主が禁裏役を勤めるにあたり、必要に応じてくりかえし利用された形跡が見られる。つまり、こうした連綿とつながる公家の家の歴史の長さは文書秩序にも反映しており、文書群の有する内的秩序は、当主の代替わりごとに副次的機能を付加されながら再生産されていった。この点は、公家文書の一つの特色といえることができる。

くりかえし再生産される文書秩序のなかで、どの断面を切り取って文書秩序を再構成するかを判断するためには、現状（現秩序）の中に手がかりを求めるのが良策であるが、本文書群のように第三者によって現状に何らかの変更が加えられている場合には、その手がかりを得ることは

難しくなる。史料の整理・分類においては、史料群を発生させた組織体の機能に基づき、史料群の有する階層構造を反映した編成となるよう心がけたが、一部に仮整理の段階における分類を踏襲せざるを得なかった。

また、本文書群のなかには、書写本の奥書や蔵書印などによって書写本の作成者が判明するものが一部にはあるが、書写時期・書写者など書誌的に不明なものが多い。『国書総目録』に見えない書名もあり、今後の研究の進展に委ねるしかない。したがって、本目録においては文書を発生させた個人および組織、いわゆる作成主体を十分に確定するにはいたっていない。文書群を概観した限りでは清水谷実揖さねおきの与えた影響が大きいのではないと思われるが、実揖の活動そのものが十全に明らかでないため、今後の課題とせざるをえなかった点をご了承いただきたい。

次に、本文書群には、清水谷家以外のものと思われる出所の不明な文書が混在している。公家文書における他家文書の混入については、当館所蔵久世家文書（『史料館所蔵目録』第三一集）においても、六條家、梅小路家などの文書の混入が見られる。本文書においても、そうした他家文書の混入ではないかと思われる文書についてはできるだけ出所の確定に努力したが、時間的制約などもあり特定できた今出川家のもののみを他家文書として扱い、その他のものは清水谷家の中に収めている。利用にあたっては、この点に注意してほしい。

今回、文書一点ごとの細目録を作成するにあたり、仮整理段階で付与された番号を活かしている。ただし、仮整理目録Bに記された番号と史料に貼付されたラベルの仮整理番号とがズレているところが一部にある。今回の整理にあたっては、史料ラベルの番号を優先したので、これまでの利用者においてはその点に注意されたい。また、本文書群には多くの丁間史料があり、それらは枝番号を与えてできるだけ目録に載せるように心がけた。ただし、一部の煩雑なものは丁間史料の有無を記載するにとどめた。書写奥書についてもすべてを目録に載せることは難しかったので、摘記するにとどめざるをえなかった。

本文書群の大部分は書冊型文書であり、当館の形態表記の通例にしたがい、美大・美・半・小本・横美（半）半・豎美（半）半と表記した。和歌書の一部には列帖綴がある。表紙を持たない仮綴本が多く見られたが、それらは仮と表記した。書付型文書はそれほど点数が多くないが、料紙の大きさに基づき、美・半、切、切継と表記し、奉書紙など美濃判より大判の料紙を用いたものは豎、それらを横折したものを折と表記した。したがって、美・半には書付型文書と書冊型文書の二系統があることになるが、それらの点数表記（通・冊）の違いにより区別できるよう

にしている。蔵書印についてはその特長を示したが、多出する「清水谷家珍藏」の朱方印のみ蔵書印1と表記している。

二、清水谷家の歴史

清水谷家は、藤原北家閑院宮流、西園寺家庶流の堂上である。鎌倉時代初期に太政大臣西園寺公経の次男実有を祖に立てられた。はじめ一条、または大宮とも称した。実有以後の系図は後掲の通りである。戦国期の公松の代に一時中絶するが、近世初頭に閑院宮一流の権大納言阿野実顕の弟忠定（後に実任）が再興した。近世の家格は羽林家で、左近衛少将、参議、権中納言と昇進し、権大納言を極官とした。また、小番詰、内々小番、小御所奉行などの朝廷の役職に就任するとともに、さまざまな臨時御用を勤めた。家禄は二〇〇石で、知行村は葛野郡上桂村一〇〇石、同郡岡村二五石、乙訓郡上馬場村七三石余、同郡植野村〇・二石であった。寛文五年（一六六五）の朱印改では次のようになっている。

山城国葛野郡上桂村内百石、岡村内貳拾五石八斗余、乙訓郡馬場村内七拾三石九斗余、上植野村内貳斗余、都合貳百石事、如前々弥了掌不可有相違者也、仍如件

寛文五年十一月三日

御朱印

清水谷中将（公栄）とのへ

（当館所蔵「寛文朱印留」）

清水谷家の歴代年譜については、後掲の通りである。清水谷家の家職は書道で、代々能書をもって朝廷に仕えた。清水谷家は養子を取ることが多く、公栄、実業が三條西家から養子に入った関係で、家職ではないが代々和歌に堪能であり、本文書群のなかにも和歌に関する史料が多い。江戸中期には、実業が霊元上皇の寵臣として元禄六年（一六九三）に議奏に就任したが、翌年には幕府の意向により議奏を免ぜられた（久保貴子「元禄期の朝廷」）。清水谷家からは実業以外に議奏に就くものは出なかった。江戸後期には、実揖（一七八二—一八四八）が徳大寺家から異例の異姓養子によって清水谷家を継ぎ、文政十一年（一八二八）六月から天保十三年（一八四二）九月まで賀茂社伝奏をつとめ、天保六年には一六年間の小番精勤を褒賞され、同一二年に小番役を免ぜられた。幕末期には、公考（一八四五—一八八二）が戊辰戦争で功があり、明治元年（一八六七）

に箱館府知事となり、同二年賞典禄二五〇石を与えられ、蝦夷开拓使次官をつとめ、明治一七年（一八八四）華族令の制定に際し、公考の弟実英が伯爵に叙せられた。

清水谷家の居宅は禁裏の東側の公家衆屋敷の並びにあり、元禄一三年（一七〇〇）の「改正御公家当鑑」には「中筋東側中程」とあり、宝暦一二年（一七六二）の「懷玉雲上要覧」には「新在家御門内下ル東側」とあり、天保一五年（一八四四）の「年々改正袖中雲上便覧」には「蛤御門内下ル東側」とある。

三、清水谷家文書の性格と階層構造

清水谷家の組織 本文書群の年代は古記録を多く伝来していることから、内容年代では古代・中世に遡る。嘉元二年（一三〇三）の書写奥書をもつ「百練抄」などの古い写本が一部にあるが、書写本の多くは江戸時代の歴代当主によって書写されたものである。また、文書群の年代の下限は、後述する「記録年表」が明治一三年（一八八〇）までを記載しているが、実質的な内容をもつ文書は明治元年までである。幕末・維新期に活躍した公考関係では、万延二年に（一八六一）に綾小路按察前大納言本の「楽目録八十七曲」を書写したもの（史料番号二六七）と、文久二年（一八六二）に徳大寺実則本の「十二月花鳥和歌書牋」（二八四）を書写した二点が確認できるだけで、公考の公職関係の文書は一切含まれていない。つまり、本文書群は清水谷家が近世初頭に再興されて以降、江戸期全般を通じて清水谷家の諸機能により、作成、授受、保管された文書群といえることができる。

ここでいう清水谷家とは、清水谷家の当主とその血縁家族による狭義の家を中核として、堂上清水谷家を支える家臣（家来・家司）によって構成される組織のことを意味している。江戸期の清水谷家の家臣組織についてはよくわからないが、羽林家の家臣は、無位・無官の雑掌・用人・近習・青士（侍）の士分以上（家士）と、小頭・中番・下僕の士分以下によって構成されていたので（箱石大「近世堂上家臣の編成形態について」、清水谷家も羽林家の家格に規定されて右のような家臣組織を備えていたものと思われる。これらの家組織を基盤として、清水谷家は様々

な禁裏役を勤めていた。したがって、本文書群を文書が有する組織・機構を類別する単位に分類すれば、

① 清水谷家の狭義の家組織の機能に基づいて作成、授受、保管された文書群

② 清水谷家の家臣組織の機能に基づいて作成、授受、保管された文書群

③ 清水谷家の公的な役職組織に関わって作成、授受、保管された文書群

といった三つのサブ・グループレベルが考えられよう。目録編成上において、①は「清水谷家」、②は「清水谷家家臣」、③は「家職」の大項目に対応している。以下では、各組織の機能により類別する単位であるシリーズレベルの項目について説明するが、くりかえし述べるように、公家の文書の場合はその家の歴史の長さから、当主の代替りごとに固有の文書秩序を有しており、作成された当時は記録としての性格を有していても、それが相伝されるなかで先例・儀礼の故実書としての機能を付加されていく。それ故、史料を記録として位置づけるか、有職故実書として位置づけるか判断に迷うものが多かった。その点をご理解いただきたい。

清水谷家 江戸時代の公家は將軍から知行を与えられ、家格に応じたさまざまな禁裏役を勤めていた。本文書群のなかには、清水谷家の経営の基盤である家禄や知行地に関する文書、経営・財政文書、家格を保証する叙位任官文書、あるいは系図・家譜、冠婚葬祭に関わる文書などは一切含まれていない。つまり、「清水谷家」というサブ・グループ文書群が本文書群全体に占める割合は極めて低いといわざるをえない。

小項目には、「日記」「古記録」「家記」の三項目を立てた。「日記」は、歴代当主の日記である。公家は儀式に臨むために、父祖の残した日記を故実・先例の典拠とした。そのため、当主日記は当主個人の書写活動の所産であっても、それが相伝されていくなかで有職故実の教科書としての二次的な機能を付加されていく。公家の日記はこうした二重の機能を有している点に留意し、それを目録編成上に反映させる場合、そのどちらの機能を重視するかで位置づけも変わってくる。ここでは前者、個人の活動の所産としての機能を優先させた。すなわち、当主日記の作成主体に出所を求め、「清水谷家」の中に配列することにした。

本文書群の当主日記は、実業、雅季、実業期のものが断片的にしか伝存しておらず、その散逸が惜しまれる。実業の日記は一点のみだが、これは彼が議奏に就任した元禄六年（一六九三）九月一二日から、辞職する翌年四月六日にわたる自筆日記である。雅季（一六八四―一七四七）の

自筆日記は、三冊ある。実栄（一七二二—一七七七）の自筆日記は、寛延二年（一七四九）一〇月から二月までの三ヶ月間の日記一冊であるが、他の日記と比べて一日の記載内容が多いのが特徴である。

こうした当主の日記を中核に、公家の家ではできるだけ多くの日記・記録類を集積するよう努めている。これらを「古記録」という中項目でまとめた。文書群のなかには書籍目録が二冊ある。まず「倭書目録」（史料番号三四）は、神書・記録・歌書・軍書・弓馬故実・書冊書札・雑書・物語の書名目録で、本奥書によれば享保一八年（一七三三）に怡顔齋が作成した蔵書目録であるという。書写奥書を欠くのでこれ以上の検討はできないが、管見の限り本文書群との関連性を見いだすことはできない。次に「記録年表」（史料番号四七）は表表紙の左下に「清水谷家珍藏」の蔵書印（朱方印・蔵書印一）が押印されている。寛平元年（八八九）から明治一三年（一八八〇）までの古記録の年表で、寛平元年から寛政元年（一七八九）までは幅約三センチメートルのタテ枠の中に古記録の書名が記されているが、寛政二年から明治一三年までは一、五センチメートルのタテ枠に縮小されており、明治七年から同一三年までの年号は異筆である。表表紙の裏には朱書で「記録之中朱点分所蔵」と記されており、実際に朱点のある書名は、本文書群中に伝存するものが多い。その点から、これは清水谷家における古記録の管理帳として作成されたものと見られる。書名の記載は永禄年間（一五五八—一五七〇）ぐらいまでが中心で、それ以降になるとほとんどまばらにしか記載がない。したがって、本文書群に近世の記録類の書写本が少ないのも、文書の散逸にその原因を求めるよりは、清水谷家において本来そうしたものを書写する意識が薄かったことの表れとみてよいだろう。後述するように、本目録の編成において、近世の記録性の高い日次記や儀式次第書を「古記録」として扱わなかった理由も、一つには右の清水谷家の文書意識に基づいている。

古記録の書写奥書には、江戸中期の雅季と江戸後期の実揖の名がよく見られる。特に実揖は後述する有職故実書も含めて、精力的に清水谷家の蔵書形成を図った人物である。彼は後掲の略譜に明らかなように、歴代当主のなかでも際だって多くの臨時御用を勤めており、朝廷儀式に精通していたことが窺われる。それと裏腹な関係で、それら朝廷儀礼の遂行のために、周到に準備された知識が必要とされ、記録の集積に拍車がかけられ、蔵書の形成に結実していった。実揖は徳大寺実祖の二男であり、その関係から実兄徳大寺公廸の所蔵本をよく書写している。また、本文書群のなかには「公衡公記」を初めとする「管見記」の写本が含まれている。「管見記」とは、西園寺家伝来の古記録・古文書の類の総称

であるが、実揖と西園寺家との交流を窺える。

「家記」には三六家の公家の年譜があり、表題をもたないため仮に「公卿諸家譜」と名付けた。そのなかに清水谷家の年譜が伝存しないため、作成の経緯などは不明であるが、一條家の年譜のなかでは「当家」と称している。既述のように清水谷家は当初一條を称しており、これらの年譜が清水谷家の関与のもとに作成されたことを推測させる。いずれの年譜も記事は詳細で、慶応年間に及んでいる。これに類するものとして「公卿補任」、「公家鑑」が部分的に伝来しているが、これらは「古記録」のなかで扱った。

清水谷家家臣 清水谷家の家政機構を知ることのできる史料もわずかにすぎない。ここでは、「取次所」と「役所」の二項目を立てた。執次所は、公家屋敷の玄関における出入りを掌握した機関である。その受付簿の「御玄関日次留」には、家人の出門の行方や供人の名、他家からの来訪者名、用件などが記されているが、安政四年（一八五七）正月から六月迄の半年分一冊しか残っていない（史料番号六一）。当主は公正で、取次方四人が交替でその役にあたっている。

清水谷家の役所では、財政一般を扱ったようである。役人の人数や役所の組織構造についてはわからない。内容的には、慶応元年（一八六五）八月二五日に公正が権中納言に任官したことに基づく、同年九月二五日に執り行われた拝賀の経費帳簿がある。拝賀とは官に任ぜられた人がその官の慶賀を天皇へ奏する儀式で、二七日にはさらに直衣初めの儀式も執り行われた。他に、屋敷普請関係の入目帳簿がある。それぞれ「拝賀」「普請」の小項目を立てたが、いずれも点数はわずかである。

家職 ここには、清水谷家の禁中における公的な活動に関わる史料を収めている。「勤仕」という大項目を立てることも考えたが、近年では公家社会の研究の進展により、公家が朝廷に負担する役務を家職として捉える考え方が一般的になっているので、「家職」を採用することにした。公家の家職は、豊臣政権や江戸幕府により設定されたもので、役と身分が確定した結果、近世の公家にとって家学に習熟し家職を全うすることは、家の名誉と存立、身分を維持する必須の課題となった（山口和夫「近世の家職」）。幕府は慶長一八年（一六二三）の公家衆諸法度において、第一条で公家衆は家々の学問を昼夜油断なくおこなうこと、第三条で「昼夜之御番」を懈怠なく勤めることを定め、これを公家の家職とした。つまり、公家は家学の継承に加え、大納言以下従五位の者までが番組に分けられ輪番制によって宮廷殿上の警護をおこない、禁裏・仙洞・

御所などに参勤宿直した。近世初期においては、官位・家格・門流とは関係なく、内々衆と外様衆の二つに編成され、摂関家以外のすべての公家衆がこの二つのいずれかに属した（母利美和「禁裏小番内々衆の再編」）。こうした禁裏小番役に加え、賀茂祭・新嘗祭・奉幣使などのさまざまな臨時御用を勤めた。これらの役務を公家の家職として総称することができる。

本文書群には、禁裏小番役に関わる職務記録が若干あるため、中項目に「職務記録」を立てた。公正は小御所奉行の記録を記している。京都御所紫宸殿の東北にある御殿を小御所といい、そこでおこなう諸種の儀式や将軍・大名の対面などを差配した。また、非蔵人小番役の雑記録がある。非蔵人とは、宮中の蔵人所に属し、主として殿上の敷設や雑役に従事した。通常、月番の非蔵人奉行二名の下に番頭が置かれ、三番ないし四番の小番組を統括した。他に臨時御用の際に作成された記録が断片的にある。これらは、各役職ごとに中項目を立てて分類するのが理想的であるが、数量的に分量が少なく、また時期的にも近世後期の実揖・公正のものに限られているので、「実揖」「公正」の中項目をたて、各編年順に編成することにした。

これらの職務記録も、作成された当時は記録としての機能を有していたが、日記と同様に相伝される中で有職故実書としての機能を持つようになる。特に実揖の記録類は、どちらかといえば実揖の役務経験に基づいて編纂された記録性の強い故実書であり、彼の編纂した膨大な有職故実の部類記「管見拾掇」の基礎となった史料とも捉えられる。そこで、有職故実書のなかに収めることも考えたが、ここに収めた史料は各当主が授受した文書をその関連する箇所添付、あるいは丁間史料として挟み込むといった特性がある。したがって、それら個々の文書の記録性に鑑みて、これらの文書を職務記録として位置づけることにした。明らかに実揖の書写活動の所産であっても、他の記録などによる編纂書は次に述べる有職故実書の中に収めている。

公家の家職を支えるのが、各家々に伝わる有職故実や諸芸・学問などの文書記録で、本文書群の大半を占めている。これらは歴代当主の書写活動の所産であり、その目的は家職としての朝儀を遂行するための知識の集積にあった。清水谷家の家学は書道と神楽笙であるが、これらの書物は比較的少ない。かわりに本文書群の特徴としては、臨時御用を勤めるために集積された幅広い有職故実書のコレクションがあるといっている。そこで、「有職故実」と「諸芸・学問」という中項目を立てた。

本文書群の有職故実書は、目次記や儀式次第書などを多く含んでおり、編纂物というよりは古記録としての性格を有している。それらを「古記録」として扱うことも考慮したが、既述のような清水谷家の「古記録」に対する文書意識に加え、これらの文書記録は清水谷家の中では故実書として利用されているという機能を重視してここに収めた。「有職故実」のなかで特筆されるのは、実揖が編纂した部類記である「管見拾掇」である。これは『国書総目録』によれば、宮内庁書陵部に文久二年（一八六二）の橋本実梁の書写本一冊、庭田重胤の書写本一冊、内閣文庫に三冊が伝わるのみである。正・補あわせて一五八冊に及ぶ「管見拾掇」は、そのわずかを知られていたに過ぎない。実揖もそれほど知られた人物ではないが、その博識は近世後期の知識人の中でも特筆されるべき内容を持っている。彼の書写活動の範囲の広さからみても、化政期から天保にかけて当時の文化知識人との交流が予想される。今後、彼の文化的活動が本文書群の分析を通じて広く検討されることを期待したい。

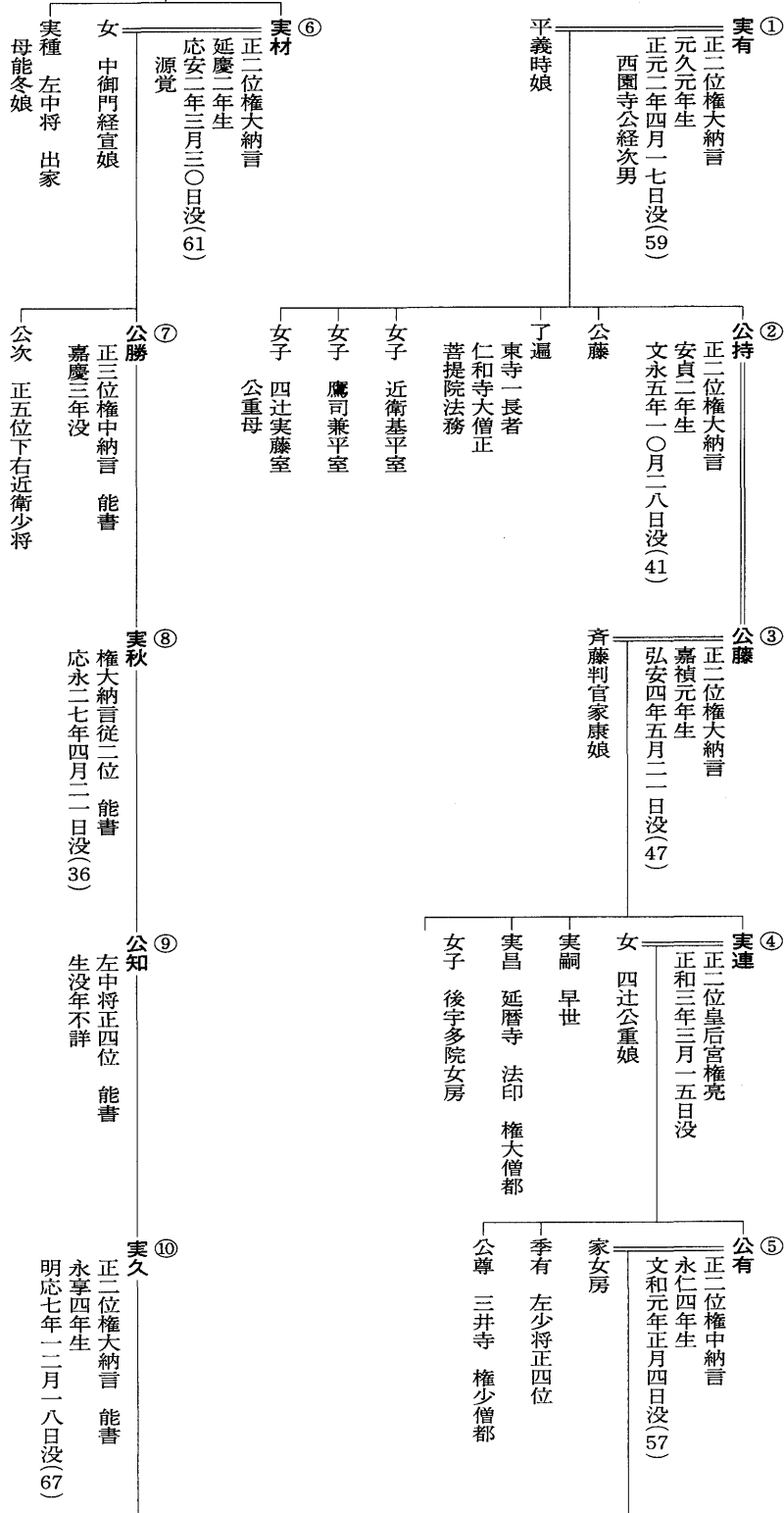
「諸芸・学問」関係で比較的まとまっているのは、歌書である。実業（一六四八―一七〇九）は、母が清水谷実任の娘であった関係で、寛文二年（一六七二）に三條西家から叔父清水谷公栄の養子となり、清水谷家を相続した。天和二年（一六八二）に従三位に叙せられ、貞享元年（一六八四）熊沢蕃山の門下で同門堂上四天王の一人とされ、靈元天皇の歌壇の一員として活躍した。実業も和歌にすぐれた人物として知られている。和歌書の写本には公栄や雅季の名が見え、和歌への造詣が深かったことが知られる。つまり、和歌は清水谷家の公式の家職ではなかったが、江戸期を通じて歌壇で活躍する人物を輩出した。その関係で、和歌に関する書写本や紀行文が多い。

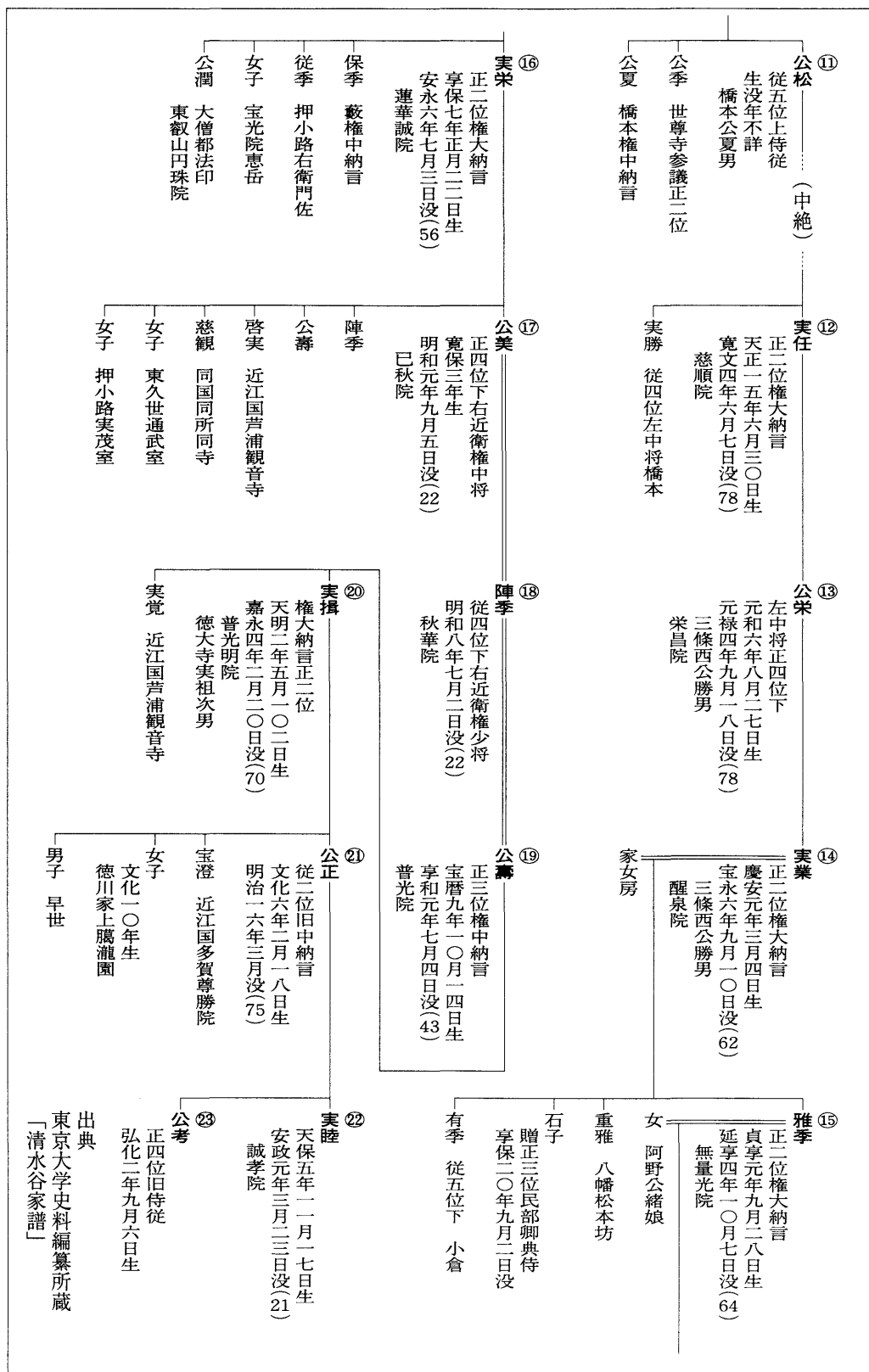
ほかには目次に示した各小項目を立てたが、それらに入らないものは便宜的に「その他」の項目に収めた。

今出川家 伝来の経緯は不明だが、安永八年（一七七九）正月から同一〇年三月までの今出川実種の自筆日記三冊（史料番号五七）が含まれている。公家の家では、祖父の日記を中核に、できるだけ多くの日記を集積していった（松園斎「日記の家」）。こうした文書の混入も、そうした日記集積の過程で生じたものと思われるが、詳しい事実関係は確認できない。ただし、この日記が今出川家のものであることは明らかなので、巻末に別項目を立てた。今出川家は藤原氏北家閑院流、西園寺家の庶流である。家格は清華で、琵琶の家として知られている。実種（一八〇一年没、四八才）は、安永八年は正二位権大納言であった。日記の内容は朝廷儀礼を詳細に記したものである。実種に関しては、史料番号一三三の「御即位式」の奥書に「安永九年十二月四日外辨実種参仕」とある。

付 図

清水谷家略系図





へ付記▽ 本文書群の整理にあたっては久保貴子氏から数々の貴重なご教示をいただき、和歌については佐々木孝浩氏のご指導をいただいた。また、山本博文氏には史料閲覧に際して諸般のご配慮をいただいた。記して謝意をあらわしたい。

△参考文献▽

久保貴子「元禄期の朝廷」(『日本歴史』五二〇号、一九九一年)

同「宝永・正徳期の朝廷と幕府」(『日本歴史』五三八号、一九九三年)

母利美和「禁裏小番内々衆の再編」(『日本史研究』二七七号、一九八五年)

杉谷昭「清水谷公考関係文書」(『国史大辞典』七)

箱石大「近世堂上家臣の編成形態について―清華・広幡家の家臣を事例として―」(徳川林政史研究所『研究紀要』二七号、一九九三年)

松園齊「日記の家―撰関家を中心に」(『岩波講座日本通史』第七卷 中世一、一九九三年)

山口和夫「近世の家職」(『岩波講座日本通史』第一四卷、近世四、一九九五年)

12.25 任左少将
 天保 3. 1. 5 叙正四位下
 5. 1.25 転右中将
 6. 2.19 兼上総権介
 12.28 院中扨候
 7. 4. 7 上皇御幸于離宮循学院供奉為御剣
 11.12.20 賜太上天皇御服御葬送為供奉
 12. 9.30 後院退散
 弘化 3. 4.24 賀茂祭近衛使
 7.23 前新清和院御葬送為供奉
 11.21 大嘗会卜合参仕
 嘉永 2. 1. 2 大床子御膳益供
 6.22 為右近府年頭
 11.14 新嘗会卜合参仕
 安政 4. 2. 9 更為右近府年頭 右大将本陣参会
 11.14 新嘗祭卜合参仕
 12.17 内侍所臨時御神楽為御剣将
 5. 6.17 伊勢公卿勅使為毛附将
 同日 南殿御拜為御剣将
 20 東庭下御内侍所渡御等為御剣将
 22 東庭下御内侍所渡御等為御剣将
 12.10 更為右近府年頭 本陣参会
 7. 1. 1 為四方拝御剣将
 万延 2.12.27 内侍所臨時御神楽為御剣将
 文久 2. 2.15 任参議
 3.11 奏慶
 12 聴直衣
 6.11 叙従三位
 11.19 新嘗祭卜合参仕 中院行幸為劍璽将
 30 賀茂臨時祭庭座
 3. 3.11 賀茂下上社行幸供奉為璽将
 11.15 新嘗祭卜合参仕 中院行幸為劍璽将
 4. 4.14 松尾社奉幣使
 5. 8 奉幣神武帝山陵使使定為執事
 9.17 石清水賀茂社使使定為執事
 元治 2. 1. 5 叙正三位
 4.18 東照宮250年神忌御經供養為着座
 19 本地堂曼多羅供為着座
 8.25 任権中納言
 9.25 拝賀
 27 聴直衣
 11.24 賀茂臨時祭庭座
 慶応 2.11. 5 春日祭上卿参向
 12.19 小番御免
 3. 1.27 孝明天皇御葬送為供奉
 11.23 吉田祭上卿参向
 4. 5. 7 松尾祭上卿参向兼宣命使
 8.22 即位由奉幣使山階陵参向
 12. 3 豊受太神宮造替地曳日時定上卿
 26 藤原朝臣美子従三位宣下上卿
 28 女御入内扨従 従三位藤原朝臣美子
 女御宣下上卿
 明治 2. 2.11 皇太后宮新殿御移徙為供奉
 23 叙従二位
 7. 8 正権中納言

12.25 後月輪山陵使参向
 3.12.17 為京都府貫属
 同月 更賜家録284石元家禄200石余
 8. 3.10 依願隠居被仰付
 実 睦
 天保 5.11.17 誕生
 7. 1. 4 叙従五位下
 弘化 2. 2.27 元服 叙従五位上 聴昇殿
 4. 1. 4 叙正五位下
 嘉永 7. 3.23 卒 (21才) 葬廬山寺、号誠孝院
 公 考
 弘化 2. 9. 6 誕生
 安政 3.12.19 叙従五位下
 5.12.28 元服 叙従五位上 聴昇殿
 7. 1. 5 叙正五位下
 文久 2. 9.20 任侍従
 10.11 前新朔平門院17回御忌懺法講為散華
 20 叙従四位下
 4. 3.25 叙従四位上
 慶応 2. 1. 4 叙正四位下
 4. 4.12 為箱館裁判所副総督
 閏4. 5 更為総督
 8. 為府知事
 12.10 以当官府知事為青森口総督
 明治 2. 6.21 免青森口総督知事如旧
 7.24 任開拓使次官
 9.13 辞次官
 14 賜賞典永世高250石
 12.18 依願大坂開成所勤学
 3.12. 8 依願東京勤学
 4.10.23 魯国留学被仰付
 8. 2. 7 帰朝
 3.10 依父公正願家督相続被仰付
 3.22 依願為東京府貫属

出典：東京大学史料編纂所蔵「清水谷家譜」（史料番号4175-234）

(5)

19.12.14 叙正二位
 延享 4.10. 7 没(64才) 葬廬山寺 号無量光院

実 栄
 享保 7. 1.22 誕生
 9. 1.26 叙爵
 13.12. 3 元服 任叙侍從々五位上 聽昇殿
 16. 9.30 叙正五位下
 12. 6 任左少将
 19. 1.15 叙從四位下
 元文 2. 1.14 叙從四位上
 3.12.25 転左中将
 5. 8.15 放生会次将参向
 11.24 新嘗会卜合次将
 12.24 叙正四位下
 寛保 3.10. 1 兼常陸権介
 延享 1. 4.26 賀茂祭近衛使
 3. 1. 1 四方拝取御剣
 5.28 親王扨候
 12.24 兼越前権介
 4. 3.16 立太子節会次将兼啓将
 5. 2 行幸供奉 劍璽渡御為劍将
 27 兼皇后宮亮
 6. 5 皇太后宮行啓為奉行
 寛延 3. 6.26 去亮
 宝暦 2. 5.13 任参議
 6. 3 奏慶
 4 聽直衣
 3. 5.14 蟄居依有御咎也 辞参議左中将
 11.19 勅免出仕
 12.22 叙從三位
 4. 2.12 改家季為実栄
 5. 2. 2 遷任
 5 兼右中将
 14 奏慶
 6. 4.16 日光東照宮幣使参向
 5.10 任権中納言 奏慶
 18 勅授帶剣
 12.21 叙正三位
 8.11. 6 補大歌所別当
 9. 2. 9 春日祭参向
 11.21 新嘗会為大忌
 12.11 勅別当
 24 叙從二位
 11. 2. 8 任権大納言 大歌所別当如元
 28 奏慶
 9.11 例幣上御参向
 13.10. 4 親王宣上上卿
 18 礼服御覽参会
 28 叙正二位
 14. 6. 2 改元伏議
 7 詔書覆奏上卿
 9. 5 辞大歌所別当
 明和 2. 3. 6 東照宮例幣發遣日時定上卿
 4. 9.25 准后御方新殿御移徙供奉

11. 1 朔旦冬至平座上卿
 6 春日祭上卿参向
 安永 1.12. 9 院中扨候
 4. 1.18 院御会始発声
 3.18 柿本社神影供読師
 5. 1.24 公宴御会始発声
 6. 7. 3 没(53才) 葬廬山寺、号蓮華淨院

公 美
 寛保 3. 1.16 誕生
 延享 3. 2.17 叙爵
 寛延 2.12. 4 元服 任叙侍從々五位上 聽昇殿
 宝暦 2. 1.22 叙正五位下
 3. 5.14 被止出仕
 11.19 勅免
 5. 1. 5 叙從四位下
 22 任右少将
 2. 5 奏慶
 9.17 内侍所本殿渡御供奉
 8. 3. 6 叙從四位上
 11. 1.12 叙正四位下
 12. 2.13 転右中将
 13. 8. 9 奏慶
 明和 1. 7. 5 聽紫組懸緒
 9. 5 卒(22才)、葬廬山寺、号己秋院

陳 季
 寛延 3. 2. 4 誕生
 宝暦 4.12.26 叙爵
 明和 2. 2.17 元服 任叙侍從々五位上 聽昇殿
 4. 1. 9 叙正五位下
 12.19 兼美濃権介
 6. 1. 9 叙從四位下
 7. 6.13 御讓位後院中扨候御内意
 10. 1 御讓位後院中扨候
 12.19 任右中将
 8. 1.17 秩満
 7. 2 卒(22才) 号秋華院

公 壽
 宝暦 9.10.14 誕生
 明和 2. 1.10 叙爵
 8.10.15 実栄為養子
 12. 3 改兼邦為公壽
 14 元服 叙從五位上 聽昇殿
 9. 3. 1 参内始
 10 参院始
 安永 1.11.26 任侍從
 2. 1. 9 叙正五位下
 4. 1. 9 叙從四位下
 6. 1.29 叙從四位上
 7. 閏7.4 任左少将
 12.10 奏慶
 8. 2. 1 叙正四位下
 5. 4 転左中将

公 松		同年、 聴紫組懸緒	
永正	8. 1.28	叙爵	延宝 3. 1. 5 叙従四位上
	7.27	任侍従	5.12.23 転左中将
	12.10.16	叙従五位上	6. 9.16 叙正四位下
実 任		天和 1.11.21 任参議左中将如元	
天正	15. 6.30	誕生	12.14 叙従三位
慶長	6. 1. 6	叙爵	6.29 聴直衣
元和6.閏	12.23	元服昇殿 任侍従元弾正大弼	4. 2.16 條事定
		叙従五位上	21 改元伏議
	9. 1. 5	叙正五位下	12.23 任権中納言
寛永	3.11.13	任左少将	貞享 2. 1.15 勅授带剣
	4. 1. 5	叙従四位下	16 奏慶
	5. 1. 5	転左中将	4.12.23 叙正三位
	2.10	叙従四位上	元禄 2.11. 3 春日祭上御参向
	9. 1. 5	叙正四位下	12.26 任権大納言
	16. 2.29	叙従三位	3. 1.12 奏慶
	18. 1. 5	叙正三位	5.11. 3 春日祭上御参向
	1.11	任参議	6. 9.11 例幣上御
	19. 2. 8	辞退	6. 9.12 議奏
	12.22	任権中納言	7. 2. 叙従二位
	28	聴带剣	4. 6 免議奏
	20. 1.14	奏慶	9.19 神宮伝奏
正保	2. 2. 7	辞退	12.20 辞退
	4.12. 7	任権大納言	宝永 1.12.26 叙正二位
	5.閏1.21	奏慶	6. 9.10 没(62才) 葬廬山寺、号醒泉院
	2. 1	春日祭上御参行	
慶安	2. 3. 3	辞退	雅 季
	4. 3	叙従二位	貞享 1. 9.28 誕生
	5.10.12	叙正二位	元禄 10.11.24 叙爵
万治	4. 1	出家	11. 1.11 聴元服昇殿 任侍従
寛文	4. 6. 7	没(78才) 葬浄華院別院松林院 号慈順院	13. 1. 5 叙従五位上
公 栄		16. 5.25 叙正五位下	5.30 任左少将
元和	6. 8.27	誕生	宝永 2. 1.23 叙従四位下
寛永	15. 1. 5	叙爵	12.18 転左中将
	17. 6. 1	元服 任侍従	4. 1.23 叙従四位上
	21. 1. 5	叙従五位上	7. 2.28 叙正四位下
正保	4. 1. 5	叙正五位下	享保 4. 6. 6 任参議左中将如元
承応	4.12.15	叙従四位下 任左少将	8.27 奏慶
万治	2. 1. 5	叙従四位上	9.13 聴直衣
	11	転右中将	5. 6.21 叙従三位
寛文	3.12.14	叙正四位下	7. 1. 3 二宮御降誕以当家為御産所 母権典侍局
元禄	4. 9.18	卒(72才) 葬廬山寺 号荣昌院	12. 8 任権中納言
実 業		18 勅授带剣 奏慶	9.閏4.2 叙正三位
慶安	1. 3. 4	誕生	10. 2.19 任権大納言
寛文	1. 7.16	叙爵	26 奏慶
	18	右京大夫	12. 1.22 勅別当
	5. 1. 5	叙従五位上	13. 2. 3 春日祭参向
	9. 1. 5	叙正五位下	12.21 叙従二位
	12.12.13	当家相続	享保 15. 8.15 放生会殿上宣命上卿
	17	任左少将	9.11 例幣上卿参向
	13. 1. 5	叙従四位下	16. 1.21 院御会始読師
			5.16 辞退

徳治 2. 1. 5 叙正五位下
 延慶 2. 3.29 叙従四位下
 3. 3. 9 任右少将
 12.11 叙従四位上
 慶長 2. 7. 6 叙正四位下
 4. 6.27 転右中将
 5.閏10.4 遷右兵衛督
 文保 2. 2.11 叙従三位去督
 3.26 任右兵衛督
 4.25 遷任右衛門督
 7. 7 去督
 3. 9.29 任皇后宮権亮
 10.18 任参議権亮如元
 11.15 去権亮依院号也
 2. 2. 9 兼丹波権守
 元応 3. 2. 5 叙正三位
 4. 6 辞退
 元徳 3.11. 5 遷任 兼右兵衛督
 12. 1 遷右中将
 2. 3.13 兼阿波権守
 4.15 任権中納言
 8. 3 叙従二位
 10.21 辞権中納言
 正慶 2. 5.17 詔復前参議正三位
 暦応 9.12. 1 任権中納言
 3.4.日不詳 叙従二位
 7.19 辞退
 5. 7.14 聴本座
 貞和 2. 1. 6 叙正二位
 観応 3. 1. 4 没(57才) 墓地不明

実 材(元、実勝)

延慶 2. 誕生月日不詳
 慶長 2. 1. 5 叙爵
 正和 5. 1.一 叙従五位上
 文保 2. 1.22 叙正五位下
 12.28 任侍従
 嘉暦 3.11.18 叙従四位下
 27 任右少将
 12. 8 改実勝為実材
 4.11. 5 転左中将
 9 叙従四位上
 元弘 2. 1. 5 叙正四位下
 6.17 解官
 3. 6.一 止正四位下為従四位上左中将
 8. 5 更叙正四位下
 4. 1.13 兼備前権介
 暦応 3. 7.19 叙従三位
 貞和 3. 1. 5 叙正三位
 9.16 任参議
 19 兼右中将
 4. 3.20 兼讃岐権守
 5. 9.13 任権中納言
 6. 8.16 辞退
 文和 3. 1. 7 叙従二位

 11.12 聴本座
 延文 3. 1. 6 叙正二位
 貞治 6. 4.13 任権大納言
 9.19 辞退
 慶安 2. 3.30 没(61才) 墓地不明

公 勝

 誕生叙年月日不詳
 慶安 7.11. 1 叙従三位左中将如元
 永和 1.11. 2 任参議
 11 兼備中権守
 康暦 3. 1. 6 叙正三位
 永徳 2. 1.26 任権中納言
 3. 4.22 辞退
 嘉慶 3. 月日不詳 墓地不明

実 秋

 誕生叙爵年月日不詳
 応永 14. 1. 5 叙正四位下
 15. 1.24 任参議右中将如元
 16.閏3.23 兼土佐権守
 17. 1. 5 叙従三位
 18. .14 叙正三位
 21. 3.16 兼備前権守
 22. 3.28 任権中納言
 11.20 叙従二位
 26. 3.10 辞退
 27.閏1.13 遷任
 4.20 任権大納言
 21 没(36才) 墓地不明

公 知

右中将正四位下

実 久

永享 4. 誕生月日不詳
 享徳 2.12.24 叙従四位上
 4. 3.27 叙正四位下
 長禄 2. 7.20 叙従三位 任彈正大弼
 12.23 任参議去大弼
 3. 3.23 兼土佐権守
 兼右中将
 同年 辞参議
 寛正 7. 2.22 遷任
 7. 7 叙正三位
 文正 2. 3.27 任権中納言
 2.12. 解官
 文明 2. 9.27 遷任
 8. 1. 6 叙従二位
 12. 3.29 辞権中納言
 13. 1.25 任権大納言
 18. 7.24 辞権大納言
 長享 3. 4.18 叙正二位
 明応 7. 2.28 出家
 12.18 没(67才) 墓地播磨国広山村

100

山城国京都清水谷家文書目録 目次

清水谷家	頁	その他	頁
日記	一〇三	今出川家	二四
実業 雅季 実栄	一〇二	日記	二四
古記録	一〇二		
家記	一〇五		
清水谷家家臣	一〇六		
執次所	一〇六		
役所	一〇六		
拝賀 普請	一〇六		
家職	一〇六		
職務記録	一〇六		
実揖 公正	一〇七		
有職故実	一〇七		
改元 儀式	二九		
諸芸・学問	二九		
書札礼・書道			
随筆 紀行			
語学			
茶道			
香道			
雅楽			
神祇			
陰陽道			
和歌			
漢詩・漢文			
服飾			
部類記			
陣次第			
官職位階			
官職位階			

山城国京都清水谷家文書目録

(文書番号 26 B)

清水谷家

日記

実業

(日記) 元禄七年〜八年

雅季

日次記 正徳四年

日次記 享保六年

(日記) (享保二年) ※後西院三十三回忌の記事あり

実栄

日次 寛延二年巳冬(十一月〜十二月)

古記録

記録年表 蔵書印1

倭書惣目録 享保一八年冬怡顔斎蔵書 藤原家蔵書印あり

続日本紀 全四十巻 ※一〜二十欠

形態 数量 番号
飯堅美半 一冊 五〇

飯半 一冊 五二

飯半 一冊 五二

飯半 一冊 五二

飯小 一冊 五〇

飯美 一冊 四七

半 一冊 三四

飯美 十冊 四

百練抄 第四 (令泉院〜後令泉院) 奥書「嘉元二年三月九日書写校合也」

美

一冊 三九一

百練抄 第五 (後三条院〜鳥羽院) 奥書「嘉元二年三月一日以大理定房卿金沢文庫本書写校合畢」

美

一冊 三九二

百練抄 第六 崇徳院十八年 奥書「嘉元二年二月廿六日書写校合畢」

美

一冊 三九三

百練抄 第七 (近衛院〜六條院) 奥書「嘉元二年二月卅日以大理定房卿本書写校合之」

美

一冊 三九四

百練抄 第八 高倉院十二年 奥書「嘉元二年四月廿六日以大理定房之本書写校合畢又以權右中辨宣房朝臣之本見合訖 金沢文庫 寛永九六初九 一校見合了」

美

一冊 三九五

百練抄 第九 安徳天皇三年 奥書「嘉元二年四月廿六日以大理定房卿之本書写校合畢見權右中辨宣房朝臣之本見合而已」

美

一冊 三九六

百練抄 第十 後鳥羽院十五年 奥書「嘉元二年四月廿二以權右中弁宣房朝臣本書写校合畢 貞顯」

美

一冊 三九七

百練抄 第十一 土御門院十二年 奥書「嘉元二年五月十日以權右中弁宣房朝臣本書写校合畢」

美

一冊 三九八

百練抄 第十二 順徳佐渡院十一年 奥書「嘉元二年五月十日以權右中弁宣房朝臣本書写校合畢」

美

一冊 三九九

百練抄 第十三 後堀河院 奥書「嘉元二年五月十日以權右中弁宣房朝臣本書写校合畢」

美

一冊 四〇〇

百練抄 第十四 四條院十一年 奥書「嘉元二年五月十日以權右中弁宣房朝臣本書写校合畢」

美

一冊 四〇二

百練抄 第十五 後嵯峨院四年 奥書「嘉元二年五月一日以權右中弁宣房朝臣本書写校合畢」	美	一冊	三九十三
百練抄 第十六 本院十三年 奥書「嘉元二年五月十五日以權右中弁宣房朝臣本書写校合畢」	美	一冊	三九十三
百練抄 第十七 本院下 奥書「嘉元二年正月十五日以大理定房卿官房書写」	美	一冊	三九十四
權記 長保四年日記 四季 日野西家藏書印	美	一冊	四〇
中右記 第九 嘉保二年夏	飯美	一冊	三七十一
中右記 第十 嘉保三年春 為永長元	飯美	一冊	三七十一
中右記 永長元年正・二・三月	飯美	一冊	三七三
中右記 元永元年七・一・一月 蓮華栄院殿御筆	飯美	一冊	三七四
中右記 大治二年正・六月 蓮華栄院殿御筆	飯美	一冊	三七五
中右記 大治四年七・九月 已秋院殿御筆	飯美	一冊	三七六
中右記 大治五年四・九月 已秋院殿御筆	飯美	一冊	三七七
中右記 為保延元 長承四年正月・一・二月	飯美	一冊	三七八
山槐記 永曆元年秋 応永二九年九月二八日書写	美	一冊	三〇一
山槐記 永曆元年十一月 貫首 本奥書正応四年写 応永二五年三月一七日從四位上行左近衛權中將藤原朝臣書写（中納言公雅卿本）	美	一冊	三〇二
山槐記 永曆元年十二月 貫首 応永二五年八月二九日前大外記入道常経筆（俗名師豊）書写	美	一冊	三〇三
山槐記 承安五年秋	美	一冊	三〇四
山槐記 治承三年二月三月	美	一冊	三〇五
山槐記 治承三年夏	美	一冊	三〇六
山槐記 治承三年冬	美	一冊	三〇七
山槐記 治承四年二月	美	一冊	三〇八
山槐記 治承四年三月	美	一冊	三〇九
山槐記 治承四年四月	美	一冊	三〇一〇
山槐記 治承四年五月	美	一冊	三〇一一
山槐記 治承四年秋	美	一冊	三〇一二
山槐記 治承四年冬	美	一冊	三〇一三
山槐元日節会部類記 本奥書文安五年 寛文四年二月上旬羽林中郎將藤原（今城）定淳書写一校	美	一冊	三〇一四
山槐記 長寛二年 国懸社火事并始着政廿二社奉幣	飯美	一冊	三〇一五
山槐記拔書 口伝故実可存知事（山槐記口伝故実） 右近中將兼中宮權亮実揖花押	飯美	一冊	三一
大鏡	飯美大	二冊	三二
玉葉 承元三年三月廿三日此日故撰政前太政大臣良経長女有入宮事	飯半	一冊	三九

園太曆 康永三年 二甲 奥書「慶安二・三・十四日一校了」 本奥書「長享元年十一月十三日書寫了」 按察使藤原親長	假美	一冊	三十一
園太曆 貞和二年	假美	一冊	三十二
園太曆 貞和四年春夏 十 本奥書「長享二年二月廿九日書寫了」 按察使親長	假美	一冊	三十三
園太曆 貞和四年秋 十一	假美	一冊	三十四
園太曆 觀應二年秋冬 十七	假美	一冊	三十五
園太曆 延文元・文和五年正月 廿五	美	一冊	三十六
園太曆 延文二年春夏 廿九 本奥書「長享元年九月十二日書寫了」 按察使藤原判	假美	一冊	三十七
園太曆 延文三年春夏秋 卅一 本奥書「長享元年十月一日書寫了」 按察使判	假美	一冊	三十八
園太曆 延文五年春 卅三 本奥書「長享二年九月五日書到曉更燈前寫了」 按察使藤原花押	假美	一冊	三十九
○			
後愚昧記 藏書印1	美	一冊	四十
後愚昧記 消息 藏書印1 藤原雅季印	美	一冊	四十二
後愚昧記 節会 文和二年以後 藏書印1	美	一冊	四十三
後愚昧記 日記 延文六年自二月至十一月 三月廿九日改康安 藏書印1	美	一冊	四十四
後愚昧記 貞治三春 同五年八・九・十一月 藏書印1	美	一冊	四十五
後愚昧記 右消息 自貞治三年至七年 自応安元年 至三年 藏書印1	美	一冊	四十六
○			
後愚昧記 自応安二年同六年大風例事 藏書印1	美	一冊	四十七
後愚昧記 自応安二年消息 藤原雅季印	美	一冊	四十八
後愚昧記 自応安四年 藏書印1	美	一冊	四十九
後愚昧記 消息 第七 応安八年 永和自元年至三年 藏書印1	美	一冊	五十
後愚昧記 永和四年四季 藏書印1	美	一冊	五十二
後愚昧記 永德元年七月 享保第四冬書寫令一校畢 八座羽林雅季花押 藏書印1	美	一冊	五十三
後愚昧記 永德三年夏 藏書印1	美	一冊	五十四
○			
公衡公記 弘安二年四月五月 弘安六年七八九月 弘安十年正月同十一年正月二月 弘安十年正月	美	一冊	五十八
大嘗會記 実泰公記 (延慶二年) 後山本左大臣 西園寺庶流洞院	美	一冊	五十九
春日社頭和歌詣記 実衡公記 (正和四)	美	一冊	六十
実遠公記 享德二年十一月同三年六月九月十二月 同四年正月三月六月十月十一月 康正二年三月四月五月七月 長祿三年四月 文明十一年八月九月閏九月	美	一冊	六十二
公藤公記 文龜三年自正月一日至四月十二日 永正三年自正月一日至四月十四日 永正九年自正月九日至五月十九日	美	一冊	六十三
実宣公記 大永二年自正月至三月同三年正月一日	美	一冊	六十四
御禊行幸服銚部類第三 節下并次第司	美	一冊	六十五
御禊行幸服銚部類第三 公卿 二卷之内	美	一冊	六十六

大槐秘抄 元禄五年二月日左中将公韶書写 藤原某
花押あり 美 一冊 四

公名公記 永享三年自正月一日至四月廿九日 美 一冊 四十一

公名公記 永享十年正月二月六月十一月十二月 同
十一年自三月八月 同十二年八月九月十月 同十二
年自六月一日至七月二日 同年自十月一日至十二月
廿九日 嘉吉元年正月二月四月 美 一冊 四十二

公名公記 嘉吉元年自五月一日至十月十四日 嘉吉
二年四季 嘉吉三年四季 美 一冊 四十三

八幡御幸記 (弘安十一年) 別名「石清水御幸記」
(公衡公記の別記) 美 一冊 四十四

○

南朝記 一、五 美 五冊 四十六

陽龍記 開闢鮮陣御幸始 寛元四年二月 ※「公光
卿記」 美 一冊 四十九

殿上人所役事 (親長卿記・宣胤卿記) 飯半 一冊 三十八

(日記) 前後欠 飯美 一冊 五

往年記 玉心藏 別名「嚴助大僧正日記」 飯半 一冊 四

武家嚴制録 全 実掛花押 飯半 一冊 二六

後光明帝外記 (正保遺事 全) 飯半 一冊 三六

老人雜話 江村專齋述 清水谷家藏 美 一冊 三十三

○

公卿補任 後光明院 (寛永二、承応三年) 藏書 美 一冊 三〇

公卿補任 龜山上 卅五 (正元二、文永四) 美 一冊 三三

○

(公家鑑) 明和四年正月一日 花押あり 飯堅美半 一冊 二四八

(公家鑑) 寛政一三年正月 飯美半半 一冊 二四八

○

大臣名 享保八年八月朔日黄門雅季写 本奥書宝永
五年五月一〇日桑原長義写 飯半 一冊 三七

家記

(公卿諸家譜) 滋野井 姉小路 (公宣系) 飯美 一冊 三三一

(公卿諸家譜) 藪 中園 高丘 西四辻 飯美 一冊 三三二

(公卿諸家譜) 西園寺 今出川 飯美 一冊 三三三

(公卿諸家譜) 九條 飯美 一冊 三三四

(公卿諸家譜) 一條 土佐一條伝 醍醐 飯美 一冊 三三五

(公卿諸家譜) 二條 飯美 一冊 三三六

(公卿諸家譜) 德大寺 飯美 一冊 三三七

(公卿諸家譜) 久我 六條 飯美 一冊 三三八

(公卿諸家譜) 阿野 姉小路 (公景系) 風早 飯美 一冊 三三九

(公卿諸家譜) 近衛 飯美 一冊 三三〇

(公卿諸家譜) 廣幡 飯美 一冊 三三一

(公卿諸家譜) 岩倉 千種 植松 飯美 一冊 三三二

(公卿諸家譜) 三條 飯美 一冊 三三三

(公卿諸家譜) 花山院 大炊御門 飯美 一冊 三三四

(公卿諸家譜)	中院	飯美	一冊	三二五
(公卿諸家譜)	花園 武者小路 押小路 高松	飯美	一冊	三二六
(公卿諸家譜)	鷹司	飯美	一冊	三二七
(公卿諸家譜)	正親町三條 園池 三條西	飯美	一冊	三二八
(公卿諸家譜)	正親町 裏辻 山本 大宮	飯美	一冊	三二九

清水谷家家臣

執次所

御玄閑日次留 安政四年正月〜六月 清水谷殿執次所

在津日記 弘化四年六月

役所

拝賀

清水谷様御拝賀御用御書附 慶応元年九月二五日
山城屋喜兵衛↓御役所

中納言御拝賀諸入箇留 慶応元年九月 御役所

中納言御拝賀二付御献立扣 清水谷殿御役所

御拝賀御入箇金銀銭申出帳 御役所

延紙料・祝酒料出方写 附飯札共 御役所

御拝賀上下人数調

御拝賀御内之御到来物扣 御答札附込

横半	横半	横半	横半	横半	横半	横半	横美
一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊	一冊
六	七	七	七	七	七	七	六

(直衣始諸役割)

普請

小仕事御用出来御書附 壬申十月二五日 大工 伝兵衛・同弥左衛門↓御役所様	横半	一冊	七
御手入下雪隠并西手縁側御積り書 壬申十月 大工 伝兵衛・同弥左衛門↓御役所様	横半	一冊	七
御入目御用代書 壬申十一月 大工同弥左衛門印↓清 水谷様御役所様	半	一冊	七

家職

職務記録

実揖

御朱印被相渡候留書 天明九年十月 清水谷家	飯半	一冊	六
四條様日光社頭御作法御記 寛政五年	飯半	一冊	四
新嘗祭儀 寛政一一年一月一三日 奉行頼壽朝臣中 院行幸 実揖花押	飯豎美半	一冊	三〇一
東照宮二百回忌神忌万里小路左大辨宰相建房卿 御直記 但從御発輿到御在府 文化十一年清 水谷殿	飯半	一冊	七
御会申沙汰雜誌 文化一三年 花押あり	飯豎美半	一冊	三五
新嘗会両儀覚悟無行幸次第等(文化一・文政三年)	飯豎半	一冊	二〇八
(賀茂祭日次) (文政三年)	飯半	一冊	六二
(賀茂祭日次) (文政一二年正月〜天保四年正月) 藏書印 ¹	飯半	一冊	六三

賀茂祭催條々以下備忘 文政一一年	豎美半	一冊 一〇	非藏人奉行雜誌 二冊之内 安政七年三月一八日、 文久二年正月三〇日	飯半	一冊 五二
北祭奉行誌 天保三年一月一九日 一社伝奏実搦花 押	飯半	一冊 一六二	(廻状留) 慶応四年	飯半	一冊 三
臨時祭之節下社注進之事 文政九年一月二五日 織田右衛門・小林監物様 ※八丁目丁間史料	横美半	一冊 一九三	(廻状留) 前後欠 七月	飯半	一冊 八〇
浄土宗 日蓮宗 一向宗 御猶寺寺院名前帖 天保四年九月改	飯半綴	一冊 三三	○		
勅答之事 天保一二年正月二日 (実搦)	飯半	一冊 三九一	文久二壬戌年五月松平阿波守殿之上書	飯半	一冊 三五
(太上天皇證号案) ※丁間史料	折紙	二通 三九二	開攘論(論策三道)	飯半	一冊 三六
(異国之一条二付一條殿江進達状) 三月七日 ※丁間史料	折紙	一通 三九三	合衆国書翰和解 蔵書印2種あり	飯半	一冊 三七
内番頭覚悟 (文政・天保) 実搦花押	飯半	一冊 三九	祝詞 享保八年二月一日	美	一通 三〇一
小御所奉行覚悟 (文政・天保) 実搦花押	飯半	一冊 三七一	祝詞 元治元年四月	豎	一通 三〇二
清水谷実搦申入状控一件 実搦↓西四辻三位・難 波三位・東園中将・信濃権介・左兵衛佐・民部大輔・ 刑部大輔殿 ※丁間史料	七通 三七二		清水谷大納言宛道盡書状(吉田二位祈禱の件) 一月二二日 ※三九一―三は同一包紙	折紙	一通 三〇一
小番奉行雑々覚悟 (文化九年五月・天保九年九月)	飯半	一冊 三七	新宰相中将宛道盡書状(親龍院入魂) 三月六日	切紙	一通 三〇二
小番奉行申沙汰之事 (文化六年・天保九年) ※丁間史料あり	飯半	一冊 三九	清水谷宰相中将宛道盡書状(拝賀着陣之儀) 五月 七日	折紙	一通 三〇三
小番奉行結改并小番勘定 (文化・天保)	飯半	一冊 三六〇	橋本様新典侍様・今津様衛門内侍様御雜記写 (天保十・嘉永元年) 清水谷殿家 山本様へ借写	飯半	一冊 三
季知卿御剣被勤仕候節之記 嘉永二年	飯美	一冊 一五	中院左中将通知朝臣毛附將勤仕之留 右中将藤原 花押	飯半	一冊 五
公 正			有職故実		
(非藏人奉行雜誌) 二冊之内 安政五年	飯半	一冊 五二	改元記 長徳・承徳・嘉承・天仁・天治・保延・康 治・永暦・応保・永万・治承・壽永・元暦・文治・ 建久 以上十五ヶ度難陳也	美	一冊 三一

改元記	文字吉凶事	美	一冊	三二	(改元記 寛保) (元文五年・六年)	飯美	二冊	三五
改元記	山槐記拔書 安元三年	美	一冊	三三	行類抄 臨時部 改元定 藤原雅季藏書印	美	一冊	三四
改元記	改天承二年為長承元年 第八十一 中右記	美	一冊	三四	(大唐改元札) 參議左近中将中宮権亮実搦花押	半 版本	一冊	三七
改元記	寛元 正嘉 貞和 観応	美	一冊	三五	元秘別録 一六(元号勘文) 藏書印1	美	六冊	三六
改元記	改明德為応永 改大永為享祿	美	一冊	三六	元秘抄(元号) 藏書印1 享保六年八座羽林雅季	美	一冊	三六
改元記	慶長	美	一冊	三七	花押書写(大納言公澄本)			
改元記	元和	美	一冊	三八	儀 式			
改元記	寛永	美	一冊	三九	天皇御元服次第 宝永八年	飯 豎美半	一冊	二三
改元記	正保	美	一冊	四〇	皇太子御元服次第 享保	飯 豎美半	一冊	二四
改元記	慶安 承応	美	一冊	四一	御元服次第	飯 豎美半	一冊	二六
改元記	改慶安五為承応元	美	一冊	四二	元服次第	折紙	二通	二六
改元記	改承応四為明暦元	美	一冊	四三	元服理髮要	飯 豎美半	一冊	二七
改元記	改寛文為延宝 宮本拝借	美	一冊	四四	元服之記(元禄七年)	飯 美	一冊	二九
改元記	天和度上卿作進記	美	一冊	四五	後桃園亭御葬葬場使雜録 文化二年五月二八日	飯 半	一冊	四二
改元記	吉統記	美	一冊	四六	享保五三承秋門院崩御凶事之方	飯 豎美半	一冊	四三
改元記	塩梅録 禁裏本書写 文禄五年	美	一冊	四七	寛政御定服紀令 嘉永六年二月一六日筆写	飯 豎美半	一冊	四四
改元記	吉統記 忠光卿記	美	一冊	四八	天皇元服記 正徳元年雅季写	飯 美大	一冊	四九
改元記	忠光卿記 文明一九年六月九日翰林小土菅	美	一冊	四九	天皇元服次第 安永一〇年正月 左近衛権中将公壽	飯 小本	一冊	五〇
改元記	和長書写(廣光卿自筆・小倉宰相中将助筆本)	美	一冊	五〇	元服最要秘鈔 書写奥書略 文化二年書写(菊亭	飯 小本	一冊	五一
改元部類記	十八公	美	一冊	五一	少将本) 実搦花押			
改元部類元亨元年・叙位略次第・院号定部類記・		美	一冊	五二	東宮御元服次第(文化八年) 文化一三年後八月	飯 半	一冊	五二
東寺灌頂記并南都大仏縁起		美	一冊	五三	実搦補闕(通峯秘藏本) 実搦花押			

故院御葬送之儀 右羽林中郎將公正	仮半	一冊	一四
天皇院崩御事	半	一冊	一
御婚次第	折紙	一通	二〇
御婚儀次第	仮半	一冊	三
立太子節会次将要 私 啓陣将要 延享四年三月一六日 左羽林卿家季	仮小本	一冊	二三
立太子次第 天和三年二月九日	仮堅美半	一冊	二四
立太子節会	仮堅美半	一冊	二五
立太子次第 立后次第 讓位次第	仮堅美半	一冊	二六
立后次第 天和三年二月一四日	仮堅美半	一冊	二七
立太后御次第 弘化四年三月一四日	仮半	一冊	二八
讓位次第 讓位 即位 立太子 立后	仮堅美半	一冊	二〇
御讓位次第	仮堅美半	一冊	二三
少外記中原友俊筆記拔 寛延四年八月 朱書「延享四年之度御讓位之儀」 藏書印 ¹	半	一冊	二三
御即位式 同次第 同色目 同外弁要 安永九年一二月四日 外辨実種参仕	仮堅美半	一冊	二三
大嘗会交名 執柄家拍子合次第 天明七年九月	仮堅美半	一冊	二四
(大嘗会卯日次第)	仮小本	一冊	二五
(大嘗会次第) (嘉永元年一月)	仮小本	一冊	二六
内親王宣下次第	仮横美	一冊	二九
大札記 天文一一年後三月一三日龍作藤原惟房書写	仮美	一冊	二〇

御得度次第 和義親王 宝曆四年八月二五日	仮堅美半	一冊	一四
後成恩寺殿亮闇抄 全 「内膳奉膳兼志摩守高橋等庭書写」 天保十二年後正月廿九日令書写畢 大夫尉花押」 藏書印	美	一冊	一四
御入寺御得度覚 享保一六年亥九月	仮美	一冊	一四
諸次第 藤原雅季藏書印	五冊	一四	
桃華御説諸次第	堅美半	一冊	一五
復辟次第 享保元年一月一日	仮堅美半	一冊	一四
復辟次第	仮堅美半	一冊	一五
(前新朔平門院御講備忘) 文久三年八月一九日	仮半	一冊	一五
院拜礼 享保八年	仮半	一冊	一五
上卿故実 藏書印 ¹	仮美	一冊	一五
平座次第	小本	一冊	一六
鳳闕見聞図記 上中下	美	三冊	一六
続大内裏図考証	美大	一冊	一六
遷幸新造内裏次第	仮堅美半	一冊	一六
定后拾葉抄	仮横半	一冊	一七
朔旦冬至次第并賀表之写 享保三年一月一日	仮堅美半	一冊	一六
祭使儀節 左近權中将藤原定基 裏辻家藏藏書印	半	一冊	一九
貞觀 儀式 一、五、六、十	仮美	四冊	一六
朝覲行幸部類 秘	美	一冊	一六
修学院御幸供奉之誌 右中将花押	仮堅美半	一冊	一七

雨儀行幸御與兩皮事 文永二年書写 延享四年四月羽林郎家季(押小路前並相本)書写 清水谷家藏前欠	一冊 一欠	飯美
日中行事 大永七年林鐘一日從三位藤原資直	一冊 二〇四	美
世俗淺深秘抄 藏書印1	一冊 二三三	美
家厚公御抄	一冊 二二七	半
亮陰近衛使勤仕備忘 右中將藤原花押	一冊 二四四	美
天兒御伽這子宿直大図 文化七年康民書写	一冊 二四二	飯美
公事根原抄	一冊 二四六	美
冠儀淺寡抄 乾 藤原実揖藏書印	一冊 二四七	美
(小車錦) 伊勢貞丈述	三冊 二四九	美
滋草拾露(慈野井公麗)	三冊 二五〇	飯半
江家次第抄 一〇七	二冊 二五五	美
羽林類葉抄上下卷	二冊 二五七	美
羽林要秘抄 藏書印1	一冊 二五八	美
羽林秘抄 表紙のみ	一枚 二五九	美
羽林類葉抄 御釵部馬頭代部釵璽扶持部 上下	二冊 二五九	飯美大
厨事類記 乾坤 寛政五年正月錦所藤原以文書写(大伴積興本)	一冊 二六一	飯美綴
世俗立要集 第百五十四 沙門正玄集記 寛政五年三月一九日固禪書写	一冊 二六三	飯美大
持扇絵様 清水谷家藏	一冊 二六三	飯半
御道具類御召物扣	一冊 二六四	飯美
御入内御調度勘物 縫殿頭大伴積興(朝儀図)	一冊 二六五	美
(御坊所門前略図)	一鋪 二六八	157×84cm
錫紵着御并脱御次第 正徳二年五月日 左中將雅季	一鋪 二六九	85×34cm
拝賀部類 雅季藏書印	一冊 二四二	飯堅美半
行類抄卷第八下 節会六 太政大臣 一〇四は合冊	三通 二七四	美
藤原雅季藏書印	一冊 二三一	美綴
行類愚抄第 二孟平座 藤原雅季藏書印	一冊 二三二	美綴
行類抄第 迂幸第四 藤原雅季藏書印	一冊 二二三	美綴
行類愚抄 二孟平座中 藤原雅季藏書印	一冊 二三四	美綴
達幸故実抄第三上 右羽林雅季	一冊 二三八	美
新内裏遷幸儀 寛政二年二月二日 左近衛權中將藤原公壽	一冊 二六三	飯小本
寺院着座 花押あり	一冊 二六五	飯半
武臣嫁娶之式 川越公規式之次第 文化一二年春実揖書写	一冊 二二三	飯半
暁心院右大臣殿御筆 執筆次第 文政元初夏下院參議從三位左近衛權中將兼中宮權亮実揖花押	一冊 二五五	堅美半
禁腋秘鈔 左權少將実揖書写(長兄(公廸)本)	一冊 二四四	飯美
三條中山口伝 元禄二年基熙書写 文化二年公廸書写	一冊 二六六	堅美半
作法故実抄 右親衛郎將藤実揖書写	一冊 二四〇	小本
内外固実抄 文政元年宰相中將実揖花押	一冊 二四二	美

世事根元 完貞享丙寅(三)年正月 憑虚子 正五位
下花押 文政六年六月公正書写

岷湖入楚 薄雲

岷湖入楚 綜合

古印模写

年中行事

節会部類 元日 白馬

節会次第 外辨要 享保一二年右大臣藤原朝臣兼香
書写(清閑寺大納言治房本)

故殿御作 三節会次第 納言内辨要 清水谷家秘藏
享保七年内大臣藤原兼香(一条)

節会次第 参議要

踏歌節会次第 万治三年十二月晦日房輔書写

四節八座抄 享保元年臘月二四日右羽林雅季書写

三節会次第 納言要 左權中將藤原雅季 藏書印1

三節会参議備忘 權中納言藤原公正

節会部 千午將軍副内常侍藤実揖花押

妙音院節会抄 秘 左少將藤実揖花押 文明一四年
二月二七日兵部尚書藤花押影書写

白馬節会次第

白馬節会次将要 寛文一二年正月七日頼業書写
延宝五年十月二十日右近衛權少將藤原為経校合

白馬節会次第 無叙位儀 明応五年・文祿四年・
元和七年書写

賀茂杜造替 官旨写(安永六・享和元)

賀茂貴布祢木造始以下正權遷宮日時 享和度 賀茂
一社中

日次記(賀茂杜關係) (宝永七・天明四年)

賀茂臨時祭使備忘

放生会殿上 奏聞次第 享保一五年八月一五日

放生会 中右記 山槐記

新嘗会部類 裏松入道作

新嘗祭卜合備忘(嘉永六)

神嘗祭 侍徒要

豐明節会 納言内辨要 宝曆九年卯月二七日權中納
言(花押)書写

豐明節会次第 藏書印

豐明節会次第

豐明節会次第 宝曆六年十一月七日

恒例年中行事 寛政一一年八月朔日 千寿万歳御役
人小泉豊後代田原稻太書

近代年中行事細記

禁裡年中行事略 外題「当时内裏年中行事」

年中行事 実揖藏書印

後醍醐天皇年中行事 正平七年書写(中略)
実揖花押 表紙藤原実揖藏書印

参議要鈔 完 藏書印	假 豎美半	一冊	一七三
参議拝賀寛 寛政六年二月二四日	小本	一冊	一七三
参議拝賀私心覚	折紙	一通	一七三
参議要 賀茂臨時祭備忘 天保一五年三品羽林藤花押(二四才)(野宮羽林定功本) 書写	假 豎美半	一冊	一七三
参議執筆要 由奉幣 実搦花押	假 美	一冊	一七三
陣 次 第			
陣次第(慶長以降嘉永度迄) 嘉永五年八月 権大納言(三二歳) 書写(野宮羽林定功本)	假 豎美半	一冊	一六六
寛永以来陣之儀次第 享一五中繩 花押	豎美半	一冊	一六六
文政七年以後陣之儀次第	豎美半	一冊	一六七
諸陣之儀次第 藤原雅季藏書印	豎美半	一冊	一六六
次將本陣 中山忠頼卿・野宮定靜朝臣・東園基貞卿 藤公正	假 半	一冊	一六六
礼服御覧次第 宝曆一三年一月一八日 ※一丁目 丁間史料	折紙	二通	一六六
内大臣右近衛大将御拝賀次第并御着陣本陣等儀 ※一丁目丁間史料	假 横美	一冊	一六六
左大将中少将着本陣次第 寛政四年二月一七日 ※一丁目丁間史料	假 小本	一冊	一六六
定家御次第大將着陣次第先着本陣 権中納言藤原公正	半	一冊	一七三
内大臣路右近衛大将御拝賀公純公次第并御着陣本陣等儀 権中納言藤原公正	半	一冊	一七五

官職位階			
釈家官班記 上下 文明五年権中納言藤原胤書写	美	一冊	一三
官位惣要録	豎美半	一冊	一三八
官位次第 天明八年	假 半	一冊	一三九
官位次第 天明九年正月	假 半	一冊	一四〇
諸役	美	一冊	一三三
職原抄 上下	假 美	二冊	一三三
官位次第 寛政四年正月 左権中将藤原花押	假 豎美半	一冊	一三六
明治十五年六月十七日御改製御達旧女官御順席書	假 野紙	一冊	一三七
服 飾			
郢曲装束鈔 本奥書永正一二年六月・奥書享和四年 実搦花押	假 半	一冊	一八
装束目錄 享保一六年九月速水房常 姉小路家本書写 実搦花押	假 小本	一冊	一八
法体装束鈔 単 応永三年三月一八日藤原永行 左京藤原貞幹書写 表紙実搦花押	美	一冊	一八
照念院装束抄 完 応永二七年閏二月書写 享和二年書写 (野宮羽林定業朝臣本) 実搦花押	假 美	一冊	一八
物具装束抄 以花山院忠定卿自筆写令写事畢 延享二年一〇月一九日 左近中将家季書写	美	一冊	一八
近衛使装束色目并召具櫛馬・馬副居飼	美	一冊	一八
羽林中諸公事装束要抄 大永丁亥年 都督郎	假 美	一冊	一八
装束雜事鈔 狩衣 公廸書写	美	一冊	一八

臨時祭移鞍図	平文移	彩色図	仮美	一冊	六
衛府長装束事			仮半	一冊	六
野槐服飾抄	徳大寺家藏本	実搦花押	仮美	一冊	九
飾抄	文明一八年二月九日	権中納言藤原朝臣	美	一冊	三
装束秘抄			美大	一冊	三
衣紋図	全		仮美	一冊	六
布衣装束抄	享和四年左新衛郎将実搦花押書写		仮堅美半	一冊	六
雁衣部			仮堅半	一冊	六
文章不足口伝抄	永正三年写	文化元年十月中院	仮堅美半	一冊	七
中宮権大夫書写	(寺庭本)	同年十一月藤原実搦花押書写			
蛙鈔袍部	寛政四年公廸書写本	実搦花押	仮堅美半	一冊	六
更衣鈔			仮小本	一冊	九
狩衣色目	実搦花押		仮堅半	一冊	二
当時装束色目并雑々	清水谷家藏	寛文十年写	仮綴	一冊	二〇二
当時羽林服饒要覧	節会尋常夏冬		仮半	一冊	二四
野宮公答新井氏問車服制度年記	正徳二年		半	一冊	一五
蔵書印三種類					
修学院御所御幸供奉色目			仮半	一冊	二七
女院御移徙供奉色目	寛政二年二月四日		仮小本	一冊	一八
(服飾抄)			仮小本	一冊	二〇
(色目)			仮堅半	一冊	二五

色目部	乾坤	実搦花押	仮半	一冊	一〇一
色目部	追加異説	実搦花押	仮半	一冊	一〇二
(女房衆衣装之事)		実搦花押	仮半綴	一冊	一〇三
一條家記装束鈔出	秘	宝永六年	美	一冊	一〇三
閑土藤	徳大寺蔵印	公廸蔵書印			
装束七鈔	文応元年書写	享和元年拾遺補闕実搦	堅半半	一冊	一〇六
次将要抄	定家卿	奥書略	美	一冊	一〇三
桃花随葉并胡曹抄	明暦四年三月六日	清原忠廣	美	一冊	一〇三
諒闇服飾	右近衛権中将藤公正		仮半	一冊	一〇九
止毛考	河合顯良	文政一二年六月因幡伊良子憲叙序	美	一冊	一一三
実搦花押	清水谷家藏				
部類記					
管見拾掇	羽林拝賀部		仮半綴	一冊	一一一
中將様中宮権亮御兼任雜誌	享和二年四月二二日				
四辻家					
管見拾掇	参議拝賀部	上	仮半	一冊	一一一
(絵柄)	包紙あり	※一丁目丁間史料			
徳大寺公純書狀	三月三日	公純↓清水谷殿	切	一通	一一三
※二六丁目丁間史料					
管見拾掇	参議拝賀部	下	仮半	一冊	一一三
(下書力)	※一丁目丁間史料		半	一通	一一三
管見拾掇	拝賀部	扈從	仮半	一冊	一一四

（直衣始ニ付連軒之儀願狀）三月 一條殿御使↓ 清水谷中将様 ※表紙丁間史料	切	一通	三三〇一
（文政七年正月五日雜記） ※二丁目丁間史料	折	二通	三三四三
（中宮參駕一件綴） ※一五丁目丁間史料		一綴	三三四四
補管見拾掇 拝賀部 大臣・大将・大納言等	半	一通	三三五一
留御前出立之儀 ※二丁目丁間史料	仮 豎美半	一冊	三三五一
管見拾掇 山草部 一上	仮 半	一冊	三三五六
管見拾掇 山草部 二下 ※丁間史料あり	仮 半	一冊	三三七
管見拾掇 滝口之部	仮 半	一冊	三三八一
管見拾掇 袖結部	仮 半	一冊	三三八二
管見拾掇 辛酉革命雜事・同革命指掌・同革命 当否考	仮 半	一冊	三三九
管見拾掇 見聞画図部	仮 半	一冊	三三〇
管見拾掇 放生会上卿参議要 上 付、文化二年八月一五日参向下院極樂寺図	仮 半綴	一冊	三三二一
管見拾掇 放生会次将要 下 付、文化二年八月一五日参向下院極樂寺図	仮 半綴	一冊	三三二二
管見拾掇 妻室称呼部	仮 半	一冊	三三二三
管見拾掇 嫁娶部 女礼驍方 非簪執	仮 半	一冊	三三二一
（屋敷略図） ※三丁目丁間史料	半	一通	三三二三
御膳次第 ※三〇丁目丁間史料	半 折	一通	三三二三
（酒献上覚） ※三二丁目丁間史料	切	一通	三三三四
管見拾掇 紙部	仮 半	一冊	三三三四

管見拾掇 御七夜事	仮 半	一冊	三三一五
管見拾掇 東宮御書始次第 付勘例	仮 半	一冊	三三一六
（屋敷略図）	半	一通	三三一六
管見拾掇 御讓位節会部			三三一七
管見拾掇 東宮被渡御劍儀 御湯殿儀			三三一八
管見拾掇 一品宣下上卿要	仮 半	一冊	三三一九
管見拾掇 納言上卿 例弊発遣上卿要	仮 半	一冊	三三二〇
管見拾掇 歛喜乘院宮御葬送前後私誌 弘化二年自十月一日到同十一月	仮 半	一冊	三三二二
管見拾掇 記録年月便覧 麟 從延喜廿二年到仁平元年二月卅日	仮 半	一冊	三三二三
管見拾掇 立坊部 付、文化六年三月二十四日立太子前会参陣之備忘	仮 半	一冊	三三二三
立坊日所役次第 付、拜觀儀 文化六年 ※一丁目丁間史料	仮 半綴	一冊	三三二三
恵仁親王立太子儀 昭陽舎代 小御所東面 図 ※五四丁目丁間史料	包紙入	一紙	三三二三
（屋敷指図） ※五九丁目丁間史料	包紙入	一紙	三三三四
立坊次第 文化六年 ※六六丁目丁間史料	豎美半	一紙	三三三五
管見拾掇 着帶部 后妃 臣下	仮 半綴	一冊	三三三六
中宮御着帶参役之記 文化二年二月二五日			三三三六
補管見拾掇 中宮御着帶次第 文化二年二月二五日			三三三六

管見拾掇	橐囊部 上	※丁間史料「雛形」	假半綴	一冊	三三・一五	管見拾掇	内々番衆年中行事 中	假半	一冊	三三・四一
管見拾掇	橐囊部 下		假半	一冊	三三・二六	管見拾掇	内々番衆年中行事 下	假半	一冊	三三・四二
管見拾掇	節会立標部		假半	一冊	三三・二七	管見拾掇	寛政十二 二月参日公敬卿役送次第 文化七年八月公正写 (十六歳) 松木相公記の写 ※丁間史料	半折	一通	三三・四三
管見拾掇	車之部		假半綴	(合冊)	三三・二六	管見拾掇	内々番衆年中行事	假半	一冊	三三・四四
管見拾掇	輿之部	※八丁目丁間史料あり			三三・二九	管見拾掇	地理部 亜細亞洲 付、琉球談 (寛政二年九月刊)	假半	一冊	三三・四五
管見拾掇	家例部		假半	一冊	三三・三〇	管見拾掇	地理部 欧邏巴洲 付、天保四年阿蘭陀船入津風説書	假半	一冊	三三・四六
(清水谷公有和歌写)		※一四丁目丁間史料		一通	三三・三〇・二	琉人行列之図	嘉永三年一〇月来朝 版元津嶋堂	瓦版	一通	三三・四七
管見拾掇	旗旗部		假半	一冊	三三・三三	管見拾掇	曆部 上	假半	一冊	三三・四七
管見拾掇	弓矢部・胡籙部		假半	一冊	三三・三三	管見拾掇	曆部 下	假半	一冊	三三・四八
管見拾掇	劔部		假半	一冊	三三・三三	管見拾掇	曆部	假半	一冊	三三・四九
管見拾掇	武大刀部		假半	一冊	三三・三四	管見拾掇	大嘗会 己日節会私細記 凡例附	假半	一冊	三三・五〇
管見拾掇	武器部		假半	一冊	三三・三五	管見拾掇	大嘗会	假半	一冊	三三・五一
管見拾掇	馬具部		假半	一冊	三三・三六	管見拾掇	大嘗会 卯日次第略編集	假半	一冊	三三・五二
管見拾掇	履部		假半	一冊	三三・三七	管見拾掇	文政度御指図 ※表紙丁間史料	半	一通	三三・五三
管見拾掇	扇部		假半	一冊	三三・三六	管見拾掇	獣部 乾上	假半綴	(合冊)	三三・五三
管見拾掇	薦筵部		假半	一冊	三三・三九	管見拾掇	獣部 乾下			三三・五四
管見拾掇	薬師詣		假半	一冊	三三・四〇	管見拾掇	獣部 坤上			三三・五五
管見拾掇	饗饌部	※一丁目丁間「雛形」あり	假半	一冊	三三・四一	管見拾掇	獣部 坤下			三三・五六
管見拾掇	内々番衆年中行事 上		假半	一冊	三三・四二	管見拾掇	消息部	假半綴	一冊	三三・五七
小御所白図 (文化五年)		※二丁目丁間史料		一通	三三・四二					
包紙入										

管見拾掇	消息部	一冊	三三一九	管見拾掇	蟲部 孝	一冊	三三二六
管見拾掇	調度部	一冊	三三一五	管見拾掇	蟲部 悌	(合冊)	三三二七
管見拾掇	調度部 筥部	一冊	三三一六	管見拾掇	蟲部 忠	一冊	三三二六
管見拾掇	調度部 庖厨調度部	一冊	三三一六	管見拾掇	蟲部 信	一冊	三三二五
管見拾掇	調度部 屏風	一冊	三三一六	管見拾掇	魚部 鱗	一冊	三三八〇
管見拾掇	調度部 几帳	一冊	三三一六	管見拾掇	無鱗魚部 鳳上	(合冊)	三三八〇
管見拾掇	調度部 承塵 帽額 軟障 幔 幕 簾	一冊	三三一六	管見拾掇	無鱗魚部 鳳上	一冊	三三八一
壁代 垂布 行障 平張	承塵 帽額 軟障 幔 幕 簾	一冊	三三一六	管見拾掇	龜鼈部	一冊	三三八二
管見拾掇	調度部 台盤 衝重 机 神前案 文台	一冊	三三一五	管見拾掇	無鱗魚部 鳳下	一冊	三三八三
管見拾掇	調度部 茵 龍鬘 地敷 草墊 円座	一冊	三三一五	管見拾掇	魚部 龜	一冊	三三八四
管見拾掇	調度部 窪坏 佐良 鉢 壺 白瓷 青瓷 朱瓷 銀器 樣器 陶器 茶碗 土器 合子	一冊	三三一六	管見拾掇	書籍部	一冊	三三八五
碗 筥		一冊	三三一六	管見拾掇	着陣部 知	一冊	三三八六
管見拾掇	調度部 尺類 斗外類 權衡	一冊	三三一七	烏丸光政書伏(明後日陣奉行二付拝見願)		一冊	三三八六
管見拾掇	調度部 櫃	一冊	三三一六	光政↓清水谷殿 ※一二丁目丁間史料		一通	三三八六
管見拾掇	調度部	一冊	三三一六	管見拾掇	着陣部 仁	一冊	三三八七
管見拾掇	調度部 硯	一冊	三三一六	管見拾掇	着陣部 勇仁	一冊	三三八八
管見拾掇	鳥部 水禽 春	一冊	三三一七	管見拾掇	歲時春部 上	一冊	三三九一
管見拾掇	鳥部 原禽 夏	一冊	三三一七	(梅園日記抄) ※二九丁目丁間史料		一紙	三三九一
管見拾掇	鳥部 林禽 秋	一冊	三三一七	管見拾掇	歲時春部 下	一冊	三三九一
管見拾掇	鳥部 山禽 冬	一冊	三三一七	雛遊 ※二〇丁目丁間史料		一通	三三九二
管見拾掇	新嘗祭 侍從要	一冊	三三一七	管見拾掇	歲時夏部	一冊	三三九二
管見拾掇		一冊	三三一七	管見拾掇	歲時穰部	一冊	三三九二

管見拾掇	歲時冬部	飯半	一冊	三三二九	管見拾掇	枳門部	飯半	一冊	三三二三
管見拾掇	殿衾部	飯半	一冊	三三三四	管見拾掇	枳門部 一	飯半	一冊	三三二三
管見拾掇	住宅部	飯半	一冊	三三三五	節會部	御酒勅使 宣命使 祿所	飯半	一冊	三三二四
管見拾掇	寢殿以下事	飯半	一冊	三三六六	管見拾掇	雨儀節會部	飯半	一冊	三三一
管見拾掇	時勢興廢部 從寬正六年到永祿七年百ヶ年	飯半	一冊	三三六七	(宣命写)	文政三年一月一日 一五丁目丁間史料	半	一通	二五二
管見拾掇	時勢興廢 從永祿八年到天正十七年廿五年	飯半	一冊	三三九七	(宣命写)	文政四年正月七日 一五丁目丁間史料	半	一通	二五三
管見拾掇	時勢興廢 從天正十八年到慶長十九年廿五年	飯半	一冊	三三九八	管見拾掇	節會 次將 乾	飯半	一冊	三三二六
管見拾掇	時勢興廢 從元和元年到寛文四十五年	飯半	一冊	三三九九	管見拾掇	節會部次將 坊家奏 坤	飯半	一冊	三三二七
管見拾掇	烏帽子部	飯半	一冊	三三〇〇	管見拾掇	元日節會 外辨要 納言	飯半	一冊	三三二八
管見拾掇	草衣部	飯半	一冊	三三〇一	管見拾掇	元服部 春 敷設・冠具次第	飯半	一冊	三三一
管見拾掇	俗服部	飯半	一冊	三三〇二	滋野井公敬書狀(直衣一件故実)	公敬↓清水谷	切繼	一通	三三一
管見拾掇	布帛部	飯半	一冊	三三〇三	黃門殿 ※一四丁目丁間史料			一冊	三三一
管見拾掇	芸服部	飯半	一冊	三三〇四	縉紳愚記拔 ※七八丁目丁間史料		飯半	一冊	三三一
管見拾掇	諸紋部	飯半綴	一冊	三三〇五	元服次第(文政三年方鷹公正元服二付冠儀次第)		飯切繼	一冊	三三一
補管見拾掇	諸紋部	飯半綴	一冊	三三〇六	※七八丁目丁間史料		飯半綴	一冊	三三一
管見拾掇	諸紋部		一冊	三三〇七	管見拾掇	元服部 理髮 夏下		(合冊)	三三一
管見拾掇	諸紋部		一冊	三三〇七	元服次第(文化六年十二月四日益季元服加冠次第)		折	一通	三三一
管見拾掇	諸紋部		一冊	三三〇八	※表紙丁間史料		折	一通	三三一
管見拾掇	調味部 菜 海菜	飯半	一冊	三三〇九	左右理髮人作法		切	一通	三三一
管見拾掇	調味部 貝 鳥	飯半	一冊	三三二〇	理髮次第 ※二四丁目丁間史料		折	一通	三三一
管見拾掇	調味部 魚類	飯半	一冊	三三二一	管見拾掇	元服部 加冠 夏下		一通	三三一

管見拾掇 元服部 冠者 扶持 諸役 雜具供擲 秋	三三・一三
管見拾掇 雜々 参会	三三・一
(浅寡抄拔粹) ※表紙丁間史料	二通 三三・二
(浅源秘抄拔粹) ※一丁目丁間史料	一通 三三・三
(着座次第) ※一〇丁目丁間史料	一通 三三・四
管見拾掇 即位部 儀式 天	一冊 三三・一
(永享新式拔粹) ※表紙丁間史料	一通 三三・二
管見拾掇 即位部 儀式 介	一冊 三三・三
管見拾掇 即位部 敷設 乾付、文化一四年九月二一日即位圖	一冊 三三・六
管見拾掇 即位部 礼服 坤	一冊 三三・七
管見拾掇 即位部 儀式 地	一冊 三三・八
補管見拾掇 即位部 次将要	一冊 三三・九
補管見拾掇 改元雜陣備忘 下	一冊 三三・一〇
(正元二年改元記拔書) ※一八丁目丁間史料	一通 三三・二
補管見拾掇 草木草花部	一冊 三三・三
補管見拾掇 鎧之部 乾・坤	一冊 三三・四
補管見拾掇 賢所番仕日録 触穢中(文化九年內侍所附留・從天保十一年到同十二年賢所番仕日録) 実攝花押	一冊 三三・五
補管見拾掇 和哥内喜々 読良材集	一冊 三三・六
補管見拾掇 革部	一冊 三三・七
補管見拾掇 入木部	一冊 三三・八
南嶺遺稿拔書	一冊 三三・九
補管見拾掇 由奉幣次第 參議執筆要	一冊 三三・一〇
執筆備忘次第(文久三年二月一二日鴨社造替遷宮公卿勅使使定) ※表紙丁間史料	一通 三三・一一
補管見拾掇 恭光朝臣抄 正忌日隨役或否雜例 実攝花押	一冊 三三・一二
補管見拾掇 系圖	一冊 三三・一三
(藤原氏系圖下書) ※一〇丁目丁間史料	一通 三三・一四
補管見拾掇 中宮御用誌 (文化六十年)	一冊 三三・一五
補管見拾掇 伝宣案 上 (文化二年明治元年) ※表紙丁間史料三通あり	一冊 三三・一六
補管見拾掇 入寺并得度参会部(文化五年中山前大納言忠頼卿之備忘) 付、仙洞御所御興寄之図	一冊 三三・一七
補管見拾掇 補年預將之事	一冊 三三・一八
補管見拾掇 節会次将要	一冊 三三・一九
元日節会次將軍要 ※表紙丁間史料	一冊 三三・二〇
(坊家奏上二付拔書) ※表紙丁間史料	一通 三三・二一
(詠歌) ※一丁目丁間史料	一通 三三・二二
(詠歌) ※一丁目丁間史料	一通 三三・二三
補管見拾掇 改元定弔參伏之誌 上	一冊 三三・二四
補管見拾掇 小朝拝部并拜礼	一冊 三三・二五

(短冊) ※三丁目丁間史料

六点 三四・七三

補管見拾掇 天皇崩御 小番御免輩雜部(滋野公敬誌天保十一年十一月十九日仙洞崩御雜事・弘化四年新朔平門院御凶事略日次)

仮半

一冊 三四・八一

五辻豊仲書狀(大宮不例二付伺) 豊仲↓清水谷殿 ※表紙丁間史料

切

一通 三四・八二

補管見拾掇 国郡卜定部 執筆部 (文政元年三月二十二日)

仮半

一冊 三四・九一

(国郡卜定二付坊城俊明申入狀写) 三月一三日 俊明↓右大將殿・中宮權大夫殿・日野中納言殿・宰相中將殿・新左宰相中將殿 ※一丁目丁間史料

切繼

一通 三四・九二

(卜部氏之覺) ※一丁目丁間史料

切

一通 三四・九三

(参陣・退出時之覺) ※一丁目丁間史料

切

一通 三四・九四

補管見拾掇 和謂巷説部

仮半

一冊 三四・一〇〇

補管見拾掇 庭園雜艸部

仮半

一冊 三四・一三

補管見拾掇 公卿 雲客 節会日隨他役之例

仮半

一冊 三四・一三

補管見拾掇 和漢法帖部

仮半

一冊 三四・一三

補管見拾掇 諒闇服飾部 崩日并亮闇年表

仮半繼

一冊 (合冊) 三四・四一

涼闇中御作定 弘化四年丁未正月

一冊 (合冊) 三四・四二

補管見拾掇 賀茂葵祭部 服鎧

仮半繼

一冊 (合冊) 三四・五五

補管見拾掇 賀茂葵祭部 作法雜々

切

一通 三四・六二

(賀茂祭次第) ※四一丁目丁間史料

切

一通 三四・六三

(諒闇中賀茂祭記録抜粹)

仮半繼

一冊 三四・七七

諸芸・学問

書札礼・書道

下外記部 本奥書文安四年 式部大輔菅書写

美

一冊 一四

諸宣下事 全 明応二年二月權中納言藤原書写

美

一冊 一五

宣命 寛文四年五月一二日書写 寛文四年五月一二日書写(弘資卿本)

仮美

一冊 一六

宣命部類・位記宣旨 享保一三年六月一日

仮美

一冊 一七

(宣旨例文控) (享保九ノ明和四)

半

一冊 一八

傳宣草 藏書印1 享保六年八座羽林(雅季) 花押書写

堅美半

一冊 一九

傳宣草(傳宣抄)

堅美半

一冊 二〇

(文化一四年即位宣命・上官府等写)

仮堅美半

一冊 二一

御教書案 乾坤 宣秀卿 明応四年二月九日 藏書印1

美

二冊 二三

弘安以来自僧中還俗中書札礼 元禄四年書写

仮美

一冊 二五

書札礼 付故実 本奥書貞和三年一〇月洞院実夏書写

美

一冊 二五

入木管見鈔

美

一冊 二六

書法秘伝・短尺散形

半

一冊 二六

消息詞 大藏卿為長卿作 実揖花押

半

一冊 二六

倭点執筆法伝義 宝永元年孟夏 韜光子穿輯 藏書印1

仮美

一冊 二八

八法七十二形 藏書印1	美	一冊	三九	翁之大事 宝曆二年二月一七日尾張(松岡)雄淵識 享和三年四月上旬実揖花押書写	仮美	一冊	三七
三條西殿御息女へおしえ文	美	一冊	三五	詮舜阿闍梨行業略記(葦浦觀音寺第八世) 享保一十七年	美	一冊	三六
學問				東照宮奉幣發遣日時定次第	折紙	一通	一五
(勘出記) (文政八年、同九年)	美	一冊	二五	惇信院影遷座宝塔供養日時定次第	折紙	一通	一五
難波前大納言宗建卿勸物少々 実揖花押	仮半	一冊	三七	延経辨卜抄 花押あり	仮半	一冊	二
神祇				陰陽道			
菅大臣紅梅殿荒木天満略記 神主太田南畝源正守	仮美	一冊	四	吉日考秘傳 完(日法雜書) 清水谷家藏	美	一冊	三
壺井權現神階正一位宣下次第 元禄一四年一二月二二日 上卿權大納言篤親	仮豎美半	一冊	五	仮名曆本領名曆略註	仮罫	一冊	二六
五部抄	仮美	一冊	八	彗星略辨 天保一四年 陰陽助保救 朱書「陰陽寮勸進之文書写」	仮半	一冊	三四
東照大権現縁起	仮美大	一冊	九	和歌			
日光山縁起第一、第四	仮美大	一冊	一〇	詠歌之大概 前中納言藤原朝臣 (慶長十六年六月十月初河百韻連歌)	半	一冊	二九
造伊勢二所太神宮宝基本紀 天慶五年九月二三日 太神宮祢宜荒木田神主行真書写	仮美	一冊	二	時代不同歌合 後水尾院 藏書印1	仮豎美半	一冊	二四
御鎮座次第記	仮美大	一冊	二一	院御会留 正徳四年	升	一冊	二四
豊受皇太神宮御鎮座本紀 文治元年四月二一日祢宜高倫(祢宜光忠本)書写	仮美大	一冊	二二	詠歌一鉢 正徳元年書写 奥書「右老帖顯祖君故重相□純卿以御自筆令書写遂一校了 正徳元年初夏花押」	美	一冊	二二
(中臣祓抄・中臣祓松風抄・中臣祓一毛抄拔書)	仮半	一冊	二五	仙洞御百首和歌 通茂卿点	列帖装	一冊	二六
天書紀 正徳三年三月晦日源光海翁識 延享三年左近衛權中將藤原家季書写	半	一冊	二六	和謂御会奉行雜記 (貞享四、元禄一一年)	仮半	一冊	二五
柿本大明神神階正一位宣下次第 享保八年二月一日	仮豎美半	一冊	元		仮美	一冊	二六
吉田社内外院図 慶応三年一二月 清水谷殿家	袋入	一鋪	三七				

同題三百首 元禄一五年 奥書「右三百首八元禄拾五壬午年各同題仙洞御製 中院通茂卿 清水谷実業卿」	半	一冊	二六九
和歌御会始 明和七年正月二四日 詩哥会図	飯美 飯美	一冊 一冊	二五三 二七五
百人一首 奥書「享保九年応鐘中句 藤原基幸」	半 綴葉装	一帖	二七六
(百人一首色紙形書様)	美	一冊	二八五
絵讃集	飯小	一冊	二七七
亜槐集 ※飛鳥井雅親家集	半	一冊	二七九
古今和歌集上下 延宝二年三月発行 寛政一〇年九月重鐫 東都書林(前川六左衛門・大和田安兵衛) 藤原豐子	美 板本	一冊	二八三
須磨琴之事(古今和歌集) 藏書印	半	一通	二五四
菰之落穂 上下 奥書「慶応元丑晩冬 邦子美」	美	一冊	二八六
詠歌大概	列帖装 紐切	一冊	二八七
続現存集 春夏秋冬恋雜	美	六冊	二九五
太平撰三十六人和歌 天保四年三月三日 奥書「此一冊者天保四年四月十二日之夜亀齡二借テ同夜書之」	美	一冊	二九六
新撰一字抄 上下 奥書「元禄十四年八月中旬日」 藏書印1	美大	二冊	二九八
(古歌色紙形書様)	飯小	一冊	三〇一
十首懷紙書様事 持明院基春卿消息・一條殿御返事有之 本奥書「永正九七月十二日 基春」奥書「前略」七月十五日 御判	半	一帖	三〇二
(渡忠秋詠草)	切	一通	三〇二

短冊 未使用	18×3.8cm	一枚	三〇二
(伊勢物語) 古大納言実藤卿祖母(若狭少將勝俊妻) 藏書印 奥書「寛永六年霜月中之五日朱印 故大納言実藤卿祖母之筆跡 祖母者若狭少將勝俊朝臣妻」	列帖装	一帖	三〇三
未来記雨中吟 藏書印1 奥書「以待從中納言入道也足軒素了潤筆之本令書写校讎畢 万治第二冬十月中旬 弘實卿判(後略)」	半	一帖	三〇四
(清水谷実秋卿御筆之写)	断簡	一冊	三〇五
漢和連句	折	四紙	三〇六
千一種之形 下	美大四切	一冊	三〇七
和漢朗詠集 上 奥書「寛文八年春三月日藤定矩」 「右之一冊勘解由次官共経朝臣本借請令書写者也 延享元甲子冬臘左羽林家季」	美大	一冊	三〇八
覚書 扉題「詠歌制之詞二十四孝古哥聞書詠草留和歌ちとせ友成事」	飯半	一冊	三〇九
歌談・時文摘紙 平春海作	美	一冊	三一〇
定家卿八雲神詠口決相伝起請文 宝曆七年初夏 二八日權中納言書写花押	飯半	一冊	三一三
八雲口伝 弘長年間 融覚	美大	一冊	三一四
四條局口伝 安嘉門院四糸阿仏口伝・藤原為秀書	美	一冊	三一五
下卷 隣女晤言	飯半	一冊	三一六
元問弘答 全 延享元年初冬仲七左羽林家季筆写 (新源大納言長忠卿本)	美	一冊	三一七

顯注密勘 中下 花押・藏書印1 中冊奥書：康
 曆二年一〇月二日書写（中略）応永三〇年菊月一五
 日書写校合 下冊奥書：承久三年後一〇月一二日
 書写（中略）内大臣藤原書写（法恩寺本）

瑠璃壺 二条殿撰

醒泉院正二位前（寛保元年）相実業卿卅三回忌追善十首和歌
末尾「右追善和歌雅二位前權大納言藤原雅季勸進 題者飛鳥井中納言雅香卿」

心静酌春酒 寛保二年 ※寛保二年正月二四日和歌御
会始

後水尾院御製
藏書印1
雅季筆力

いその玉藻 明応八年一月二日 奥書「此一帖以幸仁親王御自筆之御本遂書而得四十八枚以不足仍又以三条西の本書続山科言御卿手跡之由且少々後十輪院通村公手跡相交也加校合畢三条西本十卷行也于時正徳四年初秋五日 藤原雅季」

老杖（数量和歌集）
蔵書印1・雅季蔵書印

類句

一葉抄（万葉一葉抄） 藏書印1 奥書「此一冊以冷泉前中納言為綱卿本染草筆後日可被書改者也享保第三仲夏 羽林雅季」

正風躰抄
藤雅季

九十賀 藏書印1 本奥書「貞治六年八月七日書寫了 羽林郎將藤 在判為重也」奥書「于時正德二四月三日花押 右一冊通夏卿自筆本借求令書寫重而可書改者也 正德五三月日 羽林雅季」

每月抄
藤雅季書寫

後水尾院百人一首御抄
花押
藏書印1
左中将藤雅季

近來風軼 輿書「此一卷道之數奇異他之間書遺松田丹州者也老聃事等不可為指南歟不可有他見也 嘉慶元年十一月十二日 後普光園撰政殿准三后御判（中略）天正十九曆蠟月初四亥旨判一校了」

詠歌ノ大概（後水尾院詠歌大概御抄）
季」藏書印¹

京極中納言相語書

十二月花鳥和歌書牋 奧書「文久二秋八月此一冊
新中納言実則卿二借請令書写者也 藤公考」

漢詩・漢文

詩法授幼抄卷之二 延宝七年二月青木勝兵衛・文台
屋治郎兵衛 藏書印¹

遣山詩鈔（元好問古今躰詩鈔）
故人神田実甫選

米寅先生繹
左近衛權中將兼中宮權亮実揖花押

文章規範牧評 全

書經繹解

小文規則 賴山陽著・春水序

孟子考

助字詳解 文化二年春稻川真民書写 実揖花押

伝

訪子虎米翁尺牘

詩經繹解

初學課業次第 林祭酒口授・佐藤一斎記

中庸釈解聞書

美
一冊
三〇

美
一
冊

美
一冊
三八

飯豎美半一冊二六四

假半板本一冊二七〇

美
一
冊
三
四

三十一

反
半
一
冊
三
五

飯半
一冊

假半
一冊

第一冊

—

一冊 三

假半
一冊
三四

假半
一冊
四

聞書大学衍義

(上経・下経)

(大雅)

論語觀意第一位之一・二 日本阿波藤田逸世逸学

男英茂述

毛詩考卷一〜三

東坡外伝

随筆

燧囊考

ふつくえのちり 二

秋斉問語 多田義俊 蔵書印1

新学考 実揖花押

年々随筆 (石原喜左衛門正明随筆)

紀行

高雄紀行 清水谷実業 宝暦三年初春参議家季書写
業室前並相所持本

菅笠日記上下卷 (明和九〜寛政六) 本居宣長 享
和二年四月大法師融海

草まぐらの日記 (安永二〜天明八年)

源斐雄東行日記 文化十五年弥生 源斐雄

東国紀行 源親行

語学

名目鈔 全 林和泉掾時元板行 蔵書印

かなづかい

伊呂波類聚 上下

虚字略解 似月先生詮訳

増補古言梯標注 全 弘化四年春刊 山田常助増補・
江戸書林英文蔵梓

源語秘訣 蔵書印1 本奥書慶長一八年曆季二四日
法橋昌琢書写 正徳三年書写

国風之事 親衛中郎將副内常侍実揖花押

国郡名目

(仮名名目) 清水谷公揖

茶道

(茶道秘伝)

胸中控 (茶人辻宗範茶記) 嘉永四年〜安政五年

香道

倫閑録

御香書

雅楽

風管之譜 延徳三年一二月繁秋一校

楽目録八十七曲 万延二年 公考書写 (綾小路按察
前大納言本)

その他

毛利士尊天略縁起(梦中梦) 日)	(万延三年八月一八日)	仮半	一冊	三六
(頼真京注進状断簡写)	天文十九年六月二十七日	豎	一通	三三
山陵探索始末書	疋田棟隆	仮美	一冊	三〇
後嵯峨御真陵探索草稿	慶応二年仲秋 疋田棟隆	仮半	一冊	三七
都良香	大日本史祓集	一部野紙	一冊	三七
富家語拔書	天明三年左京藤原貞幹	仮豎美半	一冊	三三
塞驢嘶余	文化三年実揖花押書写	仮半	一冊	三九
山業秘録全	文久三年七月四日、十七日 関定吉	仮横美半	一冊	三四
和漢画手本 書写	蔵書印五種類 文化五年五百蔵小善	仮半	一冊	二六
(雑記録)	断簡	一括		三七

今出川家

日記

日記	安永八年自正月一日到十二月廿九日	内教坊	仮小	一冊	至一
別当權大納言藤原実種花押	二十六歳				
日記	安永九年自正月一日到十二月廿九日	權大納	仮小	一冊	至二
言藤原実種花押	二十七歳				
日記	安永十年自正月一日到三月廿九日	内教坊別	仮小	一冊	至三
当權大納言藤原実種花押	二十八歳				

山城国乙訓郡長野新田村三宅家文書目録

山城国乙訓郡長野新田村三宅家文書目録解題

一、長野新田村三宅家文書の伝来と整理の方針

三宅家文書は、山城国乙訓郡長野新田村（現在の京都府京都市西京区大枝）の三宅家に伝存した文書群三八四点で、一九五八年度に当館が三重県古書店から購入したものである。長野新田村は昭和四七年（一九七二）からの洛西ニュータウンの開発によって、京都市のベッドタウン化が著しく進められている地域であるが、三宅家の菩提寺である称念寺（京都市西京区大枝塚原町）に連絡をとったところ、三宅家は現在も旧来の地に居住されていることがわかった。そこで、さっそく三宅家（京都市西京区大枝東長町）を訪れ、所蔵されている家歴を拝見させていただいた。明治一八年（一八八五）五月に第六代善藏氏が調べた「墓籍」一冊、同じく同年九月改めの「戸籍」一冊、および「家歴」一冊である。三宅家の母屋は近年立て替えられたものだが、門付近は往事の面影を残しているという。ただし、本年（一九九五）一月の阪神・淡路大震災により、五つあった土蔵のうち四つを崩したとのことで、土蔵のあった裏庭は更地となっていた。三宅家では、土蔵を崩す際に桐箱に納められた稻荷社勧請の裁許状一通が見つかった他には、文書などは伝存していない。

本文書群の内容は、後述のように近世後期から明治初年にかけての三宅家の家に関わる文書が中心であるが、一部に長野新田村の庄屋役・戸長役を勤めた際に作成・授受された文書を含んでいる。その関連では、同じく長野新田村の庄屋を勤めた松木家文書（京都市西京区大枝西長町）の存在が知



三宅家の門（1995年11月18日撮影）

られている。これは、松木弥一郎氏の所蔵になる近世中期から明治初年にかけての村方文書約二五〇点である。両者を付け合わせることににより、三宅家文書の性格をより具体的に明らかとする手だてとした。なお、松木家文書の閲覧は、京都市歴史資料館（京都市上京区寺町通丸太町上る）所蔵の写真版を利用させていただいた。以下で引用する史料については、松木□□号と（ ）内に示すことにする。

京都市では『史料京都の歴史』を刊行しており、その第一五巻「西京区」の中に長野新田村に関する史料が翻刻されている。今回それらの多くを参考とさせていただいたが、同書翻刻史料のうち「長野新田村文書」として紹介されている文書は、当館所蔵三宅家文書のことである。利用者においては、その点に十分留意されたい。

当館では受け入れ以後、仮整理による出納カードで閲覧に供してきた。今回、一点ごとの細目録を作成するにあたり、これまで付与されていた仮整理番号を活かし、一括で扱われてきたものについては枝番号を付与した。

形態については、多くの文書は美濃判・半紙判の大きさの書付型文書であり、それぞれ美・美繼・美切、半・半繼・半切と表記した。美濃判より大判の奉書紙などの料紙を用いた書付型文書については、堅と表記した。明治九年（一八七六）以降の罫紙を使用した文書は罫と表記し、版心を注記するようにした。

書付型文書の名称については、古文書学的に定義された統一名称を付与することも考慮したが、村方文書の場合には次のような点が懸念される。まず、近世社会においては文書主義の広範な浸透により、さまざまな階層の人々がさまざまな文書様式によって文書を認めている。こうした文書様式の多様性に加えて、借用証文ひとつをとっても地域ごとに文書表現に差異があるという地域性の問題がある。近年においては、その文書表現の地域的差異により、地域の歴史認識の違いを捉えようとする試みもなされつつある。文書は各地域ごとの秩序体系の中で作成・授受されているのであって、そうした地域ごとの文書秩序の解明がなされていない現段階において、村方文書に全国統一的な名称を付与することは、各地域の豊かな文書認識を切り捨てることにつながるのではないかと考える。したがって、書付型文書については、書出文言（柱書）を表題に採用し、（ ）内に内容から判断される古文書学的名称を併記するよう心がけた。これにより、文書表題が二行にわたることになり、目録の検索が煩雑になることが目録表記上の難点といえるが、こうした一つ一つの積み重ねは村方史料論を構築する上での基礎的作業であり、その蓄積

があつてこそ目録記述の標準化の問題も具体化されると考えてのことなので、その点をご理解いただきたい。

二、長野新田村三宅家の歴史

三宅家 三宅家は長野新田村の庄屋・戸長を勤めた家である。世襲名は善藏、屋号を「木屋」といい、三宅家の伝によれば、材木業を営み、通称「木善」として知られていたという。本文書群は近世後期から明治初年にかけてのものが中心であり、近世前期の三宅家の活動はよくわからない。家歴によれば、初代善五郎は貞享二年（一六八五）の生まれ、宝暦十三年（一七六三）に没というから、長野新田村が成立したとされる元禄七年（一六九四）頃には一〇歳前後だったことになる。善五郎の名の史料上の初見は、宝暦十一年（一七六一）の「切死丹宗門御制禁寺請帳」（松木一〇〇号）で、次のようにある。

年六十七才	女房五十三才	悴廿六才	同十八才
一 善五郎	ふし	善九郎	石之助
同十四才	娘十二才		
長太郎	はや		

この宗門帳の年齢から善五郎の生年を逆算すれば、元禄八年（一六九五）生まれということになる。松木家文書には、この年以外にも多くの宗門改帳を伝存しているが、それらの記事は必ずしも三宅家に伝わる家歴と一致しない。ここでその一々を詳細に検討することはせず、後掲の系図も三宅家に伝存する家歴三冊をもとに作成した。利用者はその点に留意してほしい。

初代善五郎の長野新田村内における持高は、不明である。二代善九郎については、安永六年（一七七七）の「家数人別附牛馬員数帳」（松木一五五号）では、持高二石四斗四升となっている。第1表には、長野新田村の高持百姓の分布とその推移を示した。安永六年の村高は八三石八斗三升五合であり、高持百姓のうち約三分の一が一石以下の小百姓で、持高の多い家でも八石程度であった。安永八年の「御請書」（松木家文書一

八三号)では、庄屋一・年寄一・高持百姓二七・無高百姓一四名の名があり、善九郎の名は高持百姓の二一番目に見える。

本文書群の中には、嘉永二年(二八四九)の「浄土宗門御改寺請并家数人数別牛員数帳」(史料番号七一)がある。それによれば、三宅家は西山派浄土宗称念寺(塚原村、現在は西京区大枝塚原町)の旦那で、家族構成は、善蔵(五三歳)、妻きし(四三歳)、倅亀次郎(二四歳)、娘うの(二五歳)、倅梅次郎(二三歳)、倅栄次郎(一五歳)、倅幸三郎(五歳)の七人となっている。持高は、二八石五斗三升七合貳勺で、外に五斗七升八合八勺は市左衛門に譲ったとある。屋敷(長一九間・横一九間)、本家(梁三間・桁五間)、土蔵二軒(梁二間・桁四間半、梁二間・桁五間)、小屋四軒(梁二間・桁二間半、三間四方、梁二間・桁三間、梁二間・桁四間半)とある。

文政元年(一八一八)の「寅年免割帳」(史料番号四一)では、三宅家の持高は二九石余りに増加しているほか、「善蔵預り」とある六筆の総高一四石余がある。第2表は、三宅家の長野新田村内における持高の推移である。断片的な史料しか残されていないので確定的ではないが、享和三年(一八〇三)から文政元年(一八一八)にかけてのわずかに一〇年間に急速に持高を増やしたことがわかる。次に、明治六年(一八七三)一二月の「高附免割扣帳」(史料番号四一三)から善蔵の持高を示しておく。

一、元高式拾四石四斗七升四合貳勺 三宅善蔵
内

本畑元高 四石三斗九升九合 取壺石七斗壺升五合六勺

第2表 三宅家持高変遷表

年 代	石 高
安永6 (1777)	2.440
天明2 (1782)	2.440
天明4 (1784)	2.440
天明5 (1785)	2.440
天明6 (1786)	2.440
寛政元 (1789)	1.750
寛政2 (1790)	1.741
寛政3 (1791)	2.191
寛政4 (1792)	2.191
寛政6 (1794)	2.191
寛政7 (1795)	2.191
寛政8 (1796)	3.755
寛政9 (1797)	3.755
寛政11 (1799)	3.755
寛政12 (1800)	3.911
享和元 (1801)	3.911
享和2 (1802)	4.091
享和3 (1803)	4.091
文政元 (1818)	29.737
文政10 (1828)	29.171
嘉永2 (1849)	28.237
嘉永3 (1850)	28.237
万延2 (1861)	25.742
慶応3 (1867)	25.742

註：松木家文書、三宅家文書より作成

第1表 長野新田村石高分布表

石 高	安永6年	寛政3年	慶応4年
1未満	11	14	18
1～	5	7	6
2～	6	6	3
3～	3	3	1
4～	4	2	1
5～	1	4	0
6～	1	1	0
7～	0	0	0
8～	2	0	0
9～	0	0	0
10～	0	0	0
11～	0	0	0
12～	0	1	0
13～	0	0	0
14～	0	0	0
15～	0	0	1
23～	0	1	0
25～	0	0	1
計	33	39	34

出典：松木家文書125、14、231号より作成

式ツ元高 五石壹斗七舛六合式勺 取壹石三舛五合式勺

壹ツ五厘高 拾三石六斗七合 取壹石四斗式舛八合七勺

田荒元高 壹石三斗式合 取壹斗三舛

山年貢 三斗壹合五勺

口米 壹斗三舛八合四勺

メ 四石七斗四舛九合四勺

本文書群には、長野新田村以外の村民と善蔵が交わした借用証文を多く伝存しているので、三宅家は長野新田村を中心に幅広く当該地域において地主経営を展開したと考えられるが、三宅家の経営を知る史料が伝存していないため、多くの検討課題を残している。

長野新田村 長野新田村は、物集女・沓掛・塚原三村の入合地であった長野芝地（二町五〇間、三町四〇間）を京都町人岸田佐治兵衛が元禄一年（一六九八）に開発したと伝えられる。「京都府誌」にはその開発を元禄七年としているが、同一三年取り調べの「元禄郷帳」には長野新田村の名はみえない。元禄一五年小堀克敬らによって検地が実施され八三石の村高が定められ、ここに長野新田村は正式に成立した。「享保村名帳」では八三石余りで、そのうち九舛六合が小倉家領となった他は、すべて幕府代官玉虫左兵衛領であった。天明三年（一七八三）には新たに三〇石余りが村高に繰り入れられて村高は一一四石余りとなり、「天保郷帳」「旧高旧領」においても変わらなかった。慶応四年（一八六八）閏四月の京都府立庁により、乙訓郡はその所轄下に置かれ、第三区長野新田村となった。明治六年（一八七三）の「田畑潰地并荒地其外取調一筆限」（松本二〇〇号）では、乙訓郡第六区長野新田村となっている。明治九年七月には、岡新田村（反別一九町六反二畝二歩、戸数一五、人口六九）と長野新田村（反別三〇町九反四畝一〇歩、戸数三四、人口一七一）が合併し、明治二二年には沓掛・塚原村の両村と合併して大枝村が成立した。昭和二五年（一九五〇）には京都市に編入された。

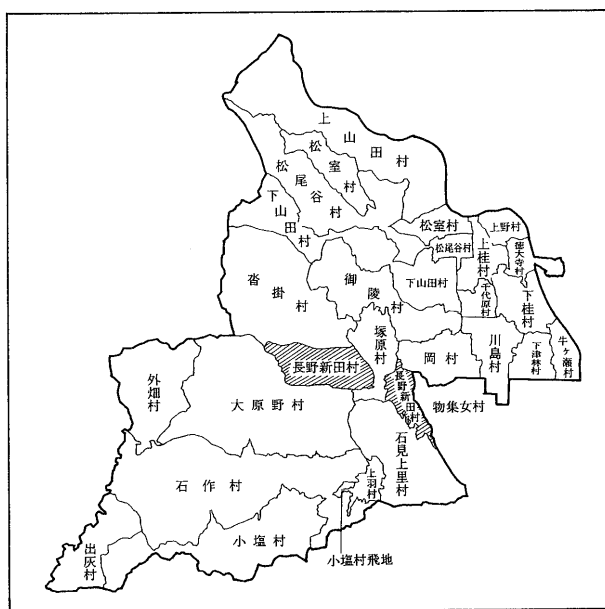
長野新田村の村域は、塚原村を挟んで東西に二分されている。東部は小畑川東岸にあり、北を葛野郡岡村、東を物集女村、南を石見上里村、西を塚原村に接した。西部は千丈新田とよばれ、北を岡新田・沓掛村、東を塚原村、南と西を大原野村に接した。長野新田村の開発は、山林田

畑を適当な大きさに分割した「株」という地域割りの単位で行われたという。また、町人請負新田であるため、村に居住しない高持が多く、かわりに村には新田支配人が置かれていた。現在の東長町の町名は東長野新田の略称であり、西長町は西長野新田の略称である。つまり、庄屋を勤めた三宅家は長野新田村の東部に、同じく松木家は同村の西部に居住していたことになる。

長野新田村の村役人は、庄屋・年寄・百姓惣代（頭百姓・百姓代）の各一名づつを置き、五人組制のもとに村運営をおこなっていた。第3表には、管見の限りで長野新田村の役人変遷を掲げた。通覧してわかるように、同村は村役人の世襲制をとっておらず、松木（重兵衛）、安井（源右衛門・文四郎）、中尾（善兵衛）、水谷（久治郎）の家々の持ち回りであった。三宅家が村役人に就任した時期は、文化期の史料が散逸しているので確定できないが、文化一三年（一八一六）に善蔵が庄屋役を勤めたのが初見である。

長野新田村の惣人数は、安永六年（一七七七）は二〇六人（男一〇三人・女九九人・僧四人）、宝暦九年（一七五九）で二二二人（男二一人・女九〇人・僧四人）、寛政三年（一七九二）で一六八人（男九二人・女七二人・僧四人）、嘉永二年（一八四九）で一七二人（男九五・女七七）であった。村民は大原野村西迎寺（浄土宗）・塚原村称念寺（同）・伏見風呂屋町西方寺（一向宗）の旦那で、長野新田村内には養雲庵（黄檗宗）・円澄庵（律宗）の二軒があったが、旦那はいなかった。

村にかかる小入用は年々異なるが、三代善蔵が庄屋を勤めた時期の小入用帳が二冊ある。そのうち、文政一〇年（一八二七）のものを参考までに掲げておく。



注)『史料京都の歴史』15. 西京区より作成。

第3表 長野新田村村役人変遷表

和 曆	西曆	庄 屋	年 寄	百 姓 惣 代	出 典
享保12年6月	1727	岸田佐次兵衛	中原太左衛門		松木10
宝暦9年5月	1759	喜兵衛	徳兵衛		松木15
宝暦11年5月	1761	喜兵衛	重兵衛	頭百姓佐次兵衛	松木109
宝暦14年3月	1764	喜兵衛	十兵衛	頭百姓佐次兵衛	松木5、73
明和元年7月	1764	喜兵衛	重兵衛		松木182
明和8年5月	1771	源右衛門	重兵衛	百姓惣代久右衛門	松木55
明和8年6月	1771	源右衛門	十兵衛		松木52
明和8年11月	1771	源右衛門	重兵衛		松木6、72
安永6年4月	1777	源右衛門	重兵衛		松木125
安永6年11月	1777	源右衛門	重兵衛	百姓惣代九郎兵衛	松木186
安永8年8月	1779	重兵衛	源右衛門		松木183
天明2年4月	1782	重兵衛	源右衛門		松木104、124
天明2年12月	1782	喜兵衛	重兵衛		松木12
天明3年3月	1783	重兵衛	源右衛門		松木102～106
天明3年8月	1783	重兵衛	源右衛門	百姓惣代善兵衛	松木33
天明4年3月	1784	重兵衛	源右衛門		松木92～95、137
天明5年3月	1785	重兵衛	源右衛門		松木96～98、138
天明6年3月	1786	重兵衛	源右衛門	百姓惣代善兵衛	松木13
天明7年3月	1787	重兵衛	源右衛門	百姓惣代善兵衛	松木108、132
天明7年4月	1787	重兵衛	源右衛門	頭百姓善兵衛	松木7、70
天明8年5月	1788	重兵衛	源右衛門	百姓惣代善兵衛	松木76、110
寛政元年8月	1789	重兵衛	文四郎	百姓惣代善兵衛	松木8、9、39、51
寛政2年8月	1790	重兵衛	源右衛門	百姓惣代善兵衛	松木21
寛政3年3月	1791	重兵衛	九郎兵衛	百姓惣代善兵衛	松木14、11
寛政4年8月	1792	重兵衛	九郎兵衛	百姓惣代善兵衛	松木44、145
寛政5年2月	1793	重兵衛	九郎兵衛	百姓惣代善兵衛	松木24
寛政6年3月	1794	重兵衛	九郎兵衛	百姓惣代善兵衛	松木117、118
寛政7年3月	1795	重兵衛	九郎兵衛	百姓惣代善兵衛	松木59、119
寛政8年3月	1796	重兵衛	九郎兵衛	百姓惣代善兵衛	松木127～130
寛政9年3月	1797	重兵衛	九郎兵衛	百姓惣代善兵衛	松木131、146
寛政10年3月	1798	重兵衛	九郎兵衛	百姓惣代善兵衛	松木53、120、147
寛政11年3月	1799	重兵衛	九郎兵衛	百姓惣代善兵衛	松木121、148、149
寛政12年3月	1800	重兵衛	惣治郎	百姓惣代善兵衛	松木122、150
享和元年3月	1801	重兵衛	惣治郎	百姓惣代文四郎	松木123
享和2年3月	1802	重兵衛	惣治郎	百姓惣代文四郎	松木111、152

享和3年3月	1803	重兵衛	惣次郎	百姓惣代文四郎	松木134~136
享和4年3月	1804	重兵衛	惣次郎	百姓惣代文四郎	松木157
文化2年3月	1805	重兵衛	惣治郎	百姓惣代文四郎	三宅8
文化3年3月	1806	善兵衛	久次郎	百姓惣代与左衛門	三宅7-1
文化4年	1807				
文化5年	1808				
文化6年3月	1809	与左衛門	久次郎	重兵衛	松木80、234
文化7年	1810				
文化8年3月	1811	庄藏	久治郎	百姓代重兵衛	松木85
文化9年3月	1812	庄藏	久治郎	百姓代重兵衛	松木84
文化10年	1813				
文化11年	1814				
文化12年	1815				
文化13年2月	1816	善藏	重兵衛		三宅12
文化14年12月	1817	善藏	重兵衛	百姓代久次郎	松木46
文政元年3月	1818	重兵衛	惣次郎	百姓代文四郎	松木79、156、189
文政2年一	1819	善藏	重兵衛	百姓代久治郎	
文政3年3月	1820	善藏	重兵衛	百姓代久次郎	三宅4-1
文政7年6月	1824	善藏			三宅38-6
文政7年10月	1824	善藏			三宅38-7
文政8年12月	1825	善藏			三宅39-17
文政10年3月	1827	善藏	与左衛門	百姓代久次郎	三宅9-1
文政10年5月	1827	善藏	与左衛門		三宅14-1
天保4年3月	1833	重兵衛	久治郎	百姓代文四郎	松木188
天保7年2月	1836	重兵衛	安兵衛		三宅60-3
天保9年2月	1838	重兵衛			三宅25
弘化2年3月	1845	重兵衛	久兵衛	百姓代与左衛門	松木82
嘉永2年	1849	善藏	善兵衛	百姓代安兵衛	三宅7-2
嘉永5年3月	1852	善藏	与左衛門	百姓代安兵衛	三宅9-2
万延2年3月	1861	文四郎	安兵衛	百姓代与左衛門	松木145
慶応4年3月	1868	文四郎	清兵衛	百姓代弥平次	松木154

註、松木家文書、三宅家文書により作成、史料番号は出典に示した。

不明の年は空白にしてある。

戌年小入用

一	銀貳匁五分八厘	小倉様越高上納
一	銀拾匁七分八毛	未年御国役上納
一	銀九匁八分五厘八毛	御公儀様人足賃割
一	銀六拾三匁四厘八毛	雇馬賃錢割
一	銀五匁六厘八毛	女御御殿 里御殿 御修復入用
一	銀拾貳匁四分一厘貳毛	申年御国役上納
一	銀七拾四匁六分八厘	御口米壺石貳舛六合代
一	銀九匁八分	土砂御奉行様人足入用
一	銀五匁一分	御廻状賃錢
一	銀六匁貳分	諸勧化合力
一	銀六匁	村々参会入用
一	銀八匁五分	諸帳面筆料
一	銀貳拾目五分	御上納掛置入用
一	銀三匁貳分	紙墨蠟燭代
一	銀七匁五分	御用節飯代
一	銀七匁	山川筋普請竹木代
一	銀貳匁四分	茶料
一	銀拾匁匁	村入用

一 銀百三拾五匁五分六厘 庄屋給米代

一 銀六拾目 年寄給米代

一 銀六匁七分七厘 惣代給米代

一 銀七拾七匁 常使給米代

ノ五百四拾四匁八分八厘四毛

高壺石二付

四匁七分五厘掛り

右之通去戌年小入用銀、書面之通庄屋年寄惣百姓出作之者迄立会割賦仕候処、少茂相違無御座候

以上

一 高貳拾九石壺斗七舛壺合 善 藏(印)

一 高貳石壺斗貳舛三合 久次郎(印)

一 高三石八斗七舛五合 九兵衛(印)

一 高三斗六舛 半次郎(印)

一 高貳斗六舛 安兵衛(印)

(三五人分中略)

一 高五斗 与左衛門分 善藏預り(印)

一 高壹斗七舛五合

惣兵衛分
善藏預り(印)

一 高貳石七合

伊勢講(印)

一 高五斗三舛七合

惣畑(印)

右之通惣百姓連印取之奉指上候、以上

城州乙訓郡

長野新田村

文政九戌年

庄屋

善藏(印)

年寄

与左衛門(印)

百姓代

久次郎(印)

小堀主税様

御役所

三、長野新田村三宅家文書の性格と階層構造

当館所蔵の三宅家文書は、安永五年(一七七六)から明治三三年(一八九九)におよぶ総点数三八四点の文書群である。その内容はおもに、長

野新田村の庄屋役・戸長役に関わって作成、授受、保管された文書と、三宅家の家の運営に関わって作成、授受、保管された文書に分けられる。したがって、大項目には、「庄屋（長野新田村）」、「戸長（長野新田村）」、「三宅家」の三項目を立てた。以下、それぞれについて説明を加えておきたい。

庄屋（長野新田村） 長野新田村の庄屋役を勤めるにあたり、作成、授受、保管された文書三〇点がある。長野新田村の村役人は、庄屋・年寄・百姓惣代（百姓代・頭百姓）の各一名づつが置かれ、村政の運営にあたっていた。庄屋は世襲ではなく、第3表のように交代制が取られていた。文化期の史料が散逸しているため確定的ではないが、三宅家が村役人に就任した初見は文化一三年（一八一六）で、三代善蔵が庄屋役に就任している。それ以前に庄屋役に就任していた可能性もあるが、以後は善蔵が庄屋役につくことが多かった。ただし、本文書群には三宅家が庄屋役に就任した際に作成、授受、保管された文書はわずかにしか残っていない。逆に、松木家文書には善蔵が庄屋を勤めた時期の文書が、ほとんど欠落している。長野新田村における村方文書は、庄屋役の交替によって引き継がれなかったのではないかと思われるが、三宅家・松木家ともに庄屋役を勤めていない時期の村方文書を含んでいるため、今後の検討課題である。

中項目には「支配」、「土地」、「年貢」、「戸口」、「村政」をたてた。「村政」には、小項目としてさらに、「小人用」、「夫食」、「普請」、「諸願・諸届」、「寺社」を立てたが、いずれも断片的な史料しか残っていない。

長野新田村では毎年三月頃に宗門改帳を各宗派ごとに作成した。松木家文書のなかには、天明から寛政期にかけての宗門改帳が残っており、各宗派ごとに四冊ないし五冊が作成された。本文書群には二冊伝存している。まず、文化三年の宗門改帳四冊のうちの一冊のみが伝存しているが、これは三宅家の庄屋時代のものではない。もう一冊は善蔵が庄屋を勤めた時の作成文書で、浄土宗・一向宗・禅宗・律宗分を作成し、さらに巻末に「家数人別寄書帳」、「五人組名前帳」を付けて一冊にまとめられており、松木家文書の帳簿作成の仕様とは異なる。

戸長（長野新田村） ここには、戸長の役職に関わって作成、授受、保管された文書を収めた。中項目には「土地」、「租税」を立てたが、点的にはわずかである。明治一〇年（一八八七）に戸長三宅善蔵（史料番号一〇）とあるのは、おそらく五代善蔵のことと思われるが、戸長の就任時期など不明である。分家の三宅清兵衛が戸長を勤めた明治九年には、善蔵は収穫評価人として村政に関わっているが、これもあわせてここに

収めた。

三宅家 まず「家系」に関する文書は、明治五年に三宅家に縁組した林與兵衛の妹こまの送籍状が一通あるだけで、ほかに三宅家の由緒や系図などを知る文書は、本文書群のなかには一切伝存していない。次に、「家計」は三宅家の経済状況を示す文書を集めた。「経営」は本文書群の中心をなすもので、さらに小項目として、「金融」「争論」「裁判」「奉公人」を立てた。

三宅家は初期の長野新田村における持高からみても、その発展は材木商としての資金力をもとに貸付をおこない、土地の集積をはかったものと推測されるが、三宅家の材木商としての経営を知ることのできる文書は残念ながら伝存していない。文書の中心となるのは、地主経営の一端を示す江戸後期から明治にかけての証文類であり、「金融」のなかに収めた。これらの証文類は、三宅家の経営規模の拡大を如実に表している。それらの特徴について、簡単に説明しておく。

まず、証文類二九三件は、寛政三年（一七九一）を初見として文化期以降集中して多くなり、以後は明治期まで続いている。これはちょうど三代善蔵が長野新田村の庄屋に就任する時期と重なっており、文化年間（一八〇四―一八一八）が三宅家の経営において一つの画期をなすことを示している。三代善蔵は、天保四年（一八三三）七月八日に七四才で没した。

貸付の範囲は長野新田村のみならず、他村にも及んでいる。もつとも多いのは、塚原村の五二件で、上里村の四〇件がこれに続く。他には、沓掛村・川島村・岩見村・岡新田村・中山村・大原野村などの村名が見える。三宅家の持高は長野新田村のものしかわからないが、他村も含めるとかなりの土地を集積していったと推測される。

これらの証文類は、ある時期にその機能ごとに一綴りにまとめられて管理されたと思われるふしがある。まず、史料番号二五の綴りは、本物返証文が一綴りになっている。本物返し（ほんもつかえし・ほんものかえし）とは、ある年限を定めて土地を売却する年季売りの方法である。畿内地域で一般的に見られる土地売買証文で、売却金を返却すれば本の土地を請け返すことができた。しかし、そのなかにはさらに善蔵から借金を増額して田地を永代譲渡に切り替えたものがあり、その場合には添証文が付けられている。

最初から土地を永代譲渡（売渡）する永代譲渡証文類は、まず善蔵を宛所とする証文が一綴りにまとめられている（史料番号二七）。同じく永

代譲渡証文であるが、善蔵以外の宛所をもつ証文類が一綴りある（史料番号二八）。また、借用証文では、担保引当のある借用証文が一綴り（史料番号三八）、無担保の信用借し証文が一綴り（史料番号三九）ある。これらの証文類は明治一〇年代のものを含むことから、こうした証文類の整理は明治一〇年代以降におこなわれたと考えられる。

他に土地の相続や貸借関係をめぐる争論や裁判に関する文書がある。それぞれ「争論」、「裁判」の小項目を立てた。特に、天保七年（一八三六）の長野新田村百姓後家むめの相続に関しては、今里村・塚原村・大原野村・長野新田村内千丈から扱人を立てて内済をうけている。

奉公人請状は文政七年（一八二四）から文久元年（一八六二）にかけてのものが八通あり、いずれも長野新田村の近隣の村から受け入れている。「その他」では、三宅家は明治期に学校経営と関わっていたと思われる文書がある。断片的なものであるため、便宜的に「その他」の項目で扱った。

以上のように、当館所蔵の三宅家文書は、村方文書および地主経営文書の性格を有しているが、いずれもその多くを散逸している。今後の追跡調査等により、関連文書が発見されることを期待したい。

〈付記〉

本文書群の解題を書くにあたり、三宅家から貴重な家歴を拝見させていただいた。ここに深く御礼申し上げたい。また、松木家文書の閲覧に際しては、京都市歴史資料館の方々に大変お世話になり、数々のご教示をいただいた。あわせて感謝の意を表したい。

〈参考文献〉

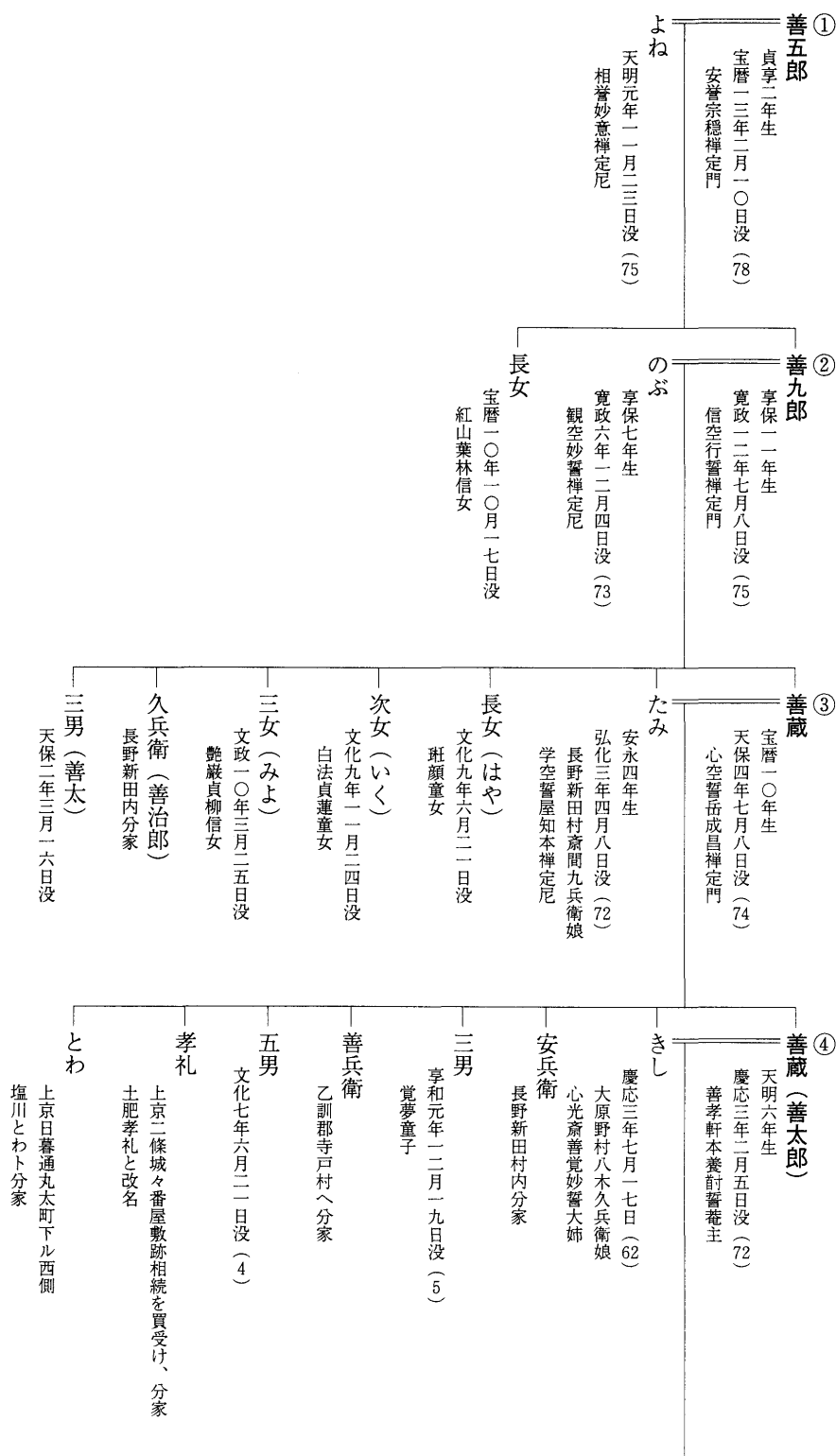
京都市都市開発局洛西開発室編『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査』（一九七二年）

『史料京都の歴史』二五、西京区（平凡社、一九九四年）

『京都府百年の年表』一、政治・行政編（一九七一年）

『京都府百年の資料』一、政治行政編（一九七二年）

三宅家略系図



⑤ 善太郎（善九郎）

文政八年六月三日生
 明治二年一〇月二五日隱居、善九郎と改名
 明治三年九月一日没（76）
 禅光院珊空潤瑚靜齋居士

さく（先妻）

安政元年入籍
 明治三年九月一〇日没（38）
 田明寺村小林庄右衛門娘
 貌空貞容本齋禪定尼

たみ（後妻）

天保六年六月三日生
 明治四年一月五日入籍
 明治二年三月二三日没（46）
 葛野郡下津林村塩田助右衛門三女
 心眼院得空覺成齋開禪定尼

ジュ（三妻）

天保一四年九月二五日生
 明治四三年一〇月七日入籍
 大正六年二月一日没（75）
 京高倉六角上ル鈴木善吉長女
 万劫院量空妙壽覺心禪定尼

清兵衛

天保五年一月四日生
 長野新田村内分家

うの

大原野村八木久兵衛室

⑥ 善蔵（龜次郎）

安政四年四月三〇日生
 明治二年一〇月二五日相統
 大正六年一月八日没（61）
 昭光院定空善明公濟居士

カジ

安政六年三月二五日生
 明治九年四月三日入籍
 昭和二年九月一三日没（80）
 大原野村八木久兵衛次女
 弘誓院散空至善妙頼大姉

りやう

安政二年四月一〇日生
 下京大黒町通松原下ル二丁目
 土田小兵衛へ嫁す

やゑ

万延元年八月一三日没（3）
 三光妙心童女

源之助

文久元年二月生
 明治一〇年四月二七日
 今里村小山宇右衛門へ養子

常次郎

文久二年八月一五日生
 長野新田村一七番へ分家

なを

明治一〇年長野新田村三宅清兵衛へ嫁す

⑦ 善蔵（善一郎）

明治一〇年八月二五日生
 大正六年相統
 同年三月六日善蔵と改名
 昭和二年三月一〇日隱居
 昭和一七年二月三日分家
 昭和四二年一月一五五没（91）
 専修院殿勸空明善和光大居士

たみ

明治一五年二月二日生
 明治三五年五月二四日入籍
 昭和一五年一月一二日没（59）
 相楽群木津町高橋喜兵衛長女
 累功院積空善顯妙種大姉

志津

明治二年二月二〇日生
 明治一四年二月八日没（3）
 智妙童女

ミツ

明治一五年四月二五日生
 明治三六年四月八日京五條通烏丸東へ入
 安永万次郎へ嫁す

修之助

明治一八年六月六日生
 明治三八年一月一四日川岡村下津林
 塩田助右衛門へ養子

エイ

明治二一年五月四日生
 明治三〇年八月九日宇治郡山科村北花山
 松井為次郎へ嫁す

源之助

葛野郡西七条村内藤源助分家へ養子

平兵衛

葛野郡岡村古岡茂助へ養子相続

竹次郎

葛野郡下津林村塩田助右衛門へ養子相続

理三郎

嘉永五年二月八日没

洗空唯心童子

末次郎

同村内分家 土肥孝礼相続す

米次郎

明治二年六月二日生

明治三八年四月一九日

紀伊郡伏見町大井アイ婿養子

キシ

明治七年八月八日生

明治二四年三月二五日

海印寺村高橋房次郎へ嫁す

ユウ

明治一一年三月八日生

明治二八年一月一七日没(18)

大宮八条下ル林徳太郎へ嫁す

甚三郎

明治一五年五月一五日生

明治四三年二月一九日

烏丸四条下ル北尾政吉長女婿養子

のぶ

明治一七年七月二八日生

明治三七年岡村小泉庄太郎へ嫁す

大正七年七月六日伏見深草角道源兵衛へ嫁す

良三

明治二四年七月一〇日生

大正四年六月一九日相楽郡木津町

高橋善平次妹正を娶る

大正六年二月一日分家

キク

明治二八年一〇月四日生

同年二月一九日没(当)

光月智照嬰女

出典

三宅家所蔵「家暦」「戸籍」「墓籍」による。

山城国乙訓郡長野新田村三宅家文書目録 目次

庄屋（長野新田村）	………	一四五
支配	………	一四五
土地	………	一四五
年貢	………	一四五
戸口	………	一四五
村政	………	一四五
小人用 夫食 普請（土砂留場） 請願・諸届 寺社 講	………	一四五
戸長（長野新田村）	………	一四六
土地	………	一四六
租税	………	一四六
三宅家	………	一四七
家系	………	一四七
家計	………	一四七
経営	………	一四七
金融 争論 裁判 奉公人 その他	………	一四七

山城国乙訓郡長野新田村三宅家文書目録 (文書記号 33 X)

庄屋 (長野新田村)

支配		形態	数量	番号
定 (綿屋仲間他新規株差留・諸勸化村銭など定書写)		文化一四年七月	一通	三
土地				
御検地寄帳 (長野新田)		天保四年正月	三宅善藏	半
御検地寄帳 (下書)		天保四年正月	長野新田	半
年貢		文政三年三月 (文政元年)	乙訓郡長野新田 (庄屋善藏・年寄重兵衛・百姓代久次郎連印↓小堀中務様御役所)	半
御蔵入高附免割合帳		嘉永三年二月	庄屋善藏	半
戸口		宗門御改寺請并家数人別牛馬員数帳	四冊之内	半
門徒		文化三年三月	乙訓郡長野新田 (庄屋善兵衛・年寄久次郎・百姓惣代与左衛門連印↓小堀中務様御役所)	半
浄土宗門御改寺請并家数人別牛馬員数帳		嘉永二年三月	乙訓郡長野新田	半

村政

成年小入用帳	文政一〇年三月	乙訓郡長野新田 (庄屋善藏・年寄与左衛門・百姓代久次郎連印↓小堀主税様御役所)	半	一冊	九二
亥年小入用帳	嘉永五年三月	乙訓郡長野新田(庄屋善藏・年寄与左衛門・百姓代安兵衛連印↓小堀主税様御役所)	半	一冊	九二
貯夫食石数帳	文化二年三月	乙訓郡長野新田(庄屋重兵衛・年寄惣治郎・百姓代文四郎連印↓小堀中務様御役所)	半	一冊	八
一札(貯夫食積米并下穀高割許可願状)	弘化三年二月	乙訓郡長野新田村百姓中重兵衛他三二名連印↓村方役人中	半	一通	二六
夫食貸下ヶ証文外三利右衛門講銀証文入(五ヶ年積立)	紙背(二二人分高書上)		半	一綴 (七通)	二七
・預り申米之事(夫食米貸下ヶ証文)	嘉永四年三月	組頭文次郎外四名連印↓御役人中	半	一通	二一
・預り申夫食粉之事(夫食粉貸下ヶ証文)	嘉永四年三月	村庄屋嘉兵衛(印)↓御地頭庄屋善藏殿	半	一通	二二
・預り申米之事(夫食米貸下ヶ証文)	嘉永四年三月	組頭万五郎外四名連印↓御役人中	半	一通	二三

・預り申罫米之事（夫食米貸下ケ証文） 年三月 組頭嘉兵衛外三名連印↓御役人中	嘉永四 半	一通 二七四	（虚無僧取締証力）（明暗寺取締場↓乙訓郡新田村） 壺印あり	美切	一通 二
・覚（宛米高書上）	半	一通 二七五	（虚無僧取締証難形力）（取締場↓何郡何村）	美切	一通 三
・預り申米之事（夫食米貸下ケ証文） 三月 組頭善兵衛外四名連印↓御役人中	半	一通 二七六	覚（寅年取締料百文受取証文）寅八月一日 明暗 寺役僧↓貴学印↓長野新田村役人 後欠	切	一通 六
・預り申米之事（夫食米貸下ケ証文） 三月 組頭久兵衛外四名連印↓御役人中	半	一通 二七七	○		
・預り申罫米之事（夫食米貸下ケ証文） 年三月 組頭九兵衛外五名連印↓御役人中	半	一通 二七八	本寺証文之事（住持職任命ニ付本寺証文難形） 文化一五年何月本願寺御門跡何寺↓小堀中務殿御 役所	半繼	一通 七
普 請（土砂留場）			講		
土砂留場御普請所帳（永井日向守土砂留場長野 新田村四ヶ所）享和三年 高槻土砂役所（沢田 作太夫・新家一九郎）	半	一冊 三	預り申講銀之事（講銀手形）文政一二年六月 借 主西坂本村中・庄屋勘左衛門・証人長右衛門・同安 兵衛連印↓善藏殿	半	一通 一五
諸願・諸届			預り銀子之事（西岩倉経堂講銀手形）亥五月 （嘉永四カ）千丈借主嘉兵衛・請人左衛門連印↓ 善藏殿	半	一通 一五二
乍恐御訴奉申上候（村内男子捨子の届状下書） 文化一三年二月二日 乙訓郡長野新田庄屋善藏・ 年寄重兵衛連印↓小堀中務様御役所	美	一通 三	預り申御講銀之事（講銀手形并質入証文）嘉永 四年四月 預り主利右衛門（印）↓当村役人中	半繼	一通 一五三
一札扣（牛馬持六人下ケ札六枚許可願）文政一 〇年五月 乙訓郡長野新田庄屋善藏・年寄与左衛 門連印↓御用米会所御役人中	半	一通 一四一	戸 長（長野新田村）		
覚（下ケ札二枚戻シ、一枚名替届）文政一〇年 五月 乙訓郡長野新田庄屋善藏↓御用米会所御役 人中	半	一通 一四二	土 地		
寺 社			養水池井路堤敷地并官有地調帳 明治一〇年六月 乙訓郡第三区長野新田郡（郡総代清原嘉兵衛（印）・ 評価人安井文四郎（印）・同西郡與市郎（印）・戸長 三宅善藏（朱印）↓京都府知事上村正直殿）	半	一冊 〇
掟書（虚無僧修業ニ付心得差人一札）文化一四 年八月 明暗寺目附役己樂・加役里虎連印↓村役人 中	美	一通 一	乙訓郡長野新田村字福西地引図 明治一九年九月 再調		二鋪 九

租 税

高附免割扣帳 明治六年二月 乙訓郡第三区長野
新田村 半 一冊 四三

収獲取調帳 明治九年二月 長野新田 半 一冊 六一

収獲取調書 明治九年一月 乙訓郡第三区両町長
野新田村 半 一冊 六二

収獲見込帳 明治九年七月 乙訓郡第三区長野新田
(村中總代清原嘉兵衛・評価人三宅善藏・同安井文
四郎・同戸長三宅清兵衛) 半 一冊 五

三 宅 家

家 系

送り籍之事(林與兵衛妹こま、三宅善藏方縁付
二付送籍証文) 明治五年十一月 下京三二区大
宮通八条下ル石橋町戸長岡田半三郎 (印) ↓乙訓郡
第六区長野新田村戸長安井文四郎殿 半 一通 六

家 計

当邑水帳写(京都府支配) 明治五年八月 三宅善
藏所持 半 一冊 二

開墾上伸 明治二〇年一月七日 乙訓郡長野新田村
(地主惣代三宅安兵衛・松木弥平次・松尾佐兵衛 ↓
京都府知事北垣国道殿) 野紙綴 一冊 二一

開墾上申図面 明治二〇年二月改 乙訓郡長野新田村
(地主惣代松尾佐兵衛(朱印)・三宅安兵衛・松木弥
平次(朱印) ↓京都府知事北垣国道殿) 半綴 一冊 二二

山城国乙訓郡長野新田村三宅家文書目録 戸長(長野新田村) 三宅家

委任証(地租改正による土地評価の戸長・評価
人・老農への委任状) 明治九年九月 乙訓郡第三
区長野新田岡新田 京都府管下無印紙証書用紙使用 野 一冊 九

(三宅善藏所持字福西旧塚絵図并年貢高書上) 一通 七一

(三宅善藏所持字亀畑塚絵図并年貢高書上) 一通 七二

(松木平四郎所持字亀畑塚絵図并年貢高書上) 一通 七三

○

田地裁宅地書誤二付帳面御戻願 明治九年三月
三宅善藏・安井文四郎・戸長三宅清兵衛連印 ↓京都
府権知事榎村正直殿 野 二部 七五

記(明治一六年分諸上納并村費請取証文) 明治
一七年五月三十一日 乙訓郡查掛村戸長林四郎兵衛
(朱角印) ↓長野新田村三宅善藏殿 乙訓郡查掛村
戸長役場野紙使用 野 一通 三

経 営

金 融

譲り申田地之事(金光領田地譲渡証文) 天保一
一年十二月 譲り主善藏・倅勇次郎・庄屋藤兵衛連
印 ↓伊勢講中 美 一通 三一

譲り渡申田地之事(金光寺領田地永代譲渡証文)
嘉永三年二月 長野新田村譲り主善藏・倅勇次郎・
庄屋藤藏連印 ↓弥二兵衛殿 美 一通 三二

覚(千本通道普請助成寄付金百両請取証文)
弘化二年四月 道普請掛り六ヶ村(印) ↓長野新田
木屋善藏殿 野 一通 三〇

○
本物返讓渡証文綴

一綴
(一通) 二五

返本物譲り渡し申田地之事 (金光寺領田地本物返讓渡証文) 文化一一年霜月 譲り主弥治兵衛・受人次郎兵衛・庄屋藤兵衛連印↓善藏殿

美

一通 二五一

返本物譲り渡し申田地之事 (金光寺領・北面松波越前家領田地本物返讓渡証文) 文化一一年一月 譲り主弥治兵衛・請人次郎兵衛・庄屋藤兵衛・庄屋宇右衛門連印↓善藏殿

美

一通 二五二

返本物譲り渡し申田地之事 (金光寺領・北面松波越前家領田地本物返讓渡証文) 文化一一年一月 譲り主弥治兵衛・請人次郎兵衛・庄屋藤兵衛・庄屋宇右衛門連印↓善藏殿

美

一通 二五三

返本物譲り渡し申田地之事 (金光寺領田地本物返讓渡証文) 文化一一年一月 譲り主弥治兵衛・請人次郎兵衛・庄屋藤兵衛連印↓善藏殿

美

一通 二五四

返本物譲り渡し申田地之事 (金光寺領田地本物返讓渡証文) 文化一一年一月 譲り主弥次兵衛・受人次郎兵衛・庄屋藤兵衛連印↓善藏殿

美

一通 二五五

返本物譲り渡し申田地之事 (泉桶寺領田地本物返讓渡証文) 文化一一年一月 譲り主弥次兵衛・受人次郎兵衛・庄屋平左衛門連印↓善藏殿

美

一通 二五六

返本物譲り渡し申田地之事 (北面河端安藝守領田地本物返讓渡証文) 文化一一年一月 譲り主弥次兵衛・受人次郎兵衛・庄屋宇右衛門連印↓善藏殿

美

一通 二五七

返本物譲り渡し申田地之事 (金光寺領田地本物返讓渡証文) 文化一一年霜月 譲り主弥次兵衛・受人次郎兵衛・庄屋藤兵衛連印↓善藏殿

美

一通 二五八

本物返讓渡シ申田地之事 (周防守領田地本物返讓渡証文) 文政二年一月 塚原村譲り主勝右衛門・同村請人市左衛門・同村庄屋宇右衛門連印↓長野新田村善藏殿

美

一通 二五九

本物返シ田地之事 (松波越中守領田地本物返讓渡証文并永代讓渡証文) 天保三年極月 譲り主源治郎・請人伊左衛門連印↓長野新田村善藏殿 ※本物返讓渡証文は文政九年

美繼

一通 二六〇

本物返シ譲り渡田地之事 (金光寺領田地本物返讓渡証文) 天保二年二月 譲り主惣五郎・証人平七・庄屋藤兵衛連印↓善藏殿

美

一通 二六一

本物返シ譲り渡田地之事 (山形対馬守領田地本物返讓渡証文) 天保二年二月 譲り主惣五郎・証人平七・庄屋卯右衛門連印↓善藏殿

美

一通 二六二

本物返シ譲り渡申田地之事 (金光寺領田地本物返讓渡証文) 天保三年一月 田地主四郎兵衛・庄屋藤兵衛・請人嘉右衛門連印↓長野新田村善藏殿

美

一通 二六三

本物返シ売渡し申田地之事 (金光寺領田地本物返賣券狀) 天保八年三月 中山村売主源兵衛・請人利兵衛・庄屋藤兵衛連印↓木屋善藏殿

美

一通 二六四

本物讓渡シ申田地之事 (小堀主税領田地本物返讓渡証文) 天保九年二月 譲り主文四郎(印)・請人新右衛門(印)・庄屋重兵衛↓善藏殿 文四郎奥書あり

美

一通 二六五

本物讓渡シ申田地証文之事 (金光寺領田地本物返讓渡証文) 嘉永三年六月 譲り主塚原村宇右衛門・請人同中山弥次兵衛・請人杏掛村四郎兵衛・庄屋藤藏連印↓長野新田村善藏殿

美繼

一通 二六六

本物譲り渡申田地証文之事 (金光寺領田地本物返讓渡証文) 嘉永三年六月 譲り主塚原村宇右衛門・請人同中山弥次兵衛・請人杏掛村四郎兵衛・庄屋藤藏連印↓長野新田村善藏殿

美

一通 二六七

本物譲り田地之事（富小路領田地本物返讓渡証文）嘉永五年正月 譲り主上里村庄左衛門・親類徳右衛門・同惣左衛門・孫兵衛↓長野新田善藏殿
一通 二五十八
美

本物返シ田地之事・添証文之事（金光寺領田地本物返讓渡証文并永代讓渡証文）安政四年十二月 塚原村譲り主徳右衛門・請人卯兵衛・庄屋藤藏連印↓長野新田善藏殿 ※本物返讓渡は嘉永五年五月
一通 二五十九
美繼

本物返シ売渡申田地之事（金光寺領田地本物返売券狀）安永五年二月 中山売主仁兵衛・請人嘉兵衛・庄屋瀬兵衛連印↓同村伊兵衛殿
一通 二六
美

永代讓渡証文綴
（五八通）三七
一通 二七一
半

永代譲り申畑地之事（蔵入領畑地永代讓渡証文）文化二年二月 譲り主弥次兵衛・証人長野惣次郎・庄屋重兵衛連印↓善藏殿
一通 二七一
美

譲り渡申敷之事（敷永代讓渡証文）文化八年二月 譲り主源七・請人喜兵衛・年寄久治郎・庄屋与左衛門連印↓当村善藏殿
一通 二七二
美

譲り渡申田地之事（金光領田地永代讓渡証文）文化一〇年二月 譲り主惣治郎・請人武兵衛・庄屋藤兵衛連印↓長野善藏殿
一通 二七三
美

譲り渡申田地之事（金光寺領田地永代讓渡証文）文化一五年四月 譲り主弥治兵衛・証人庄右衛門・庄屋藤兵衛連印↓善藏殿
一通 二七四
美

譲り渡申田地之事（北面衆山形領田地永代讓渡証文并池地支配替証文）文政三年 岡村田地譲り主大八木宗五郎・証人平七・庄屋宇右衛門連印↓長野新田村善藏殿 大八木宗五郎奥書あり
一通 二七五
美繼

譲り渡申敷地之事（敷地永代讓渡証文）文政九年極月 譲り主惣次郎（印）・請人重兵衛・同甚七（印）・年寄与左衛門（印）↓庄屋善藏殿
一通 二七六
美

譲り渡し申田地之事（伊勢講引当田地永代讓渡証文）文政一〇年七月 譲り主惣次郎・請人茂登・百姓代久次郎連印↓庄屋善藏殿
一通 二七七
半

譲り渡し申田地之事（富小路領田地永代讓渡証文）文政一〇年二月 上里村譲り主小右衛門・証人弥左衛門・同利右衛門・御地頭庄屋忠右衛門連印↓長野新田村善藏殿 付、天保一四年正月上里村支配人九右衛門永代支配替証文
一通 二七八
美繼

本物譲り渡し申田地之事（富小路領田地本物返讓渡証文）文政一二年極月 上里村譲り主利右衛門・同伴辰五郎・庄屋弥兵衛連印↓長野新田善藏殿
一通 二七九
美

譲り渡申田地之事（七條道場金光寺領田地永代讓渡証文）文政一三年極月 譲り主片木原小兵衛・請人塚原村勝右衛門・庄屋藤兵衛連印↓長野新田善藏殿
一通 二八〇
美

譲り渡申田地之事（大炊御門領田地永代讓渡証文）天保四年二月 中山讓主喜右衛門・請人金藏・庄屋仁兵衛連印↓善藏殿
一通 二八二
美

添証文之事（別紙山林讓渡二付請狀）天保四年四月 上里村九右衛門（印）↓善藏殿
一通 二八三
美

譲り渡申田地之事（田地永代讓渡証文）天保五年二月 譲り主岡新田村與市郎・同請人傳吾・庄屋藤兵衛連印↓長野新田村木屋善藏殿
一通 二八三
美

譲り渡申田地之事（大炊道場領田地永代讓渡証文）天保六年二月 岩見村譲り主弥兵衛・弥七連印↓長野新田善藏殿
一通 二八四
美

譲り渡申田地之事（富小路領田地永代讓渡証文）天保六年二月 上里村九右衛門・証人弥左衛門・御家領庄屋忠右衛門連印↓善藏殿
一通 二八五
美

添証文之事（別紙田地三筆讓渡二付請狀）天保六年二月 上里村添書人九右衛門・請人弥左衛門連印↓善藏殿
一通 二八六
美

譲り渡申田地之事 (善峯寺領田地永代譲渡証文) 天保六年二月 上里村譲り主九右衛門・証人孫左衛門・御家領庄屋李兵衛連印・長野新田村木屋善藏殿	美	一通	二七十七
譲り相渡シ申田地之事 (富小路領田地永代譲渡証文) 天保六年二月 譲り主仁兵衛・請人孫兵衛・親類徳右衛門・御家領庄屋利兵衛連印・長野善藏殿	半	一通	二七十八
譲り相渡シ申田地之事 (富小路領田地永代譲渡証文) 天保六年二月 譲り主仁兵衛・請人孫兵衛・親類徳右衛門・御家領庄屋利兵衛連印・長野善藏殿	半	一通	二七十九
売譲り申田地之事 (小堀主税領田地売譲証文) 天保七年一〇月 田地譲り主杏掛村権右衛門・請人塚原村勝右衛門・塚原村庄屋与右衛門連印・長野新田村木屋善藏殿宛	美	一通	二七三〇
譲渡申田地之事 (田地永代譲渡証文) 天保九年七月 譲り主武兵衛・庄屋宇右衛門連印・善藏殿	半	一通	二七三一
譲り渡申蔵之事 (蔵永代譲渡証文) 天保一〇年十二月 譲り主惣次郎・同佐藤蔵・請人平四郎・庄屋重兵衛・年寄久兵衛連印・善藏殿	半	一通	二七三三
譲り渡シ申山地之事 (富小路領山地) 天保一一年一月 上里村譲り主源左衛門・親類同源右衛門・請人同弥助・御家領庄屋同利兵衛連印・長野新田村善藏殿	美	一通	二七三三
譲り渡申田地之事 (富小路領田地譲渡証文) 天保一二年二月 上里村譲り主藤左衛門・親類請人源左衛門・新兵衛・御地頭庄屋利兵衛連印・善藏殿	美	一通	二七三四
譲り渡シ申田地之事 (大炊御門領田地譲渡証文) 天保一二年二月 上里村譲り主藤左衛門・親類請人源左衛門・請人新兵衛・御地頭庄屋治兵衛連印・善藏殿	美	一通	二七三五
譲り渡申田地之事 (泉涌寺領田地永代譲渡証文) 弘化三年二月 塚原村内中山譲り主藤五郎・請人浅七・庄屋四郎兵衛連印・善藏殿	半	一通	二七三六
添証文之事 (別紙田地譲渡二付請状) 弘化四年二月 上里村作人伊右衛門印・長野新田善藏殿	半	一通	二七三七
譲り渡申畑地之事 (小堀勝太郎領畑地譲渡証文) 嘉永三年六月 畑譲り主塚原村宇兵衛・請人弥次兵衛・庄屋藤蔵連印・長野善藏殿	美	一通	二七三六
譲り渡申田地証文之事 (松波越前領田地永代譲渡証文) 嘉永三年二月 譲り主弥二兵衛・請人安五郎連印・御地頭両庄屋藤蔵殿・長野新田善藏殿	美繼	一通	二七三九
譲り渡申蔵地之事 (蔵譲渡証文) 嘉永三年二月 岡村譲り主小八(印)・請人清次郎(印)・喜左衛門・庄屋弥二兵衛・長野新田善藏殿	美	一通	二七三〇
為念一札之事 (蔵譲渡証文) 嘉永四年正月一二日 杏掛村木屋伊八・長の新田村世話人弥平次連印・木屋善藏殿	半	一通	二七三一
為念一札之事 (蔵代金調立書面返却二付一札) 嘉永四年正月一二日 木屋伊八・俵金四郎連印・木屋善藏殿	半	一通	二七三二
添証文之事 (山林譲渡証文) 嘉永四年七月 惣代伊兵衛・受主弥二兵衛連印・長の新田村善藏殿	半	一通	二七三三
譲渡シ申田地之事 (竹之内領田地譲渡証文) 安政二年九月 上里村譲り主孫兵衛・同請人文左衛門・御家領庄屋武右衛門連印・長の新田村善藏殿	美	一通	二七三三
譲渡申田地之事 (大炊道場領田地譲渡証文) 安政二年極月 上里村譲り主孫兵衛・証人喜助・御寺領庄屋利左衛門連印・長野新田村木屋善藏殿	美	一通	二七三四
譲り渡シ申田地之事 (安楽光院領田地永代譲渡証文) 安政二年八月 譲り主中山村金藏・請人利兵衛・同清蔵・庄屋四郎兵衛連印・長野善藏殿	美	一通	二七三五

譲り渡し申田地之事（北面領田地本物返讓渡証文）安政五年二月 譲り主塚原村久藏・同請人同安兵衛・同嘉七・庄屋宇兵衛連印↓長野善藏殿	美	一通	二七〇
差入一札（下作地戻証文）万延元年六月 下作人半兵衛・妻はる連印↓善藏殿	半	一通	二七〇
譲り渡し申畑之事（畑敷譲渡証文）万延元年六月 譲り主半兵衛（印）・同妻はる（印）・庄屋文四郎・年寄安兵衛↓善藏殿	半	一通	二七〇
譲り渡し申田地之事（北面領田地本物返讓渡証文）万延二年四月日 塚原村譲り主久藏・請人嘉七・同新次郎・庄屋宇兵衛連印↓長野新田善藏殿	半	一通	二七〇
譲り渡し申田地之事（北面領田地本物返讓渡証文）文久元年二月 塚原村譲り主嘉七・請人勝右衛門・庄屋宇兵衛連印↓長野新田善藏殿	美	一通	二七〇
譲り渡し申田地之事（金光寺領田地本物返讓渡証文）文久元年二月 塚原村譲り主嘉七・請人勝右衛門・庄屋藤藏連印↓善藏殿	美	一通	二七〇
譲り渡し申田地之事（金光寺領田地本物返讓渡証文）文久元年二月 塚原村譲り主嘉七・請人勝右衛門・庄屋藤藏連印↓善藏殿	美	一通	二七〇
包紙（塚原宇兵衛田地証文二通入）	美	一通	二七〇
包紙（塚原嘉七田地証文四通入） 文久元年二月	美	一通	二七〇
永々譲り渡し申田地之事（金光寺領田地永代讓渡証文）文久元年二月 塚原村譲り主宇兵衛・請人乍親類弥三兵衛・同勝右衛門・庄屋藤藏連印↓長野新田善藏殿	美	一通	二七〇
永々譲り渡し申田地之事（金光寺領田地永代讓渡証文）文久元年二月 塚原村譲り主宇兵衛・請人弥三兵衛・同勝右衛門・庄屋藤藏連印↓長野新田善藏殿	美	一通	二七〇

約定証(田地増金売渡証文) 明治一〇年八月三〇日 乙訓郡第三区塚原村売渡人木村喜右衛門・請人中原庄藏連印↓三宅善藏殿 証券界紙使用	美	一通 三七五
売渡シ証券(畑地売渡証文) 明治一二年九月五日 乙訓郡第三区塚原村売渡人奥村宇兵衛・親類総代引受人奥村勇藏連印↓三宅善藏殿 右組戸長不在ニ付用掛り林新右衛門(朱印)あり 印紙五錢添付	美繼	一通 三七五
売渡申地所之証(地所売渡証文) 明治一二年三月二〇日 乙訓郡第三区塚原村売渡人山口清左衛門・俵浅次郎・保証人山口幸次郎連印↓三宅善藏殿 葛野郡第二組岡村中原彦兵衛奥書あり 印紙三錢添付	美繼	一通 三七五
永代譲渡証文綴		一綴 (一六通) 元
譲り渡申茲荒之事(茲荒一ヶ所七〇目ニテ永代譲狀一札) 寛政三年二月 譲り主文蔵・証人いち・年寄惣治郎連印↓善九郎殿	美	一通 二六一
永代譲り渡ス漆畑之事(小堀領高六斗八升四合、代銀二五〇目ニテ譲渡一札) 文化六年正月 長野新田譲り主文蔵・同村請人久治郎・庄屋与右衛門連印↓岡村徳兵衛殿	美	一通 二六二
譲り渡申田地之事(金光寺領田地三反、代銀一貫五〇〇目ニテ譲券狀) 文化九年二月 岡新田村譲り主佐右衛門・同村請人喜兵衛・庄屋藤兵衛連印↓玉屋徳兵衛殿	美	一通 二六三
譲り渡し申田地之事(金光寺領田地三反、代銀九五〇目ニテ譲手形) 文化一四年二月 譲り主岡村徳兵衛・請人同村傳兵衛・塚原村庄屋藤兵衛連印↓千丈村嘉兵衛殿	美	一通 二六四
譲り切申田地之事(寺領一ヶ所・御領二ヶ所、代銀六〇〇目ニテ永代譲証文) 文政一二年六月 杵掛村譲り主正藏・請人藤七・両御支配庄屋平左衛門連印↓中山村藤五郎殿 付札二あり	美	一通 二六五
売渡申田地之事(大炊道場領田地二反、代銀一貫一五〇匁ニテ売渡証文) 文政一二年二月 売主□兵衛・証人奎兵衛・庄屋喜兵衛連印↓弥兵衛殿	美	一通 二六六
譲渡申畑之事(蔵入高一石八斗、代銀一五〇目ニテ永代売切証文) 文政一二年四月 譲り主上久世村清七(印)・庄屋善藏↓四郎右衛門様	半	一通 二六七
譲り渡シ申田地之事(知恩院宮領・樋口領田地、代銀二貫一〇四匁二分八厘ニテ譲一札) 天保六年四月 譲り主大八木全・証人平左衛門連印↓半兵衛殿 庄屋半治郎(印)・同治兵衛(印)・退役ニ付年寄無印・庄屋徳兵衛(印)↓樋口様宛奥書	美繼	一通 二六八
永代譲り渡申田地之事(金光寺領一反、代銀七〇〇目ニテ譲証文) 天保三年二月 譲り主長右衛門後家まさ・親類受人市左衛門・庄屋藤兵衛連印↓奥村卯兵衛殿	美	一通 二六九
譲り渡シ申田地証文之事(金光寺領上田一ヶ所、代銀三五一匁ニテ譲証文) 天保六年二月 譲り主安五郎・兄安右衛門・請人甚兵衛・庄屋藤兵衛連印↓当村宇右衛門殿	美	一通 二七〇
譲り渡シ申田地証文之事(金光寺領上田一ヶ所、文銀七〇〇目ニテ譲証文) 天保八年二月 譲り主安五郎・請人甚兵衛・庄屋藤藏連印↓宇右衛門殿	美	一通 二七二
譲り渡シ申田地証文之事(金光寺領上田一ヶ所・中田一ヶ所、文銀一貫五〇〇目ニテ譲証文) 天保一三年二月 田地譲り主油屋藤兵衛(印)・請人安右衛門・庄屋藤藏(印)↓奥村宇右衛門殿	美	一通 二七三
譲り渡シ申田地之事(安楽光院領上田三反、代銀六貫四〇〇目ニテ譲証文) 弘化四年二月 杵掛村庄屋四郎兵衛・請人弥左衛門・同人嘉右衛門連印↓法音院様御役人中	美	一通 二七三

譲り渡し申地面之事（蔵入六反、六〇〇目ニテ譲り証文） 嘉永二年極月 譲り主与左衛門（印）・請人万五郎（印）・庄屋善蔵↓安兵衛殿	美	一通	二六・四
永代売譲渡一札之事（智恩院宮領蔵、代銀三〇〇目ニテ売渡一札） 嘉永二年一月 同村売主喜助・請人清吉連印↓同村源蔵殿 庄屋清兵衛・年寄嘉助・同半次郎連印奥書あり	美繼	一通	二六・五
永々売渡シ申田地之事（金光寺領田地一ヶ所、金七〇〇目） 嘉永六年二月 田地譲り主平右衛門・受人安兵衛・庄屋藤蔵連印↓嘉七殿	美	一通	二六・六
（下作地譲請ニ付）世話請一札 文政一三年 大原野村柳川喜・物集女村武↓下桂村八左衛門 前欠	半繼	一通	二九・一
（下作地譲地ニ付）世話請一札 天保六年二月 岩見村弥兵衛・弥七連印	美	一通	二九・二
手形（土蔵讓渡代銀引渡手形） 天保七年申二月二六日 今里井正人村与右衛門（母印）・長野新田村善蔵（母印）↓查掛村又兵衛殿 岡新田村与一郎殿・塚原村庄兵衛殿 墨引抹消あり	半	一通	三〇・一
覚（土蔵讓渡代銀請取手形） 申二月二六日 譲り主庄兵衛・請人與重郎連印↓千丈新田重兵衛殿	切	一通	三〇・二
一札（田地請戻ニ付約定） 天保一四年二月日 岩見村下作人弥兵衛印↓長野新田善蔵殿	半	一通	三〇・三
一札之事（借用引当蔵証文受取ニ付念書控） 申一二月二三日 長の新田村善蔵↓石見村治郎兵衛殿	半	一通	三〇・三
一札（讓請池地支配ニ付念書案） 長の新田善蔵↓大八木宗五郎殿	半	一通	三〇・四
一札之事（買請蔵山戻シニ付念書） 嘉永四年正月日 查掛村蔵戻し主伊八・取暖人長野新田弥平次連印↓長野新田善蔵殿	半	一通	三〇・五
売渡申米之事（講中米売渡代銀請取ニ付念書） 嘉永四年二月日 塚原村売主西東講中物代八郎兵衛・年寄利兵衛・庄屋藤蔵連印↓長野新田善蔵殿	美	一通	三二・一
証（内取米売渡代銀請取ニ付念書） 万延三年一二月 塚原村売主平四郎・請人乍庄屋宇兵衛連印↓長野新田善蔵殿	半	一通	三二・二
借用金子之事（金子二五兩借用証文） 嘉永三年六月 小堀勝太郎手代借用人前橋彦次郎（印）・証人上桂村藤右衛門↓長野新田村三宅善蔵殿	美	一通	三三・一
借用証文綴	（五六通）	一通	三三・二
借用申銀子之事（上田引当銀三〇〇目借用証文） 文化一〇年一二月日 借主浅治郎・請人重兵衛連印↓善蔵殿	半	一通	三三・三
借用申銀子之事（金光寺領下田引当銀二〇〇目借用証文） 文化一四年二月吉日 借用主文四郎印↓長野善蔵殿	半	一通	三三・四
借用申銀子之事（泉桶寺領田地引当銀九〇〇目借用証文） 文化一四年二月 借主千丈藤兵衛印↓長野新田村善蔵殿	半	一通	三三・五
借用申銀子之事（家敷蔵引当銀一〇〇目借用証文） 文政二年正月 借主弥八・請人半治郎連印↓庄屋善蔵殿	半	一通	三三・六
借用申金子之事（家敷蔵引当金三兩借用証文） 文政四年九月日 借り主市治郎・請人喜兵衛連印↓善蔵殿	半	一通	三三・七
借用申銀子之事（山林畑引当銀八〇〇目借用証文） 文政七年六月 千丈借主善兵衛・証人庄兵衛連印↓長野新田村庄屋善蔵殿	半	一通	三三・八
借用証文之事并覚（山林引当銀一貫目借用并請取証文） 文政七年一〇月 上里村半兵衛・俵栄蔵連印↓長野新田村庄屋善蔵殿	半	一通	三三・九

借用申銀子之事 (法泉寺領敷地引当銀三〇〇目 借用証文) 文政七年二月日 借用主石見村治郎 兵衛・同受人惣兵衛・同受人甚右衛門連印↓長の善 藏殿	美	一通	三九
借用申金子之事 (御宮様領敷引当金両借用証文) 文政八年二月一日 借主藤助・請人善兵衛・同 人治助連印↓善藏殿	半	一通	三九
借用申証文之事 (敷引当銀三貫目借用証文) 文政九年二月 岡新田村借用主金藏印・同村請人 伝吾連印↓木屋善藏殿	堅	一通	三〇
借用申銀子之事 (松木領田地引当銀五〇〇目借 用証文) 文政一〇年一月 長嶺村借り主重右衛 門・請人乍庄屋喜三郎連印↓長野新田村善藏殿	半	一通	三一
借用申銀子之事 (今大路領地引当銀二〇〇目借 用証文) 文政一〇年二月日 長峰村庄屋借り主 喜三郎↓長野新田村善藏殿	半	一通	三一
借用申銀子之事 (林引当銀五〇〇目借用証文) 文政一〇年二月 借り主善兵衛・証人左衛門連 印↓善藏殿	半	一通	三一
借用申銀子之事 (家屋敷引当銀三五〇目借用証 文) 文政一三年九月日 借り主新七・請人重兵衛 連印↓善藏殿	半	一通	三四
借用申銀子之事 (山林引当銀六〇〇目借用証文) 天保二年二月 檜原中川平右衛門印・娘ゆう↓長 野新田村善藏殿	美	一通	三五
借用申銀子之事 (屋敷敷引当銀三三六匁借用証 文) 天保三年極月 中山村借り主伊左衛門・同伴 藤七・請人円兵衛連印↓善藏殿	半	一通	三六
借用申銀子之事 (敷地引当銀二貫目借用証文) 天保三年閏霜月 上里村大嶋貢馬・受人西田九左衛 門連印↓長野新田村木屋善藏殿	美	一通	三七
借用申銀子之事 (田地引当銀九〇〇目及び敷引 当銀三〇〇目借用証文) 天保四年極月 岩見村 弥兵衛・弥七連印↓善藏殿	堅	一通	三八
借用申金子之事 (松山引当金五両借用証文) 天保四年八月 文四郎印↓善藏殿	半	一通	三九
借用申銀子之事 (山引当銀七〇〇目借用証文) 天保五年四月 借用主大原野村彦兵衛・請人上里村 利右衛門連印↓長野新田村木屋善藏殿	美	一通	四〇
借用申銀子之事 (塚原村領田地并続山引当銀四 〇〇目借用証文) 天保四年極月 借主武兵衛印 ↓善藏殿	半	一通	四一
借用申銀子之事 (敷引当銀三五〇目借用証文) 天保五年二月 半次郎・妻しか連印↓善藏殿	半	一通	四二
借用申金子之事 (家財引当金一〇両借用証文) 天保五年九月 川島村半左衛門・源六連印↓善藏殿	美	一通	四三
預申銀子之事 (敷引当銀二貫五〇〇目預り証文) 天保五年二月 岡村仙八・伴吉連印	美	一通	四四
添証文之事 (借銀返済約定添証文) 天保五年一 二月 岡村仙八・弁吉連印↓善藏殿	半繼	一通	四五
借用申銀子之事 (因幡堂領田地引当銀一貫六三 〇目借用証文) 天保六年二月 岩見村弥兵衛・ 弥七連印↓善藏殿	美	一通	四六
借用申金子之事 (畑山引当金一〇両借用証文) 天保七年正月 借主平四郎・茂と・請人久兵衛連印・ 重兵衛↓善藏殿	美	一通	四七
一札并借用申銀子之事 (畑引当年貢米七戸并家 屋敷統敷引当銀九〇〇目借用証文) 天保七年 極月 百姓藤兵衛・伴清吉連印↓善藏殿 借主藤兵 衛・妻ふし・清吉連印↓善藏殿	半繼	一通	四八

借用申金子之事（金光寺領田地引当金一〇兩借用証文）天保八年極月 沓掛村四郎兵衛印↓善藏殿	半	一通	三十一元
借用申銀子之事（畑引当銀八〇〇目借用証文）天保一年正月 借り主平次郎・請人重兵衛連印↓善藏殿	半	一通	三十一元
借用申銀子之事（富小路領田地引当銀五〇〇〇匁借用証文）天保二年一月 上里村借用主新右衛門・証人六左衛門・御家領庄屋利兵衛↓長野新田邑善藏殿	半	一通	三十三元
借用申金子之事（田地家屋敷諸道具引当金一五兩借用証文）天保二年四月 上嵯峨井井頭町綿屋利右衛門・悴榮治郎・妻うた↓新田善四郎殿	美	一通	三十三元
借用申金子之事（松山引当金二〇兩借用証文）天保四年極月 借主四郎兵衛・請人弥左衛門連印↓善藏殿	半	一通	三十三元
借用申銀子之事（金光寺領田地引当金五一兩借用証文）天保四年二月八日 借用主宇兵衛・受人平八連印↓木屋善藏殿	繼	一通	三十四元
借用申金子之事（上田引当金二〇兩借用証文）天保四年七月 沓掛村借主庄屋四郎兵衛・同年寄弥左衛門連印↓長野新田善藏殿	美	一通	三十五元
借用申銀子之事（家屋敷小屋引当銀一貫六〇〇〇目借用証文）天保五年二月 川嶋村借用主喜右衛門・親類請人新五郎連印↓長野新田善藏殿	半	一通	三十五元
借用申金子之事（建家引当金五兩借用証文）天保五年極月 川嶋村借主由藏・同新五郎・同庄右衛門連印↓善藏殿	半	一通	三十七元
借用申金子之事（田地引当金二四兩借用証文）弘化三年一〇月 借用主中山源七・同浅七↓長野新田村善藏殿	半	一通	三十九元

借用申銀子之事（畑敷引当銀二〇〇〇目借用証文）弘化五年正月日 借主善兵衛・悴丹藏連印↓善藏殿	半	一通	三十九元
借用申金子之事（家屋敷引当金三〇兩借用証文）嘉永元年八月 川島借主中村屋嘉兵衛・証人同悴庄次郎連印↓木屋善藏殿	美	一通	三十九元
借用申金子之事（田畑引当金四兩借用証文）嘉永三年九月 塚原村借り主徳右衛門・同弥五郎・証人平八連印↓善藏殿	半	一通	三十九元
借用申銀子之事（家屋敷引当銀五貫文借用証文）嘉永四年正月 中山借り主喜助・証人藤四郎連印↓善藏殿	半	一通	三十九元
借用申金子之事（松山引当金一〇兩借用証文）嘉永四年一月 借主利右衛門印・請人治郎右衛門↓庄屋善藏殿	半	一通	三十九元
借用申銀子之事（家屋敷引当銀六五〇目借用証文）嘉永五年六月 塚原村借り主平八・請人平七・同卯右衛門連印↓善藏殿	半	一通	三十九元
借用申銀子之事（田地引当銀五〇〇〇目借用証文）嘉永五年七月 塚原村借主宇兵衛・弥二兵衛・庄屋藤藏連印↓長野新田善藏殿	半	一通	三十九元
借用申金子之事（田地引当金一五兩借用証文）嘉永五年二月 岡村山の上町借主半兵衛・請人平兵衛連印↓長野新田村善藏殿	美	一通	三十九元
借用申金子之事（北面領上田引当金五兩二歩借用証文）安政元年二月 借用主塚原村久藏・請人安兵衛・同嘉七・庄屋宇兵衛連印↓長野新田善藏殿	美	一通	三十九元
借用申金子之事（山引当金二兩借用証文）安政五年八月 借用主野田勝右衛門・請人同嘉右衛門連印↓長野善藏殿	半	一通	三十九元

借用申金子之事（藪引当金五両借用証文） 安政七年正月 塚原借主喜助・請人徳右衛門連印↓長野新田村善藏殿	半	一通	三六
借用申銀子之事（建家・続畑藪引当銀五三八匁借用証文） 万延元年六月 借用主半兵衛印・庄屋文四郎・年寄安兵衛↓善藏殿	半	一通	三六
借用申銀子之事（藪引当銀八貫目借用証文） 万延元年八月 借用主広野平七・請人樫原茂助連印↓善藏殿	美	一通	三六
借用申銀子之事（田地引当銀札一貫目借用証文） 文久二年二月 借主嘉七・請人安兵衛連印↓善藏殿	半	一通	三六
借用申銀子之事（金光寺領田地引当銀二貫八〇〇目借用証文） 文久二年二月 塚原村借用主勝右衛門・中山村請人弥治兵衛連印↓木屋善藏殿	美	一通	三六
借用申金子之事（悴幸吉奉公代金引当金九両借用証文） 慶応三年七月 借用主七兵衛・悴熊吉・悴幸吉連印↓長野新田善藏殿	半	一通	三六
借用申金子之事（富小路領田地引当金四五両借用証文） 明治二年正月 借用主仁兵衛・請人茂兵衛・御家領庄屋利兵衛連印↓長野新田村善藏殿	美	一通	三六
借用証書（諸道具引当金二〇兩借用証文） 明治一年二月二六日 乙訓郡第三区石見上里村借用主中倉仁兵衛・保証人鎌田茂兵衛連印↓三宅善藏殿	美	一通	三六
借用証文綴 借用申銀子之事（銀五〇〇目借用証文） 文化五年極月 借用主勝右衛門・証人佐左衛門連印↓善藏殿	美	一通	三六
借用申金子之事（金五両借用証文） 文政二年霜月 借り主嘉兵衛印↓善藏殿	半	一通	三六

借用申銀子之事（銀五〇〇目借用証文） 年霜月 借り主嘉兵衛印↓善藏殿	半	一通	三六
借用申銀子之事（銀二〇〇目借用証文） 二年二月 借り主惣治郎印↓善藏殿	半	一通	三六
借用申銀子之事（銀七〇目借用証文） 二月 借り主源治郎・請人伊八連印↓善藏殿	半	一通	三六
預り銀子之事（銀六三三匁預り証文） 二月二七日 千文借主庄藏印↓長野新田善藏殿	半	一通	三六
借用申金子之事（金五両借用証文） 一月 上里村借り主半右衛門印↓長野新田村善藏殿	半	一通	三六
借用申金子之事（金四両借用証文） 〇月 上里村借り主半右衛門印↓長野新田村善藏殿	半	一通	三六
借用申銀子之事（銀一二〇目借用証文） 二年二月 借用主石見村与左衛門印・受人惣兵衛連印↓長の善藏殿	半	一通	三六
借用申銀子之事（銀六〇目借用証文） 極月五日 岩見村借り主九左衛門印↓善藏殿	半	一通	三六
借用申銀子之事（銀一〇〇目借用証文） 二年二月一五日 上里村借り主五郎右衛門印・岩見村請人惣兵衛↓善藏殿	半	一通	三六
借用申銀子之事（銀二五〇目借用証文） 二月 借用主石見村勘兵衛・受人同村惣兵衛連印↓長の善藏殿	半	一通	三六
借用申金子之事（金二両借用証文） 月 借り主善兵衛印↓善藏殿	半	一通	三六
借用申金子之事（金二〇両借用証文） 八月 上里村借り主小右衛門・請人利右衛門・同弥兵衛・同半兵衛連印↓善藏殿	半	一通	三六

借用申銀子之事（銀五五三匁借用証文） 文政八年極月 借り主岩見村源左衛門・同請人清左衛門連印↓善藏殿	半	一通	三九一五
借用申金子之事（金二兩借用証文） 文政八年二月 岩見村借り主喜平次・請人惣兵衛連印↓善藏殿	半	一通	三九一六
預り銀子之事（銀一貫六〇〇目借用証文） 文政八年二月 千文預り主庄藏印↓長野新田村庄屋善藏殿	半	一通	三九一七
借用申銀子之事（銀四〇〇目借用証文） 文政九年六月 西坂本村借り主庄屋長右衛門・年寄源左衛門・請人勘兵衛・同佐兵衛連印↓善藏殿	半	一通	三九一八
借用申金子之事（金一兩借用証文） 文政一〇年三月 借り主三宅和吉・請人松倉与兵衛連印↓善藏殿	半	一通	三九一九
借用申銀子之事（金六五〇目借用証文） 文政一〇年二月日 西坂本村借り主庄屋儀左衛門・請人年寄甚右衛門・同安兵衛連印↓長野新田善藏殿	半	一通	三九二〇
借用申金子之事（金四兩二歩借用証文） 文政一〇年極月 中山村借り主清七・請人藤五郎連印↓善藏殿	半	一通	三九二三
借用申金子之事（金五兩借用証文） 文政一一年閏二月 上里村預り主伊助・同請人源左衛門連印↓長野新田村善藏殿	半	一通	三九二三
借用申銀子之事（銀一〇〇目借用証文） 文政一一年八月 借り主佐兵衛・勘兵衛連印↓善藏殿	半	一通	三九二三
借用申金子之事（金三兩借用証文） 文政一二年三月日 粟生村借り主惣五郎印↓善藏殿	半	一通	三九二四
借用申金子之事（金一〇兩借用証文） 文政一二年六月 川嶋村大工喜右衛門印↓善藏殿	美	一通	三九二五
借用申銀子之事（銀三〇兩借用証文） 文政一二年一月 岡村借り主さい・同源吾郎・証人平七連印↓長野新田村善藏殿	美	一通	三九二六
借用申金子之事（金一兩借用証文） 文政一二年二月 塚原村借り主市左衛門印↓善藏殿	半	一通	三九二七
借用申金子之事（金五兩借用証文） 文政一三年六月日 大原野借り主藤兵衛・請人庄五郎連印↓長野新田善藏殿	半	一通	三九二八
借用申金子之事（金七兩借用証文） 文政一三年一月八日 借り主清八・請人嘉兵衛連印↓善藏殿	半	一通	三九二九
一札（金二〇兩借用証文） 寅壬三月二日 借用入油屋平七・さい連印↓長野新田村善藏殿	半	一通	三九三〇
借用申金子之事（金一〇兩借用証文） 天保二年一〇月 借り主平七・忤定吉連印↓善藏殿	半	一通	三九三三
借用申金子之事（金四兩借用証文） 天保二年極月 上里村借り主又左衛門・請人忠次郎連印↓善藏殿	半	一通	三九三三
借用申銀子之事（銀五〇〇目借用証文） 天保三年四月 借り主政七・請人亦兵衛連印↓善藏殿	半	一通	三九三三
借用申銀子之事（金四〇兩借用証文） 天保三年七月 借用主平七・証人さい連印↓善藏殿	美	一通	三九三六
借用申金子之事（金五兩借用証文） 天保三年九月片木原借り主源藏印↓善藏殿	半	一通	三九三五
借用申銀子之事（銀一貫目借用証文） 天保三年極月 川嶋村借用主瓦師半右衛門・請人源六連印↓善藏殿	半	一通	三九三六
借用申銀子之事（銀六〇〇目借用証文） 天保三年極月 千文借り主新右衛門↓善藏殿	半	一通	三九三七

借用申銀子之事(銀五〇目借用証文) 天保三年 二月 借り主源次郎・請人伊左衛門・同友七連印 ↓善藏殿	半	一通 元六
借用申銀子之事(銀六〇〇目借用証文) 天保三年 年極月 上里村借り主九右衛門印↓善藏殿	半	一通 元六
借用申金子之事(金五兩借用証文) 天保三年 月 片木原借り主源藏印↓善藏殿	半	一通 元四
借用申銀子之事(銀一貫六〇〇目借用証文) 天保四年正月 借用主九右衛門印↓善藏殿	半	一通 元四
借用申金子之事(金二〇兩借用証文) 天保四年 四月 上里村借り主九右衛門印↓長野村善藏殿	堅	一通 元四
借用申金子之事(金一〇兩借用証文) 天保四年 五月 片木原借主源藏	半	一通 元四
預り申金子之事(金三兩借用証文) 天保四年一 月五日 預り主市左衛門印	美	一通 元四
借用申金子之事(金五兩借用証文) 天保四年一 二月 上里村借り主九右衛門印	半	一通 元四
借用申銀子之事(金九兩借用証文) 天保四年極 月 上里村半右衛門・徳左衛門・岩見村取喰人久藏	美	一通 元四
借用申金子之事(金三兩借用証文) 天保四年極 月 文四郎印↓善藏殿	半	一通 元四
借用申金子之事(金三兩借用証文) 天保五年二 月五日 借り主大島數馬印↓木屋善四郎様	半	一通 元四
預り申銀子之事(銀三〇〇目預り証文) 天保五 年七月 粟生村茂右衛門印・惣五郎↓善藏殿	美	一通 元四
借用申銀子之事(金四兩借用証文) 天保六年四 月 上里村借り主九右衛門・同庄右衛門連印↓長野新 田村善藏殿	半	一通 元六
借用申金子之事(金一〇兩借用証文) 天保八年 二月 上里村借り主九右衛門	半	一通 元五
借用申金子之事(金七兩借用証文) 天保九年一 二月 川嶋村源六	半	一通 元五
借用申銀子之事(金五兩借用証文) 天保一〇年 四月 借主和吉印・請人久兵衛↓善藏殿	半	一通 元五
借用申金子之事(金五兩借用証文) 天保一〇年 八月 借主儀左衛門・同儀八連印↓善藏殿	半	一通 元五
借用申金子之事(金一〇兩借用証文) 天保一〇 年一二月 沓掛村借り主弥左衛門印↓善藏殿	半	一通 元五
借用申金子之事(金三兩借用証文) 天保一一年 三月 上里村忠兵衛印↓善藏殿	半	一通 元五
借用申金子之事(金一〇兩借用証文) 天保一 年一二月 沓掛村四郎兵衛・弥左衛門連印	半	一通 元五
借用申金子之事(金二五兩借用証文) 天保一二 年六月 沓掛村借り主弥左衛門印右衛門↓善藏殿	半	一通 元五
借用申銀子之事(銀二〇〇目借用証文) 天保一 三年四月 川嶋村東大道町中 町惣代新屋藤五郎・ 中村屋喜兵衛連印木屋善藏殿	半	一通 元五
借用申金子之事(金二五兩借用証文) 天保一三 年六月 沓掛村借り主弥左衛門印↓善藏殿	半	一通 元五
借用申金子之事(金五兩借用証文) 天保一四年 一二月 同村借用主文四郎印↓善藏殿	半	一通 元六
借用申金子之事(金三兩借用証文) 天保一五年 六月二日 岩見村法泉寺現主義隆・同隠居随阿・口 入請人久藏連印↓長野村善藏殿	美	一通 元六
借用申金子之事(金五〇兩借用証文) 天保一五 年六月 沓掛村借り主弥左衛門印↓善藏殿	半	一通 元六

借用申金子之事(金五〇兩借用証文) 天保一五年六月日 杵掛村借主弥左衛門印↓善藏殿	半	一通 元六
借用申銀子之事(數引当銀三貫目借用証文) 天保一五年七月 借用主宇右衛門・悖宇兵衛連印↓木屋善藏殿	半	一通 元六
借用申銀子之事(銀一貫九〇〇目借用証文) 天保一五年七月 借主南伊勢屋町中年寄忠兵衛・五人組市兵衛・同庄吉・町中惣代市兵衛・同幸助連印↓三宅善藏殿	美	一通 元六
借用申金子之事(竹皮壳払代金引当金二〇兩借用証文) 天保一五年七月九日 杵掛村借り主弥左衛門印↓善藏殿	半	一通 元六
借用申金子之事(竹皮壳払代金引当金三兩借用証文) 天保一五年八月 杵掛村借り主弥左衛門印↓善藏殿	半	一通 元六
借用申銀子之事(文政四年借用三〇〇匁返済滞二付借用崩一札) 天保一五年八月 借用主佐兵衛・親類請人忠右衛門連印↓長野新田村善藏殿	美	一通 元六
借用申銀子之事(金五兩借用証文) 嘉永元年七月 粟生邑借り主秀次郎・請人庄五郎・同栄次郎連印↓長野新田村善藏殿	半	一通 元七
借用証文之事(銀四貫六四〇目借用証文) 嘉永二年正月二八日 借主杵掛村伊八・証人重兵衛・同安兵衛連印↓木屋善藏殿	半	一通 元七
借用申金子之事(金二五兩借用証文) 嘉永二年七月日 物集村借り主儀八印↓長野新田村善藏殿	半	一通 元七
借用申金子之事(金一〇兩借用証文) 嘉永二年一月 川嶋中村屋喜兵衛・同悖庄次良連印↓長野新田村善藏殿	半	一通 元七
借用申金子之事(金一五兩借用証文) 嘉永二年極月 塚原村借主常五郎・請人宇右衛門・同利兵衛連印↓善藏殿	半	一通 元七
借用申金子之事(金一〇兩借用証文) 嘉永二年二月 借用主寺戸村安右衛門印↓長野新田村善藏殿	半	一通 元七
覚(金一五兩借用証文) 嘉永三年正月二九日 鷹屋勇之助印↓三宅善藏殿	美	一通 元七
借用申金子之事(金一兩二歩借用証文) 嘉永三年四月 称念寺印↓長野三宅善藏殿	半	一通 元七
借用金子之事(金一兩借用証文) 嘉永三年七月 片木原定五郎印↓長野善左衛門様	半	一通 元七
借用金子之事(金一兩借用証文) 嘉永三年七月 塚原村亦三郎印↓長野新田村善左衛門様	半	一通 元七
借用金子之事(金一兩借用証文) 嘉永三年七月 杵掛村伊八印↓長野善左衛門様	半	一通 元七
借用申金子之事(金一兩二歩借用証文) 嘉永三年九月 塚原称念寺印↓長野三宅善藏殿	半	一通 元七
借用申銀子之事(銀札三五〇目借用証文) 嘉永三年一月 塚原村借り主宇兵衛・同平右衛門連印↓善藏殿	半	一通 元七
借用申金子之事(金一四兩借用証文) 嘉永四年七月 塚原村借り主安兵衛印↓善藏殿	半	一通 元七
借用申金子之事(金三兩借用証文) 嘉永四年八月 借主称念寺・請人地福寺連印↓三宅善藏殿	半	一通 元七
借用申金子之事(金一〇兩借用証文) 嘉永四年八月 川嶋中村屋喜兵衛印↓長野新田村木屋善藏殿	半	一通 元七

借用申金子之事（金八兩借用証文） 嘉永五年六月 月 借り主称念寺・丹州開花村請人積善寺真空連印 ↓長野三宅善藏殿	半	一通 元六	借用申金子之事（金八兩借用証文） 安政五年一月 月 塚原村借用主勝右衛門・木屋善藏殿 （金一兩借用証文） 安政六年正月 上里村借り主半兵衛・庄屋定右衛門連印↓長野新田善藏殿	半切	一通 元七
借用申銀子之事（銀九八匁四分借用証文） 嘉永五年二月 塚原村借り主徳右衛門・請人宇兵衛連印↓善藏殿	半	一通 元七	借用申金子之事（金一五兩借用証文） 安政六年二月 月 塚原借用主勝右衛門印↓木屋善藏殿	半	一通 元九
金子借用申証文之事（金七兩二歩借用証文） 嘉永五年二月 塚原村借用主人庄屋藤藏印・右同断年寄宇兵衛連印↓長野新田三宅善藏殿	美	一通 元六	借用申金子之事（金一兩借用証文） 万延元年極月二七日 善幸寺様上里村庄屋平兵衛・同定右衛門・請人太兵衛連印↓善藏殿	半	一通 元九
借用申金子之事（金二兩二歩借用証文） 嘉永六年三月 借用主中山弥次兵衛・請人塚原新七連印↓長野善藏殿	半	一通 元九	覚（金一〇兩借用証文） 万延二年正月二七日 河内屋治兵衛・木屋善藏殿	半	一通 元一〇
借用申金子之事（金子二兩二歩借用証文） 嘉永七年五月 塚原村庄屋宇兵衛・同平右衛門・同平八連印↓善藏殿	半	一通 元九	借用申金子之事（金二〇兩借用証文） 文久元年四月 借り主安兵衛印↓善藏殿	半	一通 元一〇
借用申銀子之事（銀五〇〇目借用証文） 嘉永七年六月 三条西入口亀屋東吉・同内伊助連印↓長野新田村善藏殿	半	一通 元九	覚（亀山銀札六貫目借用証文） 文久三年五月二五日 洛西太秦西村宮内↓三宅善藏殿	半切	一通 元一〇
借用申金子之事（金五兩借用証文） 嘉永七年九月 月 借主塚原村庄屋卯兵衛・年寄平右衛門連印↓善藏殿	半	一通 元九	借用申金子之事（金一〇兩借用証文） 文久三年十一月 借用主上里村忠次郎印↓長野善藏殿	半	一通 元一〇
借用申銀子之事（銀二貫六〇〇目借用証文） 安政三年正月 借用主川嶋瓦師半右衛門・同村請人親類伊八・千代原村請人親類兵助連印↓長野新田木屋善藏殿	半	一通 元九	一札之事（金一兩借用証文） 元治元年九月二〇日 悲田院年寄長岡作次郎印↓長野新田村善藏殿	半	一通 元一〇
借用申金子之事（金四兩借用証文） 安政四年二月 月 借用主塚原藤四郎印↓長野善藏殿	半	一通 元九	借用申金子之事（金二五兩借用証文） 慶応二年八月 上里村借り主忠兵衛印↓長野新田善藏殿後欠	半	一通 元一〇
借用申金子之事（金二兩借用証文） 安政五年正月 月 塚原村借り主久藏・証人安兵衛・同嘉七連印↓善藏殿	半	一通 元九	借用申金子之事（金二〇兩借用証文） 慶応三年六月 借用主上里村忠次郎印↓長野善藏殿	半	一通 元一〇
			借用申金子之事（金一〇兩借用証文） 卯十一月二八日 借用主人今里村樋口八郎右衛門・同村請人松之介連印↓長野新田三宅善藏殿 墨引抹消あり	半	一通 元一〇

借用申金子之事（金一〇兩借用証文） 明治元年 二月 上里村借用主仁兵衛・同村請人茂兵衛連印 ↓長野新田村善藏殿	半	一通 元一〇
覚（金一兩二歩并二〇〇疋借用証文） 弘化三年 七月 借主新田屋甚衛・請人丹波屋五七郎・同淀屋重吉連印↓善藏様	切	一通 元一〇
一札（別紙貸付金引当沽券状帳切迄預り願） 弘化五年正月 木□□□・松屋吉兵衛（印）・彫 物屋梅次郎（印）↓梅濱様御貸附所	半	一通 三
別紙一札之事（御所御納戸金貸下ケ証文） 慶応三年二月 城州葛野郡河原町木屋与兵衛・木屋源兵衛・丹波屋庄次連印↓桂御所御貸附所	美	一通 三一
覚（金百兩請取証文） 木屋与兵衛・木屋源兵衛・丹波屋庄次連印↓桂御所御貸附所	半切	一通 三二
奉拝借御之事（妙法院貸付金借用証文） 慶応三年六月（切斷）	堅	一通 二四
預り申銀子之事（銀七五〇目預り証文） 天保九年六月 查掛村預り主四郎兵衛（印）・証人弥左衛門（印）・長野新田証人善藏↓重兵衛殿	半	一通 四一
借用申銀子之事（銀一貫目借用証文） 安政六年八月日 日暮通丸太町下ル借主源之助・きぬ・証人登和↓山田屋茂助殿	半	一通 四二
一札（先納銀返済延滞二付念書） 文政九年極月西坂本村借り主長右衛門・世話人甚右衛門・同佐兵衛↓善藏殿	半 包紙入	一通 四
添証文之事（中村左衛門借銀返済二付数山林引当添証文） 文政一〇年二月大八木縫殿↓善藏殿	美	一通 四三
為念差入候一札之事（中村左衛門借銀引請替二付念書） 善藏↓岡村惣五郎殿	切	一通 四
取替七一札（金銀貸借清算二付取替状） 嘉永三年四月日 今里村八郎右衛門・妻はる連印↓長野新田村善藏殿	美	一通 四
一札（借金返済残金差引二付離別状） 天保一〇年四月 和吉印・妻ちう・悻為之介↓長野新田善藏殿	美	一通 四
仕合一札之事（借金返済残金差引二付仕合証文） 天保一三年四月 川嶋村借り主米屋半兵衛・噯人新屋藤五郎連印↓木屋善藏殿	美	一通 四
覚（金子差引明細証） 卯七月 木屋善藏↓油屋平七様	切	一通 七一
覚（金子預り証文） 午一一月五日 寺内小平次印↓木屋善四郎様	切	一通 七二
領收証（金一円領収） 明治三二年一月二九日 乙訓郡有志者發起人加藤喜平治外三名↓三宅善藏殿	野	一通 七三
覚（貸付金明細証） 亥一一月五日 せわ方↓善藏様	切繼	一通 七四
争 論		
一札之事（無心聞済二付念書） 弘化三年六月 本人新田屋甚兵衛（印）・請人丹後屋五七郎（印）・請人淀屋重吉↓長野新田村木屋善藏様・久藏様	半	一通 四七一
一札（合力金請取二付、以後無心申掛間敷二付念書） 弘化三年七月 新田屋甚兵衛・町内世話人丹後屋五七郎・淀屋重吉連印↓西岡長野新田善藏様	半	一通 四七二
一札之事（金子請取二付仲人を立て一札） 慶応三年八月七日 小林久七・おみか連印↓利三郎様	半	一通 四

御詫一札之事（松山立木伐取二付詫状） 明治九年一月二日 上里村詫主富坂久右衛門・親類同里右衛門・沼田佐兵衛連印↓三宅善藏殿

○

証札（長野新田村庄右衛門家名相続ノ訴訟内済二付差入一札） 天保七年二月 塚原村庄兵衛・岡新田村与市郎・沓掛村亦兵衛連印・御中人千丈新田与左衛門・大原野宇右衛門・今里村八郎左衛門殿

証札（当村百姓後家むめ件中人扱済二付一札） 天保七年二月 長野新田重兵衛印↓当村安兵衛

証札（甚右衛門妹むめ相続一件中人扱済二付一札） 天保七年二月 庄右衛門倅万吉・神足村半左衛門・円明寺村縁引甚右衛門連印↓長野新田村庄屋重兵衛・年寄安兵衛・町内善藏・久兵衛・御中人今里村八郎右衛門・塚原村卯右衛門・大原野村清左衛門・長野新田村内千丈与左衛門殿

為取替申一札之事（中路間家持参金附養子貰二付取替一札） 天保一一年子六月 中路間家主代親類山口要一郎・親類山崎治左衛門・世話人樫木源六連印・下津林村御口入徳雲庵宗淳花押↓濱瀬久兵衛殿同家本人喜兵衛殿

一札（すむ身上貰請二付差入一札） 安政二年九月 上里村孫兵衛印・定次郎↓善藏殿

一札（亀次郎乳養料白銀五枚請取証文） 安政五年九月 寺内村幸平次印↓長野新田善藏殿

一札（末次郎乳養料金一両請取証文） 慶応三年二月 大原野村比茶屋町磯七・同町請人嘉助連印↓長野新田善藏殿

半 一通 六

堅 一通 六

半切 一通 六

美繼 一通 六

美繼 一通 六

半 一通 六

半 一通 六

半 一通 六

裁 判

記（約定金返済地券受取二付一札）（明治）一六年三月三〇日 乙訓郡沓掛村林儀右衛門外七名代林四郎兵衛（朱印）↓三宅善藏殿

裁許書（貸金催促之訴訟控訴審判） 明治一四年二月二八日 大坂上等裁判所判事十時三郎・判事安藤定格連印（朱印）

（貸金催促之訴訟判決） 明治一四年五月二三日 京都裁判所判事松村秀実・判事補小林正氣連印

命令書（原告八被告財産差押執行之旨通知） 明治一五年一月九日 判事補丘崎耕・書記井沢正直連印 京都始審輕罪裁判所野紙使用

裁判言渡書（講金貸付金取戻訴訟二付言渡書） 明治一五年三月一三日 伏見治安裁判所判事補山田小太郎・書記五島端藏 明治一五年四月一三日写（手控） 長野新田村野紙使用

（貸金催促ノ控訴審判決） 明治一五年一〇月四日 京都始審裁判所判事北條元利・書記井沢正直連印 裁許用野紙使用

裁判言渡書（貸し金催促ノ訴訟判決言渡書） 明治一五年八月二五日 伏見治安裁判所判事補山田小太郎・書記片山実連印 裁許用野紙使用

裁判言渡書（三宅善藏ヨリ契約履行請求訴訟二付京都始審裁判所言渡文書）（明治）二〇年一〇月二九日 裁判所書記津田希三郎印 京都始審裁判所野紙使用

（京都府公債証書明細状）（明治）二一・同（一五） 土肥好札

預り金之証（金二五〇円預り状） 明治一五年四月一七日 上京廿二組荒神町三浦武功印↓土肥好札殿二丁四は一綴

切 一通 六

野 一冊 五

野 一冊 五

野 一通 五

野 一冊 五

野 一冊 五

野 一冊 五

野 一冊 五

野 一通 五

野 一通 五

証(預り金之内引換約定証) 明治一五年七月二二日 三浦武功↓土肥好礼殿

野

一通 五十三

委任状(部理代言人木田八十八委任) 明治一五年八月二二日 土肥好礼印

野

一通 五十四

別紙之証(預り金返済延期調整二付別添証文) 明治一五年一〇月一二日 三浦武功↓土肥好礼殿

美

一通 五十五

奉 公 人

奉公人請状綴

(一綴
八通) 至

・年季奉公人請状之事 文政七年霜月 乙訓郡上里村親茂兵衛・奉公人ふじ・請人九左衛門連印↓長野新田村善藏殿

半

一通 至一

・奉公人請状之事 弘化四年一二月 大原野茶屋親甚吉・奉公人倅定次郎・請人忠兵衛↓善藏殿

半

一通 至二

・奉公人請状之事 安政二年二月日 同郡塚原村親半右衛門・奉公人安次郎・請人安兵衛連印↓善藏殿

半

一通 至三

・奉公人請状之事 安政四年八月日 葛野郡川嶋村親平左衛門・奉公人倅仙吉・請人はん連印↓長野新田村善藏殿

半

一通 至四

・奉公人請状之事 万延二年二月日 広瀬村裏之町親源兵衛・奉公人ひで・請人やへ連印↓長野新田村善藏殿

半

一通 至五

・奉公人請状之事 文久元年極月日 乙訓郡物集女村奉公人いか・親新助・請人儀八連印↓長野新田村善藏殿

半

一通 至六

・奉公人請状之事 塚原村親伊三郎・奉公人とせ・沓掛村請人長次郎連印↓善藏様

半

一通 至七

・奉公人請状之事 中久世村親彦右衛門・奉公人孫

野郎・寺戸村亀次郎↓善藏様

○

証(給金前借分一兩受取証文) 嘉永五年一二月三日 日徳大寺村百姓親文五郎・奉公人娘さき・世話人沓掛村儀助連印↓善藏殿

半

一通 五十八

口請証文之事(新兵衛妹たけ身元引受証文) 文化一三年七月日 西岡小塩村新兵衛印

半

一通 五十九

そ の 他

覚(金一五兩受取証文) 九月一四日 松屋仙八↓善藏様

切

一通 六十一

口上(金子返済延引并新借願状) 六月晦日 松屋仙八↓善藏様

半

一通 六十二

書状(借用金子返済延引願) 七月二二日 大原野西迎寺↓三宅善藏様

切

一通 六十三

書状(返済金添状) 九月九日 上原九右衛門↓木善藏様

切

一通 六十四

書状(金三兩借用願) 九月一九日 長岡作兵衛↓善藏様

切

一通 六十五

書状(金子受取持参延引二付詫状) 一一月一〇日

半

一通 六十六

御倚頼書(豊表替・河村氏辭職の件等依頼) 一〇年一月二八日 長野新田村戸長三宅雅兄君

半

一通 六十七

(塚原校計算二付諸帳簿持参之上出頭依頼状) 三月二三日 藤松↓塚原校会計係三宅氏

半

一通 六十八

山城国乙訓郡菱川村文書目錄

やましろう おとくにぐんひしかわむら
山城国乙訓郡菱川村文書目録解題

一、菱川村文書の伝来と整理の方針

本文書群は、一九六二年度に当館が大阪の古書店から購入したもので、総点数一五三点である。これまで史料館案内などでは、「山城国乙訓郡諸村文書」という文書群名称で紹介されてきたが、今回の目録刊行にあたり本文書群の名称を「山城国乙訓郡菱川村文書」と改めることにした。その理由の第一は、後述するように本文書群が菱川村（現在の京都市伏見区羽東師菱川町）において、作成、授受、および保管された一連の文書群であるとなされるからである。第二に、本文書群は三輪善九郎が庄屋役を勤めた時期の文書が中心であるが、明らかに前代の庄屋から引継いだと思われる文書群が一部伝存している。他方、三輪家の家の機能に基づいて作成、授受、および保管された文書、いわゆる私的文書は一切見受けられない。

本文書群に関連する文書では、南淳一家文書五八三点の存在が知られる。南家文書は大きく証文類と水利・講などの村関係文書に分けられるという（『史料京都の歴史』）。菱川村では村役人の世襲制をとっておらず、南家文書および本文書群などをみる限り、南、和卷、黒川、金谷、中村、三輪といった家々から庄屋・年寄・百姓総代（頭百姓・百姓代）の村役人を出していた。その点でも、庄屋引継文書と推定される本文書群が最終的に保管された家、もしくは場所を特定するためには、菱川村の本格的な研究と関連文書群の史料学的分析が進められる必要があり、本文書群の構造のみからでは、本文書群が三輪家に伝存したと断定することには留保せざるをえなかった。したがって、本文書群が菱川村の運営に関わる文書群であるという出所とその機能に基づき、右のような文書群名称を採用することにした。

当館では本文書群を受け入れた後、仮整理による出納カードにより閲覧に供してきた。史料の整理・分類編成においては、文書群の有する階層構造に基づいた編成となるよう心がけた。ただし、本文書群のなかには、仮整理の段階で一括して親番号を与えられた文書群があり、それら

は紐でくくられたものが多かった。こうしたまとまりが、いつどのような段階で形成されたのかを現在では明らかにしえない。しかも、これらのまとまりは、必ずしも文書群の階層構造を反映したものではない。今回それら一点ごとの細目録をとるにあたり、仮整理段階で付けられた番号を親番号としてそのまま活かし、一括で処理されているものには枝番号を付与することで処理した。そのため、同じ階層レベルに属すると思われる文書の中には、親番号（単独番号）で処理されたものと枝番号で処理されたものがあるという不統一を生じているが、点数の少ない文書群であるため、新たに番号を付与することでこれまでの利用者に混乱を生じさせてもよくないと考えた。その点、目録を利用するにあたっては留意してほしい。

二、菱川村の歴史

菱川村は鴨川と桂川の合流地点の西岸に位置し、北は久我村、南は古川村、東は志水村、西は上植野村と接する。この地域は毎年のように繰り返す洪水に悩まされていた。当地区は、古代には長岡京の京域にかかり、中世の菱川荘は摂関家領のひとつであった。近世に入ると、幕府領・六条家領・南禅寺領・本圀寺領・堀川家領によって占められ、総石高は「正保村高帳」では七七七石余、「元禄郷帳」「天保郷帳」では七九九石余となっている。寛保三年（一七四三）の村明細帳（史料番号一一、以下同じ）では、小堀十左衛門代官蔵入高五二六石二斗八升、六条家領四五石、堀川因幡知行三〇石、南禅寺領二一石一斗九升、本圀寺領高一五五石一斗七升であった。戸数は四一軒で、そのうち高持は三七軒、無高は四軒で、総人数二一六人のうち、男一一六人、女百人、牛一一匹、馬は所持していなかった。村内には浄土宗西向寺・松林庵、真言宗観音寺・釈明寺・証心庵の五ヶ寺があったが、志水村にある羽束師官を氏神とし、古川村・志水村・菱川村・樋爪村の氏子による祭礼を毎年四月におこなった。他に菱川村には地藏堂が一ヶ所あった。天保九年（一八三八）には戸数が五四軒となり、総人数一一二人のうち、男六〇人、女五二人、外に僧二人であった（南（淳）家文書）。戸数が増加するにもかかわらず、総人数は減少している。

当村から京都へは二里半、小堀代官役所へも二里半、大坂へは一〇里、江戸へは一二〇里余、伏見へは一里、淀へは一里、山崎へは五〇町余

であった。百姓持山は菱川村より三里余りの、摂津国と山城国境の鴨背嶽に一か所あり、そこで薪を得て山手銀七匁五分を上納した。他村から菱川村への入作はなかったが、菱川村から他村への出作は多く、小堀十左衛門代官所支配の上植野村・鶏冠井村・志水村の出作高三〇石五斗余、六条家領志水村の出作高五石余、本圀寺領志水村の出作高一〇石余、因幡殿領志水村の出作高一石七斗、南禅寺領鶏冠井村の出作高一石となつてゐる。年貢米の津出しは二条御蔵まで直納めとし、小物成は上ヶ葉代銀七匁五分を小堀代官役所まで上納した。高掛り物は、伝馬宿掛（高百石に付六升宛）、六尺給掛（高百石に付二斗宛）、御蔵前掛（高百石に付銀一五匁宛）、二条城修復掛、鉄砲合藥掛、上使馬代掛があつた。口米は物成米一石に付米三升宛であつた。

菱川村の村役人は、まず庄屋は断片的ながら金吾平、源兵衛、源助、善九郎の名を確認できる。年寄二―三名と百姓惣代（頭百姓）一―二名によつて構成されていた。これら庄屋を初めとする村役人の世襲制は見られない。寛保三年段階での村役人給は、庄屋給が高百石に一石宛、年寄給は高百石に三斗宛、定使給は村中より米一石五斗を渡した。慶応二年（一八六六）には三輪善九郎が、庄屋源助の代役を勤めている。これ以外には、各領主ごとに御領庄屋および私領（給地）庄屋が置かれていた。

菱川村は明治元年（一八六八）に京都府に属し、明治二三年に鴨川村・志水村・古川村と合併して羽束師村の大字となり、村役場は菱川区に置かれた。その際の菱川村の戸数は四七戸、人数二三八人であつた。昭和二六年（一九五一）に京都市伏見区に編入され、現在にいたつてゐる（『史料京都の歴史』）。

右は一村落としての菱川村の変遷であつて、これは菱川村の機能の一つの側面でしかなかった。菱川村は近世には桂川からの引水によつて農業経営をおこない、北方の築山村（現南区）に長さ五〇町余ほどの井堰をかけ、周辺の古川村・志水村・築山村の四ヶ村が共同で用水組合を作り、井堰入用は御料・私料の高割で賄つてゐた。菱川村が四ヶ村惣代を勤めた史料も見られる（史料番号一一四）。しかも後述するように、菱川村はいくつかの重層的な組合村に属し、惣代的機能を果たした村であつた。菱川村が山城国の地域秩序のなかで果たした役割について、ここで具体的に検討することはしないが、本文書群には菱川村の組合村行政に関わる文書が断片的ながら含まれてゐるので、それらが今後活用されることによつて菱川村および周辺村落の歴史がより豊かな具体像をもつて描かれることを期待したい。

三、菱川村文書の性格と階層構造

菱川村文書一五三点は、寛保三年（一七四三）から明治七年（一八七四）にわたる村方文書である。その内容は、山城国地域の村落組織構造のあり方を反映して、おもに①江戸時代の村方文書、②明治元年に京都府編入後の村方文書、③組合村文書の三つに分けることができる。したがって、大項目には「菱川村」、「第五区菱川村」、「組合村」を立てた。以下に簡単な説明をしておく。

菱川村 中項目には、「土地」「貢租」「村政」を立てた。いずれも、点数はわずかである。三輪善九郎が庄屋を勤めた時代のものが多いが、必ずしも善九郎が庄屋役を勤めるにあたり、作成、授受されたものばかりではない。「土地」のなかには、菱川村の水帳・検地帳のほかに、「和巻源兵衛分」「中村太右衛門分」といった個人分の石高書上げ帳が含まれている。また、年寄（文武兵衛）の所持文書などもある（史料番号一一四）。こうした文書の混入は、菱川村の庄屋が世襲制をとっていないことの現れであり、その点で本文書群は菱川村の庄屋引継文書と考えることができる。文書の初見は、寛保三年の村明細帳で、別に宝暦六年（一七五六）のものが一冊ある。「当村郷村改」によって村明細帳が作成され、小堀代官役所に提出された。前者の一部分は『史料京都の歴史』に翻刻されている。

第五区菱川村 明治元年（一八六八）に京都府が成立後、京都府では同五年に庄屋・年寄を廃止して、中年寄を区長、町年寄を戸長に改称し、小学校区を戸籍区に利用した。このとき乙訓郡は淀支庁の管轄となった。ここに収めた文書の宛先には、「京都御政府」「京都御役所」「京都府御廳」という表記が多く見られるが、なかには「京都府郡政役所」（史料番号一〇七一）と表記したものがある。そこで、京都府庁と郡政役所（支庁）とを峻別した編成を採用することが文書群の階層構造を正しく理解するために必要であるが、文書点数も少ないので、ここでは両者を包括した京都府の管轄下において、作成、授受、保管された文書としてまとめて扱った。中項目には、「土地」、「徴兵」、「救恤」、「寺社」、「諸願」を立てた。なお、「堤井路惣敷地定帳」（史料番号一二七）は、「山城国乙訓郡菱川村釈明寺々籍」「明治三年 去巳年小入用帳」などを紙背文書としており、菱川村の帳簿が再利用されている。

組合村 組合村とは、さまざまな内容や機能により、村落が一村を越えた連合を組織し、共同作業や共同負担をおこなう地域共同体である。前述のように、菱川村では築山村の取水口から用水を得て農業を営んでおり、この用水を志水・古川の二ヶ村を加えた四村で用水組合を作って、共同管理した。その四ヶ村惣代を菱川村が勤めた際の文書群が伝存している。内容的には、江戸期は小堀代官役所もしくは代官所の川方役人に宛てて、井堰の普請を願ったものが中心である。京都政府発足後も、この四ヶ村結合は続けられた。また、享保十二年（一七二七）には東土川村の取水をめぐる用水争論がおり、東土川村の取水を一部追認することで解決したが、その後も東土川村とは出入が生じている（史料番号一一五）。これ以外にもいくつかの用水組合や機能を異にする組合が重層的に成立していたようで、文化・文政期には乙訓郡久我村・志水村・菱川村・古川村・樋爪村・古市村・神足村・勝龍寺村・赤井村、紀伊郡水垂村・大下津村の二ヶ村による羽束師川の用水普請管理の組合村が結成されている。それらは、史料番号一〇九、一二八の「口上書綴」にある一件ごとの嘆願書を詳細に検討することにより、当時の組合村と菱川村との結合関係がより具体的に明らかになるものと思われる。明治元年（一八六八）には菱川村が乙訓郡古市村・神足村・勝龍寺村（いずれも現長岡京市）の四ヶ村惣代を勤めている（史料番号一〇六）。

次に、明治三年七月から同四年九月にかけて、京都府政府に提出された旧領主別高反別小前帳の控帳類がまとまって伝存している。いずれも乙訓郡内の石倉村・今里村・岩見上里村・大藪村・開田村・鶏冠井村・金ヶ原村・上植野村・上久世村・久我村上方・久我村下方・志水村・白井村・下海印寺村・調子村・長法寺村・塚原村・築山村・友岡村・馬場村・東土川村・菱川村・樋爪村の二三ヶ村分である。ここに収めた文書名には若干の異動があり、内容的にも性格の異なる文書が含まれていることが想定されるが、文書点数も少なく煩雑となるので、さらに細かい項目は立てず、村ごと一括して扱い、今後の検討に委ねることにしたい。

ここで、これら一連文書を菱川村の組合行政の機能に基づいて作成、授受、保管された文書群と考えた理由についてふれておきたい。まず、菱川村の小前帳の一例を提示しよう。

(史料番号七五―五)

未歳早稲方内見小前帳

元堀川家上知

山城国乙訓郡

古検 菱川村

元堀川家上知

一、高三拾石

山城国乙訓郡

此反別式町壹反五畝六歩

菱川村

内

高四石四斗六升

此反別三反廿五歩

畝違定引

残高式拾五石五斗四升

石盛平均

此反別壹町八反四畝拾壹歩

壹石三斗八升五合

内

高八石九斗壹升四合壹勺

早稲方御検見奉請候分

此小前

わた貫

一 八畝歩

下々毛

田主

伝左衛門

東うら

二 式畝拾式歩

下々毛

源兵衛

十ヶ坪

三 一 壹反歩

中毛

善九郎

堀前

四 一 七畝歩

下毛

同人

(朱書)「改壹升式合五勺」

角かいと

五 一 壹反四歩

下々毛

太右衛門

脇田

六 一 壹反三畝五歩

下毛

大助

川田尻

七 一 壹反三畝廿歩

下々毛

同人

右寄

反別合六反四畝拾壹歩

此毛揃

一 壹反歩

中毛

一 式反五歩 下毛

一 三反四畝六歩 下々毛

合毛付反別六反四畝拾壹歩

右署当辛未早稻方御検見二付村役人田主立会内見仕候処、書面之通御座候、尤田每字番付、内見位付認候、畝札并隣村境へハ葉竹建置紛敷儀無之様仕候、以上

辛未八月

右村

百姓代

南 大助

年寄

黒川源右衛門

同

金谷伝左衛門

庄屋

三輪 善九郎

京都府御廳

A

「八月十三日 大庄屋迄帳面上ル

同 十五日 昼渡 検見

」

B (朱書)

「本庄大属様

市石少属様

村木権少属様

大庄屋

岡本三郎平

松本嘉一郎様

メ 外僕式人

┌

小前帳の田主の名は、すべて村役人四名の名である。ここである小前とは水呑のような弱小百姓ではなく、村内に田畑屋敷を所持し貢租を負担する高持百姓の意味であり、早稲刈の検見を受けるための旧領主ごとの基本台帳が、この小前帳であった。これ以前にこうした帳簿が作成されたかどうか、史料学的に検討課題を残しているが、とりあえず新政府発足による旧領主層の上知のもとで、年貢収納方法に変更がもたらされ、その中で作成された帳簿ではないかと位置づけておきたい。

菱川村の小前帳は他村の小前帳と記載内容については同じだが、記載様式において明らかに異なる点が三つある。まず、他村では一筆ごとに田主の名前の下には押印があるのに対し、菱川村には一切押印がない。第二に、他村では村役人の名前の下にも押印があるのに、菱川村にはない。第三に、用いている料紙も菱川村のものは粗悪であり、朱書の書き込みや文字の訂正などが目立つ。菱川村の帳面には、こうした特徴が共通して見られ、村役人の押印がある場合にも善九郎の印のみ省略されたものがある（史料番号七九一一）。

ある同一の機能（政策意図）のもとで作成された文書群のなかにおいて、菱川村の文書様式のみに差異が見られる。この違いは、なにを意味しているのだろうか。押印のない文書は、下書、控、案文と考えるのが一般的であろう。おそらく、菱川村の場合は自村分の控えなので、村方文書の控作成の通例にしたがい、押印が省略されたのではなからうか。つまり、菱川村の文書は京都府政府へ提出した本紙の控、もしくは下書であると見なされる。その意味では、逆に他村文書は正帳としての要件を満たした文書ということができよう。

さらに注目すべきは、AとBの書き込みである。Aではまず、八月一三日に帳面を大庄屋まで提出し、その二日後にBの政府役人四名と大庄屋岡本三郎平による検見があったとわかる。相綴になっている「未歳早稲方内見小前帳」（七五一一）には、八月一三日の日付の左横に「出張廳ニテ大庄屋へ渡ス」とある。小前帳は菱川村から直接京都府政府に提出されたのではなく、菱川村―大庄屋（京都支庁）―京都府庁という文書の流れに基づいて提出されたことを確認できる。ここに菱川村の組合村惣代的機能を見いだすならば、各村からいったんとりまとめ役をする菱川村に、京都府政府に提出する正帳および正帳と同様に作成された控帳の二冊が提出され、正帳は菱川村から大庄屋へ提出され、控帳は菱川

村に残され、これが本文書群に伝存する他村の小前帳ではないかと推定できる。さらにいえば、菱川村の記載様式のような小前帳の控、もしくは下書の類が各村に残された可能性がある。菱川村の管轄下にあった村の小前帳およびそれに類する帳簿がすべて本文書群の中に残っていると限らないので、実際には二三ヶ村を越える広域行政の単位があつたことも念頭に置く必要があるだろう。これはあくまでも、本文書群の有する階層構造を史料学的に検討したことによる仮説であり、今後の当該地域の研究のなかで検討していただければ幸いである。

△参考文献▽

- 【史料京都の歴史】第一六巻、伏見区（平凡社、一九九一年）
- 【京都市の地名】日本歴史地名体系二七（平凡社、一九七九年）
- 【京都府百年の年表】一、政治・行政編（一九七二年）
- 【京都府百年の資料】一、政治行政編（一九七二年）
- 【京都市町村合併史】（一九六八年）

乙訓郡村名変更表

	明治元年	明治22年	明治元年	明治22年
○	神足村	新神足村	広隆寺門前	太秦村
○	古市村		市川村	
○	調子村		大石中里村	
○	勝龍寺村		安養寺村	
○	馬場村		安井村	
	開田村	大山崎村	常磐村	
	友岡村		谷村	
	大山崎庄		窪村	
	円明寺村		中野村	
	下植野村		生田村	
○	向日町	向日町	高田村	下嵯峨村
○	鶏冠井村		川端村	
○	西土川村		上嵯峨村	
○	白井村		池裏村	
○	寺戸村		岡村新田	
○	上植野村	久世村	天龍寺村	
○	物集女村		水尾村	
○	大藪村		原村	
○	下久世村		越畑村	
○	中久世村		中村	小野郷村
○	上久世村	久我村	東河内村	
○	築山村		西河内村	
○	東土川村	羽東師村	○下海印寺村	海印寺村
○	久我村		○金ヶ原村	
○	石倉村		浄土谷村	
○	鴨川村	淀村	○奥海印寺村	乙訓村
○	志水村		○長法寺村	
○	菱川村		粟生村	
○	古川村	花園村	井之内村	
○	樋爪村		○今里村	
	鳴瀧村		○石見上里村	大原野村
	山越村	谷口村	灰方村	
	池上村		長峯村	
	法金剛院村	梅ヶ畑村	西阪本村	
	木辻村		灰谷村	
	谷口村		上羽村	
	善妙寺村		小塩村	
	平岡村		大原野村	
	中嶋村		出灰村	大枝村
	一ノ瀬村		外畑村	
			○長野新田	
			○塚原村	
			○沓掛村	

注：○印は本文書群中の反別小前帳の村名。
『京都府市町村合併史』より作成。

山城国乙訓郡菱川村文書目録 目次

菱川村	一七	石倉村	今里村	岩見上里村	大藪村	開田村	鶏冠井村
土地	一七	金ヶ原村	上植野村	上久世村	久我村上方	久我村下方	
水帳・名寄帳		志水村	白井村	下海印寺村	調子村	長法寺村	塚原村
貢租	一七	築山村	友岡村	馬場村	東土川村	菱川村	樋爪村
村政	一七						
村明細帳 戸口							
寺社	一七						
第五区菱川村（明治六年以後）	一八						
土地	一八						
徴兵	一八						
救恤	一八						
寺社	一八						
諸願	一八						
早稻苅取願 普請願							
組合村	一八						
用水組合	一八						
小前取調帳	一八						

山城国乙訓郡菱川村文書目録

(文書群記号 37D)

菱川村

土地

水帳・名寄帳

形態 數量 番号

御料地並本帳 菱川村

半 一冊 三

(代官所高反別帳雛形) (文久元年) (誰代官
所何国何郡何村三役人連印→何ノ誰様御役所) 朱書
一用紙大藩土ノ類横帳

横美 一冊 一三

御料名前別帳 (善九郎他田高書上)

半 一冊 二

○中村太右衛門

(中村太右衛門分田高書上)

横半 一冊 一三

田畑屋敷御高書訳水帳 (太右衛門分) (明和四・
寛政七・同八)

半 一冊 四

持高覚帳 天保一五年八月 中村太右衛門印

半 一冊 三〇

○和卷源兵衛

持田地並帳 文政七年正月改 和卷源兵衛

半 一冊 三

○観音寺

山城国郡村仮名附帳 (観音寺除地高書上)
(享和三年一〇月) 乙訓郡菱川村観音寺 (観音寺・
庄屋三郎兵衛・年寄安兵衛連印→御勘定所)

半 一冊 三

貢 租

戊年御上納取立帳 文久二年二月 庄屋大助 半 一冊 一〇五

寅年立毛内見合附寄帳 (扣) 慶応二年九月 乙
訓村菱川村 (百姓代源兵衛・年寄太右衛門・庄屋源
助代兼善九郎→会津様役知代官) 半 一冊 三

欽下御願帳 (善九郎・傳左衛門・源右衛門・大
助分三〇石余) 半 一冊 三五

村 政

村明細帳

山城国乙訓郡菱川村差出明細帳正扣 寛保三年六
月 菱川村庄屋源兵衛・年寄左次兵衛・同善兵衛・
同平左衛門・頭百姓大助・同三郎兵衛連印→小堀十
左衛門様御役所 合冊半 一冊 一一

明細帳扣 宝暦六年二月 小堀数馬御代官所城州
乙訓郡菱川村 (菱川村庄屋弥左衛門・年寄安右衛門・
同伝兵衛・百姓惣代源兵衛・同金五平→小堀数馬様
御役所) 合冊半 一冊 一二

戸 口

宝暦二申年寛政四子年方去申年迄年々家人別
書上帳 (雛形) 享和元年何月何国何郡何村 (庄
屋誰・年寄誰・百姓惣代誰→小堀縫殿様御役所) 半 一冊 一八

寺 社

御觸二付口上書ひかへ 享和三年七月二二日 乙
訓郡菱川村西向寺・観音寺 菱川村庄屋三郎兵衛・年

寄忠兵衛奥書あり

第五区菱川村(明治六年以後)

土地

地租改正(税地総計帳雛形)(何郡何区何村戸長印)

新検方一筆限高反別小前帳

畑方高反別小前帳

一筆限畑方高反別小前帳

田畑潰地并荒地其外取調一筆限帳 明治六年 明治六年七月小学校へ差出ス

堤井路惣敷地定帳 元治元年九月 甘露寺様庄屋六左衛門扣 紙背文書「山城国乙訓郡菱川村釈明寺々籍」他

徴兵

今般御入用之筋ニテ身丈ケ五尺以上身體壯健者ヨリ拔書尤阿親有之上且次男之向 明治四年四月一日 乙訓郡菱川村庄屋三輪善九郎・年寄黒川源右衛門↓京都御政府

救恤

村高家数難渋之者取調書帳(明治二年正月)乙訓郡菱川村(庄屋源助・年寄太右衛門↓京都府御役所)

寺社

北向見返天満宮御神事御場御膳寄附帳(三輪善次郎他四人) 明治四年二月

北向見返天満宮御神事御場御膳寄附帳(三輪善次郎他四人) 明治三年二月

北向見返天満宮御神事御場御膳寄附帳(三輪善次郎他四人) 壬申(明治五年)

御菩薩地之御尊像小野篁御作六地藏隨一地蔵堂修覆再建寄進帳 明治元年一月 地藏講世話方・念仏講世話方(印)

諸願

早稲刈取願

当田方早稲刈取御願帳 明治六年一〇月 小前惣代金谷傳左衛門(印)・戸長黒川源右衛門(印)・戸長三輪善九郎↓京都府七等出仕国重正文

覚(金沓円請取) 一〇月一九日 植田川熊五郎(印) ※丁間史料

当田方早稲刈取御願帳 明治七年九月 乙訓郡第壹区菱川村(戸長三輪善九郎・同黒川源右衛門・小前惣代金谷傳左衛門)

普請願

乍恐普請御願書(村持屋敷地借請、居宅の普請願) 明治二年一月 乙訓郡菱川村願人百姓清五郎(願人清五郎・庄屋善九郎・年寄太右衛門連印↓京都府郡政御役所)

乍恐普請御願書(村内明屋敷地借請、居宅の普請願) (明治三年一月七日) 乙訓郡菱川村願人五兵衛(願人五兵衛(印)・隣家忠兵衛(印)・同源兵衛(印)・庄屋善九郎・年寄多右衛門↓京都御

政府

普請御届(古屋建直し願書) 明治五年三月 乙訓郡
菱川村(願人木村清吉・西南隣金谷傳左衛門・東
隣田中藤吉・北隣藤田宇右衛門・年寄中村太右衛門・
庄屋三輪善九郎連印↓京都府御廳) 三月五日御届、
御下分二相成ル

普請(古屋建直し願書) 明治五年三月 乙訓郡菱
川村(願人木村清吉・東隣田中藤吉・北隣藤田宇右
衛門・西南隣金谷傳左衛門・組頭金谷茂左衛門連印
↓京都府御廳)

組合村

用水組合

卯春御普請仕様帳 天明三年四月 (小堀数馬御役
所(印)↓乙訓郡菱川村・古川村・志水村)

卯春御普請仕様帳 天明三年四月 (小堀数馬御役
所(印)↓乙訓郡菱川村・古川村・志水村) 石高
訂正付箋あり

脇川筋拾ヶ年御普請帳 乙訓郡菱川・古川村立合

用水井堰并用樋御伏替御願書 延享五年正月(四
ヶ村惣代菱川村庄屋源兵衛・年寄武兵衛・安兵衛・
茂兵衛↓上倉彦右衛門)

桂川筋築山村外三ヶ村立合用水樋御普請仕様
帳写(明治四年二月) (京都府) 本紙は築山
村に有り

乍恐奉願口上書(桂川筋堰普請) 明治四年三月
二三日 組合村々乙訓郡築山村庄屋横山新右衛門・
菱川村庄屋三輪善九郎・古川村庄屋竹中六郎兵衛・
志水村庄屋斎内佐右衛門連印↓京都御政府

乍恐奉願口上書 明治四年三月二三日 組合村々乙
訓郡築山村庄屋横山新右衛門・菱川村庄屋三輪善九

郎・古川村庄屋竹中六郎兵衛・志水村庄屋斎内佐右
衛門連印↓京都御政府 ※一〇八一と同文

用水樋伏替并東土川村繩手切破り候損出入一
件 正徳五―天明七年 丁間史料あり

桂川通(紀伊郡水垂村・大下津村他七ヶ村立合
普請入用)

(京都政府宛口上書綴) (明治二年六月―同四年六
月)

(京都政府宛口上願書綴) (慶応元年―明治四
年)(菱川村)

文久三亥年方慶応三卯年迄五ヶ年間田畑御取米
之写(乙訓郡古市村・神足村・勝龍寺村分書
上) 明治元年十一月 乙訓郡村々(乙訓郡村々惣
代菱川村庄屋源助↓京都府御役所)

小前取調帳

石倉村

中山家高反別小前取調帳 明治三年八月 庄屋佐
治兵衛・年寄藤右衛門連印↓京都御政府

土山家知行高反別取調小前帳 明治三年八月
庄屋佐治兵衛・年寄藤右衛門連印↓京都御政府

堀川家高反別取調小前帳 明治三年八月 庄屋
佐治兵衛・年寄藤右衛門連印↓京都御政府

庭田家高反別取調小前帳 明治三年八月 庄屋 佐治兵衛・年寄藤右衛門連印↓京都御政府	半	一冊 七
井料書上帳 明治三年八月 庄屋佐治兵衛・年寄 藤右衛門連印↓京都御政府	半	一冊 三
今里村		
西園寺様田方並小前一筆帳 明治三年八月 庄屋 清左衛門・同八良右衛門・年寄安左衛門・同宇右衛 門・同孫兵衛連印↓京都御政府	半	一冊 三
伏見宮様田方並小前一筆帳 明治三年八月 庄屋清 左衛門・同八良右衛門・年寄安左衛門・同宇右衛門・ 同孫兵衛連印↓京都御政府	半	一冊 六
二内侍御局様上知当午田方立毛内見寄帳 明治 三年一〇月 庄屋清左衛門・同八良右衛門・年寄安 左衛門・同宇右衛門・同孫兵衛連印↓京都御政府	半	一綴 八一
(京極局上知当午田方立毛内見寄帳) 明治三年一 〇月 庄屋清左衛門・同八良右衛門・年寄安左衛門・ 同宇右衛門・同孫兵衛連印↓京都御政府	半	一綴 八一二
岩見上里村 いわみかみさと		
花開院領当午年立毛内見小前帳 明治三年一〇月 (庄屋喜助・年寄喜兵衛・庄屋九郎左衛門・年寄藤 兵衛連印↓京都御政府)	半	一冊 八
花開院領当午年立毛田方毛揃帳 明治三年一〇月 庄屋喜助・年寄喜兵衛連印↓京都御政府	半	一冊 三
戒光寺領当午歲立毛田方毛揃帳 明治三年一〇月 庄屋喜助・年寄喜兵衛・庄屋九郎左衛門・年寄藤兵 衛連印↓京都御政府	半	一冊 四
(善峯寺領立毛見合附帳下書) 付札あり	半	一冊 五
(戒光寺領立毛見合附帳下書) 付札あり	半	一冊 六
(大炊道場聞名寺午年立毛内見合附寄帳下書)		
大藪村		
御料書拔小前帳 明治三年九月 庄屋嘉左衛門・ 年寄德兵衛・同治郎兵衛連印↓京都御役所	半	一冊 七
御料内檢合附寄帳 明治三年九月 庄屋嘉左衛門・ 年寄德兵衛・同治兵衛連印↓京都御役所	半	一冊 八
開田村		
櫛笥殿家領高反別小前帳 明治三年七月 庄屋長 左衛門・年寄九郎右衛門・同勘兵衛連印↓京都御政 府	半	一冊 三
鶏冠井村 かいで		
伏見宮様家領高反別小前帳 明治三年八月 庄屋 五右衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	半	一冊 四
東坊城殿家領高反別小前帳 明治三年八月 庄屋 五右衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	半	一冊 五
六條殿家領高反別小前帳 明治三年八月 庄屋五 右衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	半	一冊 六
正親町三條殿家領高反別小前帳 明治三年八月 庄屋五右衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	半	一冊 七
藤波殿家領高反別小前帳 明治三年八月 庄屋五 右衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	半	一冊 八
櫛笥殿家領高反別小前帳 明治三年八月 庄屋五 右衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	半	一冊 九
五辻殿家領高反別小前帳 明治三年八月 庄屋五 右衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	半	一冊 一〇
庭田殿家領高反別小前帳 明治三年八月 庄屋五 右衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	半	一冊 一

土御門家領高反別小前帳 右衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	明治三年八月 庄屋五	半	一冊 四三
五條殿家領高反別小前帳 右衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	明治三年八月 庄屋五	半	一冊 四三
園殿家領高反別小前帳 衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	明治三年八月 庄屋五右	半	一冊 四四
甘露寺殿家領高反別小前帳 五右衛門・年寄安右衛門連印↓京都御政府	明治三年八月 庄屋	半	一冊 四五
金ヶ原村			
高反別小前帳（伏見宮領地） 原村庄屋市右衛門・年寄喜兵衛連印↓京都御政府	明治三年八月 金ヶ	半	一冊 三
上（当村田畑山間之惡地二付、斷狀） 八月 金ヶ原村庄屋市右衛門・年寄喜兵衛連印↓京都御政府	明治三年八月	半	一冊 二九一
上（芝開小物成書上） 屋市右衛門・年寄喜兵衛連印↓京都御政府	明治三年七月 今ヶ原村庄	半	一冊 二九一
上（庄屋給・井料給書上） 村庄屋市右衛門・年寄喜兵衛連印↓京都御政府	明治三年八月 今ヶ原	半	一冊 二九一三
上植野村			
青蓮院宮家領田方反別小前帳 野村庄屋清兵衛・年寄久左衛門・同四郎兵衛連印↓京都御政府	明治三年七月 上植	半	一冊 四
油小路家々領田方反別小前帳 野村庄屋清兵衛・年寄久左衛門・同四郎兵衛連印↓京都御政府	明治三年七月 上植	半	一冊 四七
藤谷家々領田方反別小前帳 庄屋清兵衛・年寄久左衛門・同四郎兵衛連印↓京都御政府	明治三年七月 上植野村	半	一冊 四
醍醐家々領田方反別小前帳 村庄屋清兵衛・年寄久左衛門・同四郎兵衛連印↓京都御政府			
西大路家々領田方反別小前帳 訓郡上植野村（上植野村庄屋清兵衛・年寄久左衛門・同四郎兵衛連印↓京都御政府）	明治三年七月 乙	半	一冊 五〇
姉小路家御家領田方反別小前帳 訓郡上植野村（上植野村庄屋清兵衛・年寄久左衛門・同四郎兵衛連印↓京都御政府）	明治三年七月 乙	半	一冊 五一
三寶院宮御家領田方反別小前帳 訓郡上植野村（上植野村庄屋清兵衛・年寄久左衛門・同四郎兵衛連印↓京都御政府）	明治三年七月 乙	半	一冊 五二
聖護院宮御家領田方反別小前帳 上植野村庄屋清兵衛・年寄久左衛門・同四郎兵衛連印↓京都御政府	明治三年七月	半	一冊 五三
梶井宮御家領田方反別小前帳 野村庄屋清兵衛・年寄久左衛門・同四郎兵衛連印↓京都御政府	明治三年七月 上植	半	一冊 五四
上久世村			
二命婦上知・三命婦上知當年立毛内見合附寄帳 帳 明治三年一〇月 庄屋清右衛門・年寄六兵衛・同平兵衛・同與兵衛連印↓京都御政府	明治三年一〇月	半	一冊 八二
相国寺様當年立毛内見合附寄帳 月庄屋清右衛門・年寄六兵衛・同平兵衛・同與兵衛連印↓京都御政府	明治三年一〇月	半	一冊 八三
繼孝院様當年立毛内見合附寄帳 月庄屋清右衛門・年寄六兵衛・同平兵衛・同與兵衛連印↓京都御政府	明治三年一〇月	半	一冊 八四
本光院様・慈雲院様當年立毛内見合附寄帳 明治三年一〇月 庄屋清右衛門・年寄六兵衛・同平兵衛・同與兵衛連印↓京都御政府	明治三年一〇月	半	一冊 八五

大徳寺様当午年立毛内見合附寄帳 明治三年一〇月 庄屋清右衛門・年寄六兵衛・同平兵衛・同與兵衛連印↓京都御政府 半 一冊 六

瑞華院様・惠聖院様当午年立毛内見合附寄帳 明治三年一〇月 庄屋清右衛門・年寄六兵衛・同平兵衛・同與兵衛連印↓京都御政府 半 一冊 七―一

御料当午年立毛内見合附寄帳 明治三年一〇月 庄屋清右衛門・年寄六兵衛・同平兵衛・同與兵衛連印↓京都御政府 半 一冊 七―二

久我村上方

鷹司殿家領高反別小前取調帳 明治三年七月 庄屋九郎左衛門・年寄弁之助連印↓京都御政府 半 一冊 二〇

松橋家領高反別并小前帳 明治三年七月 庄屋九郎左衛門・年寄長藏連印↓京都御政府 半 一冊 二一

勢多家知行高反別并小前帳 明治三年七月 庄屋九郎左衛門・年寄收納取立役四郎兵衛連印↓京都御政府 半 一冊 三

久我村下方

久我家々領高反別小前帳 明治三年七月 訓郡久我村下方 久我村庄屋喜右衛門・收納取立役兼年寄調次郎連印↓京都御政府 半 一冊 二六

烏丸家々領高反別小前帳 明治三年七月 (久我村下方庄屋收納兼喜右衛門・年寄八郎兵衛連印↓京都御政府) 半 一冊 二七

一條家々領高反別小前帳 明治三年七月 乙訓郡久我村下方 (庄屋喜右衛門・收納取立役兼年寄八郎兵衛連印↓京都御政府) 半 一冊 二八

北面中知行高反別小前帳 明治三年七月 庄屋喜右衛門・收納取立役兼年寄八郎兵衛連印↓京都御政府 半 一冊 二九

鷹司家々領高反別小前帳 明治三年七月 庄屋喜右衛門・收納取立役兼年寄政次郎連印↓京都御政府 半 一冊 三

東園家々領高反別小前帳 明治三年七月 庄屋喜右衛門・收納取立役兼年寄政次郎連印↓京都御政府 半 一冊 三

志水村

午年立毛内見小前帳 明治三年一〇月 庄屋佐右衛門・年寄七右衛門・百姓惣代市右衛門連印↓京都府御役所 半 一冊 八

(御料)午年立毛内見合附寄帳 明治三年一〇月 庄屋佐右衛門・年寄七右衛門・百姓惣代市右衛門連印↓京都府御役所 半 一冊 九

(飛鳥井殿上知)午年立毛内見合附寄帳 明治三年一〇月 乙訓郡志水村上知方(庄屋佐右衛門・年寄七右衛門・百姓惣代市右衛門連印↓京都府御役所) 半 一冊 九

白井村

土山從五位知行高反別小前帳 (明治三年七月) (庄屋五右衛門・年寄又右衛門・取立役五左衛門連印↓京都御政府) 半 一冊 六

下海印寺村

別帳面(山林年貢・水車・冥加金・地床井出式地高書上) 明治三年八月五日 乙訓郡下海印寺村庄屋久左衛門・年寄嘉兵衛連印↓京都御政府 半 一冊 一三〇

調子村

調子家知行所高反別小前帳 明治三年七月 調子村庄屋佐兵衛・年寄源四郎連印↓京都御政府 半 一冊 一三一

正観町家々領高反別小前帳 明治三年七月 調子村庄屋佐兵衛・年寄源四郎連印↓京都御政府 半 一冊 一四

長法寺村

大典侍御局上知高反別小前帳 明治三年八月 庄屋
久左衛門・年寄清兵衛・同庄右衛門連印↓京都御政
府

半 一冊 五

塚原村

(金光寺領立毛見合附帳下書) 付札あり

半 一冊 九

築山村

今城家御家領高反別小前帳 明治三年八月 (築山
村庄屋新右衛門・年寄利兵衛・收納方清左衛門連印
↓京都御役所)

半 一冊 五

七條家御家領高反別小前帳 明治三年八月 築山
村庄屋新右衛門・年寄利兵衛・同善兵衛・同治郎右
衛門連印↓京都御役所

半 一冊 三

参典侍御局御知行上知田方反別小前帳 明治三年
八月 築山村庄屋新右衛門・年寄利兵衛・同善兵衛・
同次郎右衛門連印↓京都御役所

半 一冊 五

友岡村

橋本殿御家領田方反別小前帳 明治三年七月 友
岡村庄屋三郎兵衛・年寄弥兵衛連印↓京都御政府

半 一冊 五

元京極殿局上知田方反別小前帳 明治三年七月
友岡村庄屋三郎兵衛・年寄弥兵衛連印↓京都御政府

半 一冊 五

西山光明寺領田方反別小前帳 明治三年七月 友岡
村庄屋三郎兵衛・年寄弥兵衛連印↓京都御政府

半 一冊 七

(元京極局上知立毛見合附帳下書) 付札あり

半 一冊 七

(午年立毛内見合附寄帳下書綴) (明治三年一〇
月) (乙訓郡長峯村・沓掛村)

半 一綴 一〇〇

松木家々領高反別小前帳 (明治三年七月) 乙訓

郡西坂本村(西坂本村庄屋安兵衛・年寄甚右衛門連
印↓京都御政府) 半 一冊 五

川鱈家々領高反別小前帳 (明治三年七月) 乙訓
郡西坂本村(西坂本村庄屋安兵衛・年寄甚右衛門連
印↓京都御政府) 半 一冊 六

花園家々領高反別小前帳 (明治三年七月) 乙訓
郡西坂本村(西坂本村庄屋安兵衛・年寄甚右衛門連
印↓京都御政府) 半 一冊 七

柿小路家々領高反別小前帳 (明治三年七月) 乙
訓郡西坂本村(西坂本村庄屋安兵衛・年寄甚右衛門
連印↓京都御政府) 半 一冊 六

吉田家高反別小前帳 (明治三年七月) 乙訓郡西坂
本村(西坂本村庄屋安兵衛・年寄甚右衛門連印↓京
都御政府) 半 一冊 九

安田家高反別小前帳 (明治三年七月) 乙訓郡西坂
本村(西坂本村庄屋安兵衛・年寄甚右衛門連印↓京
都御政府) 半 一冊 三

細川家高反別小前帳 (明治三年七月) 乙訓郡西坂
本村(西坂本村庄屋安兵衛・年寄甚右衛門連印↓京
都御政府) 半 一冊 三

清水谷殿家領田方反別小前帳 明治三年七月 乙
訓郡馬場村(馬場村庄屋庄左衛門・年寄幸右衛門・
同元右衛門連印↓御政府御役所) 半 一冊 六

馬場村

(天龍寺領立毛見合附帳下書) 付札あり 半 一冊 九

東土川村

土山右近將監家々領高反別小前帳 明治三年七月
東土川村庄屋仙右衛門・年寄甚兵衛・取立役儀左衛
門連印↓京都御政府 半 一冊 三

浄教寺家々領高反別小前帳 明治三年七月 東土
川村庄屋仙右衛門・年寄甚兵衛・取立役儀左衛門連
印↓京都御政府 半 一冊 二四

菱川村

御料未歳見小前帳 明治四年九月 乙訓郡菱川村
百姓代南大助・年寄黒川源右衛門・同金谷傳左衛門・
庄屋三輪善九郎↓京都府御廳 半 一冊 五

御料未歳早稲方内見小前帳 明治四年八月 百姓
代南大助・年寄黒川源右衛門・同金谷傳左衛門・庄
屋三輪善九郎↓京都府御廳 半 一綴 五十一

元本園寺領上知未歳早稲方内見小前帳 明治四年
八月一三日 百姓代南大助・年寄黒川源右衛門・同
金谷傳左衛門・庄屋三輪善九郎↓京都府御廳 半 一綴 五十二

元南禅寺領上知未歳早稲方内見小前帳 明治四年
八月 百姓代南大助・年寄黒川源右衛門・同金谷傳
左衛門・庄屋三輪善九郎↓京都府御廳 半 一綴 五十三

元六條家上知未歳早稲方内見小前帳 明治四年八
月 乙訓郡菱川村(百姓代南大助・年寄黒川源右衛
門・同金谷傳左衛門・庄屋三輪善九郎)↓京都府御
廳 半 一綴 五十四

元堀川家上知未歳早稲方内見小前帳 (明治四年
八月) 乙訓郡菱川村(百姓代南大助・年寄黒川源
右衛門・同金谷傳左衛門・庄屋三輪善九郎↓京都府
御廳) 半 一綴 五十五

元本園寺料上知・南禅寺料上知未歳内見小前帳
明治四年九月 百姓代南大助・年寄黒河源右衛門・
同金谷傳左衛門・庄屋三輪善九郎↓京都府御廳 半 一冊 六

元六條家上知未歳内見小前帳 明治四年九月 百
姓代南大助・年寄黒川源右衛門・同金谷傳左衛門・
庄屋三輪善九郎↓京都府御廳 半 一綴 七十一

元堀川家上知未歳内見小前帳 乙訓郡菱川村 半 一綴 七十二

元六條家元堀川家上知未歳内見小前帳 明治四年
九月 百姓代南大助・年寄黒川源右衛門・同金谷傳
左衛門・庄屋三輪善九郎↓京都府御廳 裏表紙繼目
善九郎印あり 半 一冊 六

堀川家知行所當年早稲方立毛内見小前帳 明治
三年八月 庄屋善九郎・年寄傳左衛門(印)・同源
右衛門(印)・百姓代八良兵衛(印)↓京都御政府
裏表紙繼目善九郎(印)あり 半 一綴 七十一

六條家領當年早稲方立毛内見小前帳 明治三年
八月 庄屋善九郎・年寄傳左衛門(印)・同源右衛
門(印)・百姓代八良兵衛(印)↓京都御政府 綴 一綴 七十二

藪地書上帳 明治四年一月 庄屋三輪善九郎・年
寄金谷傳左衛門・勸農掛中村新六↓京都府御廳 丁
間絵図あり 半 一冊 三六

六條家々領高反別小前帳 半綴 一冊 五十一

堀川家知行所高反別小前帳 明治四年九月 五十二

本園寺領高反別名前帳 明治四年九月 半 一冊 六

南禅寺領高反別名前帳 半 一冊 七

古検方根帳分一筆限高反別小前帳 半 一冊 八

樋爪村

竹内領田方反別小前帳 明治三年七月 樋爪村庄
屋五兵衛・年寄嘉右衛門・取立役市郎右衛門連印↓
京都御政府 半 一冊 五

史料館所蔵史料目録 第六十三集
山城国諸家文書目録(その二)

平成八年三月一日 印刷発行

編集兼 国文学研究資料館
発行者 史料館

〒142 東京都品川区豊町一丁目十六番十号
電話 〇三―三七八五―七二三(代)

印刷所 睦美マイクロ株式会社
〒135 東京都江東区東陽一丁目十六番十二号

(本文用紙は中性紙を使用)